
オオヤシマ記 イワレヒコ伝（改訂版）

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オオヤシマ記 イワレヒコ伝（改訂版）

【Nコード】

N0845W

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

どこにあるのかわからないオオヤシマ。そこで戦乱が起こっていた。ヤマトとヒノモトの国の争いの真っ只中に放り込まれた現代日本の高校生、磐神武彦はどうなってしまうのか？ 「姉萌え」「弟萌え」「幼馴染萌え」を強化していきます。よろしく願いします。

始まりの章 二人のイワレヒコ

二十一世紀、日本。東京の一角。季節は夏が終わり、秋の訪れを予感させる高い空。

磐神武彦^{いわがみたけひこ}、十七歳。高校二年生。身長は高い訳でもなく低い訳でもなく、容姿は決して美男子ではないが、不細工でもない。言うなれば、本当に「絵に描いたような普通の男子高校生」である。元気で明るく、美人の母、そして元氣過ぎて明る過ぎ、彼にとってはとても怖い姉との三人暮らし。

父親の尊^{たける}は三歳の時、交通事故で他界。それでも彼はその事で人生が変わる事もなく、母と姉の愛情をたくさん注がれて、とてもものんびりとした性格に育った。どちらかと言うと、のんびり過ぎるくらいに。

「武君、遅刻するよ。早く支度しないと」

幼馴染みで同級生の都坂亜希^{みやこさかあき}が、毎日武彦の家に来る。長い髪をポニーテールにして、クリクリした黒目がちの瞳、スツと鼻筋が通り、採れたてのサクランボのような潤いのある唇。多くの男子の同級生から、

「磐神が羨ましい。俺が毎日迎えに来て欲しいくらいだ」

と言われるほどの美人だ。でも、武彦は羨ましがられるような間柄だとは思っていない。むしろ、亜希に対しては、ほんの少しだけ恐怖心がある。しかし、亜希はそんな武彦の気持ちを知らない。

「毎日悪いわね、亜希ちゃん」

母である珠世^{たまよ}はパートに行く時間だ。家の中で誰よりも早く起き、誰よりも遅く寝る生活を十五年近く続けている。でも元氣一杯である。年齢の割には肌艶のいい健康美人だ。武彦は、

「自慢の母親」

だと思っている。でも彼はマザコンではない。

「いえ、近所ですから。大丈夫です」

亜希は何でもない事のように答える。社交辞令ではなく、亜希は本当にそう思っている。

「亜希ちゃんがウチの子だったら良かったのにな」

珠世母さんのトンデモ発言にニッコリ微笑んで応じる亜希も、すっかり警神家の一員である。

「母さん、行つてらっしゃい」

と言いながらも、武彦はまだ半分寝ている。目が死人ゾンビのようだ。

「武君、もう行かないと！」

亜希は武彦を引き摺るようにして玄関に急ぐ。武彦は生欠伸なまめくびをしてフラフラと歩く。

「こら、武彦！ いい加減目を覚ませ！」

運送業のアルバイトをこなしながら、大学の夜間部に通学している二十歳の姉、美鈴が怒鳴る。珠世は化粧つ気がなく、見た目で損をしているが、美鈴の顔を見れば、本当は美人なのがよくわかる。美鈴の肩上でバツサリと切られた黒髪は、仕事を効率良くこなすため。高校生の時は、艶やかな長い髪で同級生を魅了していた。ちょっと釣り上がり気味の目と高い鼻と口角の上がった口のせいで、元々きつい性格がよりきつく見えてしまいが、それを補って余りあるほどの美人である。

「うーい」

武彦はまだ寝ぼけていた。

「おらっ！」

美鈴の容赦のないハイキックが武彦の顔面に決まる。亜希は美鈴の邪魔にならないようにサッと身を引いていた。

「フギッ！」

気を失ってしまい、逆効果になるのではないかというくらい鮮やかな一撃だ。でも、そんな暴力にも慣れてしまった武彦は気を失いはしない。むしろ「気付け」代わりになる。

「おお、目が覚めた。姉ちゃん、行つて来るよ」

「あーいよ」

美鈴はもう一発武彦の頭に拳骨を食らわせ、送り出した。

そう、武彦はマザコンではなく、極度の「シスコン」なのである。

「ねえ、武君、もう高校二年なんだから、朝くらい起きられるようになろうよ」

大通りの舗道を歩きながら、亜希が呆れ顔で言った。何しろ、高校までは徒歩で十五分程度なのに、武彦は毎日遅刻しそうなのだ。亜希が愚痴るのも無理はないのである。武彦はようやく頭が活動し始めたらしく、

「ごめん、委員長。明日はちゃんと起きるから」

「……」

武彦のその言葉を聞き、亜希はムスツとして先に行ってしまう。

彼女は武彦が自分の事を

「委員長」

と呼ぶのが気に入らない。だったらその事を言えばいいのだが、何故か亜希はそうしない。

「知らない!」

だから、武彦は亜希の機嫌が悪くなっても、その理由に気づけないのだ。

「ああ、どうしたの、委員長。僕、何か怒らせるような事言った?」

それでも武彦はびっくりして尋ねる事はする。亜希が怖いからである。

「別にイ」

亜希は武彦の問いに振り返らずに答え、走り出した。ある女優を真似たような言い方。でも委員長の方がずっと可愛いと思う武彦だった。そんな時でも「委員長」ではあったが。

「ホント、遅刻だよ、武君」

陸上部のエースプリンターでもある亜希は足が速い。風を巻いて走り、武彦を置き去りにしてしまう。

「わああ、ヤバい！ 今日遅刻したら、停学だよー」
武彦は、追いつくのは到底無理だと思いながら走り出した。

だらしないうちの弟を送り出し、姉の美鈴はほんの一時ひといきの安らぎを満喫する。

出勤前の熱いお茶が彼女のエネルギー源だ。

「さてと。私も出かけるか」

自分に気合を入れ、美鈴は立ち上がる。その名に恥じない美貌とスタイル、おまけに頭脳明晰、社交性抜群。弟の分まで取ってしまったのでは、というくらいできた姉だ。

「にしても、心配だな、あのバカ」

携帯の待ち受けは小さい頃武彦と一緒に写した写真。顔を寄せて写っている二人だが、満面の笑顔の美鈴に比べて、どこかおどおどしている武彦の顔。でもそれを待ち受けにしているのは弟には内緒。彼氏もいるのに、弟が心配で仕方がない、ある意味「弟萌え」な「姉ちゃん」だ。本人はそれを言われると烈火の如く怒るが。

「戸締り、よーし！」

美鈴は指差し確認をして、家を出た。

そう、美鈴は極度の「ブラコン」なのである。

どこにあるのか、いつの時代なのかもわからない。

しかし、その島も国も、確かに存在している。

オオヤシマ。気候が温暖で緑豊かなその島にあったのは「ワ」という国であったが、後継者争いが激化し、先代の王であるオオヒルメ女王が王位を放棄し、オオヤシマの北の果てにある大きな洞窟であるアマノイワトに籠ってしまった。

オオヒルメの王位放棄により収拾のつかなくなったワの国は、オオヒルメの遠縁に当たり、王位継承権を有しているホアカリとウガヤの兄弟によって二分され、兄の国は領土の西半分を有してヒノモ

トと名乗り、弟の国は東半分を有してヤマトと名乗った。

正統な後継者はオオヒルメの近親者であるアキツであったが、ヒノモトとヤマトはそれを認めなかった。争い事が嫌いなアキツは大叔母であるオオヒルメの元に身を寄せ、ワの国は完全にその正統なる血筋を途絶えさせてしまった。

そもそもの争いの発端は、ホアカリの妃トミヤの兄であるナガスネの野心である。彼はワの国の王位を奪取するため、ホアカリを焚き付けた。彼は王位そのものを欲する事はなかったが、権力には惹かれていた。

「アキツ姫は確かにオオヒルメ様に一番近い方ですが、お優し過ぎます。あれでは遠き海の果ての大国が攻め入りし時、勝てませぬ」
ナガスネの愚かな思いが元来は温厚で争いを好まないホアカリの判断を誤らせ、ワの国は分裂へと向かった。

もちろん、ヤマト側にも原因がなかった訳ではない。常に兄と比較される人生だったウガヤは兄に必要な以上の敵対心があり、機会があれば兄を潰そうと考えていた。兄と違って激しい気性の持ち主なのだ。ナガスネが軍を動かした事を知るや否や、ウガヤもすぐに反応し、二国は両勢力を隔てるアマノヤス川を挟んで睨み合いを続けた。

両国が実質的な戦闘状態に突入したのは、それから三日後の事だった。

ナガスネの率いる精鋭部隊が勇み足で弓矢を射てしまったのだ。それが運悪くウガヤの嫡男であるイツセの右肩を射抜いた。憤激したヤマト軍の先鋒がアマノヤス川を越え、合戦が始まった。

こうなると両軍の王にも戦は止められなくなった。ヒノモトとヤマトは、ズルズルと国全体を巻き込む戦いに雪崩れ込んでしまった。「何をしている!? こちらは皇太子を狙われたのだぞ! 何としても、ホアカリの首を獲るのだ!」

兵に檄を飛ばしているのは、ウガヤの三男であるイワレヒコだ。身の丈はヤマトの国の男子より頭一つ大きく、胸板は大木の幹のように厚い。性格は荒々しく、戦を好み、話し合いを潔しとしない。彼はヤマト一の剣士なのだ。彼はヒノモトの国を滅ぼし、オオヤシマを平定する事を悲願としていた。

「腑抜け共が！ このイワレヒコが、うぬ等の代わりにヒノモトの兵共を退治たいじしてくれるわ！」

イワレヒコは鎧兜よろいのかぶとを身に着けると一人馬を駆り、敵陣に突っ込んで行つた。

「イワレヒコが一人で突っ込んで来るだと？」

アマノヤス川の河原にあるヒノモトの本陣のナガスネは呆れ返っていた。彼は味方をも身じろがせるその風貌を更に険しくし、重い鎧兜をもともせずたわに立ち上がる。

「どこまでも戯たわけな男よ、イワレヒコ。返り討ちにしてやる！」

ナガスネは騎馬隊を投げ、イワレヒコの首級を獲りに行かせた。

しかしイワレヒコは動じなかつた。彼は水飛沫を上げて向かつて来る騎馬隊を見て高笑いし、

「笑止！ このイワレヒコを止めたくば、千の兵を差し向けよ、ナガスネ！」

と怒鳴つた。

オオヤシマの北の外れにあるアマノイワト。ワの国最後の王であるオオヒルメが籠り、洞窟の奥を向き、正座をしてオオヤシマの安寧を祈念していた。イワトの奥には、代々のワの国王が祀られているのだ。彼女が祈っている場所は、油を注いだ深皿よに入れた繕つた糸に灯した火を明かりとしており、薄らと周囲が確認できる程度である。オオヒルメは老いてはいるが、その昔は美麗であつた面影を残していた。長く伸ばされた髪は銀色に近い白髪で襟元で金色の紐

で結わえられている。その顔には艶があり、皺も少ない。目は精悍で、力強さを感じさせる。着ている服は白地で爪先まで隠れる長めの裾になっており、帯で締められている。

「大叔母様」

オオヒルメの後継者だったアキツが跪き、声をかけた。大きな瞳に憂いを湛えた美麗な顔立ち。彼女も爪先まで隠れる裾の服を着ている。色はオオヒルメの服と違い、薄い紫色だ。アキツは長い黒髪を髪留めで結わえ、襟元から返して頭の上でもう一つの髪留めで留めている。これはオオヤシマの未婚の女性の髪形なのだ。オオヒルメは前を向いたままで、

「アキツ、彼の者達は如何いかしておる？」

「とうとう戦いくさになりました」

アキツは頭を下げた。その言葉にオオヒルメは天を仰いだ。

「やはり滅ぶのか、この国は。そして沈むか、このオオヤシマは」

オオヒルメの嘆きの言葉にアキツは、

「いえ、そうならぬように私が必ず……」

「何をするつもりか、アキツ？」

オオヒルメは鋭い眼でアキツを見た。アキツはオオヒルメを見たままで、

「必ず戦を止めます。この命に代えても」と胸に右手をかざす。

「それは私かな。お前は命を粗末にするな、アキツ」

オオヒルメはワの国の女王であると同時に國中の民が敬う最高の呪術者でもあった。彼女はその力で争いを止めようとした。しかし、止められなかったのだ。アキツは頭を下げた、

「恐れながら、大叔母様はすでにお力を失われています。今は私が代わりに」

「ならぬ。それはならぬ。お前は戦が終わる時、今一度ワの国を治める女王となるべき身。命を捨ててはならぬ」

オオヒルメはアキツの身を案じ、断固としてアキツの行動を止め

るつもりでした。

「このままではこの国は滅びます。それでは女王も何もございませぬ。私に、今動かずしていつ動けとおっしゃるのですか、大叔母様！？」

アキツは普段は決して出さないような大きな声でオオヒルメに反論した。

「アキツ……」

オオヒルメはアキツに何か考えがある事に気づいた。

「何に気づいたのだ、アキツ？」

アキツはオオヒルメにスツと近づき、

「私の呼びかけに答えた方がいらっしやいます」

「呼びかけに答えた方？」

オオヒルメは眉をひそめた。

「はい。その方がこの国にいらしてくださいだされば、オオヤシマは救われ、ワの国は元の平和な国に戻りましょう」

「その方はどこにおわすのだ？」

オオヒルメは俄にその話を信じられない。

「わかりませぬ。しかし、確かにおわします。私にはわかります」

アキツの眼は自信に満ち溢れていた。オオヒルメはニツコリして、

「わかった。そなたに任せよう。その方を必ずこの国にお連れする

のだ」

「はい」

アキツは再び深々と頭を下げた。

武彦は英語の授業中だった。その担当は学校一厳しく、生徒指導の責任者でもある尼照富美子。武彦が一番苦手とする先生だ。しかし、それにも関わらず、彼は全く授業に集中していなかった。尼照先生が武彦を睨んでいるのにも気づいていない。そんな武彦を亜希がチラチラ見ている。

(誰だ？ さつきから声が聞こえる)

武彦は何日か前から、不思議な夢を見ていた。どこの誰なのかわからない女性の声が、

『助けて。私の声が聞こえる方。私の呼びかけに答えてください』
と言っている。そんな夢を何日も続けて見ていた。そのため、普段以上に朝起きられなくなっていた。

そして今日になって、とうとう起きている時までその声が聞こえるようになったのである。

(僕、ヤバいのかな？)

武彦は何かの病気なのかと思っていた。呑気な彼でも、これはさすがに心配のようだ。

(病院に行った方がいいかな？)

彼は本気でそう思っていた。

二人のイワレヒコが、少しずつ近づいていた。国の行く末を憂う一人の女性によって。

二の章 武彦の悩み、アキツの思い

連日のように夢で謎の女性の声に悩まされている磐神武彦、いわがみたけひこ高校二年。

そのせいで毎日高校に遅刻しそうになり、幼馴染で同級生の都坂みやこさか亜希あきに迎えに来てもらっている。呑気の塊のような性格の武彦も、この「悪夢」には心身共に参ってしまった。

「病気なのかな？」

そう思った武彦はある日の夜、思い切って母の珠世に相談した。

「母さん、僕、毎日同じ夢を見るんだ」

「そうなの」

忙しい珠世母さんは残念な事に更にここ数日仕事が忙しく、可愛我が子の相談に乗れるほど精神的に余裕がなかった。

「ごめん、またにする」

武彦は小さい頃から母親の忙しい姿を見て育ったせいとか、珠世の声のトーンでそれを感じ取れるようになっていた。学校の成績は振るわないが、生活能力は高いのが武彦の取り柄だ。

「姉ちゃん、時間ある？」

次に武彦はバイトから帰ってこれから夜間の講義を受けに行く美鈴に声をかけてみた。

「何？」

この時間帯の姉は特に機嫌が悪いのだが、弟が病気かも知れないのだから、話くらい聞いてくれるだろうと考え、思い切って言ってみただ。

「僕さ、毎日女の人の声が聞こえる夢を見るんだ」

「下らない事で私を呼び止めないでよ！」

しかしポカンと頭を一つ殴られる。武彦が何も言い返す間もなく、美鈴は玄関を飛び出して行った。

「ああ」

武彦は仕方なく、自分もコンビニのバイトに出かける用意をした。磐神家は彼がバイトをしなければならぬほどには逼迫してはいないが、姉美鈴の、

「高校生になっただから、自分の小遣いくらい、自分で稼げ」という絶対命令があったので、高校入学と同時に開始したのだ。

「店長に相談する訳にも行かないしな……」

武彦は結局、亜希に相談してみる事にした。

翌日。残暑が厳しい日になりそうな日差しが照りつけていた。

それにもかかわらず、性懲りもなく起きられない武彦を亜希が起こしに来る。

「武君、今日は起きるって約束だったでしょ！」

昨日一人で起きると言っただけなのに、相変わらずの寝坊。さすがに亜希もムツとしている。可愛い口を尖らせ、ほっぺをプウツと膨らませている。普通の男子なら、

「付き合ってください！」

と言いつつだが、寝ぼけ眼の武彦にはそんな感覚はない。

「ごめん、その事なんだけどさ……」

頼れるのは亜希しかいないと思って話し始めたが、

「話は後で！ 早くして！」

とあっさり遮られてしまう。項垂れるまもなく、今日も亜希に引き摺られるようにして玄関を出る武彦。

「起きろ、武彦！」

美鈴の尻への蹴りでようやく完全に目を覚まし、

「これ以上遅刻はできないよオ」

と叫びながら走り出す。

そして休み時間。本当は眠りたいのだが、どうしても亜希に相談したい事があったので、

「委員長、話があるんだけど」

と亜希の席まで行って小声で話しかけた。

「何？」

おかしな事に、相談したい武彦より話があると云われた亜希の方がアタフタしている。心なしか、頬が赤い。

「こ、ここで大丈夫な話？」

亜希は呼吸を整えて尋ねる。武彦は一瞬だけ考えて、

「あ、そうだな。ベランダで話そうか」

「う、うん」

そこもあまり人目を避けられないよ武君、と言いたい亜希だったが、それは言えない。亜希は高鳴る心臓の鼓動を鎮めようと深呼吸し、武彦と共にベランダに出る。

「あのさ」

振り向きざまに武彦が切り出すと、亜希はますます緊張した顔になって、

「な、何？」

ガラス越しに見ているクラスの連中がいる。亜希はそれも気になるのだが、武彦は全然気にならないらしい。

「僕、何かの病気かも知れないんだ」

「えっ？」

予想していたのと全然違うコースにボールが飛んで来たので、亜希は危うくベランダから落ちそうになった。

「毎日さ、夢で、知らない女の人の声が話しかけて来るんだ。助けてって」

武彦は真剣な表情で話しているのだが、亜希にはそれが伝わっていない。

「……」

亜希は呆然としていた。

「それでさ、昨日はとうとう英語の授業中にも聞こえてさ。何の病気なんだろう？」

亜希は呆れ返ったのを通過し、怒りを感じ始めていた。しかし、

武彦はそれに気づかない。

「それはきつと、恋の病よ」

「えっ？ 鯉？ 鯉の病気が移ったの？」

武彦はボケたのではない。真剣なのだ。それが更に亜希をイラッとさせた。

「そんな事、私知らないわ」

亜希はブイツと顔を背けて、教室に戻ってしまう。

「ああ、委員長……」

武彦は話し方が悪かったのかと思った。

「僕、話をうまくできないから……。伝わらなかったのかな？」

どうしたらいいのかわからなくなってしまった武彦である。

そして、どこにあるのか、いつの時代なのかわからないオオヤシマ。

元はワの国という一つの国家だったが、後継者争いが激しくなり、野心を持った者が現れ、国が二つに分裂した。「ヒノモトの国」と「ヤマトの国」。兄と弟が骨肉相争う事になってしまったのだ。

「お前の呼びかけに答えし方は、どうされた？ 何かご返答があったか？」

オオヤシマの北の果てにある洞窟のアマノイワトで、ワの国の先代女王のオオヒルメが後継女王になるはずだったアキツに尋ねた。

「いえ。でも、以前よりその方の心が近づいた気が致します。近いうちに、こちらに呼び込めるのではないかと」

アキツは額ずいたままで答えた。

「そうか。心が近づいているのがお前にわかるのなら、その方はこちらにいらっしやるであろう。否、いらしてもらわねば困る」

オオヒルメは深刻な顔で言った。アキツは顔を上げて、

「はい。もはや時は迫っております。ヒノモトにもヤマトにも、悪しき気が満ちておりまして、戦いくさが大きくなるのは避けられませぬ」

「そうか」

オオヒルメの顔は悲しみに暗くなった。

「私が早く二人の心の内を見抜いておれば、このような事にはならなかった……」

オオヒルメの嘆きに、アキツは、

「そうではありませぬ、大叔母様。起こりは、ナガスネの悪しき心でございます。あの者がホアカリ殿を唆そそのかさねば、戦は起こりませんでした」

「ありがとう、アキツ」

オオヒルメは微かに笑みを浮かべてアキツを見た。アキツは深々と頭を下げてから、

「大叔母様、ご相談がございます」

と切り出した。オオヒルメは居ずまいを正して、

「何か？」

アキツは顔を上げてオオヒルメを見ると、

「私の呼びかけに答えし方を何としてもこちらに呼び込むため、お力をお貸し下さい」

「私の力をか？」

オオヒルメは何かに思い当たったかのように眉をひそめる。

「はい」

アキツは力強い眼差しでオオヒルメを見ている。オオヒルメは、
「何を考えておるのだ、お前は？」

アキツはススツと前に動き、

「その昔、遠き場所から呼ばれた者がおり、その者の力でオオヤシマは鎮まったと聞いた事がございます。それをまた、為してみたいのです」

オオヒルメの顔つきが変わった。

「アキツ、それは禁呪ぞ。ワの国では、禁じられた術。ならぬ」

オオヒルメの声がイワトの中で反響する。

「ですが大叔母様」

アキツは絶すがるような目で大叔母を見た。

「オオヤシマの一大事と言つても、ならぬ」

オオヒルメは立ち上がり、クルリと踵を返すと、足早に奥の間に入ってしまった。

「大叔母様……」

反対される事は承知していた。だから、アキツも簡単に諦めるつもりはなかった。

ヤマトの国。オオヤシマのほぼ中央を流れる大河のアマノヤス川の東側にある、ウガヤが治める国である。

その国の軍の中に一人、特殊な力を持つ者がいた。その者の名はツクヨミ。言こと霊たまし師と呼ばれる一族の最後の生き残りである。黒い服に白い襟が一族の証だ。美形と呼ぶのが相応しい中性的な面差しのお陰で、ヤマトばかりではなく、ヒノモトの女性にまでその名を知られるほどだ。そしてまた、女装をすれば絶世の美女にもなれそうである。

彼の能力を簡単に言ってしまうと、言葉に呪いを乗せて放てばその言葉を聞いた者は呪われ、言葉に火の力を込めて放てば、その言葉を聞いてしまった者は焼かれてしまうのだ。そして、彼の使う言霊は一切の防御ができない。但し、その言霊の届く範囲は狭く、せいぜい二人か一人にしか攻撃できない。だからこそ、彼の出陣は稀で、決戦の時以外はウガヤ王の三男であるイワレヒコの許嫁であるイスズのそばに仕えている。以前は勝気な姫であったが、イワレヒコの許嫁と決まってから口数が少なくなり、俯いている事が多い。イスズはイワレヒコの姉でもある。オオヤシマでは近親婚は禁じられておらず、かなりの頻度で行われている。イワレヒコは美しい姉イスズが小さい頃から大好きで、必ず自分の妃にと考えていたのである。

しかし、イスズはイワレヒコが嫌いである。乱暴で礼儀を弁わえまえず、兄であるイツセを全く敬っていない。そのくせ、周囲の目を気にしているので、公おおやけにはイツセを立てている腹黒さも嫌だった。

「兄様が可哀想」

そう言って悲しそうな顔で窓の外の月を眺めるイスズを、ツクヨミはとても気の毒に思っていた。

そのツクヨミは、この数日、アキツの呼びかけの声を聞いていた。

「アキツ様は、大変お嘆きなのだ」

彼は、自分の祖先達がその昔はワの国王からも崇拜されていた一族でありながら、戦争の道具としての価値を見出した歴代の王によって絶滅寸前にまで追い込まれた事から、王族を快く思っていないかった。だからこそ、アキツの無念を理解できるのだ。

「このオオヤシマを救ってくださる方が早くいらつしゃると良いが……」

ツクヨミはアキツに心惹かれている。しかし、身分の差があるため、決して叶わぬ思いである。それは彼もよく承知していた。それ以上に、言霊師には「他族との交わり」を固く禁じる掟があつたのだ。

イワレヒコの連戦で、イスズはここ何日か明るい。元々は明るい性格のイスズの表情が冴えないのは、イワレヒコのせいなのだ。彼がいると必要以上に用を言いつけられるため、気持ちが悪まらない。戦が終わってからという父王の命があるため、婚儀はしていないのだが、イワレヒコは毎夜イスズを求めた。イスズは弟との婚儀を心の底で嫌がっていたが、父が決めた事であるので、逆らう事ができないのだ。

「婚儀が終わってからにしてくださいまし」

イスズにはその程度の抵抗しかできなかった。

「どうしました、ツクヨミ？ 悩み事ですか？」

そんなイスズであるから、彼女はツクヨミには心を開き、信頼もしていた。だからこそ、ツクヨミの表情に翳りが見えると気になっってしまう。その上イスズの部屋で二人きりになる事が多いため、口

さがない者達は、

「ツクヨミはイスズ様と添おうとしている」

などと噂をしている。言霊師であるツクヨミは、そんな根も葉もない噂を全て把握していたが、歯牙にもかけない。あり得ない話だからだ。

「いえ、別に。戦が早う終われば良いと思うておりました」

ツクヨミはそう言ってしまうてから、自分の失言に気がついた。

「そうですか」

イスズの悲しそうな顔を見て、ツクヨミは慌てた。

「申し訳ございませんぬ。イスズ様のお気持ちも考えずに……」

彼はイスズの前で平伏し、詫びた。

「構いませぬ。この国の誰もが、戦が早う終わるのを待ち望んでいるのですから」

イスズは声を震わせてそう言った。

（イスズ様はイワレヒコ様をお嫌いどころか、お恐れなのではないか？）

ツクヨミはそんな風にさえ思ってしまった。

皮肉な事に、イスズとツクヨミの深い信頼関係はイワレヒコの嫉妬の元となり、混乱の一因ともなうて行くのである。

武彦は結局誰にも相談できないまま、一人で家に帰った。いつもなら頼まなくても彼と一緒に下校する亜希は、朝の一件以来一言も口を利いてくれないのだ。

「委員長はずっと機嫌悪いしなア。どうしよう？」

亜希が不機嫌な理由がわからない武彦だが、それを確認する勇氣はない。その時、再び彼の耳に声が聞こえて来た。

『助けて。私の声が聞こえる方、私の声にお答えください』

まただ。武彦は怖くなっていた。

「僕、どうしちゃったんだろう？ 死ぬのかな？」

家に着いたが、姉もまだ帰って来ていない。母が帰るのはもつと後。今日のバイトは遅番なので、仮眠をとってから出かける事になっている。

「寝たら、もっと聞こえるのかな？」

武彦は怖くて眠れそうになかった。

「進めーっ！」

返り血を浴びて赤黒く染まった顔で、イワレヒコは叫んだ。その右手には討ち取ったヒノモトの武将の首を持っている。

「ヒノモトの兵なぞ、一人残らず殺してしまえ！ ヤマトこそがこのオオヤシマに相応しい国なのだ」

イワレヒコの顔は物の怪のように兇悪だった。そして彼の背後には、闇が蠢蠢いていたのである。

三の章 アキツの願い、ツクヨミの決意

どこにあるのか、いつの時代なのかもわからない。しかし、その島も国も、確かに存在している。そこはオオヤシマという島の「ワの国」という国であつたが、後継者争いが激化し、先代の王であるオオヒルメ女王がそれを嘆いて王位を去り、オオヤシマの北の果ての王家の聖なる洞窟であるアマノイワトに籠つてしまった。

收拾のつかなくなったワの国は、オオヒルメの遠戚である二人の兄弟ホアカリとウガヤによって二分され、兄ホアカリの国はヒノモト、弟ウガヤの国はヤマトと名乗った。

正統な後継者はオオヒルメの近親者であるアキツであつたが、ヒノモトとヤマトはそれを認めず、争い事が嫌いなアキツはオオヒルメの元に身を隠した。そして、ワの国は完全にその系統を途絶えさせてしまったのである。

そもそもの争いの発端は、ホアカリの妃トミヤの兄であるナガスネの野心である。彼はワの国の王位を奪取するため、ホアカリを焚き付けた。

「アキツ姫は確かにオオヒルメ様に一番近い方ですが、お優し過ぎます。あれでは遠き海の果ての大国が攻め入りし時、勝てませぬ」
ナガスネの愚かな思いがホアカリの判断を誤らせ、ワの国は分裂へと向かった。ヤマトとヒノモトは刃を交え、多くの血が流された。ナガスネは退かず、ウガヤは怯まなかつた。

戦はやがて膠着状態に陥り、互いに一進一退を繰り返し、兵は疲弊し、民は瘦せさらばえて行った。

そして、それから数日後の事である。

ワの国の後継女王候補であつたアキツは、ヤマトの国の言霊師ことだましであるツクヨミが異界の者に対する自分の呼びかけに気づいている事を悟り、ヤマトの国に赴く事にした。先代女王のオオヒルメはアキ

ツの行動を快く思っていないが、それを止める理由もないため、何も語らないまま、彼女を送り出した。

「アキツ、如何なる事になるうとも、禁呪はならぬぞ……」

アマノイワトから出て行くアキツの姿をオオヒルメは心配そうに見守っていた。

「ツクヨミ殿なら、力を貸して下さいさるはず」

アキツは、ヤマトの国にいるツクヨミがかつてこのオオヤシマの最高位であった言霊師ことだましの最後の生き残りである事を知っていた。そして、言霊師の一族のみが有する秘術も知っていたのである。彼女はそれに賭けてみるつもりでいた。只心配なのは、言霊師であるツクヨミが、ワの王家を恨んでいるのではないかという事だった。

(例えそうであっても、お願いするまで)

アキツの決意は固かった。必要であれば自分の命も差し出すつもりでいた。

ツクヨミもまた、ヤマトの国の王であるウガヤの娘のイスズ姫の部屋で、アキツが自分のところに向かっている事を感じていた。

「アキツ様……」

アキツは彼にとつてまさに憧れの存在である。アキツが望めば、ツクヨミは喜んで自分の命を差し出すだろう。彼はワの王家への恨みを抱いてはいるが、アキツ個人には何も悪感情はないのだ。まさしく、彼とアキツは、互いに自分の命を惜しまないほどの敬意を抱いているのだ。

「ツクヨミ、如何したのですか？」

イスズが訝しそうな顔で尋ねた。

「失礼致しました。考え事をしておりましたので……」

ツクヨミはすぐに平伏し、イスズに詫びた。イスズは相変わらず悲しそうな顔で、

「今日、イワレヒコ様が戻られるそうです。お出迎えせねばなりません」

その言葉にツクヨミは顔を上げる。

「そうでありましたか」

ツクヨミは急なイワレヒコの帰還を意外に思っていた。

「私は嫌です。イワレヒコ様は私の弟。それなのに、私は……」

イスズは感情が高ぶったのか、声を荒げた。

「イスズ様、それは口にしてはなりません」

ツクヨミはイスズの発言を遮った。彼はイワレヒコの密偵が潜んでいる事を知っている。だから、迂闊な事を言わせたくないのだ。もちろん、いくらイワレヒコが乱暴者でも、姉であり、許嫁であるイスズに危害を加える事はないであろう。しかし、乱暴ではなく、他の方法で彼女を苦しめる可能性があるのだ。例えば「マグワイ」等によって。

オオヤシマの多くの民は近親婚を忌み事とは思っていない。しかし、極僅かであるが、近親婚を嫌う者もいる。イスズはその類いの人間ではなく、只単にイワレヒコが嫌いだけであるが。

「ツクヨミ？」

元々明るくて元気だったイスズが、塞ぎ込む事が多くなり、ツクヨミはそれを悲しんで、ウガヤ王に申し出、イスズのそばについているようになったのだ。おおらかに育ったイスズは謀略とは無縁だ。ツクヨミが何故自分の言葉を遮ったのか彼女にはわからない。

「イスズ様、アキツ様がお出での方です。こちらにお招きして、お話されては如何でしょうか？」

ツクヨミはそう言ってイスズの疑問をはぐらかしてしまった。

「アキツ様が？」

イスズにとっても気品に溢れたアキツは尊敬の対象であり、高貴な女性として憧れを抱いていた。

「はい。アキツ様なら、イワレヒコ様にご意見してくださいませうし、ヒノモトの国との取りなしもしてくださいませう」

「そうですね」

ツクヨミの進言にイスズは顔を綻ばせた。ツクヨミもそれを見て

微笑んだ。

そして。

磐神家^{いわがみ}。仮眠を取ってアルバイトに出かけた磐神武彦^{いわがみたけひこ}が帰宅した。夜中の十二時である。本当は、武彦がそこまで働かなくても、磐神家の家計は支障がない。武彦がアルバイトをしているのは、自立のためなのだ。姉美鈴の命令なのである。

「男が自立してなくてどうするんだ、バカ武！ 自分の小遣いくらい、自分で稼げ」

高校入学と同時に姉にそう言われた武彦はコンビニのバイトを始めた。彼は、尊敬する姉が昼間フルタイムで肉体労働をして、そのまま夜間の大学に通学している姿を見ていたから、別に何の抵抗もなく素直に姉の言葉に従った。それくらいは当たり前前だと思ったのだ。

「お帰り、武彦。身体は大丈夫？」

ちょうど風呂上がりの珠世母さんが出迎えてくれた。ほんのりピンク色の頬をしている。

「うん」

武彦はニッコリして応じた。珠世母さんは、

「よし、それじゃ、サッサとお風呂入ってね。出たら、栓抜いて。

美鈴は先に入ったから」

「うん」

武彦はそのまま風呂場に行き、服を脱ぎ始めた。その時だった。

『私の声が聞こえる方。答えてください』

また幻聴が聞こえる。武彦は頭を振って、幻聴を振り払おうとした。

「ああ、もうやだ」

武彦は泣きそうだった。実際、彼の^{まなじり}は潤んでいる。

「誰なんだよ？ どうしてなんだよ？」

彼はどこから聞こえて来るのかもわからない声に向かって文句を言った。

「本当に誰かが呼びかけているのなら、名前くらい言えよ。このままじゃ、気が変になりそうだよ」

いや、本当に武彦は精神崩壊一歩手前なのかも知れない。

ヤマトの国の城に到着したアキツは、貴賓の間でウガヤ王と対面していた。ウガヤは、白髪交じりの髪を後ろに撫で付けて金色の紐で結わえ、頬、顎に髭を伸ばしている。衣は白地に緋の縁取りがしてある。帯は紐と同じく金色だ。小柄で痩せているが、気性が激しく、部下にはあまり慕われていない。今まで幾人も兵や使用人をその手にかけていると噂が立つほどだ。

「アキツ様には、ご機嫌麗しく……」

腹の底では全く敬っていないのに、言葉だけは丁寧なので、アキツはウガヤが嫌いだ。彼は兄ホアカリがお人好しで、妃のトミヤの兄であるナガスネに利用されている事を憂えているようだが、決して兄の事を心配しているのではない。呑気な性格の兄のせいで、ナガスネが力を身に着け、いつかこの国全体を乗っ取ってしまうのではないかと心配しているのだ。だがそれは只の取越苦労である。ナガスネは野心はあるが、王家乗っ取りを画策するほど身の程知らずではない。

「挨拶はその辺で」

アキツは用意された椅子に腰を下ろし、ウガヤを見た。椅子もウガヤの方が大きいもので、アキツに出されたものより良質の木材で装飾も華美に作られている。どう見ても、アキツの方が身分の低い者の扱いである。

「戦は止められませぬか、ウガヤ殿？　このような事、決してオオヤシマの民のためにはなりません」

「これは異な事を仰せですな、アキツ様。戦は兄ホアカリが仕掛け

申した。我らに非はありませぬ。そのようなお話は、ホアカリになさってください」

兄を敬う気持ちが欠片もないウガヤの言葉にアキツは怒りを覚え、たが、それを胸の奥にしまい、

「ホアカリ殿のところには、後に伺うつもりです。今は貴方に問うております。お答えください」

「無論、我が方は戦を好んでおる訳ではありません。ホアカリが詫びを入れれば、すぐにでも兵を引き上げます」

「……」

アキツは呆れていた。ウガヤは、大義は我にあり、と思っているのだ。

「承知致しました。ところで、ツクヨミ殿はおられますか？」

「はい。イスズの元におります。こちらに呼びましょう」

ウガヤが兵に命じようと手を動かしたのを見て、アキツは立ち上がり、

「それには及びませぬ。私がイスズ様のところに参ります」

「そうですか」

ウガヤはニヤリとして立ち上がった。そして会釈程度に頭を垂れ、

「アキツ様、くれぐれも道中お気をつけください。ヒノモトの者共は、我らと違って無礼な輩がおります故」

「お心遣い、感謝致します」

アキツは白々しいウガヤの言葉を聞き終わらないうちに、貴賓の間を出ていた。

(今、私の声に応えてくれた方が、私に返してください……)

アキツには、武彦の声が聞こえていた。彼女は声が聞こえた事とても喜んでいいるのだ。

「確かに名は名乗るべきですね」

彼女は相手の指摘に苦笑いした。

「それには、どうしてもツクヨミ殿の力がなければ……」

貴賓の間から廊下を歩き、アキツはイスズの部屋の前に来た。そ

して呼吸を整える。彼女はツクヨミの力を必要としていたが、ツクヨミ自身には畏怖の念を抱いているのだ。言霊師の最後の生き残りであるツクヨミが、果たして一族の怨敵であるワの国の王族の一人である自分に力を貸してくれるのか？ ツクヨミが何故ヤマトの国にいて、イスズに仕えているのか、その真意も測りかねているのだ。

「失礼致します」

アキツは意を決して扉を押し開き、中に入った。

「アキツ様！」

ツクヨミとイスズは、まさかアキツの方から部屋まで来るとは思っていなかったので、非常に驚いていた。

「わざわざのお運び、恐悦でございます」

ツクヨミとイスズは床に平伏して言った。アキツは微笑んで、

「堅苦しき挨拶はおやめください。私は今日はツクヨミ殿に頼みがあつて参つたのですから」

「私にですか？」

ツクヨミはアキツにそのような事を言われて酷く胸が高鳴った。

顔も火照っている。イスズとツクヨミはアキツのために椅子を用意し、自分達は床に正座した。当然の事ながら、ツクヨミはイスズより下がった位置に控えた。

「言霊師としての貴方の力をお借りしたいのです」

アキツに真っ直ぐ見つめられてツクヨミは頬を赤らめる。イスズはその様子に気づき、クスツと笑った。

「言霊師としての？ それは如何なる事でございますでしょうか？」

アキツは椅子から立ち上がってツクヨミに近づき跪いた。それに驚いたツクヨミとイスズであったが、アキツは二人を手で制し、声を低くして、

「こことは違う世界の方をオオヤシマに呼び込みたいのです。そのために、お力を貸して頂きたい」

「は……」

ツクヨミは話の重大性より、体温がわかるくらい近い距離にある

アキツの顔の方が気になってしまった。何とも無礼な事だと思つクヨミである。

「私と一緒にアマノイワトにいらしてください。大叔母様とお話を
して頂き、何としても異界の方をオオヤシマにお迎えしたいのです」
アマノイワト。ワの国の代々の王が祀られているオオヤシマーの
聖地である。王家の血筋以外の者がその地に足を踏み入れた事は未
だかつてないのだ。ツクヨミは身体が震えそうになった。

「はい」

しかし、ツクヨミには断わる理由など何もないので、二つ返事を
した。アキツはあまりにもツクヨミの返答が早かったので、少し面
食らってしまったほどだ。

「ありがとうございます。私は断わられてしまうのではないかと考
えておりました」

アキツの嬉しそうな顔が目の前にあるので、ツクヨミは自分の顔
の火照りを気づかれないように頭を下げた。

「滅相もごさいませぬ。アキツ様のお言葉とあらば、私はどこへで
も参ります」

アキツはイスズと思わず顔を見合わせてしまった。

四の章 オオヒルメの憂い、アキツの心

ワの国の聖なる洞窟であるアマノイワトに王族以外の者が足を踏み入れる事はなかった。その歴史に、遂に終止符が打たれた。時期女王候補であったアキツに連れられて、ヤマトの国の言霊師であるツクヨミが、その「聖地」に足を踏み入れたからである。彼はイワトの中を進み、先代の女王であるオオヒルメが待つ広間に赴いた。

「オオヒルメ様には、ご機嫌麗しく存じます」

ツクヨミはまさに震えながら挨拶をしていた。彼の目の前には、女王となるべきであったアキツだけでなく、先代の女王であり、ワの国最高の呪術者であるオオヒルメがいるのだ。震えるなどという方が無理であろう。

「其方そなたの一族に対する非礼の数々、王祖に成り代わり、お詫びする」
ツクヨミが顔を上げると、オオヒルメはそう返して来た。ツクヨミは心底驚いてしまった。

「オオヒルメ様、勿体ないお言葉にございます。我が一族の辿りし道は、我が一族に非あればこそ。私には、全く怨みはございません。況まししてや、オオヒルメ様にお詫び頂くなど、滅相もない事にございます」

ツクヨミは再び平伏ひれふして言った。オオヒルメはツクヨミの言葉に微笑み、

「その言葉で、私は救われました。言霊師一族には、詫びても詫び切れぬ程の災いを与えてしまったので、其方がここへ参ると聞いて、私は何としても詫びねばならぬと思っていたのです」

「ありがとうございます。我が祖も、オオヒルメ様のお言葉で救われましょう」

「ツクヨミ、其方は誠に優しき男よの」

オオヒルメは一段高いところに正座していたが、そこから降りてツクヨミの肩に手をかけた。

「恐れ多い事です、オオヒルメ様」

ツクヨミは上げかけた頭をまた地面に擦り付けた。

「ご挨拶はその辺りで。お話に入らせて頂きたいのですが」

アキツが堪りかねて口を挟んだ。オオヒルメとツクヨミはハッと
してアキツを見た。

「事は一刻を争うのです。お急ぎ頂きとう存じます」

「わかった、アキツ」

オオヒルメは苦笑いをして座に戻った。ツクヨミはアキツに、

「私にどうせよと？」

「言霊師の秘術を使い、異世界の方の魂をこちらに呼んで頂きたい
のです。大叔母様のお力と貴方のお力ならば、禁呪である秘術を使
わずとも、為せるはずと思います」

ツクヨミとオオヒルメは、思ってもいなかった提案に顔を見合わ
せてしまった。

「アキツ、それでも禁呪は禁呪ぞ。私は力を貸す訳にはいかぬ」

オオヒルメは厳しい表情になって言った。

「大叔母様、先程も申し上げましたが、時は待つてはくれませぬ。
急がねばならぬのです」

しかしアキツは引くつもりはない。彼女はオオヒルメを真っ直ぐ
に見つめている。

「ならぬものはならぬ」

オオヒルメは遠き昔の秘術の結果を知っているのです、どうしても
賛同しかねた。

「何故です？ このままでは、オオヤシマは血に染まって行くだけ
です」

アキツにはそのオオヒルメの頑かたくなさが理解できなかった。

「……」

オオヒルメは、それでも禁呪を使いたくなかった。そして、搾り
出すような声で言う。

「それでもならぬ。禁呪を為せば、今以上の災いを呼び込む事にな

るからじゃ」

「ええ？」

アキツは驚愕した。ツクヨミも、オオヒルメの真剣な表情から何故禁呪とされたのか、その理由を知りたくなつた。彼はゴクリと唾を呑み込み、オオヒルメを見た。

「古に、一体何があつたのですか、大叔母様？」

アキツの問いにオオヒルメは俯いた。

「大叔母様、お教えてください」

アキツがオオヒルメに近づき、言葉を促す。オオヒルメは伏せていた目を上げて、

「秘術を使うと、ヨモツが蠢くのじゃ。ヨモツが動けば、オオヤシマは今以上に血塗らるる事になるうぞ」

オオヒルメの悲痛そうな声に、アキツは思わずピクンとした。ツクヨミも身を強張らせる。

ヨモツとは、オオヤシマの地下にあると言われている闇の国のことである。数多の魔物達が棲み、人を瞬時にして死に至らしめるほどの妖気が漂っていると言われている。

（オオヒルメ様が躊躇われる理由がわかった。ヨモツか。それは難題だ）

ツクヨミもヨモツの事は聞いた事がある。しかし、詳しい事は知らない。オオヒルメの話は彼の興味を大いにかき立てた。

「では、その昔、異界の者がオオヤシマを救つたというのは偽りでございますか？」

アキツは震えながら尋ねた。するとオオヒルメはゆっくりと首を横に振り、

「それは真の話。じゃが、その時もヨモツは動いてしまった。ワの国は滅びるかと思われる程、ヨモツの兵はワを攻めた」

「……」

アキツはツクヨミと顔を見合わせた。

「ですが、ワの国は滅びておりませぬ。ヨモツも今は動いていない

様子。どうしてワは滅ぼされなかったのです？」

アキツは再びオオヒルメに尋ねた。オオヒルメは悲哀に満ちた顔で、

「ワの王が、身を捨ててヨモツの兵を封じたのじゃ。アマノイワトの更に奥にあるヒラサカでな」

アキツは自分が何をしようとしているのか、気づき、目を見開いた。

「そのような事があったのですか。申し訳ありません、大叔母様」
彼女は平伏して詫びた。オオヒルメは微笑み、

「もう良い、アキツ。其方のオオヤシマを憂う心、ようわかった。顔をお上げなさい」

「私は、自分の事ばかりで、大叔母様のお苦しみを考えずに……」
アキツは涙を流していた。ツクヨミは涙するアキツの美しさに顔が火照るのを感じた。

「いや、私も同じぞ。禁呪を使えば、自分が命を捨てねばならぬ事を知っていたのだ。私は自分の命が惜しくて、オオヤシマを救おうとするお前を諦めさせようとした。詫びねばならぬは私の方じゃ」

オオヒルメは涙こそ流していないが、目を潤ませていた。するとアキツは、

「もしヨモツが動きし時は、私が封じます。本来であれば、私が王であったはずなのですから」

「アキツ……」

オオヒルメは目を見開いた。ツクヨミも驚いてアキツを見た。

「その覚悟なくして、ワの女王などと名乗れませぬ」

アキツの決意の固さに、ツクヨミは自分が身代わりになれればと心の底から思った。

そして、磐神家。

武彦は、久しぶりに夢の中の女性の声に悩まされる事なく、快適

な睡眠を得られた。そして朝もすっきり目覚め、朝食をすませたので、いつものように彼を迎えに来た幼馴染で同級生の都坂亜希みやまのかあきを驚かせた。

「ビックリした。てっきりまだ寝てると思ってたから」

亜希はいつになく上機嫌で言った。武彦の姉である美鈴も、

「私も驚いたのよ。今日は雪が降りそうね」

「そうですね」

女性陣に酷い事を言われている武彦だが、そんな事よりグッスリ眠れた事の方が嬉しいのか、

「行こうか、委員長」

「うん」

二人は玄関を出た。美鈴は溜息を吐き、

「全く、朝起きられただけで感動させるなんて、あいつも本当に困った奴」

と言いながらも嬉しそうだ。彼女は自分も出かける準備をするために部屋に戻った。

「あのみ」

大通りの舗道を歩きながら、武彦は言った。「ご機嫌な亜希は、

「何？」

とニコニコして聞き返す。武彦は、

「委員長つてさ、機嫌いい時と悪い時が激しく変わるんだけど、僕が何を言つと気分が悪いの？」

いつもの亜希なら、「委員長」の一言が気に障るのだが、今日は本当に機嫌が良かったので、

「そう？ そんな事ないと思うけどなあ」

と惚とぼけてしまった。内心はドキドキしているのだ。武彦はキョトンとして、

「そ、そうなの」

武彦の脳内は、疑問符だらけになっていく。そんな彼を見て、亜

希はまたドキツとしていた。

「ほら、早く行こうよ、武君」

顔が赤くなつたのを悟られたくないのか、亜希が武彦の手を握つて走り出す。いきなり亜希に手を握られた武彦はビクツとして、

「あ、ちよ、委員長！」

とアタフタしながらも、亜希の手を振り解く勇氣もなく、されるがままに走り出した。

武彦の生活環境は穏やかだった。しかし、少しずつ、それは変化していた。

五の章 ツクヨミの策、ホアカリの動揺

どこにあるのかわからないオオヤシマ。そしてそこにある二つの国、ヒノモトとヤマト。王位継承権を巡って、実の兄弟が相争うという悲劇が起きていた。

オオヤシマの北の果てにある聖なる洞窟アマノイワト。その中の広間で、ワの国の次期女王となるはずだったアキツは先代の女王であるオオヒルメを何とか説得しようとしていた。

「大叔母様、このまま二つの国が争いを続ける事こそ、ヨモツを動かす起こりとなりましょう」

しかし、オオヒルメは口を横一文字に結んだままで、頑として譲らない。

「何をどう言い繕うと、ならぬ。禁呪は許さぬ。例え、お前が命を賭けてヨモツを封じようとも、為すべき事ではない」

「大叔母様……」

オオヒルメとアキツの双方の憂いが、言霊師であるツクヨミにはよくわかった。彼は堪りかねて、遂に口を開いた。

「恐れながら申し上げます」

オオヒルメとアキツはツクヨミを見た。ツクヨミは頭を下げたままで、

「言霊師一族に伝わる秘法がございます。その秘法であれば、ヨモツは動かぬかと」

「それは真か、ツクヨミ？」

オオヒルメは身を乗り出して尋ねた。アキツもツクヨミをジッと見ている。ツクヨミはアキツの視線を感じ、顔が熱くなった。

「はい。但し、術具が要ります」

「如何なるものじゃ？」

オオヒルメはアキツと顔を見合わせてから尋ねた。ツクヨミは顔

を上げて、

「アメノムラクモでございます」

「何と！」

ツクヨミの言葉に、オオヒルメとアキツは驚愕した。アメノムラクモとは、ワの国に代々伝わる秘剣である。正統後継者のみが持つ事を許される物なのだ。

「その剣は、今はここにない。ヒノモトのホアカリが持っておる」

オオヒルメは悲しそうに呟いた。ツクヨミは、

「存じ上げております。その剣、取り戻しに行こうと思っております」

「其方がか？」

オオヒルメは再びアキツと顔を見合わせ、尋ねた。ツクヨミは頭を下げ、

「はい。私が、ヒノモトより取り戻してご覧に入れます」

「それは……」

アキツが口籠った。ホアカリが持っていると言うのは建前で、本当にアメノムラクモを持っているのは、ホアカリの妃トミヤの兄であるナガスネなのだ。温厚で柔和なホアカリならば、話も聞いてくれようが、謀略家で粗野なナガスネではその話すらできない。ヤマトの国ではウガヤ王の三男のイワレヒコが乱暴者のように言われるが、ナガスネの狼藉に比べれば、イワレヒコなど子供の悪戯程度である。

「ホアカリは我が血に連なる者なれど、ナガスネは違う。ツクヨミ、命を落とすかも知れぬぞ」

眉間に皺を寄せたオオヒルメの忠告にツクヨミは微笑んで、

「お気遣い痛み入ります。しかし、私は言霊師でございます。その昔、オオヤシマで並ぶ者なき一族と言われた者の末裔です。策がございます」

「策、とな？」

オオヒルメは眉をひそめた。ツクヨミは微かに笑みを浮かべ、ゆ

つくりと頷いた。

ヒノモトの国。オオヤシマの西半分を治める、ホアカリを王と戴く国である。荒地の多いヤマトの国に比べると、緑が豊かだ。二つの国を隔てるアマノヤス川の流れのせいのようなのである。

ホアカリは弟ウガヤと違い、凡庸だ。義理の兄に当たるナガスネに唆そそのかされ、戦を起こしたものの、それを後悔しているのだ。しかし、狡猾なナガスネが怖くて、何も言い出せない。ワの王家に代々伝わる秘剣アメノムラクモも、ナガスネが勝手にワの国の城から持ち出してしまったのだ。それが自分の城にあるのが、どうにも恐ろしくて仕方がない。

「ナガスネはおるのか？」

王の座に着いていながら、ホアカリはビクビクしていた。弟のウガヤが気が短くて血気盛んなのに反し、彼はどちらかという之歌を詠んだり、書を嗜たしなんだりする方が好きなのだ。ほとんど白髪になっってしまった髪を銀色の紐で結わえ、白地に群青色の縁取りがしてある衣を着ている。本来ならば、金色の紐で髪を束ねるのが本当であるが、ウガヤにその紐を取られてしまい、銀色の紐を仕方なく使っている。心優しいと言えは聞こえが良いが、腰抜けなのである。

ホアカリがそのような状態であるから、ナガスネは実質的なヒノモトの支配者だ。ホアカリを王位に就けているのは方便に過ぎない。それはいくら凡庸なホアカリにもわかつている。彼が曲がりなりにも肅清されないのは、ひとえに妃であるトミヤのおかげだ。傍若無人なナガスネも妹のトミヤにだけは気を遣う。彼が何より恐れるのは、トミヤが悲しむ事なのだ。そのトミヤが愛しているホアカリは、ヤマトとの争いに勝つまでは非常に大事な存在であるが、ヤマトを滅ぼしてオオヤシマを支配できれば、どうでもいい存在になってしまう。

「ホアカリ様はお隠れになりました」

いつそのような目に遭わされるかわからないのだ。

「ナガスネ様は戦場でございます」

家臣達も心得たもので、ホアカリが何を聞きたいのかわかっている。

「そうか」

ホアカリはナガスネがいないと知ると、玉座の間を出て妃トミヤのいる部屋へといそいそと向かう。

「陛下」

「トミヤ」

二人は好き合って添った。だから、本当に仲睦まじい。トミヤも兄ナガスネの野望を悲しく思っている。誰か二人の間に立ち、取りなしてくれる人がいないかと日々思っているほどだ。オオヒルメやアキツがその第一候補であるが、ワの国を全く畏敬の対象としないナガスネには、二人の威厳は通用しない。

「戦はいつ終わるのですか？」

薄紅色の衣を身に纏ったトミヤは悲しみに溢れた瞳で夫を見た。

ホアカリより十歳若い彼女は肌の艶も良く、腰まで伸びる長い髪にも白いものはほとんど見られない。醜悪な面相のナガスネの妹とは到底思えない美麗な顔立ちで、ホアカリには過ぎた妃と陰口を叩かれている程である。ホアカリはトミヤの心がわかるので、その目を直視できない。自分の不甲斐なさも感じているので、何も言う事ができない。

「申し訳ございません。お忘れください」

トミヤは夫が苦しんでいるのを知り、頭を下げた。しかしホアカリは、

「構わぬ。私とて、戦を何とかせねばならぬと思うておる。不甲斐ないのだ、己が」

「陛下」

トミヤはそんなホアカリの純真さが好きだ。悲しいまでに真っ直ぐな心の持ち主。

「兄上が陛下を苦しめておるのです。私がお話し致します」

堪りかねたトミヤが進言する。しかしホアカリは首を横に振った。
「それはならぬ。ナガスネはこの国の事を思っておりだ。あの者には野心はあれど私欲はない。だからこそ、私も戦に賛同した。しかし、今となつてはその戦そのものが間違つておる気がする。如何にすれば良いのか、思案しているのだ」

「陛下」

二人は抱き合い、互いの温もりを感じ合った。

警神家。武彦が帰宅し、居間でバイトに出かける支度をしている。

「只今」

そこへ姉美鈴が帰って来た。武彦は居間から玄関に顔を出して、
「お帰り、姉ちゃん」

美鈴はちょうど靴を脱ぐところだ。美人でスタイルもいいのに、行動は男のようで、ドスンと玄関に腰を下ろすと、足をグイッと持ち上げて、靴をポンと勢い良く脱いだ。

「おう、今からバイトか？」

靴を脱ぎ終わり、美鈴は弟を見上げる。そんな姉を見慣れている武彦は、姉の行為を「はしたない」

とは思ひもしない。普通だと思つている。

「うん」

武彦は基本的にそんな姉が好きだ。だから、美鈴と話す時は、嬉しそうな顔になる。怖いけど優しい姉。武彦が美鈴に抱くイメージだ。

「頑張れよ」

美鈴は玄関に上がると、武彦の背中を右手で叩いた。

「姉ちゃんは今？」

武彦はその痛みに顔を歪めながらも、文句は言わない。いや、言えない。

「今日は休講。久しぶりに休めるんだよん」

美鈴は嬉しそうだ。多分飲み明かすつもりだろう。

「飲み過ぎないようにね」

武彦は、余計な事だと思いつつも、つい言ってしまう。

「私はいつでも適量しか飲まない！」

その適量が普通じゃないんだよな。と武彦は思った。

「あ」

その時、また声が聞こえた。

『私の声が聞こえる方、答えてください』

また始まってしまった。武彦は憂鬱な顔になった。美鈴がそれに気づく。

「どうした、武？ 顔色が悪いぞ」

姉に指摘され、弟はビクツとする。

「あ、うん。また変な声が聞こえてさ……」

武彦は頭を掻きながら美鈴を見た。

「変な声？」

この前もこいつ、そんな事言ってたな。美鈴はふと数日前の事を思い出した。

「病院に行った方がいいぞ、武。手遅れにならないうちにさ」

美鈴は腕組みをして武彦を見た。

「そうかな……」

武彦はフーツと溜息を吐く。美鈴はあまりにも武彦が深刻な顔をしているので、

「休んだ方がいいぞ、バイト。姉ちゃんが付き添ってあげるから、病院行くか？」

その言葉に武彦はギョツとした。

「だ、大丈夫だよ」

姉ちゃんと一緒に病院に行くのは恥ずかしいと思う武彦である。でも、言えない。

「行って来ます」

武彦はそそくさと玄関を出て行った。美鈴は、

「本当に大丈夫なのかな、あのバカ……」
と呟いた。もう彼女には酒盛りをするテンションはなかった。弟が心配で。

ツクヨミはアマノイワトを出て、ヒノモトに向かっていた。アキツも同行している。北の果てのアマノイワトからヒノモトまでは、それほど道のりではないが、すぐに到着できる程近くでもない。二人は緩やかな坂道を歩き、大河アマノヤス川の河岸付近まで来た。もうすぐ国境である。

「アキツ様、やはり私一人で参ります。お戻りください」

ツクヨミはもう一度言ってみた。

「いえ。私も参ります。参らねばなりません。この国の災いを取り除くのが、我が務めなのです」

「はい……」

アキツは決して退くつもりはない。ツクヨミはそれを感じて、遂に彼女を説得するのを諦めた。

「ここより先は両軍が対峙する所です。とても危うき場です。お気をつけください」

「はい」

アキツがスツとツクヨミに貼り付くように歩く。ツクヨミには幾万の軍隊よりアキツの方が脅威であった。彼女の身を案じているので、同行しないで欲しいというのも本音だが、それ以上にアキツがそばにいと、術をうまく使えないかも知れないと思うのだ。

「ツクヨミ殿……」

アキツはツクヨミが緊張しているのを感じ取り、声をかけた。

「は、はい」

ツクヨミはアキツを見た。アキツは顔を近づけて、

「心安らかに。さすれば、うまくいきます」

「はい」

心が安らかなにならないのは、貴女がこれほど近くにいらっしやるからです。ツクヨミはそう言いたかった。でも、言えなかった。

その頃、ヤマトの国にはイワレヒコが戻っていた。

「姉上、お久しゅうございます」

イスズの部屋に入ると、イワレヒコは皮肉混じりにイスズに挨拶した。イスズは震えながら、

「ご無事で何よりでございます」

と返した。イワレヒコはニツと笑い、

「さて。戦場での疲れを癒して頂きたい」

と言うと、ドスンと部屋の中央に胡座あぐらを掻いた。

「はい」

イスズは琴を取り出し、弾いた。彼女は楽師がくしと呼ばれる。楽器を奏でる事により、様々な効果を生じさせるのだ。とりわけ、イスズの琴は癒しの効果が大きく、軽い怪我ならその音で治癒してしまう。「相変わらず姉上は琴の名人。聞き惚れる」

イワレヒコはそう言いながら、琴を奏でるイスズに近づいた。

「はっ」

イスズは一瞬のうちに組み伏せられた。イワレヒコはイスズに馬乗りになり、彼女の服の裾を捲り上げた。

「このイワレヒコ、いつ戦場で命を落とすかも知れませぬ。そうなる前に、姉上に我が子種を宿したい」

ふと見ると、イワレヒコの「男」が猛っているのがわかった。それを見てイスズは固まってしまった。

(ツクヨミ！)

思わず、ツクヨミの名を心の中で叫んで目を強く閉じる。イワレヒコは更にイスズの腿ももに指を這わせて来た。もはやこれまでかと思われた時、

「イワレヒコ、おるか？」

ウガヤの声がした。イワレヒコは舌打ちして起き上がり、

「只今参ります」

と部屋を出た。イスズはようやく硬直が解け、起き上がった。

「ツクヨミとアキツが？」

イワレヒコの大声が聞こえて来た。イスズはハツとして戸口に駆け寄り、聞き耳を立てた。

「ツクヨミとアキツが、ヒノモトに赴いたらしい。国境の伝令からの報告じゃ」

ウガヤの声が聞こえた。イスズはハツとした。

(ツクヨミとアキツ様がヒノモトに?)

「何をするつもりか、あの二人」

イワレヒコの苦々しそうな声が聞こえた。イスズは、イワレヒコがツクヨミに敵意を抱いているのを感じ取っていた。

六の章 ナガスネの警戒、アキツの信頼

オオヤシマの二つの国、ヒノモトとヤマトの国境に、ヤマトの言くわんがえい霊師であるツクヨミと、ヒノモトとヤマトの元であったワの国の女王後継者であるアキツがいる。二人の動きは伝令兵を通じてヒノモトとヤマトの中枢に知らされていた。

ヤマトのウガヤ王と王子イワレヒコは二人の行動に色めき立った。もしやヒノモトに着くつもりなのかと考えたのである。ヒノモトはヒノモトで、アキツとツクヨミが行動を共にしている事を危惧していた。ヤマトがワの国の元女王を抱き込んだと考えたのだ。二人の行動は、二人が思っている以上に周囲に影響を与えていた。

「ツクヨミめ、寝返るつもりか!？」

玉座の間で報告を受けたウガヤは激高し、軍を送ろうとした。すると嫡男であるイツセが、

「父上、お待ち下さい。もし、ツクヨミが何かの策があつてヒノモトに赴いたのであれば、すぐに敵対と断ずるは宜しくないでしょう。仮にもあの者は言霊師です。扱いを誤れば、たちどころにヤマトは滅ばされましょう」

と諫いさめた。彼は激烈な気性の父には似ず、心優しい母のタマヨリに似た温厚な性格の持ち主だ。鎧兜姿があまり似合わない線の細い美男子である。しかしそんなイツセと正反対で、父の悪いところばかりを受け継いでしまったようなイワレヒコは、

「いや、何かの策であれば、我らに何も告げずに出立するはずがありません。兄上。しかもアキツ様が同道されているとなれば、尚の事。あの者はワの国に怨みありし者です。何かの企みがあると考える事も必要です。あまりに信を置く事こそ、宜しからざる事と存じます」

と反論した。彼は心の底ではイツセを見下しているのです、ここぞとばかりに真っ向から異を唱えた。ウガヤは腕組みをして二人の王子

を交互に見ると、

「倅等の申す事、ようわかった。まずは斥候を送り、様子見をする事にしよう」

「はは」

イワレヒコはニヤリとして頭を下げた。イツセは先の戦で負った肩の傷を摩りながら頭を下げ、イワレヒコを横目で見た。

(イワレヒコ、お前は一体何を考えておるのだ?)

イツセはあまりに激し過ぎる弟の気性を憂えていた。

ツクヨミとアキツはアマノヤス川を旧王家の御印が入った小型の帆船で渡り、向こう岸のヒノモトの軍の陣に到着して、ホアカリとの会談を申し入れた。いくらワの国の威光が以前ほどではないにしても、女王となるべき血筋のアキツが現れたので、ヒノモトの陣はすっかり萎縮して浮き足立っていた。

「お取り次ぎ願えますか?」

アキツは部隊の長に尋ねた。長は深々と頭を下げ、

「直ちに將軍に伝えます。しばしお待ちを」

「ありがとう」

アキツは微笑んで応じた。二人は陣の奥にある垂れ幕で囲われて大布で覆われた仮の館に通され、椅子を用意され、アキツだけが腰を下ろした。初めはツクヨミにも腰掛けるように言ったアキツだったが、

「それはできません」

ツクヨミが頑として受け入れなかったので、一人で座ったのだ。突然の訪問でありながら、ヒノモトの兵が敵意を見せなかったのは、彼女の威光もさることながら、その類い稀なる美貌も一役買っていた。兵達はアキツを一目見ようと、用もないのに覗きに来ていた程だ。

「さすがでございます、アキツ様。私一人では、こうはなりませんでした」

とツクヨミが小声で言うと、アキツは恥ずかしそうに俯いて、
「それ程の事ではありません。私にできる事と言ったら、ワの国の
大叔様のご威光をお借りする事くらいですから」

「そのような事はありませぬ。これは、アキツ様のお力です」

ツクヨミはアキツの謙虚さに感動して言った。

「ありがとう、ツクヨミ殿」

こうして間近でアキツの笑顔を拝める事が、ツクヨミの何よりの
幸せだった。

アキツとツクヨミの申し入れは、すぐに早馬でヒノモトの国の王
城の近くの館にいるナガスネの元に伝えられた。

「ツクヨミか。あの魔物が、どうやってアキツを抱き込んだのか、
知りたいものだな」

ナガスネは万事が謀略と言う発想の男なので、ツクヨミがアキツ
を騙していると考えていた。しかも彼は、ワの王家に一欠けらの敬
意もないため、アキツの存在など齒牙にもかけていない。

「彼奴は所詮、言霊師ことだましという物の怪。何を企んでいるのかわからぬ。
陛下に会わせる事はできぬ故、アキツだけをヒノモトに來させよ。
もしツクヨミが抵抗するなら、アキツの命と引き換えになる旨、し
かと申し伝えよ」

「はは」

ワの次期女王となるはずであったアキツを呼び捨てにするナガス
ネに驚愕しながら、伝令兵はそのままアキツ達のいる陣に戻った。

その頃、ヤマトの国の城では、ウガヤ王の王女であるイスズガツ
クヨミの事を心配していた。

「ツクヨミ……」

只一人、このヤマトで彼女の気持ちを理解しているツクヨミが、
ヒノモトにアキツと向かっている。イスズの気持ちは複雑であった。
彼女はツクヨミに心を開いている。そして、男としての魅力も感じ

ている。但し、彼女は王家の者故、ツクヨミと添い遂げたいとなどという事は考えていない。それでも、アキツとツクヨミが二人でというのが、イスズには気にかかった。

（やはり、ツクヨミはアキツ様の事を……）

叶わぬ恋なのは、ツクヨミが一番良くわかつている。そしてイスズも、ツクヨミがそれ程愚かな者とは思っていない。

「私は……」

自分の気持ちを測りかねるイスズだった。

「姉上」

その思いを破るように、弟であり許婚いいなすけでもあるイワレヒコが入って来た。

「はい」

イスズは怯えた目でイワレヒコを見上げた。イワレヒコはニヤリとして、

「また出立です。貴女と次に会うのは、ツクヨミの首級を挙げた時
やも知れませぬな」

「えっ？」

イスズはギクツとした。その時のイワレヒコの目は、嫉妬する男の目だったのだ。

（もしか、イワレヒコ様は私とツクヨミの仲をお疑いなのか？）

イスズはツクヨミに惹かれてはいるが、それは男女の色恋の類いではないと思っている。イワレヒコの嫉妬は、只の勘繰りだと言い切れる。しかし、イワレヒコはそれ以上は何も言わず、部屋を出て行ってしまった。

「ツクヨミが討たれてしまう？」

イスズはイワレヒコの言葉の真の意味が読めず、不安だった。

いわがみたけひこ
磐神武彦は何の支障もなく無事バイトを終え、帰宅した。

「お前、本当に大丈夫か？」

湯上がりスツピンの姉美鈴が玄関に来て尋ねた。武彦はそんな姉の上氣したほんのり赤い顔をドキドキして見ながら、作り笑いをして、

「大丈夫だよ。声はあの後聞こえなかったから」

美鈴は真剣な表情で、

「本当にさ、今度姉ちゃんと一緒に病院に行こう。検査だけでも受けた方がいいよ」

「うん」

姉があまりに心配そうな顔をしているので、その気もないのに武彦は返事をした。

「必ずだからな。約束だぞ」

美鈴は弟がよくうわの空で返事をするのを知っているので、念を押した。

「わかったよ」

姉ちゃんのおんな顔、いつ以来だろう？ 僕が小さい頃、高熱で何日も学校を休んで以来かな？ そんな事を思いながら、武彦は二階の自分の部屋に行った。

「武彦、どうなの？」

聞きつけた母珠世がキッチンからやって来て、美鈴に小声で尋ねた。美鈴は肩を竦めて、

「聞いているんだか、聞いていないんだか、わからないわよ、あのバカ。こっちの気も知らないで」

珠世はムツとする美鈴の肩に手を置いて微笑み、

「とにかく、病院には必ず連れて行ってね、美鈴」

美鈴はその手に自分の手を重ねて、

「わかってるわよ、母さん」

二人もそれぞれの部屋に戻った。

武彦は本当は声が聞こえ続けていた。姉が心配するので言わなかったのだ。彼は服を部屋着に着替え、風呂に入る支度をした。

「でも前と違う事言ってたな。このままでは国が滅びてしまつて、どこの国の人なのだろう？」

武彦は、この地球の別の国の人の声だと思つていた。それにしても、声は日本語だったと疑問には思つていたが。

「どうすればいいのか、教えてくださいよ、声の主さん」
武彦は祈るように呟いた。

「はっ」

アキツはピクンとした。ツクヨミはハツとして、

「如何なさいましたか、アキツ様？」

「お声が返つて来ました。どうすれば良いのか教えて欲しいと」

「そうですね」

アキツは微かに微笑んで、

「僅かではありますが、答えし方が私に近づいてくれたようです」

「はい。私も探っておりますが、何かが感じられました。あれがそうだったのですね」

ツクヨミはアキツが本当に嬉しそうなので、自分まで気分が高揚して来た。

「ええ」

アキツは、また決意を新たにした。するとそこへ部隊の長が戻つて来た。長はアキツの前で跪くと、

「アキツ様、ここより先はお一人で願います」

その言葉にアキツは仰天して、ツクヨミを見た。しかしツクヨミは全く慌てた様子がない。彼は只頷いた。何か考えがあるようだ。アキツはそれを読み取り、

「わかりました。ここから先は、私のみで参りましょう」

と応じた。長はツクヨミが抵抗した時はアキツを楯にせよとのナガスネからの伝言を聞いていたので、そうならずにすんでホツとしていた。このオオヤシマの大半の人々は、まだまだワの王家への畏敬

の念はあるのだ。彼はツクヨミが抵抗したら、アキツを楯にする事なく、自分の命を懸けて彼を止めるつもりでいたのである。

(アメノムラクモさえ手に入れば良いのですから、心配ないでしょう。そしてあのツクヨミ殿が策があるとおっしゃっていたのですから、そちらも心配無用ですね)

アキツはツクヨミに全幅の信頼を置いていた。彼女は長の先導に従って、館を出て行った。

(こうなる事はわかっていた。だからこそ、私の策が生きるのだ)

ツクヨミは秘策を以てアメノムラクモを手に入れるつもりだったので、ヒノモトの軍の条件を呑んだのだ。言霊師は、一度会った者の言葉をどれほど離れたところからでも聞き取る事ができる。彼はナガスネの企みを完全に把握していた。

(どれ程の策を弄そうとも無駄ですぞ、ナガスネ様)

ツクヨミはニヤリとした。

七の章 アキツの声、武彦の心

ヒノモトの国。

ワの女王となるべき立場にあつたアキツは、生まれて初めてその地を訪れた。オオヤシマの西半分を領土とするヒノモトは、東のヤマトに比較し、気候は温暖、農作物も豊富に収穫される。長期戦になれば、国土に荒地が多くて兵糧の蓄えが少ないヤマトは自滅する。ナガスネはそれを見込んで、意図的に総力戦を避けるようにし始めた。

「緑豊かですね」

彼女は窓の外に広がる緑地を見て、向かい合わせに馬車に乗っている長おさに声をかけた。彼はアキツを監視するために同行していたが、彼女の美しさに顔を合わせる事ができず、俯いたままだ。馬車の中は狭いため、アキツの顔は長のすぐ目の前にある。余計に見る事ができない。そんな長の緊張をアキツは嫌悪と勘違いし、

「すみませぬ」

と詫びると、窓の外に目を向けた。長はホツとすると同時に、この高貴な方を怒らせてしまったのではないかと更に緊張してしまった。

一方、アキツが一人でホアカリの元に向かっている事を伝令兵から伝えられたナガスネは、

「あのツクヨミが同行を申し出なかったとは、何か企んでおるのか」と勘繰り、

「ツクヨミから目を離すなど伝えよ。彼奴あやつは必ず動くはず」

「はは」

ナガスネはその後、自分の館を出てホアカリの城に出向いた。

「陛下にはご機嫌麗しく」

謁見の間で形ばかりの敬いの言葉を述べ、ナガスネは話を始めた。

「アキツがこちらに向かつております。如何様な思惑があるのかわかりません故、まずは私が会う事に致します」

ホアカリは隣に座る妃トミヤを見た。トミヤは兄ナガスネを心配そうな顔で見ている。

「わかった。しかし、ナガスネ、アキツ様を呼び捨てとは、無礼であるぞ」

ホアカリの精一杯の返しである。ナガスネは苦笑いをして、

「これは申し訳ありません。しかし、もはやあの方は、王族でも王でもございませぬぞ」

「そうではあるが、我らの上に立つべきお方だ。蔑ろにするでない」
ホアカリは、ナガスネが反論しないので、もう一步踏み込んでみた。

「畏まりました」

ナガスネは頭を垂れ、ホアカリに見えないところでニヤリとした。

「失礼致します」

彼はスツと立ち上がり、退室した。

「陛下」

兄が退室すると、トミヤは小声で夫に言った。

「ワの王家の秘剣であるアメノムラクモ、アキツ様にお返しする機会です。兄に命じてお返しくださいませ」

「そうだな。あの剣は、私が持っているべきものではない」

ホアカリは力なく微笑み、答えた。トミヤは、

「況してや、我が兄が隠し持つ等、許されざる事です」

と語気を強めて言った。

しかし、その当人であるナガスネは、アキツの目的がアメノムラクモであると予測しており、どうやって誤魔化すか思索していた。

（トミヤがホアカリを後押しして、アキツに剣を返そうとするのは承知。しかし、あの剣は返さぬ。アキツはもはや飾りにもならぬ。

そのような女子が、アメノムラクモを持っていても仕方あるまい）
「聞かぬ時は、あるいは……」

いくらナガスネが狡猾と言えども、アキツを手にかけるのはさすがに躊躇ためらわれた。

「そこまではしたくはない」

ナガスネはフツと笑い、城の中にある自室に入った。

一人国境の陣に残ったツクヨミはアキツの身を案じながら、ヤマトに引き上げるふりをして出立する事にした。兵達は、ツクヨミが動くたびに身構えるので、彼は笑いそうになってしまった。

(随分と警戒されているようだ)

ツクヨミは部隊の長がアキツに同行したので、その次の位の兵にヤマトに帰る旨を告げて、陣を出た。兵達はしばらくツクヨミの後をつけて来たが、彼がアマノヤス川に向かって歩き始めたのを確認すると引き上げて行った。

(アキツ様、ホアカリ王はともかく、ナガスネ將軍にはお気をつけください)

ツクヨミは遙か彼方にあるヒノモトの城の方向を眺め、アキツの無事を祈った。

「さて、私も動くか」

彼はそう呟き、再び歩き出した。

ウガヤは謁見の間で、国境に放った斥候せうこうからの報告を受けていた。「そうか。ツクヨミは足止めされ、アキツだけがヒノモトに行ったか」

斥候は跪いて、

「はい。ツクヨミは然さしたる抗あいもなく、素直に引き下がった様子。そろそろこちらに戻りましょう」

「わかった。ご苦労であった」

斥候が下がると、ウガヤはイワレヒコとイツセを見た。

「どう思うか、お前達は？」

すると、イツセが、

「アキツ様はアメノムラクモをお取り戻しに行かれたのではないでしょうか？ ナガスネが戦の混乱に乗じて、盗んだと聞いております」

「そうだな。アキツが自らヒノモトに赴くは、それくらい理由がなければならぬ。アメノムラクモはそもそも王族の剣。ナガスネ如き下賤の者が手にして良い物ではない」

ウガヤはそう言いながらも、もしアキツがアメノムラクモを取り戻したら、彼女諸共ヤマトに奪い取るつもりでいた。凡庸な兄ホアカリが、成り上がりのナガスネの思うがままにされているのは、ウガヤにとって非常に不快なのだ。オオヤシマを我がものにするのも目的であるが、それ以前にナガスネの息の根を止めるのもウガヤの悲願である。そして、そんなナガスネに利用されているホアカリさえも、始末しようと考えているのだ。恐るべき弟である。

「私が出立して、アキツの首とツクヨミの首、更にはアメノムラクモを手に入れて参りましょうか、父上？」

イワレヒコが狡猾な笑みを浮かべて進言した。イツセはギョツとしたが、ウガヤはニヤリとした。

「そこまでする事もあるまい。動かずとも、アキツは来る。ツクヨミと共にな」

「そうでありますかな」

イワレヒコは父を尊敬しているが、何もかも人にやらせるところは好きになれない。彼は残虐ではあるが、卑怯ではないのだ。

「それに、アキツはすでに王族ではないとしても、まだまだ民の心を惹きつけている。あの女を殺めれば、ヤマトの国はまとまらぬ。

アキツを手にかかけようなど、この後一切口に致すな、イワレヒコ」

ウガヤは何時になく鋭い口調で言い放った。イワレヒコはそれに気圧されるように、

「ははっ」

と額ずいた。イツセはウガヤがアキツまで手にかけるつもりではない事を知り、ホツとしていた。

いわがみたけこ

警神武彦は、バイトを休んで近くの大病院に行った。当然の事ながら、姉美鈴も同行している。武彦は病院に来るのは本当に嫌だったのだが、今までに見た事がないほど心配そうな顔の母珠世と姉を見て、仕方なく同意したのだ。ここまで来るのに何度溜息を吐いたか知れない。

「同じ夢を何度も見るのですか」

「はい」

武彦は心療内科で問診を受けていた。医師は若い男だ。何故か美鈴も一緒に診察室にいる。

「何日もそういう事が続いているらしいんです。始めは只の疲れだと思っていたのですが、最近は起きていても幻聴が聞こえるらしくて」

武彦の代わりに美鈴が答えた。医師は露骨に迷惑そうな顔をして美鈴を見る。

「お姉さん、心配なのはわかりますが、診察の妨げになりますので、一度退室して頂けますか？」

「えっ？」

意外な事を言われて、美鈴はキョトンとした。医師は続けた。

「心的な病気は、身近な人の影響によるものが多いのです。お姉さんがそばにいますと、武彦君の心の内が覗けない恐れがあります。退室して下さい」

「は、はい」

美鈴は納得できなかったが、医師がそう言うのでは従うしかないと思い、診察室を出た。

「さてと。武彦君、もう何も心配する事はないよ。全部話してくれたまえ」

医師は微笑んで促した。彼は美鈴と武彦の関係を見て、原因は美鈴にあると判断したようだ。ある意味では、正しい判断である。医

師の言葉に武彦は呆然としていたが、

「は、はい」

と応じ、見た夢と聞こえた声の内容を話した。

「最近、テレビや新聞でどこかの国の戦争の話を見聞きしたりしましたか？」

「いいえ」

武彦は即答する。医師は腕組みして、

「では、高校の授業で、そのような話を聞きましたか？」

「いいえ」

武彦は、医師が自分の話をまるで信じていない事に気づき、ガツカリしていた。

（これじゃ、相談できないよ。僕が嘘を吐いているみたいない扱いじゃないか）

その時だった。

『助けて下さい。私はワの国のアキツ。オオヤシマが戦で……』

また声が聞こえた。武彦は空を見つめるようにその声を心の中で反復した。

（オオヤシマ？ アキツ？ ワの国？ どの国？）

歴史が苦手な武彦には、「ワの国」が昔の日本の国名だという事に考えが及ばなかった。仮に考えが及んだとしても、何の解決にもならなかったろうが。

「どうしたのかな、武彦君？」

医師が訝しそうな顔で武彦を見ている。武彦はハツとして、

「あ、いえ、何でもありません」と惚けた。

「もしかして、また聞こえたのかな、声が？」

医師の鋭い指摘に、正直者の武彦はギクツとしてしまった。プロの目には丸わかりだったようだ。

「い、いえ、違います。すみません、ボンヤリしてました」

武彦は何とか誤摩化し通した。医師の疑いの眼差しが痛かったが、

武彦は最後までシラを切った。

結局、武彦の病名は判明せず、薬も処方されなかった。但し、もう一度診察を受けに来るようには言われた。

「何だよ、ヤブ医者め。知り合いの紹介だったから、文句言えなかったけど」

病院を出るなり、美鈴は毒づいた。そばを歩いていた患者達が驚いたように彼女を見た。

「今度は違う病院に行こう、武彦」

美鈴は自分を診察室から追い出した医師を信用していないようだ。「う、うん」

武彦が元気がないので、

「元気出せ、武彦。姉ちゃんがついてるから」

と美鈴は武彦を抱きしめた。柔道を習っている姉は、武彦よりずっと頑丈な身体をしている。

「く、苦しいよ、姉ちゃん」

もがく武彦を更に美鈴は強く抱きしめる。武彦の身体に美鈴の柔らかい胸が押しつけられ、武彦は赤面した。

「うるさい。姉ちゃんと母さんが、どんなに心配しているのか、お前全然わかってない！ 何でも一人で悩むなよ」

武彦が美鈴を見ると、彼女は涙ぐんでいた。またドキッとしてしまう武彦である。

「もつといろいろ相談してくれていいんだぞ。そのために、姉ちゃんはいらんだからな」

武彦は顔が熱くなっているのを悟られたくないのに、俯いて答えた。

「う、うん」

「よし」

美鈴は武彦をもう一度ギュッと抱きしめてから涙を拭い、歩き出した。武彦はそんな姉の背中に、

（姉ちゃん、ありがとう）

と心の中で感謝した。

(でも、ワの国ってどこだろう？ 委員長に聞けば知ってるかな？)

言われたそばから、幼馴染で同級生の都坂みやま亜希を思い出し、姉に相談するつもりがない武彦だった。美鈴が知ったら、拳骨一萬発でも許されまい。

八の章 アキツの怒り、ツクヨミの力

どこにあるのかわからないオオヤシマ。そしてそこにあるヤマトの国とヒノモトの国。元は一つの国であったが、兄弟の諍いいさかから分裂し、互いに覇権を賭けて争うようになってしまった。

オオヤシマの元の国であるワの国の女王であるべき立場のアキツは、ワの国門外不出の剣であるアメノムラクモを取り戻すため、ヒノモトの国を訪れていた。それはヤマトの国の言霊師ことだましであるツクヨミの秘術を完成させるために必要なもの。ツクヨミの秘術で、オオヤシマを救える異界の者を呼び寄せる手はずなのだ。

ヒノモトの国の將軍であるナガスネは、自分の妹であるトミヤの夫ホアカリ王の脆弱さを憂うれえていた。戦いくにもし仮に負ける事があるとなれば、それはホアカリの求心力の弱さだと彼は考えていた。そのためにも、ワの国が混乱する中で掠め盗って来たアメノムラクモをアキツに易々と返す事はできない。アメノムラクモは王位の継承者が持つべきものだ。それをアキツに返すと言う事は、ホアカリ自らが、自分は王位継承者ではないと宣言するのと同じ事である。ナガスネは野心家ではあるが、自分で王位を強奪しようと思うほど傲慢ではない。あくまで妹の夫君であるホアカリを立て、その背後で全てを掌握するつもりだ。

「今はまだその支度の最中だ。アキツにアメノムラクモを返す事など断じてできぬ」

ナガスネは強い決意を持っていた。ホアカリに対しては殺意を抱いた事はない。しかし、アキツを手にかける事をよしとしないと頭の中では思うのだが、片隅に最悪の場合も思い描いていた。すなわち、アキツは絶対に殺さないとは決めていないのである。

そんなナガスネの思惑とは別に、ホアカリとトミヤの二人は、二

人の居室でどうやってナガスネを説得するべきか思案中であった。
「兄は強く出れば強く返して参ります。宥めすかし、こちらの思いを伝え、最後は陛下のお力で従わせてくださいませ」

トミヤはホアカリに強い調子で進言した。ホアカリは妃の迫力に少々戸惑っていたが、

「わかった。何とかナガスネを説き伏せよう。そうでなければ、私はアキツ様に顔が立たぬ」

「はい」

そこへ近衛兵がやって来て跪いた。

「アキツ様、お着きにございます」

「うむ」

ホアカリはトミヤに目配せし、アキツの待つ玉座の間に向かった。

ヤマトの国では、イワレヒコが出立の準備に追われていた。ツクヨミがいつになっても戻らないからだ。

「ツクヨミめ、何を企む？ いや、何を企んでいようと、今回の事は許し難き行い。成敗してくれる」

イワレヒコは、許嫁である姉イスズとツクヨミの仲を疑っていた。何かあるとまでは思っていないが、イスズが自分に心を開かないのは、ツクヨミの讒言ざんげんがあり、彼が男としてイスズに接しているからだと決めつけていた。だからこそ、国元にいる時は、毎夜のようにイスズを求めた。それを頑かたくなに拒否するイスズも、イワレヒコにとって疑惑の対象だった。イワレヒコは、自分に問題があるとは全く考えていないのだ。

「大義は我にあり。言霊師が如何様な物の怪であろうとも、負けぬ」
イワレヒコも、言霊師一族の力はよく知っている。ワの国が分裂する以前、他国の侵略を防げたのは、ツクヨミの力があつたからこそなのだ。彼の父であるウガヤ王がツクヨミを自由にさせているのも、彼を信頼しているからではなく、恐れているからだ。しかしイワレヒコは嫉妬心から、ツクヨミを亡き者にする事しか考えていな

かった。

いわがみたけひこ
磐神武彦は、珍しく遅刻せず、同級生でクラスの委員長でもある
みやこぞかあき
都坂亜希と登校途中だった。

「ねえ、委員長」

「何？」

委員長と呼ばないで、と言えはすむ事なのだが、亜希は何故かそうしない。そしていつもその一言で不機嫌になる。その上、武彦は亜希が不機嫌になる原因を知らないのです、いつまで経っても彼女の事を委員長と呼んでしまう。

「あ、あのさ、ワの国ってどこの国？」

武彦はそんな亜希の機嫌が悪いのを察したのか、少々怯えながら尋ねた。亜希はその質問に啞然としたが、

「何よ、急に。日本史は選択しないんでしょ、武君は？」

「えっ？　ワの国って日本なの？」

真顔で返す武彦に亜希は項垂れかけた。そして溜息交じりに、

「そんな事も知らないの？　貴方、まさか、邪馬台国やまたいこくも知らない？
更に訳がわからなくなる武彦である。

「山田国？　それ、どこ？」
やまだこく

亜希は完全に呆れてしまい、

「話にならないわ」

と言い放つと、武彦を無視して歩き出した。

「ああ、待つてよ、委員長」

武彦は無意識のうちに追い討ちをかけてしまう。

「知らない！」

亜希はますます剥れて走り出した。陸上部のエーススプリンターである亜希が走り出すと、鈍足の武彦は追いつけない。

「お、置いて行かないでよ、委員長ウ」

完全に火に油を注いでいる事に気づいていない武彦だった。

「あっ！」

その時、また謎の声が聞こえた。武彦は思わず立ち止まってしまった。

『私はワの国のアキツ。私の声が聞こえる方、どうぞ私達を助けてください。私達はオオヤシマにいます。どうか助けて』

武彦はその女性の名前を知った。

「あきつ？ あきつって苗字かな？」

それすらもわからなかった。

（そうだ、こっちからも呼びかけてみよう）

武彦は以前テレビで見た「テレパシー」の要領で、念じてみた。

『僕は磐神武彦です。あきつさん、僕はどうすればいいんですか？

教えてください』

相手に届くかどうかわからなかったが、武彦は必死に念じた。

アキツは玉座の間に通され、普段はホアカリが座っている椅子を勧められた。彼女は、

（ヒノモトの国の方が、礼儀を弁^{わか}まえているのかしら？）
と思いつつ、腰をかけた。

その時、彼女の耳に異界の者の声が聞こえた。

『僕は磐神武彦です。あきつさん、僕はどうすればいいんですか？

教えてください』

アキツはその名を聞いてあまりの偶然に震えた。

（何という巡り合わせなのかしら？ 異界の方は、イワレヒコ殿と名が似ておられる）

アキツはその偶然が何かを暗示していると感じた。まさにそれこそが因縁だったのだ。

（ならば、ツクヨミ殿にお話して……）

彼女はある策を思いついていた。

「国王陛下お越しにございます」

案内役の兵が伝えた。アキツは居ずまいを正し、ホアカリを迎えた。

「アキツ様にはご機嫌麗しく。ご無沙汰致しており、誠に申し訳ありませぬ」

ホアカリはトミヤと共に入室すると、アキツの前で跪き、深々と頭を下げた。

「ホアカリ殿、畏まつた挨拶は抜きにしましょう。私は貴方にお願いがあつて参りました」

「はい」

ホアカリはトミヤと同時に顔を上げ、アキツを見た。

「こちらにワの国の王家の秘剣、アメノムラクモがあると聞いております。その剣をお返し願いたいのです」

「承知致しました」

ホアカリの間髪入れない返答に、アキツはキョトンとしてしまつた。

（こつもあつさり承諾されてしまつと、肩透かしをされたようです）

アキツは苦笑いをして、

「ありがとうございます。では、アメノムラクモをここへお持ちください」

「はは」

ホアカリは兵に命じ、アメノムラクモを取りに行かせた。

しかし、アメノムラクモはナガスネの館にあつた。ナガスネはアキツの来訪に合わせて自分の館に戻り、アメノムラクモを持って自分専用の大きな椅子に腰掛け、待ち構えていた。

「申し上げます」

ホアカリの命を受けた兵がナガスネの元に来て跪く。

「何事だ？」

ナガスネはすまして尋ねた。兵は頭を下げて、

「アキツ様が、アメノムラクモをご所望でございます。陛下の命により、お預かりに参りました」

ナガスネはニヤリとして立ち上がり、

「そうか。ならば、私が自分でお持ちする。お二人にはそう伝えよ」「はは」

兵はナガスネの言葉を微塵も疑わず、そのまま引き返した。

「アキツめ、やはりそうか。だが、この剣は返さぬ」

ナガスネはアメノムラクモを帯剣し、館を出た。

「どうしても言うなら、斬り捨てるまで」

ナガスネは目を血走らせ、ホアカリの城に向かった。

ヤマトの国とヒノモトの国の国境^{くにがわ}。ヒノモトの国の側には、ホアカリの嫡男であるウマシがいた。ホアカリに似て、気の弱そうな風貌であるが、伯父に当たるナガスネの流れも汲んでしまっているのか、疑い深く、腹黒い。小柄で鎧兜が重々しく見え、戦は苦手だが、人をいたぶるのは好きで、ヤマトの兵の捕虜を何人もその手で殺している。陰険な男なのだ。しかも、あるう事か、彼は密かにアキツに思いを寄せており、本日城にアキツが来訪する事を聞き知っていた。しかし、父王からは帰還命令はない。彼は悶々としていた。

「国境にお越しの際は、私が城にいた時。城にいらした時は、国境とは。父上は私をアキツ様に引き合わせたくないという事なのか？」

恋に狂う者は大抵の場合、被害妄想に陥るものだ。ウマシの場合、それが顕著だった。

「私がアキツ様を娶れば、ヒノモトが正統な王位継承国となる。それが何故父上にはおわかりにならないのだ？」

アキツの心など全く考えにない独りよがりなところは、まさしくナガスネに似ていた。それでいてウマシは伯父が大嫌いであった。

ナガスネは玉座の間に到着し、アキツに拝謁していた。

「アキツ様にはご機嫌麗しく」

ナガスネは上辺ばかりの敬意を見せる。

「ナガスネ殿、戦は止められませぬか？」

アキツはナガスネを咎めるような口調で尋ねた。ナガスネは作り笑いをして顔を上げ、

「それはヤマトのイワレヒコ殿にお話し頂きとう存じます。あの方が、どれ程の数のヒノモトの兵を殺めたか、アキツ様はご存じですか？」

「知りませぬ」

アキツは毅然とした顔で返した。ホアカリはオロオロするばかりで、自分の臣下の暴言を叱責する事もできない。トミヤは悲しそうな顔で、兄と夫を見比べていた。

「ナガスネ殿、それよりもアメノムラクモはお持ちですか？」

アキツはナガスネがアメノムラクモを帯刀している事を知っているながら、敢えて尋ねた。王位にある者のみが帯剣を許される秘剣であるにも関わらず、それを知りながら意図的に帯剣して姿を見せたナガスネの挑発行為に、アキツは怒りを覚えていた。

(この男、どこまで不遜を貫くつもりなのか)

アキツは喉元まで出かかった言葉を呑み込んだ。

「ここにございます」

ナガスネは全く動ずる事なく、得意満面でアメノムラクモを抜き、アキツに見せた。ホアカリは息を呑み、

「ナガスネ、何という事を！　すぐに剣を戻すのだ。無礼であるぞ」

ナガスネはニツと笑って、

「失礼致しました」

とは言ったが、納剣しようとしなない。

「……」

トミヤも啞然としていた。アキツは怒りを抑え切れなくなったのか、

「ナガスネ！　無礼の数々、許し難し！　ワの国の王家を、そしてその秘剣アメノムラクモを何と心得ておるのか！？　天罰を加える

！
と叫んで立ち上がった。あれほど美しかったアキツの顔が、今は凄まじい形相になっている。さすがのナガスネも、オオヤシマでも一二の呪術者であるアキツが怒りを露にしたので、驚愕していた。
「お、お許し下さい、アキツ様！ この者の無礼、何とぞ私に免じて……」

慌てたホアカリが間に入り、額ずいた。トミヤもすぐに夫の隣で平伏した。ナガスネは驚きのあまり、何もできず、固まってしまったかのように動かない。

「剣は主の元へ」

アキツがそう言うと、ナガスネの手からアメノムラクモが離れ、宙を舞ってアキツの前にコトリと落ちた。

「ひーっ！」

ナガスネはその現象をアキツの呪術と思い、腰を抜かしてしまった。歯の根も合わぬほどに顎が震えている。

「確かにお返し頂きました。ホアカリ殿、これにて失礼致します」

アキツはアメノムラクモを拾い上げ、ナガスネが震えながら差し出した鞘を受け取ると、玉座の間を出て行ってしまった。

「……」

ホアカリとトミヤも惚けたように座り込んでいた。

アキツは笑いを堪えながら、ホアカリの城を出た。そして、しばらく進んだ森の中で木の陰に潜んでいたツクヨミと落ち合った。

「恐るべき術ですね、ツクヨミ殿。ナガスネの驚いた顔と言ったら……」

アキツはとうとう堪え切れずに笑い出した。ツクヨミは頭を下げて、

「言霊師は自分にも言霊を飛ばせませす故。誰にも見えぬと唱えれば、私は姿を消せるのです」

アキツの術ではなかったのだ。ツクヨミが言霊で自分の姿を消し、

城に侵入して、ナガスネから剣を取り上げたのだ。これがツクヨミの策であった。

「貴方が良い方で良かった。これほどの術を使われれば、オオヤシマは……」

アキツはそう言いかけて、ツクヨミが悲しそうな顔をしたのに気づいた。

「申し訳ありません。貴方のお気持ちも考えずに、一人で喜んでしまつて……」

アキツに謝られて、ツクヨミは恐縮した。

「いえ、滅相もない事です。確かに我が力は恐るべきものです。自分でも怖い事がございます」

「ありがとうございます、ツクヨミ殿」

アキツ様が笑うのが自分の一番の幸せ。ツクヨミはそう思った。

(この方のためにも、何としても秘術を為さねばならぬ)

ツクヨミは決意を新たにした。

九の章 武彦の思い、ツクヨミの奇策

アキツはツクヨミと共にヒノモトの国の森を抜け、アマノヤス川が流れる国境を目指していた。

「このままヤマトに戻っても、貴方は大丈夫なのですか、ツクヨミ殿？」

アキツが歩きながら尋ねる。ツクヨミは前を見据えたままで、

「恐らく、私は咎人とがびとでしょう。特にイワレヒコ様には大変疎まれておりますので」

「そうですね」

アキツは先程異界の者から聞いた話をツクヨミにした。

「それは、まさしく定めとも言うべき巡り合わせですね」

ツクヨミもその偶然に驚いたようだ。アキツは歩を進めながら、「ですから、私はイワレヒコ殿に異界の方を降ろしてしまおうと考えているのです」

「ほう」

ツクヨミにはアキツの思惑がもう一つ理解しかねたが、イワレヒコがこの戦を左右する力を持っているのは否めない事実である。

「わかりました。さすれば、どうあってもイワレヒコ様と会わねばなりません」

ツクヨミは近過ぎるアキツの顔をまともに見る事ができず、俯いてしまう。

「はい。でも気に病む必要はないようです」

アキツの謎めいた言葉にツクヨミは辺りの気配を探った。

「これは……？」

言霊師は、自分の言葉を武器にできるだけでなく、他者の言葉ことだましを遠く離れていても捉える力がある。もちろん、面識のない者の言葉は捉える事はできないのであるが。

「イワレヒコ様ですね。兵を率いて、こちらに向かわれているご様

子です」

「さすがですね、ツクヨミ殿。私はイワレヒコ殿の気は感じられませんが、そこまではわかりませぬ」

アキツは立ち止まった。ツクヨミも歩を止めた。

「馬ですね。かなりの軍勢のようだ。しかし、ヒノモトを攻むるおつもりではない」

「ええ」

アキツは、イワレヒコが発するオオヤシマを覆い尽くしそうな悪意を感じていた。

「イワレヒコ殿は、貴方を探しているようですね」

アキツはツクヨミを見た。しかしツクヨミは前を見据えたままで、「ええ。私を殺すと仰っています。あの方は、イスズ様と私の事をお疑いなのです」

「まあ」

アキツは、その事に関してはイワレヒコを責められないと思った。ツクヨミには全くその気はないようだが、イスズは明らかにツクヨミを男として見ている節があったのだ。

「だからと申して、イワレヒコ殿が貴方を殺めて良いということはありませぬ」

アキツは毅然とした口調でイワレヒコがいると思われる方角を睨む。

「はい。そして私は、今ここで命を落とす訳には参りませぬ」

ツクヨミはアキツをチラッと見て、力強く言った。

一方、アマノヤス川付近に陣を張っているホアカリの嫡男であるウマシは、イワレヒコの軍勢がアキツとツクヨミに近づいていると知り、色めき立っていた。

「イワレヒコめ、アキツ様を襲うつもりか。そのような事、断じてさせぬ！」

ウマシは騎乗した。そして、

「逆賊イワレヒコを屠^{ほぶ}るのだ！ 勝利は我らにあり！」

と叫んだ。しかし、周囲の兵は、ウマシの実力をよく知っている。イワレヒコが相手では、負け戦^{いっく}が見えているのだ。

「王子、ご冷静になってください。相手は一騎当千のイワレヒコ殿です。ここはご自重を！」

参謀役の老兵がウマシを諫めた。ウマシは老兵を馬上から睨みつけ、

「うぬはこのウマシが、イワレヒコ如きに劣ると言うか！？」
その通りなのだが、決してそれは口にできないのが下の者の辛^{つら}いところだ。

「いえ、決してそのような事は……。イワレヒコ殿は怪力無双です。馬ごと斬られた兵が何人もおります故、策を立てねば危ういという事です」

老兵はウマシの怒声に怯む事なく言葉を続けた。

「おのれエエッ！」
ウマシはやり場のない怒りを込めて叫んだ。

(私は兵に見くびられているのか!?)

ウマシのそのような考え方が兵に疎まれる理由だという事を彼は気づかない。

イワレヒコの軍勢は確実にアキツ達に近づいていた。

「よいか、ツクヨミだけだ。間違ってもアキツには手を出すなよ。アキツを殺めれば、民の心は離れ、戦に敗れる」

イワレヒコはその巨体を支えるだけの大きな馬に乗り、周囲の兵達に命じた。

「はは！」
兵達は畏^{かしこ}まって応じる。イワレヒコはニヤリとして、

「姉上への手土産は、ツクヨミの首だ」

と呟いた。その言葉を聞き、イワレヒコの近くにいた兵達は思わず身震いした。

「アキツ様はアマノヤス川までおいでです」

そこへ、先発していた斥候せつこうが戻って来て報告した。

「よし。川を渡るぞ。物の怪の血で、ヤマトの土を汚したくない」

イワレヒコの命に兵は驚いた。

「し、しかし、川の向こうはヒノモトです。軍勢もおります」

「腑抜けのウマシの軍なぞ、気にする事はない。動きはせぬ」

イワレヒコは、ウマシが動こうとしても、周囲がそれを止めに入る事を見抜いていたのである。

アキツとツクヨミはアマノヤス川が見えるところまで来ていた。

川の流れが作る緩やかな風が二人の頬を撫で、アキツの長い髪をフワフワと舞わせる。大河の中を、流れをもともせずに進むイワレヒコの姿が見えた。兵達の馬は思うように進めず、イワレヒコに怒鳴られているようだ。

「イワレヒコ殿の軍勢が、川を渡り始めましたね」

アキツが言った。ツクヨミは頷いて、

「はい。ヒノモト側の軍勢はホアカリ様のご嫡男のウマシ様の軍です。イワレヒコ様は、ウマシ様を軽んじておられます。動かぬとお思いなのでしょう」

「そうですね」

アキツはウマシの容姿を思い出していた。一度だけ、ワの国の宮殿で見かけた事がある。どう見ても勇猛果敢とは言えない、ひ弱そうな男だった。

「イワレヒコ様は、私の首をイスズ様への土産にするおつもりですよです」

ツクヨミは苦笑いをして言った。アキツはキツとして進撃するイワレヒコ軍を見て、

「そのような事、決してさせませぬ！」

と声を荒げた。ツクヨミはその言葉に感激していた。

磐神武彦は放課後、あまり行った事がない図書室で調べ物をして
いた。

「ワの国、ワの国……」

彼は「ワの国」が昔の日本だとその時初めて知った。

「そうだったのか……。じゃあ、あの人は、昔の人なのかな？」

どんな女の人なのだろう？ そんな事を考えていると、

「あ、こんなところにいた！」

と都坂亜希がやって来た。

「あれ、委員長。どうしたの？」

委員長という呼び方に一瞬ムツとした亜希だったが、

「補習サボって何してるのよ、武君？」

「あ、そうだった！」

武彦は慌てて本を書棚に戻し、鞆を掴むと、

「ありがとう、教えてくれて！」

と走り去った。亜希は、

「全く、何なのよ、あのチャランポランな性格……」

でもそんな武彦が好きなのは事実だ。

「私って、変わってるのかな？」

自分に苦笑する亜希だった。

そしてもう一人の「変わってる」人である磐神美鈴は、別の病院
をネット喫茶のパソコンで検索していた。

「同じ夢を見る……」

検索を開始する。しかし、最初にヒットしたのは、先日「ヤブ医
者」呼ばわりした大学病院だ。

「ここしかないの？」

美鈴はぼやきながらもその下の病院のサイトを開いてみる。

「心療内科は、この前の病院が一番有名みたいだなあ……」

彼女はブラウザを閉じ、電源を落とした。

「もう、あのバカのせいで、どうして私がこんなに気を揉まないとならないのよ！」

しかし、誰かに頼まれた訳ではない。

「武彦……」

それでも心配なのは変わりない。美鈴は携帯の待ち受けにしている幼い頃の二人の画像を見て呟いた。

アキツとツクヨミは、ようやく川を渡り終えたイワレヒコの軍に囲まれていた。

「これはこれは、アキツ様。馬上よりの挨拶、お許しください」

イワレヒコは勝ち誇った顔で言った。アキツはイワレヒコを見上げ、

「どこまでも礼儀を知らない方ですね、イワレヒコ殿。馬を降りなさい」

「はい」

イワレヒコは苦笑いをして馬から降りた。そしてツクヨミを睨み、「私は貴女には用はございません。この物の怪に用があるので」
ツクヨミはイワレヒコの挑発に眉一つ動かさない。

「物の怪とは、無礼でありましょう！」

アキツの言葉はイワレヒコに届いていない。

「言葉を操り、人の命をも奪える者が物の怪でなくて何でありますようか、アキツ様。ささ、お離れください。私がそやつを退治致します故」

「……」

アキツは救いを求めるようにツクヨミを見た。するとツクヨミは、「わかり申した。ならばイワレヒコ様、一騎打ちを致しましょう」
ツクヨミの言葉に、一瞬呆然としたイワレヒコだったが、やがて大笑いをして、

「何を言い出すのだ、ツクヨミ？ うぬ如きが、このイワレヒコと

「一騎打ちだと？ 戯言を申すな！」

「私との一騎打ちが怖いのですか、イワレヒコ様？」

ツクヨミの挑発にアキツは驚いていた。どう考えても、ツクヨミに勝ち目はないと思ったからだ。

（何を考えているのです、ツクヨミ殿？）

アキツにはツクヨミの意図が読めない。

「戯けた事を申すな！ 何故このイワレヒコが、うぬを恐れる事がある！？ 承知、受けて立つ！」

イワレヒコはツクヨミの挑発に乗り、剣を抜いた。ツクヨミは、

「私は剣を持っておりませぬ。お借りしたいのですが？」

イワレヒコは、アキツが秘剣アメノムラクモを持っている事に気づいていたが、

（王族の証であるアメノムラクモは使えぬか。どこまでもつまらぬ男よ）

と腹の中でツクヨミを笑った。

「誰か、剣を！」

イワレヒコは兵が差し出した剣をツクヨミの方へ投げた。

「ありがとうございます」

ツクヨミはその剣を拾おうと前に出た。

「ツクヨミ殿！」

アキツが声を振り絞って叫ぶ。ツクヨミ目掛けて、イワレヒコが凄まじい形相で突進していたのだ。

「死ぬるがいい、ツクヨミ！」

イワレヒコの剣が、ツクヨミに振り下ろされた。

「くー！」

アキツは思わず目を伏せた。

「ぬっつー！」

イワレヒコは齒軋りしていた。不意を突いたつもりが、ツクヨミに剣をかわされてしまったのだ。

「卑怯でございますよ、イワレヒコ様」

ツクヨミの構えた剣は、イワレヒコの喉元すれすれにあった。

「くっ……」

イワレヒコは身動きがとれない。

「我が言霊師一族は、あらゆる事に秀でた一族です。剣術もまた然り」

「おのれ……」

イワレヒコは形勢逆転をしたいのだが、それは万に一つもない状況だ。

「お眠りください」

ツクヨミの言霊がイワレヒコに放たれ、彼はそのまま前のめりにドスンと倒れ伏した。

「ひいいい……」

イワレヒコ軍の兵は、イワレヒコがあっさり倒されたのを見て、我先にと逃げ出した。

「情けない兵共だ」

ツクヨミは剣を投げ捨て、まだ目を伏せたままにいるアキツに近づいた。

「アキツ様、終わりました」

「え？」

アキツは恐る恐る目を開けた。そしてイワレヒコが倒れているのを見た。

「こ、これは？」

「お眠りいただきました。私が声をかけぬ限り、イワレヒコ様は目覚めませぬ」

ツクヨミの力は、アキツが思っていた以上だった。

「ただ、この巨体を運ぶ手立てがございませんね」

「それならば、大叔母様の牛車を呼びましょう。あれならば、運ぶ事ができましょう」

アキツは微笑んで言った。そして確信した。ツクヨミならば、必ず異界人を呼び込んでくれると。

十章 武彦の気持ち、アキツの誓い

我々が生きる世界とは別の世界にあるオオヤシマは大きく動こうとしていた。

嫉妬に狂ったヤマトの国の剣士イワレヒコはヤマトの国とヒノモトの国を隔てる大河、アマノヤス川を越え、言霊師であるツクヨミを襲撃した。

しかし、ツクヨミは言霊師一族の能力で完全にイワレヒコを翻弄し、言霊によつて彼を眠らせた。それを見た兵達はたちまち戦意を喪失し、ヤマトの国へと逃走した。

「牛車が参ります」

アマノイワトにいるオオヒルメと心同士で交信していたアキツが告げた。

「やはり、ワの国の王族の皆様は、我ら一族より遥かに神に近いですね。アキツ様のお力、実に恐れ多いものです」

ツクヨミが眠ったままで全く動かないイワレヒコを縄で縛り上げながら言う。

「私達は、王家の者同士で心と心で話ができるだけです。ツクヨミ殿は、そうではありませんでしょうか？」

顔を朱に染め、アキツはやや含羞はにかんで応じた。ツクヨミはアキツの反応に苦笑いをして、

「はい。その時によつては、心を閉じねば気が変になってしまう事もあります。言葉は、遠き近きに関わりなく、聞こえます故」

「そうですねですか」

アキツも言霊師の一族に生まれたが故のツクヨミの心中を察したのか、顔を曇らせた。

「イワレヒコ様の兵達が事の顛末てんまつをウガヤ様に伝える前に、何とかアマノイワトまで戻れば良いのですが」

ツクヨミはヤマトの国の方を見て呟いた。

「案ずる事はありません。あの兵共の言葉をウガヤ殿が信ずるとは思えませぬ。イワレヒコ殿がツクヨミ殿に負けるなど、思いもしないでしょうから」

アキツは右手で口を隠して、クスツと笑ってみせる。その仕草がツクヨミには眩し過ぎる。

「そうですね。兵共の作り話と思い、彼等に罰を与えるやも知れませぬ」

ツクヨミは目を細めて笑った。アキツもツクヨミが笑ってくれたので、ホツとしたようだ。実際のところ、ウガヤと言う王はその通りの人物である。疑い深く、人の言葉を信用しない。

「少しでも早く、異界の方をこちらに呼び寄せたい。そればかりを考えておりましたが、異界の方にもその方の暮らしがあります。それを思うと、私達の為そうとしている事は、あまりにも身勝手に…」

アキツはふと気になって、口にした。するとツクヨミは、

「それならば私に良い案があります。お任せ下さい、アキツ様」

「そうですね。それは心強い」

アキツはニッコリして言った。ツクヨミはアキツの笑顔に胸が高鳴るのを感じて思わず彼女から目を逸らせ、イワレヒコの様子を探るフリをした。

ウガヤは謁見の間で、イワレヒコに付き従った兵達が揃いも揃っておめおめと逃げ帰って来た事に激怒していた。

「一体何が起こったのだ？ イワレヒコほどの剣の使い手が、ツクヨミ如きにしてやられるとは考えられぬ」

ウガヤは椅子から立ち上がり、怒鳴り散らした。

「陛下」

そばに控えていたヤマトの国の將軍であるタジカラが声をかけた。彼はイワレヒコを上回る巨漢で、まさに一騎当千の強者であるが、

イワレヒコとは違い、無益な殺生を好まぬ温厚な男だ。しかし、一度戦となれば、タジカラに敵う者はいないと言われている。

「言霊師は秘術を使います。イワレヒコ様は、ツクヨミの術に嵌められたのではないでしょうか？」

タジカラは激高するウガヤを落ち着かせるためにゆっくりと話した。

「なるほど。イワレヒコは確かに強いが、考えなしに突っ込むところが悪しきところ。それはあり得るな」

椅子に腰を下ろしたウガヤはタジカラの意見に頷き、すっかり怯えている兵達を見渡す。

「うぬらは兵舎に戻り、出陣の支度をせよ。再び、ツクヨミを攻めるのだ」

「ははっ！」

兵達は転がるようにその場から走り去った。次にウガヤはタジカラを見る。

「うぬが隊を率いよ、タジカラ」

「はっ！」

タジカラは深々と一礼し、退室した。

「陛下」

ウガヤの妃であるタマヨリが言った。その面差しは娘のイスズに似ている。但し、タマヨリの方がイスズより儂はかなそうに見える。身に着けている衣は王族の証である白地に緋色の縁取りがされていた。

ウガヤより年下の彼女は、髪は未だ漆黒で頭頂部で纏まとめられ、髪留めで留められている。そこから下ろされた部分も艶があり、その肌も若々しくて張りがあがる。粗野なウガヤには勿体ないほどの美麗な女性だ。だが、ウガヤとの関係は悪化している。互いが相手が必要としていないのだ。

「何だ？」

ウガヤはこの何もできない妃を疎んじている。タマヨリにもそれはわかっていた。ウガヤの心はアキツに向けられている。彼女はそ

う考えていた。しかし、嫉妬ではない。もはや二人の間には、愛も思い遣りも存在しないのだ。

元より、この戦はナガスネが唆してホアカリに始めさせたものだが、それに乗った形のウガヤにも野心がある。タマヨリを追放し、アキツを新たな妃として迎える。タマヨリはそんな話を人伝に聞いたのだ。根も葉もない噂である。ウガヤには野望しかない。アキツの事も人心掌握のために必要と想っている程度だ。決して妃になどと考えた事はない。彼には物欲と征服欲はあるが、性欲はないのだ。「アキツ様には、手荒な真似はなさいませぬように」「わかつておる。ツクヨミを弑するためだ。アキツ様には何もせぬ」ウガヤはつまらぬ事に口を挟むタマヨリが鬱陶しかった。

他方、ヒノモトの国にも、イワレヒコがツクヨミに倒されたという情報が入っていた。アキツの力に腰が抜けていたナガスネは、更に驚愕した。

「イワレヒコがツクヨミにだど!?」
もはや人ではない。ナガスネは改めて言霊師という一族を恐怖した。

「ナガスネよ、考え直せ。アキツ様とツクヨミは、我らとは違つのだ。敵う相手ではない」

ホアカリ王がナガスネの動揺を見かねて言った。

「しかし、イワレヒコは、気が緩んでいたのやも知れませぬ。こちらが気を引き締めておれば、ツクヨミに負ける事はありません、陛下」

本当は、膝の震えが止まらないほど怖じ気づいているのに、ナガスネは尚も強がりを言った。

「兄上、お控えなさいませ。陛下のお言葉ですぞ」

王妃トミヤが口を挟む。忌ま忌ましいと思うが、妹の言葉の方が正当である。ナガスネは、

「失礼致します」

と言つと、玉座の間を出て行つた。

「愚かな兄で申し訳ありません、陛下」

トミヤは悲しみに満ちた目でホアカリを見た。

「お前が悲しい顔をするな、トミヤよ。私には其方そなたのその顔が一番辛い」

「はい」

トミヤはホアカリの言葉に涙を拭つて頷いた。

「それよりも、ウマシが気になる。彼奴あやつは、アキツ様に心惹かれていと聞く。まさかとは思うが、ツクヨミを追うかも知れぬのだ。そちらの方が気になる」

「はい。あの子は、己おのれの力をわかつておりませぬ故、誠に気がかりでございます」

トミヤはホアカリの考えに同意した。

警神武彦いわがみたけひこはヘトヘトになりながら、何とか補習を終え、校舎を出た。もうすっかり日が傾き、校庭にはほとんど生徒の姿はない。運動部の部員達も、すでに片づけを始めている。

「あつ……」

その時、武彦にはまた声が聞こえた。

「たけひこ様、私達に力をお貸しく下さい。オオヤシマをお救いください」

「また聞こえた……」

武彦は立ち止まった。そして頭垂れてしまう。それでも、気になる事があつたので尋ねる事にした。

「貴方は、日本人なのですか？　ワの国って、昔の日本なのではないか？」

そんな事を訊かれても、昔の人に「昔の国」という言い方は通じない。そして何より、アキツ達がいるのは、昔の日本ではない。全くの別世界である。

『貴方がお眠りになった時、お会いしましょう。その時に全てお話し致します』

声の主であるアキツが答えた。

「はあ……」

武彦が溜息を吐いた時、

「武君！」

幼馴染みで同級生の都坂亜希みやこさかあきが、校門の前から彼を呼んだ。

「あ、委員長」

武彦は我に返って亜希を見た。亜希は鞆を両手で持ち、左右に動かしている。武彦が近づいて来ないので、イライラしているようだ。「そう言えば、あの声、委員長の声に似ているかな？」

武彦は亜希の声とアキツの声を頭の中で比べて、そう結論づけた。「どうしたのよ、独り言を言って。また変な夢を見ているの？」

それでも、最近様子がおかしい武彦の事が心配になった亜希が自分から近づいて来て尋ねる。武彦は苦笑いをして、「いや、夢は見ないんだけど、声が聞こえるんだ」

その方が危ないんじゃないの、と亜希は思う。確かにその通りだ。「でさ、その声が、何となくなんだけど、委員長の声に似ている気がしてさ……」

武彦の思わぬ言葉に、亜希は何故か耳まで真っ赤になる。

「な、何よ、変な事、言わないでよ!」

亜希は鞆を後ろ手に持ち直して、大声で言った。

「えっ?」

武彦の方は、亜希の動揺が理解できない。

「いつも、委員長に怒られてるから、委員長の声に聞こえちゃうのかな?」

そしてまた、火に油をタツプリと注ぎ込んでしまう。「委員長」を連発された亜希はすっかり気分を害していた。

「し、失礼ね! 私は武君の事、怒ってばかりいないわよ!」

亜希はبيضと背を向け、そのままスタスタと駆け去ってしまった

た。

「ああ」

またやってしまったと思う武彦だった。

「委員長つて、時々意味不明に怒るんだよなあ」

武彦には怒られる理由がわからないとは言え、酷い言われよしの亜希である。フウと小さく溜息を吐くと、武彦はトボトボと寂しそくに歩き出した。

そしてその夜。

武彦は夕食を済ませて風呂に入って部屋に戻ると、あの女性の声が言っていた事を思い出した。

「眠った時に会いましょうって、ここへ来るのかな？」

武彦は、その人が来た時、姉や母が部屋に入って来たら何と言えればいいか考えた。

「困るよなあ。何て言い訳すればいいんだろう？」

心配しなくてもそんな事は起こらないから、とアキツが知れば教えていただろう。

「その時はその時か」

難しいと思う事はあまり深く考えないのが、武彦の短所であり、長所でもある。

「寝よう」

彼は布団に入り、目を瞑った。そして、しばらくして眠りに落ちた。

そう、眠ったはずだった。しかし、武彦は何故か起きていた。

「どこだ、どこ？」

周囲を見回すと、霧がかかっている、ほとんど視界ゼロである。明るいのか、暗いのか、それもよくわからない。

「異界の方、お呼び立てして申し訳ありません」

例の女性の声だ。

「あ、いつもの方ですか？」

武彦はビククリしてキョロキョロした。しかし、相変わらず霧が深く、見えるものは何もない。

「はい。私の名はアキツ。ワの国の者です」

その声と共に、霧の向こうからフワツと女性が現れた。その姿は、武彦が図書室で調べた古代日本の女性とよく似ていた。服装も髪型も、武彦が「山田国」だと思っていた「邪馬台国」の想像図に出て来た人物にそっくりだったのだ。しかも顔は、

「あれ、もしかして委員長なの？」

と訊いてしまいうくらい、亜希にそっくり、いや、亜希そのものだった。そのせいで武彦は思わず緊張してしまった。

「私はアキツです。『いいんちよう』という名ではありませんぬ」

「名前も似てる。ホントに委員長じゃないの？」

「はい。私はワの国の王家の者です」

「OKの者？」

武彦はそんな天然ボケを連発していた。でもアキツにはそれがわからない。

「これから、私の住むオオヤシマにお出でいただきます」

アキツの言葉に武彦はギョツとした。

「あ、でも、僕、学校行かないとだし、勝手に出かけたりしたら、姉ちゃんと母さんに怒られちゃうし……」

「それは案ずる事はございませぬ」

アキツは微笑んで言った。武彦はその笑顔にドキツとしながらも、「えっ、そうなの？」

「はい。私を信じてください、たけひこ様」

アキツは亜希にそっくりだが、亜希と違って怖くないので、そんなアキツに「たけひこ様」などと呼ばれて、武彦は照れてしまった。身体のおちこちがむず痒くなる感じがした。

「では、参りましょう」

アキツがゆっくりと霧の中を歩き出す。

「は、はい」

武彦もアキツに続いて霧の中を進む。足下も見えないのに何故か不安にはならない。

遂に武彦はオオヤシマに行く事になる。本当の戦いが始まるうと
していた。

十一章 アキツの導き、武彦の戸惑い

磐神武彦はワの国の次期女王であったアキツに伴われ、どこまでいわがみたけひこの続くように見える霧の中を進んでいた。

「あの……」

武彦は、どうしてもアキツが同級生の都坂亜希みやざかあきに思えてしまい、緊張しながら声をかけた。

「はい、如何いかがなさいましたか、たけひこ様？」

アキツは笑顔で武彦を見た。武彦は美しいアキツの顔を恥ずかしくて直視できず、

「随分歩きましたけど、まだ着かないんですか？」

「もうすぐでございます。あちらに扉が見えますよ」

アキツはそう言いながら、霧の向こうに見える、光り輝く扉を指差した。

「ああ、ホントだ。もうすぐなんですね」

武彦は少しだけホツとした。アキツはそんな武彦を微笑んで見つめたまま、

「はい、たけひこ様」

「たけひこ様」と呼ばれる度にお尻がムズムズするなあ、と武彦は思った。彼自身、本当は亜希の事が好きなのだが、自覚していないのだ。普段は亜希の「怖さ」が先立ち、愛とか恋とかを考える余裕がないのである。そのため武彦は、アキツに感じる思いがどういうものなのか、理解しかねていた。

「さあ、こちらへ」

アキツが先に立ち、扉を開いた。するとその向こうから、眩いばかりの光が溢れ出し、武彦は思わず手を翳かきして目を閉じてしまった。

その頃、ヤマトの国の將軍タジカラ率いる騎兵隊は、アマノヤス川を目指して進軍していた。

「お館様、この進軍はあまりにも危うき事が起こる気配がします」
將軍の乗る馬車の中で、タジカラの奥方であるウズメが言った。
巨漢のタジカラには似合わぬ小柄な美女である。彼女は舞踏師と呼ばれる一族の出身で、八百万の神を召喚して戦う特殊能力の持ち主である。ヤマトの国の王妃タマヨリやその姫であるイスズ達と違い、ウズメの衣は紅色の薄衣で、袖は二の腕まで見え、裾は膝丈までしかない。服装も妖艶だが、ウズメ本人も長い髪を真ん中で分けて結ばずに自然に垂らしているので、それがまたまた艶かしさを醸し出している。襟元も広く開いていて、屈むと胸の谷間が見えそうだ。
「何故そう思うか、ウズメ？」

タジカラはわかっていながらそう訊いた。ウズメは窓から外を見て、

「相手はツクヨミ殿です。国王陛下も、ツクヨミ殿の恐ろしさをご存知のはず。だからこそ、あの方を縛らず、命じず、解き放つておられたのです」

タジカラは正面を見据えたままで腕組みをし、

「それは私もわかっておる。国王陛下は、イワレヒコ様をお助けするのは、私の他にはいないとお思いなのだ。他の者がお救いしては、イワレヒコ様の沽券こけんに関わる」

「お館様は、お分かりになった上で、火中の栗を拾われると？」

ウズメは目を見開いて尋ねる。タジカラはニヤリとしてウズメに目を向け、

「私はイワレヒコ様を好かぬ。命を命と思わぬご気性、どうにも許せぬのだ」

「まさか……」

ウズメはますます驚いて夫を見た。タジカラは苦笑いして、

「案ずるな。何もイワレヒコ様を亡き者にしようと考えておる訳ではない。只、貸しを作っておきたいだけだ」

「貸し？」

ウズメは訝しそうな顔で鸚鵡返しに尋ねた。

「そうだ。イワレヒコ様は我が策を悉く撥ね付けられ、その上手柄を立てられている。このままでは私の立つ瀬がない」

タジカラはイワレヒコの強さを認めてはいるが、その悪逆非道な戦い方は嫌いなのだ。

「ここでお助けすれば、この後私もやり易いというものだ」

タジカラはそう言うと、再び前を見据える。

「はい……」

ウズメは、男同士の駆け引きはよくわからぬ、と思い、小さく溜息を吐いた。

「はっ！」

武彦はバツと跳ね起きた。

「あれ？」

しかし、そこは自分の部屋ではない。薄暗く、翳していた自分の手がぼんやりと見える程度だ。周囲を見回すと、どうやら洞窟の中らしいのがわかった。明かりは蝋燭のようなものだけで、蛍光灯や電球の光はない。

「気づかれましたね」

アキツの声がした。

「えっ？」

武彦は声がした方を見た。正座をして自分を見つめるアキツがいた。でも、やけに顔が下に見える。最初に会った時は、自分の身長と変わらなかつたはずなのに。

「まずはご自分のお姿をご覧なさいませ、たけひこ様」

「は、はい」

武彦はゆっくりと立ち上がった。

「あれれ？」

いつもより、地面が遠くに見える。しかも、足下を見た時に気づいたのだが、着ている服が変わっている。裸足だったのに、変わった形の靴も履いている。

(さつきまで、スウェットを着ていたはずなのに……。何だ、この服は?)

「さあ、こちらにごぞいます」

アキツが武彦の手を取って案内してくれた。柔らかくて、温かい手。それは亜希の手の感触に似ている気がした。

「あつ！」

目の前にある姿見に写る自分と思われる男の姿を見て、武彦はギョツとした。それは、ヤマトの国の剣士イワレヒコの姿だったのだ。勿論、武彦にはその正体はまだわかっていない。

「ぼ、僕じゃない! ど、どういう事なんですか?」

武彦はアキツに尋ねた。アキツは真剣な表情で、

「その事はそちらの部屋でお話し致します。ご一緒に」と言つと、洞窟を進んで行った。

「はい……」

アキツについて歩き出す。やっぱり、委員長達のドッキリなんじゃないか、と武彦はまた思い始めていた。

一方、ナガスネは自分の館で怒りを露にして物に当たり散らしていた。

「忌ま忌ましいー!」

彼は自分の部屋に設えてあつた壺を投げつけ、食器を粉々にした。

「陛下はお人が良過ぎる。それに加えて、我が妹の……」

トミヤは愛する妹であるが、時々出しゃばり過ぎるのが気に入くない。

「申し上げます」

そこへ斥候がやって来た。

「何用だ?」

ナガスネは斥候を睨みつけた。しかし彼はナガスネの事をよく知つているので、全く気にせず跪き、

「ヤマトの將軍タジカラ殿が、兵を率いて出立しました」

ナガスネは眉を吊り上げて斥候を見た。

「何、タジカラが？」

「恐らく、イワレヒコ様をお救いに行くと思われませう」

斥候は続けた。ナガスネは顎に手を当てて思案し、

「その事は陛下にお伝えしたか？」

斥候は首を横に振り、

「いえ、これからでございます」

ナガスネはその答えを聞くとニヤリとし、

「わかった。陛下には伝えなくて良い。ご苦労であった」

「はは」

斥候は退室した。

「タジカラか。となると、今ヤマトにいるは、腑抜けのイツセと、益体やくたいもない輩やからのみだな」

ナガスネの顔が狡猾さを増した。

武彦は広間へ行き、オオヒルメとツクヨミに紹介され、普段はオオヒルメが座る上座に座らされ、アキツから全ての経緯を説明された。何が何やらチンプンカンプンな武彦である。

「はあ」

溜息とも返事とも吐かない声が口から漏れた。アキツの話は余りに途方もなく、また「ドッキリ説」が頭に浮かんで来る。

「このオオヤシマをお救いください、たけひこ様」

アキツは地面に正座し、武彦に頭を下げた。その隣にいるオオヒルメも、アキツほどではないが、頭を下げている。先程聞いた話では、先代の女王という事だ。そんな偉い人までが、自分に頭を下げている。武彦は混乱し始めていた。

「まだいろいろとおわかり頂けていないご様子ですね。お急ぎになる事はございませぬ。ごゆるりとお考えください」

オオヒルメとアキツの後ろに跪いているツクヨミが言った。

「は、はい」

武彦はその言葉にホツとし、笑顔を見せた。

(何故だろう？ ツクヨミさんの言葉は、すごく安心感がある)

武彦は思った。それはツクヨミが言霊ことだまの力を使っているからなのだ。

「僕は何をすればいいんですか？」

武彦は少しだけ心が落ち着いた気がしたので、思い切って訊いてみた。

「まずはお国にお戻りになり、ウガヤ王をご説得ください。そして、その上でホアカリ王を説き伏せ、この度の戦たたかの大本おおもとであるナガスネをお召し捕りください」

オオヒルメが答える。武彦は、オオヒルメがもつとも苦手な英語の尼照あまてる富美子ふみこ先生に似ているような気がして怖い。只、オオヒルメの方が尼照先生より年上だと思った。

「うがやさんて、今の僕のこの身体の持ち主のいわれひこさんのお父さんなんですよね？」

武彦は慎重に言葉を選んで尋ねる。

「そうです」

アキツが笑顔で答えた。武彦は照れ笑いをして、

「それで、何て言えばいいんですか？」

「兵を引き、戦をやめ、ヒノモトと共にオオヤシマを守護するように申し伝えてください」

アキツが続けて話した。オオヒルメは、武彦が自分の事を怖がっているのを感じたのか、アキツに任せるつもりだ。彼女はアキツに目配せした。

「そんな事を言ったら、怒られないですか？ いわれひこさんのお父さんなんですよ？」

父親をほとんど知らない武彦には「父と子」という関係がよくわからない。父親を説得するなど、無理のような気がした。

「それは何とも……。イワレヒコ殿はヤマトの国一番の剣士でございます。そのイワレヒコ殿が戦をやめると話をすれば、兵達は従い

ましよう。但し、ウガヤ王が何と申されるかは、私にもわかりませぬ」

アキツは救いを求めるようにツクヨミを見た。ツクヨミはアキツに頷いてみせてから、

「たけひこ様、ご案じ召されますな。策はこのツクヨミにお任せください。貴方様には一切害なきよう、取り計らいまする」

「そ、そうですか」

ツクヨミの言葉はまた武彦の不安を取り除いてくれる。それは武彦にもわかったが、何故そう感じてるのかは正直言つて不思議であった。

アキツとツクヨミは、イワレヒコが戦に反対し、ヤマトの国の軍を引き上げさせれば、ヒノモトも引き上げざるを得なくなり、戦いは終わると考えていた。しかし、事はそう簡単にはすまない。すでにナガスネが、オオヤシマの端まで軍を進め、海伝いにヤマトに攻め込む準備を進めていたのだ。

そして何よりも、この戦の始まりを招いたのは、ナガスネではなかった。オオヤシマの地下深く存在する闇の国「ヨモツ」。イザという女王が治める、邪悪に満ちた国である。そのイザが、ナガスネを傀儡として、オオヤシマの全てを手に入れようと動いていたのだ。オオヒルメが危惧していた事は、すでに起こっていた。しかし、彼女達はそれにまだ気づいていない。

「では、お休みください、たけひこ様。また後程」

アキツがそう言つと、武彦は急に眠くなり、その場にコテンと倒れ伏してしまった。

「あれ？」

目を覚ますと、そこは見慣れた自分の部屋である。どつちやら、朝のようだ。武彦はベッドから出て箆笥の上の鏡に近づくと、

「何だ？」

鏡を覗くと、いつもの自分の顔があった。あの厳いかつい大男の「イ
ワレヒコ」の顔ではない。

「夢？」

夢にしてはあまりにはつきりと覚えているし、アキツの手の感触
がはつきり残っている。

「夢じゃないのか……」

武彦は手の平を見つめて呟いた。アキツの綺麗な手と彼女の笑顔
を思い出し、ドキドキしてしまう。

「ドツキリのような気がするけど、そうじゃないよなあ」

それでも武彦は学校で亜希に尋ねてみようと思った。そんな事を
尋ねれば、また亜希が怒るとは思わずに。

「こらアツ、武！ 早く起きろ！」

いつものように怖い姉美鈴がやって来て、勢いよく部屋のドアを
開け放った。

「おはよう、姉ちゃん」

笑顔で応じた武彦を見て、一瞬面食らった美鈴だったが、

「何だよ、起きてるなら、さっさと降りて来いよ。遅刻するぞ」

「うん」

美鈴は首を傾げてから部屋を出て行った。

「姉ちゃん、驚いてたな」

武彦はクスツと笑い、部屋を出た。

十二の章 オモイの策、タジカラの怒り

アキツは、武彦の魂を元の世界に返し、ゴロンと横になったイワレヒコを見下ろしていた。

「それにしても、ツクヨミ殿の力、本当に驚きました」

ツクヨミはアキツの感動の声に少々赤面していたが、

「いえ、それ程のものでは……。イワレヒコ様とあのたけひこ様の相性が良かったのです。事がうまく運び、安堵しております」

ツクヨミはヒノモトの国から取り返したワの王家の秘剣であるアメノムラクモを借り、言霊師ことだましの数々の秘術を尽くして、武彦の魂だけを呼び込む術を編み出し、その上でアキツの魂をこちらの世界と異界の間いざなに送り込む事にも成功した。その際、アキツの身体に言霊を吹き込む事が必要になったのであるが、ツクヨミはその時図らずもアキツの心を覗いてしまい、そんな自分を恥じた。アキツ様は自分に信頼以上の情を抱いてくださっている。ツクヨミは今まで以上にアキツを意識するようになってしまったのだ。

「控え目なのですね、ツクヨミ殿は」

アキツはツクヨミの心を知らず、ニッコリと言う。オオヒルメも嬉しそうに、

「我が一族の禁呪を使わず、見事異界の者を呼び込めた事、感謝するぞ、ツクヨミ」

「ありがとうございます、オオヒルメ様」

ツクヨミは震えてしまいそうなほど感激し、跪いて言った。そして、

「これからは、如何いかにしてたけひこ様の暮らしに障さわりなく、こちらにいらして頂けるか、考えよう存じます」

「どうするのですか？」

興味津々の目で、アキツが顔を寄せて尋ねる。ツクヨミは近過ぎるアキツの顔に緊張しながらも、

「たけひこ様をお呼び立て致す時に、たけひこ様のお休みの時をお借りする事ができるよう、我が一族の秘術を組み合わせてみようと思っております」

「そうですか。あの方がお疲れになる事がなきよう、取り計らって下さい」

アキツは微笑んで言った。ツクヨミは頭を下げ、

「はい。あの方が、このオオヤシマをお救い下さりますのは、紛れもなき事にございますので、仰せのままに致します」

「頼みましたよ、ツクヨミ殿」

アキツは自分でも抑え切れなくらい、ツクヨミに感謝していはしたくない事はあるが、ツクヨミを抱きしめたいと思った程だ。しかし、それは立場上できない事なのは承知している。ましてや、大叔母のオオヒルメの前でそのような事ができるはずもない。

「それよりも」

ツクヨミはアキツの思いがわかってしまつたので、彼女の溢れ出るような感情に呑み込まれないようにするためにアマノイワトの外の方に目を向けた。そして、

「何やら、悪しき心が近づいて来ております」

アキツとオオヒルメにも、それは感じられていたようだ。

「ヤマトの軍であろう。イワレヒコがここに連れて来られたのを知り、ここに攻め入るつもりかも知れぬ」

オオヒルメは眉を吊り上げて、強い口調で言った。アキツも頷いて、

「ヤマトばかりではありません。ナガスネの軍も動いております。

ナガスネは、手薄になったヤマトを攻むるようです」

「そのようですね」

ツクヨミは立ち上がって歩き出した。それにアキツが続く。

「イワレヒコ様がここにいて、それを連れ戻しに出立されたのが、タジカラ様。今、ヤマトには、イツセ様しか守り手がいらつしやいませぬ。ナガスネ様なら、その隙を突く事を思いつかれるはず」

ツクヨミは歩きながら話す。アキツは大きく頷いて、「ヤマトはそれを感じていない様子。危ういですね」

アキツはヤマトの国にいるイスズ達の事を心配していた。そして、ヤマトの王子で只一人信頼のおけるイツセの事も気がかりだった。

「イワレヒコ殿とタジカラの二人が不在の今、イツセ殿が出陣される事になりましようが、勝ち負けはすでに決しております」

アキツは悲しそうな顔で言う。ツクヨミもそんなアキツの心がよくわかるので、気が重い。

「ナガスネ殿は、オオヤシマの反対側に回り込み、ヤマトを背後から突く心積もりのようです。我らが動くにしても、間に合いません」

「そうですね……」

アキツは無念そうに呟いた。

「そちらの事も気がかりですが、まずはタジカラ様の方を何とかせねばなりません」

ツクヨミはアキツに進言した。

（しかし、どうした事だ？ ヤマトのウガヤ王は心穏やかだ。よもやそのような事が……）

ツクヨミは、ヤマトの国の軍師の事を思い出していた。

（オモイと申す軍師がいた。あの者、我が一族とは違つが、何やら面妖な気を持っていた）

オモイは異国の地から来たと言っていた。確かに髪の色も違つし、目の色や鼻の形もオオヤシマの人間とは違っていた。

「どうしましたか、ツクヨミ殿？」

アキツが声をかける。ツクヨミはアキツを見て、

「ヤマトには、異国から来た軍師がおるのを思い出しました。普段は城の書室で書き物ばかりしておりますが、異国との戦^{いくさ}や、斥候^{せっこう}の差配^{さくはい}などを司^{つかさど}っております」

「軍師ですか……。しかも、異国の」

アキツには、ウガヤの考えが理解できない。

「もし、その軍師が策^たに長けし者ならば、ナガスネが返り討ちに遭

「うやも知れませぬな」

アキツの言葉にツクヨミはゆっくりと頷き、

「はい。再び、たけひこ様をお呼びするのが宜しいかも知れませぬ」
「そうですね」

二人はオオヒルメの下に戻った。

その頃、ヤマトの国の玉座の間には、ウガヤとイツセ、そして噂の軍師であるオモイがいた。

「そうか。ナガスネがな」

ウガヤは、オモイが予告した通り、ナガスネが海を目指している事を知り、ニヤリとした。

「今やヒノモトは手薄にございます」

そう言つて頭を下げたオモイは、確かにオオヤシマの人間とは違つていた。髪は金色、目は青、鼻はウガヤやイツセに比べて高い。

着ている衣は闇のような漆黒で、オオヤシマの人々が忌む色である。「ナガスネの愚か者が、裏をかいたつもりであろうが、己が^{おのれ}ヒノモトを攻め易くしているとは、夢にも思ふまい」

ウガヤは得意満面で言った。イツセはそんな父王の手放しの喜びを憂えて、

「しかし、もし仮にヒノモトが手薄としても、今から軍を率いて出立しても、ナガスネに気取られて引き返されれば、ナガスネの軍とウマシの軍に挟み撃ちにされよう」

とオモイに反論した。するとオモイは顔を上げてイツセを見、

「ご心配には及びませぬ。早馬をタジカラ様に向かわせてあります」
「何と!?!」

イツセは驚愕した。オモイは、二手三手先を読んでいたのだ。いや、ナガスネ達がオモイの策に誘導されたというのが正しいだろう。「タジカラ様には、始めよりヒノモトにお向かい頂く手筈でございます」

「タジカラは存じておるのか?」

イツセはムツとして尋ねた。オモイはフツと笑い、「いえ。お伝えしております。タジカラ様はそのような策を好まれません故、ご存知でない方が、宜しいかと」と再び頭を下げた。

「……」

イツセは、オモイの策謀に背筋が寒くなる思いがした。

(この者、信を置いてよい者なのか……)

武彦はすつきりと目が覚めていたので、生まれて初めて、都坂^{みや}亜^{なかあ}希^きを迎えに行った。

「た、武君？」

玄関を出て来た亜希は、珍しい生き物でも観察するかのようになり、武彦をマジマジと見た。

「おはよう、委員長」

武彦は何故か勝ち誇ったかのように言った。

「お、おはよう」

それに反して、「委員長」と呼ばれた事にムツとするのを忘れるほど、亜希はビククリしていた。

「行こうか」

武彦がニコツとして言った。

「う、うん」

亜希は嬉しかった。ようやく武彦が一人で起きられるようになったと思ったのだ。まるで幼稚園児のような扱いだ。

「ね、委員長」

武彦は亜希が機嫌が良さそうなのを感じ、昨日の事を尋ねてみる事にした。

「何？」

亜希はあまりにご機嫌なので、「委員長」発言は気にならない。

「タベさ、ウチに来てないよね？」

「え？」

また武君が訳のわからない事を言い出した。亜希はがっかりした。「何の事よ？」

途端にいつもの亜希に戻る。武彦は危険を察知したのか、

「あ、いいんだ。何でもない」

と言い、前を向いた。

「何でもないじゃないわよ。気になるじゃない？ 言いなさいよ、最後まで！」

「う、うん……」

最後まで話した方が怒られそうだから、話すのをやめたのになあ、と思う武彦だった。

ツクヨミとアキツはイワトの入口からタジカラ軍の騎馬隊がタジカラとウズメの乗る馬車を先頭に引き返して行くのを見て、啞然としていた。

「どういう事でしょう？」

アキツが呟く。ツクヨミも、

「わかりませぬ。何があつたのか……」

と言っただけだった。言霊師は、言葉をかわた者の心を読み解く事ができる。しかし、ツクヨミはオモイと話した事がないため、彼の策略が読めない。そしてオモイにはそれ以上の秘密がある事を今のツクヨミは知らなかった。

その当のタジカラは憤激していた。

「陛下のご命令であるから従いもするが、誠に気に食わぬ」

タジカラは奥方のウズメに怒鳴り散らしていた。

「イワレヒコ様をお救いするは後とし、ヒノモトを攻めよとは、陛下はどうなさつたのでしょうか？」

ウズメは、タジカラの大声には慣れてるので、何も言わずに疑

問を返した。

「書状には、ナガスネがヒノモトを空けており、手薄だとの事だ。しかし……」

タジカラはこの行軍変更は、最初から仕組まれていたと見抜いていた。

「オモイが何か策を弄したのであろう。忌ま忌ましい異国者めが彼は苦虫を噛み潰したような顔で呟いた。

「お館様やかた」

ウズメは人の悪口を言う夫が嫌いである。タジカラは、

「私は、道化にされた。このままではすまさぬ」

と言った。彼の顔は凄まじい形相になっていた。

十三の章 イザの策略、武彦の力

武彦から詳しく事の経緯いきわだちを聞いた都坂亜希みやざかあきは、激怒いきどろしていた。

「どうして私が武君の家に夜忍び込まなきゃいけないのよ!？」

今にも噛みつかんばかりに武彦に怒鳴る亜希。武彦はオロオロしている。

「いや、だからさ、その……」

だから話したくなかったのに、と泣きそうな顔で思う武彦だった。酷こいわ。私わたしがまるでストーカーみたいな事言っ……」

亜希は目を赤くして涙を零した。怒こっていたかと思つと、今度は泣いている。忙しいな、委員長は、と呑気な事を思う武彦。どうしようもない鈍感さだ。

「もう、知らない!」

陸上部のエースプリンターはそう捨て台詞を吐くと、鈍足の武彦を置き去りにして、校庭を走って行ってしまった。

「委員長……」

置いてきぼりにされた格好の武彦は呆然ぼうぜんとしていた。

一方、オオヤシマでは、突然の進路変更をしたタジカラ軍が怒涛どとうの勢いでアマノヤス川を越え、国境くにまがひを侵犯して来た事を知り、ホアカリの嫡男であるウマシの軍は慌てふためいていた。

「斥候せつこうの話では、タジカラはアマノイワトに向かったはずではないか!」

ウマシは馬に跨またがりながら、老参謀に怒鳴った。

「そのはずでした。何が起こったのか、全くわかりませぬ」

老参謀にも、タジカラ軍の転進は意外であったのだ。

「役に立たない連中だ!」

ウマシにそのような事を言われるのは、参謀にはとても心外こころはずだっ

た。貴方こそ、ヒノモトにとって役に立たぬ存在です、と言いたいくらいだ。

「タジカラ軍は、我が方の数倍の兵力です。戦う事はできません。退却のご命令を」

老参謀はそんな思いをおくびにも出さず、ウマシに進言した。無駄死になる戦いはしたくない。ましてや、このような愚かな世継ぎのために。それが彼の本心である。

「や、やむを得ぬ……」

イワレヒコに対しては、個人的な感情で戦いを挑もうとしたウマシであったが、タジカラには何も怨みがないため、無茶な戦いはするつもりがないらしい。むしろ、老参謀が退却を進言してくれた事に胸を撫で下ろしたくらいだ。それでも、上辺を取り繕いたいウマシはわざと苦々しそうな顔をして、

「全兵、退くのだ。城へ向かう」

ウマシの命令の下、軍は雪崩を打ったように退却を始めた。兵達はウマシが暴走しなかったので皆安堵していた。

タジカラは、ウマシの軍が全く戦う素振りも見せずに逃げ出すのを知り、

「何とも情けない嫡男だ。親が親なら、子も子という事が」と呟いた。

「どちらにしても、無駄な戦をせずですんで宜しゅうございました」
ウズメはホツとして言った。気が立っているタジカラと戦えば、敵軍は恐らく壊滅したであろうから。

「今はほんの一時として惜しい。ナガスネに戻られる前に、ヒノモトを叩く」

タジカラはすでに戦意が高揚しており、敵は全て蹴散らすつもりでいた。

「否、例えばナガスネが戻って来ようと、まとめて退治してくれる」
ウズメはそんな夫の単純さに溜息を吐いた。

ナガスネの軍は、帆船の大群でオオヤシマの海岸伝いに移動中であつた。当然、タジカラ軍の転進を知らない。帆船の数は五隻。気取られないように少数精鋭で来たのだ。

「海は穏やか。まさしく天は我らに味方しているぞ」

ナガスネは上機嫌で高笑いをし、自分達の勝利を確信していた。

「ナガスネ様、ヒノモトの勝利はもうすぐですな」

ナガスネに同行している魔剣の使い手であるスサノが言った。タジカラとほぼ同じくらいの体格で、鋭い眼光、頬から顎にかけて生え揃わせた髭と銀色の派手な鎧兜が、スサノの強さと性格を印象づける。彼は元々はワの国の剣士であつたが、その粗暴な振る舞いをオオヒルメに咎められ、追放されていた。それをナガスネが取り立て、自分の右腕にしたのである。ヤマトにタジカラあれば、ヒノモトにはスサノあり、と並び称される程の剣士である。しかもスサノの使う剣は炎を纏^{まと}う魔剣で、斬つたもの全てをその業火で焼き尽くすのだ。

「そうだ。我らの勝ち戦ぞ」

ナガスネは得意満面で言った。

「ナガスネ様、何やら水が騒がしくなっております」

スサノの脇に控えていた女が言った。彼女の名はクシナダ。スサノの奥方で、魔導士と呼ばれる術者である。水の術を得意とし、水による通信もできる。衣は真紅で、丈の短い袖、太腿まで切れ込みの入った裾になっている。まだオオヒルメの時代、ウズメとその戦働きを並び称された女性で、切れ長の目、高い鼻、薄い唇の美形である。

「アマノヤス川を、ヤマトの軍が越えたようでございます」

「何？」

ナガスネはクシナダの言葉にギョツとした。彼はクシナダの交信術に信を置いているので、彼女の話の疑う事はない。

「それはどういう事だ？」

ナガスネは周囲の兵に聞こえないくらいの声で尋ねた。

「わかりませぬ。ですが、かなりの大軍です。数からして、タジカラ殿の軍ではないかと」

クシナダは跪いて小声で答える。スサノは眉をひそめ、

「もしや、我らの動きが気取られたのでは？」

「まさか……。そんなはずはない」

ナガスネはそう言いながらも、狼狽うろたえ始めていた。謀略家であるが、臆病なのだ。

「すぐに戻りましょう。今、ヒノモトは手薄にございます。タジカラの兵が押し寄せれば、ひとたまりもありません」

スサノも跪いて進言した。ナガスネは齒ぎしりして悔しがり、

「何という事だ！ 全軍、ヒノモトへ戻れ！」
と命令した。

「留守居役のウカシ宛てに狼煙をあげよ。城門を閉じ、我らが戻るまでタジカラを防げと！」

スサノは、そばにいた兵に言った。

ナガスネ軍がヒノモトに戻り始めた事は、斥候せつこうを通じてヤマトのウガヤにすでに伝わっていた。狼煙のろしを使った通信術である。

「イツセよ、出陣の支度をしろ。ナガスネの軍を挟み撃ちにするのだ」

ウガヤは嬉しそうな顔で命じた。

「はは」

それに反して憂鬱うげふつそうな顔のイツセは父王の命令を受け、仕方なく玉座の間を出た。

「こんな事で良いのか？ 兄と弟は、このような定めで良いのか……？」

父と伯父の争いを憂うイツセはそう呟きながら、更にイワレヒコの事を思った。

（お前は今、どうしているのだ、イワレヒコ？）

嫡男イツセの迷いに気づく事もないウガヤは得々として椅子に座り、

「流石だ、オモイ。うぬの読み、見事であった」と部屋の間で跪いている軍師オモイを見やる。

「ありがとうございます」

オモイは額ずいて答えた。そして、ウガヤに見えないようにニヤリとする。そんな二人のやりとりをウガヤの妃タマヨリは悲しそうに見ているしかなかった。何か口を挟めば、ウガヤが激高するのがわかっているからだ。

ウマシの軍は何かヒノモトの城にタジカラの軍より先に帰還していた。

「ウカシ、ウカシはおるか!？」

ウマシは、城門をくぐって馬を下りるなり、ウカシを呼んだ。

「ここにおります」

ウカシがウマシの前に跪いて応えた。見るからに戦い向きではない小柄な身体の上に何を考えているのかわからないような陰気な顔がある。戦士でありながら、未だに一度も出陣をした事がない男である。そして、ウマシに呼ばれて現れた今も、白地の平服を着たまま。やる気が微塵も感じられない。ウマシはウカシを見下ろし、「何としても、ナガスネが戻るまで持ち堪えるのだ。父を守るのだ」

ウカシは深々と頭を垂れて応じた。

「はは」

しかし、何故かウカシはニヤリとした。

(どちらの王も、滅びるが定め。哀れな事だ)

彼は内心そう思っていた。ウカシは実は闇の国「ヨモツ」に通じている男であった。

(このオオヤシマの主は、イザ様をおいて他にない。ワの王家に連なりし者は、悉く滅びよ)

アキツとツクヨミは、アマノイワトの広間で策謀と混乱の気を感じていた。

「何という事でしょう……。これは一体……」

あまりの乱れぶりに、アキツは啞然としてしまった。

「……」

黙って座っていたオオヒルメが立ち上がり、イワトの奥へと歩き出した。

「大叔母様？」

アキツが驚いて追いかけて、声をかけた。ツクヨミもそれに続く。

「イザが動いておる」

オオヒルメは振り返らずに言った。アキツとツクヨミは思わず顔を見合わせた。二人共その名に聞き覚えがあるからだ。そして、ツクヨミは思わずアキツの顔を直視してしまったのに気づき、オオヒルメの方を見る。

「イザと言うと、ヨモツの女王の名ですね？」

ツクヨミが尋ねた。オオヒルメは歩を早めて、

「ヒラサカの封印が揺らいでおる。閉じ直さねば、恐ろしき事になる」

「……」

アキツは息を飲み、ツクヨミは拳を握り締めた。

「ヒラサカの封は私が納め直す。其方達は、異界の方をお呼び致せ」
オオヒルメはそう言うのと、更に奥へと歩いて行った。アキツはツクヨミを見て、

「では、私達はたけひこ様をお呼び致しますよう、ツクヨミ殿」

「はい、アキツ様」

相変わらず、アキツの顔を真っ直ぐに見られないツクヨミは、頭を下げて応じた。

武彦は、授業中、急な睡魔に襲われていた。確かに今授業をしている現代社会の先生は「催眠術師」とあだ名される人物だが、原因はその先生ではない。

（何だ？ 早く起きたから、眠いのかな？）

彼はそう思ったのだが、本当はアキツが武彦を呼んでいるからなのだ。ツクヨミは、言霊師ことたましの力により、武彦が眠っている時のほんの一瞬を引き出し、オオヤシマに呼び込む術を編み出したのだ。

そうすれば、武彦に負担をかけずにオオヤシマに呼び込む事ができるのである。

（アキツさんの声が聞こえる……。委員長は今、先生に答えているところだから、やっぱりアキツさんは委員長じゃないんだ）

そんな呑気な事を思いながら、武彦は眠ってしまった。

「あれ？」

目を覚ますと、目の前にアキツとツクヨミがいた。

「たけひこ様、お呼び立てして申し訳ありません」

アキツが悲しそうな顔で言った。武彦はその顔にドキツとして、

「ど、どうしたんですか？」

やっぱり、委員長にそっくりだと思ってしまう。アキツは武彦に顔を近づけて、

「また戦になりそうなのです。お力をお貸しください」

「えええ？」

力を貸してくれって言っても、僕には戦争なんてできないよ……。武彦はそう言いたかったが、亜希にそっくりなアキツの悲痛そうな顔を見ると、とてもそんな事は言えなかった。

「今、タジカラと申す者が、ヒノモトを攻めんとして軍を進めております。それを止めて欲しいのです」

「止めるんですか？」

武彦は念のために訊いてみた。

「はい」

武彦はすが継るようにツクヨミを見る。ツクヨミは頷いて、

「私にお任せください、たけひこ様。策がございます」

「そ、そうですか……」

ツクヨミさんの言葉は本当に安心感がある、と武彦は思った。でも、どうしてなんだろうとは思わないのが、武彦の呑気なところである。

十四の章 武彦の決意、ウガヤの焦り

どこにあるのか、いつの時代なのかもわからないオオヤシマの歴史は大きく動こうとしていた。

ヤマトの国の王子イツセは父王ウガヤの命を受け、軍を率いて出立した。総勢三千。

「ここまで大戦をしてしまつては、ヨモツが動かぬか気がかりだ」
イツセは不安を胸に何度も振り返りながら、城を出た。

「イツセ様はお優し過ぎます。やはり、陛下のお志を継がれるは、イワレヒコ様にございましょう」

ヤマトの国の軍師であるオモイは、その青い目をイツセを見送るウガヤに向けて囁いた。

「私もそう思っている。嫡男は長子になるべきものなれど、イツセにはその意気がなし。あの者には、オオヤシマを統べる器がない」
ウガヤは隣にいる妃のタマヨリに聞こえないように小声で応じた。
「はい」

オモイは頭を下げ、ウガヤに同意した。

その二人が期待を寄せるイワレヒコは、今は二十一世紀の日本の高校生である磐神武彦がその身体の主となつている。言霊師であるツクヨミの秘術で、武彦の魂のみをイワレヒコに降ろしたのである。「タジカラ様はイワレヒコ様を嫌われております。ですが、イワレヒコ様の強さはお認めです。そのイワレヒコ様が戦をやめよと仰れば、必ず従います」

ツクヨミの言葉で、優柔不断の塊のような性格の武彦はほんの少し勇気が出た。

「このオオヤシマがこれ以上悪しき心に満たされれば、ヨモツが蠢きます」

幼馴染みの都坂亜希みや「あき」にそっくりなワの時期女王であったアキツが言い添える。

「今は私の大叔母であるオオヒルメが封を閉じ直す術を施しております故、しばしは留められましょうが、今以上に悪しき心が溢る事あらば、それも破られます」

「そしたら、どうなっちゃうんですか？」

武彦は怖い話の結末を訊くような心境でビクビクして尋ねた。

「ヨモツがオオヤシマに溢れ、この世は闇に閉ざされます。人は死に、死人しじとが統べる国になりましょう」

「……」

武彦はホラー映画も苦手だ。この国が死人シジトで溢れるような恐ろしい国になるのはまずいと思った。

「行きましょう、ツクヨミさん」

武彦は意を決して立ち上がった。ツクヨミは頷いて、

「はい、たけひこ様」

と答えた。アキツも頷き、

「私は大叔母様のお手伝いに参ります。ツクヨミ殿、たけひこ様をお願いします」

「はい、アキツ様」

ツクヨミは深々と頭を下げた。そして武彦の方を向くと、

「参りましょう、たけひこ様」

武彦は大きく頷いて、

「はい」

二人はアマノイワトを出て、少し離れた場所で立ち止まった。

「ツクヨミさんは、アキツさんが好きなんですか？」

その時、武彦がいきなり核心を突く質問をした。凶星を突かれたツクヨミはビクツとして、

「そのような恐れ多き事を仰せにならないでください、たけひこ様。私は、アキツ様をお守りしたいだけにごさいます」

武彦は珍しく動揺して赤くなるツクヨミの様子を見て、

「そうなんですか。僕、アキツさんが僕の好きな子に似ているので、どうしても助けてあげたいんです。だから、ツクヨミさんもそういう気持ちなのかなって思ったんです。ごめんなさい、変な事訊いてと頭を下げて詫びた。その動作は、大男のイワレヒコには何とも違和感のあるものだった。

「いえ」

そのせいか、ツクヨミは武彦の純真さにとても心を打たれていた。(この方なら、間違いなくオオヤシマをお救いくださる)

「では、目をお瞑りつむください。今より、我が秘術にてタジカラ様のところまで参ります」

「は、はい」

武彦は素直に目を閉じた。ツクヨミは武彦の前に立つと、武彦の顔の前に右手を翳かきし、

「風よりも速く、岩よりも硬くなりぬ！」

その言葉と同時に、二人の身体は宙を舞い、タジカラ軍目指して飛んだ。

「うわっ！」

うっかり目を開けてしまい、自分の今の状態を見てしまった武彦は目が回りそうになった。

タジカラ軍は、ヒノモトの国の奥まで進軍していた。ホアカリの城が森の向こうに見えて来ている。

「このように事が運ぶは、悪しき兆しかも知れませぬ、お館様」

奥方のウズメが衣の襟を直しながら言う。タジカラもそもその事の起こりが気に入らぬだけに、ウズメの言葉が気にかかった。

「お前の申す通りだ。合点が行かぬ。道理が通らぬ」

タジカラは何かが後ろで采配している気がして、どうにも不愉快であった。

「むっ？」

ウズメが何かを感じて目を閉じ、辺りを自分の気で探る。

「馬を止めい！」

彼女は御者に怒鳴った。御者は慌てて手綱を引き、馬を止まらせた。後続の部隊もそれに倣って停止した。

「何事だ、ウズメ？」

タジカラは奥方を問い詰めるように言った。ウズメはタジカラを見上げ、

「妙な気が我らに近づいております」

タジカラは眉をひそめて、

「妙な気？」

「あちらにございます」

ウズメは馬車の窓から天を指差した。タジカラがそちらに目を向けると、眩い光が近づいているのが見えた。

「何じゃ、あの光は？」

ウズメも目を細めて、

「面妖な……」

タジカラは馬車を飛び出し、剣を抜いて身構えた。ウズメも舞踏師として構えを取った。

「あれは……。お館様、お控えくださいませ」

ウズメは光の神々しさに気づき、跪いた。タジカラもウズメの言葉に慌てて跪いた。

「タジカラ、大儀である」

声が聞こえる。タジカラとウズメは、地上に降り立った光に目を凝らした。光は次第に弱くなり、人の姿が見えて来た。

「おお、イワレヒコ様……」

ウズメが先に気づき、平伏した。タジカラは不満そうに平伏す。

「タジカラ、オオヤシマを滅ぼすつもりか？」

自分を責めるようなイワレヒコの言葉に、タジカラは顔を上げて、
「滅相もございませぬ。そのような事、このタジカラ、思った事は
ありませぬ」

「ならば何故、このような兵を率いて、ヒノモトを進むのか？」

イワレヒコはタジカラの乗っていた馬車の後方に連なる大軍を指差した。

「これは異^いな事を仰せですな、イワレヒコ様。オオヤシマを救うには、ヒノモトを滅ぼすより他なしと仰ったは、イワレヒコ様ですぞ」
タジカラは、イワレヒコが以前と違う事を言っているのです、偽者ではないかと疑っている。その目は眞実を見抜こうとするかのよう
にイワレヒコを睨み据えている。

「愚か者め。この戦はヨモツの罠ぞ。これ以上オオヤシマを悪しき
心で満たさば、この世は闇に包まれようぞ」

イワレヒコはタジカラを睨み返して怒鳴った。

「何と！」

タジカラは息を呑んで確かめるようにウズメを見た。ウズメはゆ
っくりと頷きながら、

「この方は紛れもなくイワレヒコ様にございます」

と答えた。タジカラは啞然としてもう一度イワレヒコを見た。

「ヨモツの罠とは、如何^{いか}様な意味でございましょうか？」

ウズメが代わりに尋ねた。イワレヒコは穏やかな顔になってウズ
メを見ると、

「ヨモツは、オオヤシマを悪しき心で満たすを企む。ヒノモト攻め
は、まさにその助けとなるのだ」

「ならば私共は、如何にすれば宜しいのでしょうか？」

ウズメが重ねて尋ねる。

「兵を退^ひき、戦^{いく}をやめる事ぞ。それが何よりの策ぞ」

「兵を退く？」

タジカラがピクンと動いた。彼の心にまたイワレヒコは偽者では
ないかという疑念が沸き起こる。

「イワレヒコ様のお言葉とは思えませぬ」

「お館様！」

もし、今話しているイワレヒコがタジカラの知っている通りのイ
ワレヒコであったなら、彼は間違いなく斬り捨てられていたろう。

「私は変わったのだ。オオヤシマを救うは戦にあらず。人の心よ」
イワレヒコは微笑んで二人を見下ろす。

「人の心、でございますか？」

タジカラは斬り捨てられると思い、剣に手をかけていたが、その手を放した。

（一体、何があったのだ？ イワレヒコ様であるが、イワレヒコ様ではない……）

タジカラは訳がわからなくなりそうだった。

ホアカリ達は、目前まで進軍して来たタジカラ軍が止まったのを知り、不審がつっていた。

「如何なる事か？」

ホアカリは、嫡男ウマシに尋ねた。しかしウマシにも何故タジカラが進軍を停止させたのかわからない。

「只今、斥候せうこうを向かわせております。しばしお待ちを」

「うむ」

ホアカリは不安そうな顔で妃トミヤを見た。トミヤも悲しそうな顔でホアカリを見つめていた。

「ナガスネはまだ戻らぬのか？」

ホアカリは留守居役のウカシを見た。ウカシは跪いて、

「まだにございます。しかし、もうすぐご到着になります」

「そうか……」

ナガスネが間に合わない場合は、自らがタジカラとの交渉に臨むつもりだったホアカリは、ホッとすると同時に疑問が次々に沸き上がるのを禁じ得なかった。

タジカラ軍が進撃を停止した事は、斥候を通じてヤマトの国にも伝えられていた。

「何が起こっておるのだ？」

謁見の間で、ウガヤは苛ついて言った。斥候は跪いて、

「イワレヒコ様がいらしたご様子です」

「イワレヒコが？ 戯けた事を申すな。イワレヒコは、アマノイワトに連れ去られたままぞ」

ウガヤは斥候を怒鳴りつけた。

「しかし、あれは紛れもなくイワレヒコ様にございました」

ウガヤは判断がつかず、傍らに立つ軍師のオモイを見た。オモイは、

「何かありましたな。恐らく、アキツ様がツクヨミが、イワレヒコ様を操っていると思われませう」

「そのような事ができるのか？」

ウガヤは目を見開き、信じられないという顔で尋ねる。オモイは、
「はい。アキツ様やツクヨミには、できます」

ウガヤはその答えに怒りを発した。

「おのれ、どこまでも我がヤマトを愚弄しおつて！」

ウガヤは椅子から立ち上がり、

「イツセに早馬を！ アマノイワトを攻め、ツクヨミとアキツを殺してしまえと伝えよ！」

と命じた。

「なりませぬ、陛下。それはなりませぬ！」

隣で聞いていたタマヨリがウガヤのあまりの暴言に仰天して言った。しかし、ウガヤは、

「口出し致すな、タマヨリ！ これは戦ぞ。先んずれば人を制すのだ」

と言い放ち、全く聞く耳を持たなかった。

オオヤシマの悪しき心は、まだ増えようとしていた。

十五の章 ナガスネの悲願、オモイの策略

ヤマトの国の嫡男であるイツセは、早馬で届けられた父王ウガヤの命令書を読んで驚愕していた。

「何という事を……。ツクヨミはいざ知らず、アキツ様を討てとは、父上はご乱心されたのか？」

イツセは計り知れない衝撃を受け、書状を握り潰した。そして馬に跨ると、

「城に戻る。父上と話さねばならぬ」

イツセは軍を率いて、ヤマトの国へと戻り始めた。

タジカラは、イワレヒコの魂が武彦のものと変わっている事を知らないため、残虐なイワレヒコが豹変したのを信じられないでいた。「私を偽者と思うか、タジカラ？」

イワレヒコが不意に尋ねた。タジカラは自分の心が見透かされたようで、ギクツとした。

「いえ、そのような事は思っておりませぬ。あまりに思いもよらぬお言葉故、驚いただけにございます」

タジカラは頭を下げて弁明した。冷や汗が全身から噴き出し、危うく震えそうだ。何故これほど恐怖を感じるのか、タジカラにもわからない。イワレヒコはそれ以上追及するつもりはないらしく、「ならば、軍を退くが良い。私も同行しよう」

と言うと、タジカラの乗っていた馬車に向かって歩き出す。

「はは」

タジカラは救いを求めるようにウズメを見た。ウズメは只頷き、「イワレヒコ様のお言葉通りに」

と言っているかのような目でタジカラを見た。タジカラは考えるのをやめ、立ち上がった。

「全軍、城に戻るぞ。支度致せ！」

タジカラの大声が遙か後方の兵にまで届いた。タジカラは足早にイワレヒコの前に出て彼を馬車に乗せ、自分達も乗り込むと、先陣となり、ヤマトへと戻り始めた。

『ツクヨミさん』

イワレヒコの中の武彦は、心の中でツクヨミに話しかけた。実はツクヨミが姿を消して、武彦の代わりに言霊ことだまによってイワレヒコの声を真似て喋っていたのである。武彦は只口を動かしていたのだ。タジカラがイワレヒコに恐れを抱いたのも、ツクヨミの言霊の力である。

『はい、たけひこ様』

武彦はあまりの緊張に気を失いそうだった。

『大丈夫なんですか、このままで？』

しかし、ツクヨミは、

『大丈夫にございますよ』

『そ、そうですか』

ツクヨミの力強い言葉に武彦はホツとした。ツクヨミは完全に姿を消していて、誰にも気づかれるはずはないと思っていたが、何故かウズメが自分を見ているような気がしてならない。

(ウズメ様も舞踏師と言う特別な存在。もしかすると、私の気を感じているのかも知れぬ)

しかし、見えてはいないとツクヨミは安心していた。

『全軍、支度整ったな』

タジカラが窓の外に気を取られている時、

『ツクヨミ殿ですね』

とウズメが小声で話しかけて来た。ツクヨミは驚きのあまり、もう少しで声を出してしまうところだった。武彦もウズメがツクヨミに気づいた事に驚いている。

『私が見えるのですか？』

ツクヨミは驚いて小声で尋ね返した。ウズメはクスツと笑い、

『見えはしませぬ。ですが、貴方の気は感じます』

「そうですか。実は……」

ツクヨミは慌てて説明しようとしたが、
「ご心配には及びませぬ。貴方の志は良くわかっております故。また後程」

ウズメはそう言つと、タジカラと話を始めた。ツクヨミはホツとした。武彦も思わず安堵の溜息を吐きそうになり、慌てて抑えた。

(やはりな……。ウズメ様なら、気づくとは思つたが……)
ツクヨミは心強い味方を得たと思つた。

ホアカリは斥候からの報告で、タジカラ軍が引き上げて行く事を知つた。

「退いてくれたは良き事なれど、如何なる事が起こつておるのか、全くわからぬ」

ホアカリは尚も不安になっていた。妃のトミヤも心配そうにホアカリを見る。

「ナガスネ様、ご到着にございます」

兵が駆け込んで来て告げた。

「陛下！」

ナガスネはスサノ、クシナダを伴い、玉座の間に入って来た。

「大儀であつた、ナガスネ。タジカラは退いたぞ」

ホアカリがようやくホツとして言つた。するとナガスネは、
「すぐに追いつちをかけます」

と出て行こうとした。ホアカリはそれに驚いて立ち上がり、

「待て、ナガスネ。追う必要はない。タジカラは戦上手ぞ。追いつちはいかん」

ホアカリはいつになく強い口調で言つた。ナガスネはその声に呆気にとられたが、すぐさまひざまずき、

「はは」

と従つた。そして、

「うぬらは、出陣の支度をしておけ。折りを見てヤマトに向かう」

と小声でスサノに言った。

「はい」

スサノとクシナダは、ホアカリとトミヤに深々と頭を下げ、退室した。

「ナガスネ」

ホアカリが声をかける。ナガスネは顔を上げて、

「はい、陛下」

ホアカリはニツコリとして、

「良い機会じゃ。ヤマトと和議を結ぶ事はできぬか？」

「何と！」

ナガスネはホアカリの出し抜けの提案に仰天した。

「何を仰せです、陛下。そのような下手話したては、ヤマトから申す事。こちらからではありませぬ」

ナガスネの顔が険しくなった。ホアカリは思わずトミヤに救いを求めた。トミヤは夫に頷き、

「兄上、そのようなお考え、お捨てくだされ。このまま戦を続けては、民が苦しむばかりです。どうか陛下のお言葉に従い、和議をお進めください」

しかし、ナガスネは聞く耳持たなかった。

「如何いに陛下のお言葉と言えども、それだけは聞けませぬ。陛下は長兄なので。弟君のウガヤ様の方から、そのような話が出て然しかるべきなのです」

「しかし、ナガスネ……」

ホアカリが異を唱えようとしたが、

「いいえ、私は和議など致しませぬ。何としてもヤマトを平伏させて、ホアカリ様をオオヤシマの王にするが、我が願いにございます」

ナガスネは涙を浮かべて力説した。ホアカリは困り果て、トミヤを見た。トミヤも兄の頑固さに啞然としていた。

（噂では、兄上はヨモツに魅入られていると言っ……。それは真まことであつたか？）

トミヤは悲しくなつて涙を浮かべ、夫と兄に知られぬように俯いてそれを拭つた。

イツセの軍はヤマトの城に帰還して、玉座の間に向かつた。

「何故戻つて来たのか、イツセ!？」

ウガヤは激怒して椅子から立ち上がり、イツセを問い質した。イツセは跪いて、

「父上、アキツ様を討つなど、天に背くと同じ大罪にございます。お考え直してください」

と諫言した。ウガヤはその言葉にますます怒り、

「戯けた事を申すな! アキツなど、もはや何者でもない! 我が行く手を阻む者は、全て死ぬるのだ!」

イツセは父の言葉に愕然とした。そしてこの人はかつて自分が尊敬した父ではないと落胆した。それは妃であるタマヨリも同じであつた。

「これは申すまいと思つておりましたが、このままではヨモツが蠢きますぞ。オオヤシマは今、悪しき氣が覆い尽くしております。危うき事です」

イツセは殺されるのを覚悟で、ウガヤに言つた。するとウガヤは、「この腑抜けが!」

と椅子の脇に立て掛けられている剣を振りかざし、イツセに斬りかかつた。イツセはそれをかわし、ウガヤから剣を取り上げて、右手をねじ上げた。

「血迷われましたか、父上! 心をお鎮め下さいませ!」

イツセは涙を浮かべて訴えた。

「放せ、イツセ! 国王に対して無礼であろう!」

ウガヤの怒りは尋常ではなかつた。しかしイツセは父の腕を放さない。彼は部屋の隅に控えているオモイを睨んだ。

「オモイ、うぬは父上に何事かしたのか?」

普段は温厚なイツセが声を荒げたので、タマヨリもそばに仕えて

いる者達も驚いてイツセを見た。

「滅相もございませぬ」

オモイは平伏ひれふして答えた。しかしイツセに見えぬところで、彼はニヤリとした。

（オオヤシマが揺れている……良きかな、良きかな）

オモイとは対照的に、イツセは恐ろしい未来を感じていた。

「イワレヒコ様、お着きにございます」

そこに駆け込んで来た兵が伝えた。イツセは思わぬ弟の帰還にギョツとした。

「イワレヒコが？ どういう事だ？」

彼は兵に尋ねた。兵は跪き、

「タジカラ様とご一緒にお戻りです」

とだけ答えた。

「如何いかがなさいましたか、兄上？」

イワレヒコがタジカラとウズメを従えて玉座の間に入って来た。

イツセはイワレヒコに斬られると思ったが、いつもの猛々しさが無いイワレヒコに、少しだけ違和感を持った。

「父上がアキツ様を弑しいするとおっしゃったので、お諫いさめしていたのだ」

イツセはウガヤの右手を放し、イワレヒコに説明した。イワレヒ

コはよろけたウガヤを椅子に座らせて、

「父上、それはなりません。アキツ様を弑すれば、オオヤシマはまさにヨモツのものとなりますぞ」

イワレヒコのその言葉に、イツセもウガヤも、そしてタマヨリまでもが驚いた。オモイも意外そうに顔を上げ、イワレヒコを見た。

イワレヒコはウガヤとイツセを見ながら、

「オオヤシマを覆う悪しき心が、ヨモツを蠢かせております。私は、アマノイワトでそれをはつきりと感じました」

「……」

ウガヤはイワレヒコのあまりの変わりように声もない。イツセも

同じだ。オモイはイワレヒコの変化に、

(これは何とした事だ……)
と齒噛みした。

(思惑が狂うではないか)

オモイは何かを企んでいる。それは紛れもない事実であった。

「イワレヒコ、ようやく其方そなたもわかってくれましたね」

タマヨリが涙を流して言った。すると、

「えっ、か、母さん？」

とイワレヒコの中の武彦が、つい声に出して言ってしまった。タマヨリが自分の母である珠世にそっくりだったからだ。

「は？」

ほんの一言だったので、他の者は聞き取れなかったようだったが、タマヨリとオモイにははっきりと聞こえてしまった。

『どうされたのです、たけひこ様？』

ツクヨミが語りかける。武彦は、

『ごめんなさい、ツクヨミさん。あの女の人が、僕の母親にそっくりだったので』

『そうなのですか』

ツクヨミも、その偶然に驚いたが、

『今後はお気をつけください』

『はい、すみません』

アキツは亜希にそっくり。タマヨリは珠世にそっくり。武彦は動揺していた。

「……」

そんな武彦の動揺をオモイは見逃さなかった。彼は目を細めた。

(イワレヒコ様が妙だ。一体どうしたのだ?)

彼はジッとイワレヒコを見ていた。

十六の章 イスズの思い、ナガスネの決意

ヤマトの国では、玉座の間で王族の会議が開かれていた。イワレヒコの提案で、オモイは席を外させられ、退室した。

「どういつつもりか、イワレヒコ？ オモイはヤマトの軍師なるぞ」
オモイを退室させた事が不愉快なウガヤは憤然として尋ねた。イワレヒコは跪いて、

「オモイは悪しき心を持っております。あの者には、話を聞かれとうありませんぬ」

「オモイは、其方の勧めで軍師として仕えさせたのだぞ。何を血迷うておるのだ？」

ウガヤが困惑するのは当然だ。オモイを採用し、大戦の折には、必ず作戦参謀として戦線に連れて行っていたイワレヒコの言葉とは思えないのである。

「私は、あの者を見ていて、ようやくわかったのです。オモイは、オオヤシマに災いを招こうとしております」

イワレヒコのその言葉に、ウガヤはまた憤激した。

「イワレヒコ、貴様、やはりアキツかツクヨミに操られておるな！
？ そこへ直れ、成敗してくれる！」

ウガヤは椅子を立ち上がり、イワレヒコに詰め寄った。イツセが、
「父上！」

と止めに入ったが、ウガヤは収まらない。

「お前までが、あの女の色香に迷うたのか、イワレヒコ！」
「父上、言葉が過ぎますぞ！」

イワレヒコは立ち上がって怒鳴った。ウガヤはその背丈の違いにビクツとし、後退りした。イワレヒコはウガヤを睨みつけ、

「何故おわかりいただけぬのですか、父上？ ヤマトとヒノモトが争えば、悪しき心がオオヤシマに溢れ、ヨモツが喜ぶばかりです！
今は手を携え、ヨモツに対するべきなのです」

イワレヒコの言葉はツクヨミの言葉なので、その説得力は絶大であつた。

「父上、古より伝わる話です。ヨモツは、オオヤシマの悪しき心を好物とする」と

イワレヒコの言葉に同調したイツセもウガヤに詰め寄つた。ウガヤは二人の息子に言い返され、憤懣ふんまんやるかたなかつたが、

「……」

と何も言い返さずに椅子に座つた。

「しかし、イワレヒコ、ヒノモトはどうするのだ？ ナガスネは退ひく事を知らぬ男だぞ」

イツセが尋ねた。イワレヒコはイツセを見て、

「そちらも私が参ります。ナガスネはともかく、ホアカリ様はわかつてくださいますよ」

「ホアカリは腑抜け故、ナガスネの言いなりぞ」

ウガヤは吐き捨てるように呟いた。

「陛下、仮にも兄上様にそのような……」

タマヨリが口を挟んだ。ウガヤは苛立たしそうに彼女を見て、

「お前は口出し致すな！」

と怒鳴つた。タマヨリは悲しそうにイワレヒコとイツセを見た。

「父上、ホアカリ様は確かにお優し過ぎますが、それでも王家の方です。ナガスネもそこまで逆らう事はありません。私にお任せください」

イワレヒコの言葉はあくまで下手であつたが、ウガヤはその有無を言わせない気迫を感じ、恐れおののいた。もちろん、ツクヨミが言霊でウガヤをそう思わせているのもあるのだが。

「わかつた。好きに致せ」

ウガヤは顔を背けて言つた。イワレヒコは再び跪き、

「ありがとうございます」

と頭を下げた。イツセはそんなイワレヒコを嬉しそうに見ていた。

(アキツ様に会つて、変わったのだな、イワレヒコ)

タマヨリモイワレヒコの変わりように目を潤ませていた。

ウズメは、夫タジカラと共に城の自室に戻っていた。彼女はいろいろと考えた挙句、夫には真相を教えておこうと結論を出し、ツクヨミが姿を消してイワレヒコの後ろにいる事、彼がイワレヒコの変貌に大きく関わっているらしい事を話した。

「何と……」

タジカラはウズメから聞いたのでなければ、決して信じなかっただろう。それ程、奥方の話は驚愕するものであった。

「ツクヨミ殿はこのヤマトを救ってくださいます。私はそう信じております、お館様やかた」

ウズメは決死の覚悟だった。もしかすると、夫に切り捨てられると思ったのだ。

「わかった。お前がそう申すのなら、それが真まことなのであろう」

タジカラはそう言うと、自分の椅子にドスンと腰を下ろした。ウズメはホツとして顔を綻ほころばせた。

「さあ、近ちかう。其方とは久しく語ろうておらぬ」

タジカラはウズメを隣に座らせ、抱き寄せた。

「お館様、まだ日も高たかうございますよ」

ウズメはせっかちな愛し方しかできないタジカラを窺たしなめる。タジカラは苦笑いして、

「私はそういう男なのだ」

と応じると、彼女の口を吸った。

会議は終わった。イワレヒコは出立前にイスズに挨拶しておきたいと言い、彼女の部屋へ赴いた。

「お帰りなさいませ」

怯えたようにイスズが頭を下げ、出迎えた。イワレヒコが入口の戸を閉じると、ツクヨミが姿を現した。

「え？」

武彦はびっくりして思わず声を出してしまった。顔を上げたイスズも、ツクヨミがいきなり現れたので、仰天していた。

「イスズ様、私の話をお聞きください」

「は、はい」

ツクヨミと武彦はイスズに出された椅子に座り、彼女も自分の椅子に腰を下ろす。そしてイスズはツクヨミから、イワレヒコの身体が異界の人間である磐神武彦いわかみたけひこの魂を宿している事、ツクヨミが言霊ことばたまの力で姿を消してイワレヒコの声で話している事などを聞いた。また武彦はイスズが姉美鈴に瓜二つなのに気づき、ギョツとしていた。

（どういう事？ 委員長に、母さんに、姉ちゃんに……）

かなり混乱している武彦だった。幼馴染の都坂亜希みやまあきや母の珠世と違い、姉美鈴にそっくりな女性は、彼にとっては「脅威」なのだ。

「たけひこ様、よろしくお願い致します」

姉にそっくりな顔のイスズが穏やかな顔でニッコリして武彦に言う。武彦は何かむず痒かった。

（姉ちゃんて、ホントに美人なんだなって、イスズさんを見るとわかるな）

武彦はそんな呑気な事を思いながら、

「は、はい」

そう答えてから、ツクヨミに小声で言う。

「この人、僕の姉にそっくりです」

「そうですか」

ツクヨミは、ますます、

（この方こそ、本来のイワレヒコ様なのかも知れぬ）

という思いを強めていた。イワレヒコの気性があまりに激しいのは、心が二つに分かれてしまったからではないかと、ツクヨミは考えた。「何やら、俄にわかかには信じられぬお話ですが、ヤマトとヒノモトが争いをやめてくれるのであれば、私はどんな事も信じましょう」

イスズはツクヨミと武彦を見て言った。そして、

「ツクヨミ殿、たけひこ様とその、お話があります」

と少々頬を赤らめて言った。

「あ、はい。わかりました。私はウガヤ王の様子を見て参ります」

イスズの異変に気づかないツクヨミはそう言うと、再び姿を消し、部屋を出て行った。

「……」

武彦は、姉そっくりのイスズと二人きりにされて、緊張していた。悲しき条件反射である。美鈴が知れば激怒するだろうし、イスズが知れば、悲しむだろう。武彦はイスズと差し向かいで座っているのに堪えられなくなり、立ち上がった。

「たけひこ様、どうぞ、ご無事で」

イスズはまた微笑んで武彦を見上げる。

「あ、はい」

イスズも立ち上がり、武彦に近づいた。

「今までこのような心持ちになった事がございませぬ」

「え？」

イスズは武彦にスツと抱きついて来た。武彦は顔が熱くなるのを感じた。

「うわわ」

髪からいい香りがする。イスズの身体は柔らかかった。イスズは目を潤ませて武彦を見上げ、

「私をお抱きください。貴方様のお子を産みとうございます」

「ええええ？」

武彦は仰天した。抱く？抱くってどういう意味？ お子を産むって……。頭の中がグルグル回り始めた。もう逃げ出したい心境である。

（姉ちゃんそっくりのイスズさんにそんな事言われても………）
ツクヨミからの事前の説明で、イワレヒコとイスズは姉弟であり、許婚いいなずけでもあると聞いていた。しかし、イスズはイワレヒコを恐れていると。

（話が違つよ、ツクヨミさん！）

武彦は涙が出そうなくらい困っていた。彼はイスズを傷つけたくないと思っただが、

「ごめんなさい、イスズさん。僕、好きな人がいるんです！」
とイスズを押し返した。そう言ってしまうと、言った自分に武彦は驚いていた。

（好きな人って、誰？）

するとイスズはニコツとして、

「わかっております。申し訳ありません、戯たわむれにございます」

「そ、そんなんですか……」

武彦はホツとして胸を撫で下ろした。イスズは口元を袖で隠しくスクスと笑いながら、

「お優しいのですね、たけひこ様は」

と言うと、椅子に座り直した。武彦は頭を掻いた。

「はは」

やはり、姉の顔でそんな事を言われるのは非常に落ち着かないと思う武彦だった。しかし、イスズの本心は違っていた。

（イワレヒコ様がお変わりになった。この方となら、私は契りをかわせる）

イスズは、イワレヒコ（武彦）に恋をしてしまったのだ。子供の頃は仲が良かった二人である。イスズが嫌いなのは、戦をするようになってからのイワレヒコなのだ。だから、今のイワレヒコはイスズの好きなイワレヒコである。

その頃ナガスネは、自分の館の自室に密かに呼んだスサノとクシナダと三人で、会議を開いていた。

「このままにしておけば、ヒノモトはヤマトに飲み込まれる。それだけは避けたい。力を貸してくれ」

「はは」

スサノとクシナダは、長年仕えて来たナガスネに最後まで従う事を決めていた。例え、負け戦になろうとも。

「私も入れてくだされ、ナガスネ様」

ヒノモトの城の留守居役であるウカシが現れた。スサノとクシナダは驚いてナガスネを見た。

「うむ。もちろんじゃない」

ナガスネは嬉しそうに頷いた。ウカシは三人に見えないようにニヤリとした。そして、

「それについて、私の考えをお耳に入れとう存じます」と言つと、ナガスネに近づいた。

「そうか。聞かせてくれ」

ナガスネはウカシを促すが、ウカシはスサノとクシナダを見て、「ではお耳を」

と言い、ナガスネに更に近づいた。

「ウカシは油断がなりませぬ、お館様」

クシナダがスサノに囁く。スサノはチラッとナガスネと話すウカシを見て、

「わかつておる。目を離さぬようにせんとな」

スサノの言葉にクシナダはゆっくり頷き、もう一度ウカシを見た。

十七の章 ナガスネのこだわり、オモイの野望

武彦は顔を上気させ、イスズの部屋を出た。イスズが姉美鈴に瓜二つなのも、武彦を動揺させたが、それ以上にイスズが自分に好意を抱いている事が、武彦には驚きだった。

「お待ちしてりました、たけひこ様」

姿を消した状態のツクヨミが声をかけた。武彦はホツとして、

「ツクヨミさん、驚きましたよ。イスズさんがいきなり抱きついて来たんです」

「ほう」

ツクヨミもイスズがそんな大胆な行動に出るとは思っていなかった。

「元々、イスズ様とイワレヒコ様は仲がよろしゅうございましたから」

ツクヨミはクスツと笑ってから言った。

「そ、そうなんですか？」

武彦は、今後もあんな事があるとどうにかなってしまうと思った。(でも、僕、あの時、好きな人がいるんですって言っちゃったな…)

武彦はその時、自分が都坂^{みやじまかあね}亜希の事を好きなのを思い知った。小さい頃からずっと見て来た幼馴染。公園の砂場で結婚の約束をしたような気もする。しかし、成長するにつれ、亜希は武彦にとって段々と遠い存在になって行った気がした。

(アキツさんを助けてあげたくなるのも、委員長に似ているからなんだよな)

それでも亜希の事は「委員長」のままの武彦であった。

アマノイワトでは、オオヒルメが休まずに祈り続けていた。アキツもその隣で祈っている。

(オオヤシマを覆う悪しき心が、多少は和らいだように思える。タジカラが退き、イワレヒコ殿がたけひこ様になられたからか)

アキツが安堵していると、イワトの奥が鳴動した。イワトの中の空気が激しく振動し、耳鳴りがするような気がして、アキツは奥に目を向ける。

「何じゃ？」

オオヒルメも祈りをやめて奥を見た。その先には、闇の国ヨモツとオオヤシマを隔てるヒラサカがある。そこを大昔、自分の命を投げ出し、封じたワの国の王がいた。だが、アキツはその王の名を知らない。何故か語り伝えられていないのだ。

「ヨモツが蠢ぐもいておる。まだ何やら起こる兆めづしが見えるぞ、アキツ」
オオヒルメは眉間に皺を寄せて言った。

「はい、そのようで」

アキツは奥を見据えたまま立ち上がり、クルリと踵かかとを返すと、イワトの外へと向かう。

「ナガスネ、まだ諦めないのですか？」

外に出ると、彼女は拳を握りしめて空を見上げ、呟いた。

「たけひこ様、ナガスネをお止めください」

彼女は柏手を一回打ち、武彦にその思いを送った。

ナガスネは、ヒノモトの国の王であり自分の妹トミヤの夫でもあるホアカリには何も告げず、密かに自分の館に軍を集結させて、庭先で軍義を開いていた。

「海伝いに行くは確かに良い案であったが、隙を突かれる恐れもある。残された道は一つのみ」

ナガスネは声を低くして言った。

「はい」

スサノとクシナダは跪き、椅子の座っているナガスネを見つめている。

「どうなさるおつもりですか？」

もう一人の賛同者であるウカシはナガスネの無謀な策を恐れているかのように尋ねた。

「アマノヤス川を越え、ヤマトの国に攻め入る」

ナガスネの作戦は玉碎覚悟のものだ。ウカシはナガスネの短絡さに呆れていた。

(やはり、潰れてもらうか、この能無し將軍には)

ヨモツに通じているウカシは、その女王イザの命を受け、ヒノモトの国を内部から焚き付けるのが役目である。彼は別に血を好む人間ではない。ナガスネ達が勝手に戦い、自滅してくれるのが一番楽な方法である。

「ナガスネ様、それでは兵共が無駄に死にます。ここは一つ、我ら二人にお任せください」

スサノがニヤリとして言った。ナガスネは眉を吊り上げて、

「何やら策があるようじゃな、スサノ？」

「はい」

スサノは大きく頷いてからクシナダと顔を見合わせる。それを冷酷な目でウカシが見ていた。

ツクヨミと武彦は、そのままイワレヒコの部屋に行った。

「このヤマトの城で心を許せるは、イツセ様とイスズ様とタマヨリ様のみにございます。決してそれ以外の方をこのお部屋にお入れなさいますな」

ツクヨミは部屋の中に入ると、姿を現して武彦に注意を促した。

イワレヒコの部屋は、調度品は何もない。予備の剣と楯、鎧兜が並べられていて、後は椅子と寝具があるくらいだ。武彦はそれを見渡しながら、

「はい、ツクヨミさん」

ツクヨミに言われるまでもなく、この部屋には誰も入れないようしようと思う武彦だった。

「何やら、先程アキツ様の声が聞こえました」

ツクヨミが不意に言った。

「ええ。僕にも聞こえました。ナガスネをお止めくださいと言っていましたね」

武彦は椅子に腰掛けて言った。ツクヨミはその前に跪いて、

「ナガスネは諦めの悪い男でございます。まだヤマトを攻むるつもりかと」

「そうみたいです」

武彦は腕組みして思案した。そして答えを求めようとツクヨミを見た。

「どうしたらいいのでしょうか？」

ツクヨミは武彦を見上げて、

「今日はひとまずお休みください。いくらナガスネでも、夜に攻め入っては来ますまい」

「そうですね」

武彦はツクヨミの言葉にホッとして、

「お休みなさい」

と言うと、そのまま椅子で眠ってしまった。ツクヨミは倒れかけたイワレヒコの身体を椅子に戻した。

「やはり、限りがあるようだ。たけひこ様をこちらに長くお留めする事は難しい」

ツクヨミは、武彦が元の世界に戻ってしまうまでの時間を引き延ばせないかといういろいろ考えてみた。

「あっ！」

武彦は、急に声を上げて目を覚ました。

「どうした、磐神？」

黒板に向かっていた現代社会の先生が振り向いた。武彦は自分の世界に戻って来た事を自覚した。

「す、すみません、何でもありません」

武彦は慌ててそう言い繕った。クラスの一同が武彦を見てクスクス笑う。立ち上がっていた亜希が振り返り、ムツとした顔で自分を見ている。つい、俯いてしまう。

(うわ、委員長、怒ってる……)

亜希は答え終え、椅子に座った。武彦の頭に疑問が浮かぶ。

(あれ、委員長が答えていた。僕はそんなに眠っていなかったのか?)

ツクヨミが、武彦の時間のほんの一瞬を切り取って呼び込んだのだ。だから、武彦は本当に一瞬眠っただけだった。

(どういふ事なんだろう?)

それを説明されていない武彦には、謎であった。

「武君」

授業が終わり、武彦がオオヤシマの事をあれこれ考えていると、亜希が話しかけて来た。

「な、何、委員長?」

武彦はギクツとして、亜希を見た。

「何よ、そんなにビクついて……。そんなに私って怖いのか?」

亜希は「委員長」と言われた事にムツとして、口を尖らせて尋ねる。どんな仕草にしても委員長は可愛い、と武彦は思った。もう完全に「亜希バカ一直線」である。

「そ、そんな事ないよ、怖くないって」

慌てて作り笑いをし、答える。

「本当に?」

亜希はズンと顔を近づけた。亜希の瞳の中に自分の顔が見えるほど接近され、武彦はドキドキした。

「ほ、本当だよ」

それだけ言つので精一杯だ。顔がドンドン火照って来るのがわかる。

「そう」

亜希はニコツとして教室を出て行った。武彦はホツとして思わず椅子の背もたれに寄りかかった。

「やっぱり、アキツさんとは違うよな」

完全にドッキリ説はなくなったと思った武彦であった。そして、もつと問題な事を思い出す。

（ああ、委員長はともかく、姉ちゃんと顔を合わせるの、嫌だなア）
姉の美鈴そっくりのイズズに抱きつかれた事を思い出した武彦は、姉と会うのが憂鬱になっていた。

ヤマトの国では、ウガヤとオモイが薄明かりの中、ウガヤの書室で密談していた。

「やはりそうか」

ウガヤはオモイから、イワレヒコをツクヨミが操っていると聞かされていた。ウガヤ自身そう思っていたので、彼は何の抵抗もなくオモイの言葉を受け入れた。

「して、ツクヨミはどこにおるのか？」

ウガヤは眉をひそめて尋ねた。

「それはわかりませぬ。恐らくは、アマノイワトではないかと」

オモイは跪いて答える。ウガヤは立ち上がった、

「何としても、あの物の怪の策を破らねばならぬ。このままでは、ヒノモトに攻め込まれてしまうぞ」

「はは」

オモイは頭を下げながら、ニヤリとしていた。しかし、ツクヨミはその密談を姿を消して聞いていた。さすがの軍師オモイも、ツクヨミのその力には気づいていない。

（やはり油断ならぬはこのオモイだ。何を企んでおるのか？）

ツクヨミは静かに書室を出る。急がねばならぬ。そう思った。

しかし、ツクヨミのヒノモトに対する読みは外れていた。ナガス

ネはわずかな兵を伴い、スサノ、クシナダと共に出立していた。ヤマトの斥候せうこうに気取られぬために、明かりを灯さず、まるで地を這うような進軍である。

「いくらイワレヒコが強かるうとも、隙を突かれれば一たまりもなし。勝利は我らにあり」

ナガスネはそう呟いて、馬上で満足そうに笑った。

「我らは先に参ります、ナガスネ様」

スサノとクシナダが告げた。

「うむ、頼むぞ、スサノ、クシナダ」

ナガスネは目を細めて二人を見た。彼はスサノとクシナダに全幅の信頼を置いている。

「はは！」

スサノとクシナダは、夜目の利く馬に跨がり、先発した。

「すまん、クシナダ」

スサノが手綱を動かしながら言う。

「何の事です、お館様？」

クシナダは慌とほけて尋ねる。

「このような負け戦の道連れにしてしまった事だ」

スサノは苦笑いして目に向けて言った。

「何を仰せです。まだ負けと決まった訳ではありませんせぬ」

クシナダは笑って返した。

「相変わらず、気が強い事よ、其方は」

スサノは低く笑った。クシナダもフツと笑い、

「そうでなければ、お館様と夫婦めとにはなれませぬ」

二人は暗がりて顔を向け合った。

「何より、魔導士という卑しい身分の私を娶めとってくださいましたお館様とは生くるも死ぬるも一緒と決めております」

クシナダは目を潤ませて続けた。するとスサノは、

「俺も同じよ。オオヒルメ様にワの国から追放され、路頭に迷っていたのだ。其方との身分の上下などないも同然」

「お館様……」

クシナダはスサノの言葉に唇を震わせて涙を流した。

「だからこそ、そのような俺を捨ててください。たナガスネ様のご恩に報いねばならぬ」

「はい」

クシナダは大きく頷いた。

十八の章 スサノの決意、クシナダの思い

二十一世紀の日本で生活している磐神武彦^{いわがみたけひこ}は数日前まではごく普通の高校二年生だったが、ある事がきっかけで劇的な人生を歩む事になった。

オオヤシマ。どこにあるか、いつの時代なのかもわからない世界。だが、それは確実に存在している。

磐神武彦がオオヤシマに呼び込まれてから、戦いの流れが大きく変わった。一時は一触即発の場面があった程だったが、それは今ほとんど消滅したに等しい。好戦的であったヤマトの国の王ウガヤの考えは、武彦の魂が宿った剣士イワレヒコの変化で押さえ込まれ、攻め込まれる寸前であったヒノモトの国も、ヤマトの国の將軍であるタジカラの奥方であるウズメが、オオヤシマの行く末を憂うツクヨミの考えに同調し、夫を説得して事なきを得た。

だが、このままうまく収束するかに見えた二国のいがみ合いは、どうしても退く^ひ事ができないヒノモトの国の將軍ナガスネのこだわりにより、振り出しに戻ってしまう。

彼は腹心のスサノ・クシナダの二人と共に、夜陰に紛れてヤマトの国へと進軍していた。その中で、スサノとクシナダは先発し、夜目の利く馬で国境^{くわんがい}に迫った。

「む？」

クシナダは、アマノヤス川の水が騒がしいのに気づいた。

「お館様^{やかたのみま}、お待ちください」

「どうした？」

スサノは手綱を引きながら尋ねた。クシナダは周囲を見渡し、

「川の向こうに、何者かが潜んでおります」

「何？ ヤマトの斥候^{せうこう}ではないか？」

スサノも目を凝らして川の向こうを見た。しかし、何も見えない。明かりが動いている様子もない。スサノとクシナダはどちらも夜目が利く家系である。自分達と同じように動ける者がヤマトの兵にいるとは思えない。

「違います。これは……」

クシナダは水に様子を探らせるため、アマノヤス川から支流へと探索の手を伸ばした。

「あー！」

突然、何かが水を襲い、探索は中断させられた。

「如何した？」

スサノが奥方の様子の変化に気づいて尋ねる。クシナダは苦笑いして、

「しくじりました。敵に我らの居場所を教えてくださいましたようです」

スサノは慎重なクシナダがしくじったと知り、目を見開いた。

「何と？ それはどういう事か？」

クシナダは放っていた水を引き戻しながら、

「ウズメ殿です」

「ウズメか！？」

スサノは、ヤマトの国の舞踏師であるウズメを思い浮かべた。クシナダと違い、全体的に小柄な、それでいて周囲を圧倒する力を秘めた女。そんな印象である。そしてまた、彼はかつて、そのウズメを懸けてタジカラと戦った事を思い出した。スサノは、その事を知りながら自分の思いに伝えてくれたクシナダが愛おしく、そして未だもってウズメの名を聞くと胸を締め付けられる自分を情けなく思っている。

「ウズメ殿が八百万やちひゃうまんの神を降ろして、国境を見張っていました。私はその気配にまさしく謀たほられたようです」

あまりに鮮やかな罫であったため、クシナダは悔しさを感じていなかった。

「ならば、このような策、もはや意味なし！」

スサノは屈めていた身を起こした。

「堂々と渡るのみよ！」

そして剣を抜いて高く掲げた。彼は魔剣士である。その剣は炎を発する。

「我が力、振るおうぞ！」

剣から大きな炎が噴き出し、辺りを赤々と照らし出した。

「お館様……」

クシナダは呆れていたが、やがて微笑み、

「では、参りましょう」

「おう！」

二人は炎の明かりで照らされた道を馬に鞭を入れて走り出した。

スサノとクシナダの先発は、ヤマトの城のウズメに知らされていた。た。

「お館様、スサノ殿とクシナダ殿が参ります」

ウズメの報告に、タジカラはニヤリとして身を起こし、

「思った通りよ。夜陰に紛れて来る者があらば、それはあの二人をおいてなし。我らも出立致すぞ」

と言い、立ち上がった。

「陛下にはお知らせしないのですか？」

ウズメの言葉にタジカラは鎧を身に着けながら、

「これは私とスサノの因縁よ。陛下にはお伝えしない」

「……」

ウズメは、その昔、自分を懸けてタジカラとスサノが争った事があるのを思い出した。その時、ウズメは、自分はそれ程の女子おたこにあらず、おたこと思い、二人の戦いを悲しんだ。戦いは引き分けに終わったが、スサノが引き、タジカラがウズメと添う事になったのだ。しかし、その勝負をタジカラは納得せず、スサノに再戦を申し出た。だが、その直後にオオヒルメに追放されたスサノは、タジカラとの再戦を果たす事なく、ナガスネの元に行き、その後、のちクシナダを娶めとつ

た。

「まだスサノ殿をお許しでないのですか、お館様？」

ウズメの目はタジカラを非難するかのようだった。タジカラは苦笑いして、

「そうではない。昔の諍いさかいはすでに決あやつしている。彼奴もクシナダと添そったではないか」

「では何が因縁なのですか？」

ウズメはまだ少し怒っている。タジカラはこれはいかんと思って、部屋を出て行きながら、

「スサノとは、剣の腕の優劣がまだついていない」

「……」

いずれにしても男おのことはわからぬ生き物よ、とウズメはタジカラとの睦み合あいで乱れた衣を直しながら思おもった。

武彦は帰宅した。そして、姉美鈴がないのを確認すると、素早く部屋に駆け込み、猛スピードで着替えをすませ、まだ時間があるのにバイトに行く準備をした。

(姉ちゃんに顔を合わせると、イスズさんとの事を思い出して気ままずいから、サツサと出かけちゃおう)

武彦は靴を履き、玄関を出ようとした。すると携帯が鳴なった。

「誰だ？」

着信を見ると、バイト先のコンビニの店長からだ。

「お疲れ様です」

店長からの連絡は、店の電気系統が故障して臨時休業になってしまったので、今日は休んで欲しいというものだった。

「そ、そうですか。わかりました」

武彦は携帯を切り、溜息を吐いた。確か今日は美鈴も大学が休みなのだ。いよいよピンチである。

「家にいると、しばらく姉ちゃんと二人きりだしなア」

考えた挙げ句、武彦は意を決して亜希に電話した。

「どうしたの、武君？」

亜希は非常に驚いた声で訊いて来た。武彦は照れ笑いして、

「たまには夕ご飯、一緒に食べない？」

と誘ってみた。美鈴と二人きりになるくらいなら、亜希と一緒にいた方がいいと思っただのだ。

「な、何よ、いきなり？ どうしたの？」

亜希の声は動揺していた。でも武彦はそれに気づかない。

「都合悪い？」

ヤマトの国のイスズに「好きな人がいる」と言っただ事で、彼は少しずつではあったが亜希を意識し始めている。だから、断られたらどうしようと思っただけ、いつになく必死だ。もちろん、美鈴と二人きりになりたくないという気持ちも強かったのであるが。

「そんな事ないわよ。どこに行けばいい？」

亜希がOKしてくれたので、武彦は小さくガッツポーズをした。

「ああ、僕が迎えに行くから、待ってて」

「う、うん」

亜希の声は弾んでいた。

「よし」

何となく嬉しくなる武彦。自分でも亜希と一緒にいる事が楽しいと感じていた。今までには決してなかった感情である。

「あっ！」

玄関のドアを開けると、その向こうに美鈴がいた。途端にイスズと姉がオーバーラップし、更にイスズに抱きつかれた事、お子を産みたいと言われた事を思い出した。恥ずかしくなって、俯いてしまっただけだ。

「あ、武、今からバイト？」

美鈴は重い病気かも知れない弟を気遣ってか、いつになく言葉が穏やかだ。そして彼女は、武彦がオオヤシマで体験して来た事を知る由もない。

「う、うん」

武彦は美鈴の顔を見られない。美鈴は武彦が俯いているので、まだ悩んでいるのかと訊こうとしたが、心療内科の医師に言われた「心的な病気は、身近な人の影響によるものが多いのです」という言葉を思い出し、

「気をつけてね」

とだけ言うに留めた。絶対変に思われるから顔を見ないと、武彦は思ったが、どうしても見られない。

「うん」

咄嗟に嘘を吐いてしまった。姉はそのまま家の中に入って行った。武彦は何か後ろめたくなった。

「どうしても嘘吐いちゃったのかな？」

姉に対して隠し事など一つもなかったのに、今日生まれて初めて隠し事をした。武彦は妙にソワソワした。

「武君」

亜希の家に行くと、彼女は門の外で待っていて、手を振った。

「バイトは？」

「臨時休業だつて。電気系統が故障して……。店長、かなり焦ってたよ」

「そうなの」

亜希は嬉しそうだ。着ている服もノースリーブのフラワー柄のワンピースで、凄く可愛い。と言うより、亜希は何を着ていても可愛い。武彦はそんな風に思い、ニヤニヤしてしまった。

「何よ、思い出し笑いなんかして。気持ち悪いな」

亜希が言った。武彦はハツとして、

「ご、ごめん。僕笑ってた？」

「ええ、とっても嫌らしい顔だね」

亜希がからかうように言った。すると武彦はビククリして、

「そ、そうなの？ でも、亜希ちゃんが凄く可愛いから、嬉しくな

って……」

「えっ？」

亜希は泣きそうになった。武彦が何年かぶりに自分の名前を呼んでくれたからだ。

「今、武君、私の名前を呼んでくれた……」

亜希は涙ぐんで言った。武彦は亜希が泣きそうになっているのを知り、

「ご、ごめん、名前で呼んだのいけなかった？」

「そんな事ない。そんな事ないよ、嬉しいよ、武君」

亜希は涙を拭いながら微笑んだ。

「そ、それなら良かった」

また怒られるのかと思い、一瞬焦った武彦だった。

オオヤシマは、武彦達の世界と違い、一気に緊迫していた。ヤマトとヒノモトの剛の剣士がオオヤシマのほぼ中央に位置する丈の短い草が生い茂る平原で出会っていた。スサノの魔剣が噴き出す炎とタジカラが持っている松明の火たいまつ以外何も明かりがないので、彼らの周囲は対照的に漆黒の闇である。見えているのは、互いの姿のみだ。

「久しぶりだな、タジカラ」

スサノが炎の剣を高く掲げて言った。

「おう、スサノ。今宵こそ、全てのケリを着けようぞ」

タジカラも松明をウズメに渡して剣を抜き、スサノを指し示した。ウズメとクシナダは、それぞれの夫の後ろに馬を下がらせ、心配そうに行方を見守っていた。

十九の章 ウカシの策謀、ホアカリの決断

異世界オオヤシマは、また不穏な空気に包まれ始めていた。

ヤマトの国の將軍であるタジカラとヒノモトの魔劍士であるスサノが互いを睨み、ジリジリと間合いを詰めて行く。

「始めるか？」

スサノが言った。タジカラはニヤリとし、

「良からう！」

二人は馬を走らせた。二人の顔はスサノの魔劍が噴き出す炎に照らされ、まさしく鬼神の形相になっていた。

「お館様！」
やかたさま

ウズメとクシナダが同時に叫んだ。そして二人は互いを見た。二人共、思いは一つ。かつては酒を酌み交わした仲であるのに、何故今は刃を交えねばならぬのか？

「ふおおお！」

「ぬああああ！」

タジカラとスサノの劍が激しくぶつかり合い、火花が飛ぶ。スサノは炎を出したままで攻撃しているが、タジカラは降りかかる火の粉もその灼熱の劍身もものともせず、むしろスサノを押し返す勢いで戦っていた。

その頃、ナガスネは騎乗したまま、スサノ達の遙か後方で合戦の報告を受けていた。

「スサノめ、全てを背負うつもりか……！」

ナガスネが唯一信頼するスサノは、ナガスネの思いを知り、自分の命と引き換えにヤマトに譲歩を迫るつもりだ。その思いはナガスネに届いていた。ナガスネはスサノの覚悟に心を打たれ、何としても戦に勝つつもりでいた。しかし、ヒノモトの者全てがそれに賛同

している訳ではなかった。

「スサノ一人で終わらせるものか。この戦、そのような形ですませるつもりはない。贄は多き程良し」

ナガスネの無謀な戦いを快く思わないヒノモトの城の留守居役であるウカシは、混乱を引き起こすつもりでいた。彼はこっそり戦列を離れて城に帰還し、ホアカリのところに赴いた。

「何事か、ウカシ？」

謁見の間で、ホアカリの嫡男であるウマシが対応した。ウカシは煩わしいと思いつつも、

「ナガスネ様がスサノ殿とクシナダ殿を伴い、ヤマトに攻め入るおつもりでございます」

「何と！」

ウカシは驚愕し、すぐさまホアカリのいる玉座の間に向かい、父に事の次第を説明した。ホアカリもその話に大いに驚き、トミヤと共に謁見の間に現れた。

「それは真か、ウカシ？」

ホアカリは椅子に座りながら尋ねた。

「はい。ナガスネ様は戦の責めを負い、死ぬるお覚悟のようです。ウカシは跪いて答えた。そして頭を下げてからニヤリとする。

「何という愚かな！ 死ぬるなら、一人で行けば良いものを……」
ウマシはそう言い放ち、ホアカリを見た。

「ウマシ、仮にも伯父上の事をそのように申すでない」

トミヤが悲しそうな目でウマシの失言を窘めた。

「ウカシ、ナガスネを追い、止めるのだ。もはや戦はならぬ。私がウガヤと話そう」

ホアカリは決断をした。彼も彼なりに、オオヤシマの異変を感じていたのだ。

（このまま争いを続ければ、ヨモツが蠢くやも知れぬ）
「承知致しました」

ウカシはもう一度頭を下げ、再びニヤリとした。
(戦はやめさせぬ。もっと激しいものにするのみ)

タジカラとスサノの戦いは長く続き、両名共疲れが見え始めていた。両名共息が荒くなり、肩が激しく上下に動いている。馬も脚がふらついていて、限界が近いようだ。

「く……」

タジカラはスサノの剣の放つ炎で、腕と顔に火傷を負っていた。スサノもタジカラの怪力のせいで、腕の筋肉が断裂しそうになっていた。二人共、普通の人間であれば気を失っていてもおかしくない程の状態である。

「お気がすみましたか、お館様？」
やかたさま

見かねたウズメがタジカラに声をかける。

「ぬ……」

タジカラはまだ戦うつつもりだったが、スサノの後ろに見えるクシナダの悲しそうな顔を見て気が緩んだ。

「お館様、もう宜しいでしょう？」

クシナダも、戦意を喪失しかかっている夫に声をかけた。

「……」

タジカラとスサノは互いに相手を見た。そして、ゆっくりと剣を鞘に戻した。それを見て、ウズメとクシナダはホッと、顔を見合わせて微笑み合った。

「おいしかった」

近くのファミレスで食事をすませた武彦と亜希は、家路に着いていた。亜希は行く時より嬉しそうだ。武彦は恥ずかしがっているが、亜希は組んだ腕を解かせてくれない。武彦は、亜希がどうしてそんなにテンションが高くなっているのか、理解できなかった。

「ねえ、武君」

不意に笑顔の亜希が話しかける。

「何？」

武彦はその近過ぎる亜希の顔にドキツとしながら言う。

「どうして急に私を誘ってくれたの？」

亜希のその言葉に、武彦は更にギクツとして、またイスズ姫との事を思い出してしまった。

（まさか、姉ちゃんのそっくりさんに抱きつかれたので、姉ちゃんと顔を合わすのが気まずかったからなんて言えないしなあ）

仮に言ったとしても、亜希が信じる訳がない。信じたとしても、

「何よそれ、酷いわ！」

と怒り出すだろう。姉と二人きりになるのが嫌だったので、亜希を呼び出したのだから、確かに酷い話なのだ。どれほど亜希に怒られても仕方がない。

「亜希ちゃんのご飯食べたかったから」

恥ずかしかつたので、武彦は俯いてそう答えた。確かにきっかけは誉められたものではないが、武彦の言葉に嘘はない。亜希と食事したかったのは本当だ。

「……」

何故か亜希は何も言ってくれない。武彦はハツとして亜希を見た。彼女が怒ったと思ったのだ。

「嬉しい……」

ところが、亜希は泣いていた。大きな瞳から綺麗な涙をポロポロ零していた。それがそばにある街灯に照らされ、キラキラ輝いている。まるで真珠のようだ。

「わわ、泣かないで」

武彦は慌ててポケットからハンカチを出したが、汚れているのに気づき、すぐに引つ込めた。

「嬉しいよ、武君！」

亜希は泣きながら抱きついて来た。

「……」

武彦は気を失いそうなくらい驚いた。亜希の体温と心臓の鼓動、そして胸の膨らみが感じられる。耳元で彼女の息遣いが聞こえる。

「嬉しいよ、武君。私、嬉しい……」

亜希はしばらくそう言い続け、武彦に抱きついたままでいた。

「そ、そんなに喜んでもらえて、僕も嬉しいよ」

武彦は呂律が回らなくなるくらい舞い上がっていたが、何とかそう言った。

「ホント？」

亜希が涙で濡れた顔を武彦に向ける。あまりに近くだったので、互いにポツと赤くなった。

「ホントだよ」

武彦は亜希を見たままで答えた。亜希はニッコリして、何故か目を閉じた。

「え？」

武彦は、どうして彼女が目を閉じたのかすぐにはわからなかった。しばらく二人を沈黙が支配した。

やがて鈍感な武彦も、それが何のサインなのか理解した。

(も、もしかしてこれは……?)

心臓が飛び出しそうなくらいの勢いで動き出した。亜希の鼓動も早くなっているらしく、頬が紅潮して来た。武彦は顔が火照り、息が苦しくなるのを感じた。

「……」

二人はそつと唇を触れ合った。本当に軽いキスだった。互いに照れ臭そうに笑う。腕を組み、身体を寄せ合って歩き出す。そして、亜希の家の前に着いた。

「お休み、武君」

微笑む亜希をまともに見られず、武彦は応じる。

「お、お休み」

亜希はしばらく手を振ってから、家に入って行った。武彦はつい唇を触ってしまう。

「……………」
「亜希の柔らかい唇がここに触れた……。武彦の鼓動はまた早まった。」

その頃、武彦の家では、風呂上がりでパジャマ姿の母珠世がＴシャツ短パン姿の美鈴と二人でキッチンで武彦の事を話していた。

「昨日は突然早く起きたから、びっくりした」

美鈴は焼酎のお湯割りを大きめのグラスで飲みながら言った。珠世は美鈴より小振りのグラスに氷を入れながら、

「でもあの子、小さい時から、なかなか具合が悪いのを言わないから、それが心配よ」

「うん、そうなんだよね」

美鈴は酔いが回ったのか、目がトロロンとして来た。珠世はグラスをあおると、

「もう一度、病院に連れて行ってよ。今日あの子が帰ったら話をして」

と言い、グラスをサツと洗って、水切りにかける。

「うん」

珠世はキッチンを出て行きながら、

「母さん、明日も早いから先に寝るね」

美鈴は母を見て、

「うん。お休み」

「お休み」

美鈴は珠世が部屋に戻ると、テーブルの端にあるポットを引き寄せて、グラスに焼酎を注いでお湯割りを作り、武彦の帰りを待つ事にした。

「武……………」

携帯を開き、待ち受け画面を見る。幼い美鈴と武彦が写る写真。

武彦の事を心配になるたび、彼女はそれを見ていた。

二十の章 オモイの企み、オオヒルメの意志

武彦は、亜希を彼女の家まで送つてから、そこから然程離れていない自分の家の方角を警戒しながら、また商店街へと引き返した。彼はバイトの終了時間まで近所の大型書店で立ち読みや新刊の物色をしてから帰路に着いた。そのくらいの辻褄合わせをするのは、彼でも思いついた。

「……」

しかし、気が重い。あのオオヤシマという世界がどんなところなのかよくわからないが、言葉はほぼ通じる。但し、彼等の話す言葉は武彦にはちよつと難しかった。だから武彦も自分が喋る時、こんな言い方で通じるのかと心配する時もあった。ツクヨミだけはそのような不安を感じない。彼は言霊師ことたましだと言っていた。自分の発する言葉に力を与えて、相手を操る事もできるし、攻撃する事もできるのだと。考えてみれば、ツクヨミはとんでもない存在だ。しかし、彼からは全く怖さを感じない。むしろ、自分と同じ、劣等感を感じるのだ。いつも物悲しそうなツクヨミの表情を武彦は思い浮かべた。(ツクヨミさんは自分の力を恐れているんだ。だから、あんなに控え目なんだ)

良くない考えを持つ者がツクヨミのような能力を持ったりしたら、多分あの世界だけでなく、今武彦が暮らしているこの世界も滅ぼされてしまうだろう。そう思った。

(それに、あの人はアキツさんの事が好きなんだ。だから、僕はあの人に共感できる)

幼馴染みの都坂亜希みやまかあきに瓜二つのアキツ。彼女の存在があったからこそ、武彦はオオヤシマと呼ばれた。そして、アキツが亜希にそっくりだったから、武彦は彼女の事が心配になり、彼女に協力しようと思ったのだ。そこまではいい。

(問題は、イスズさんだよなア……)

イスズはヤマトの国の王女。そして、イワレヒコの姉であり、許嫁なすけでもある。それは仕方ない。でも、そのイスズが、イワレヒコの身体に武彦が降ろされていると知っていながら、抱きついて来たのは、本当に面食らった。

（綺麗な人だし、普通なら悪い気はしないよ）

いくら女性にモテない武彦でも、そんな事があれば嬉しいとは思う。しかし、イスズは姉美鈴にそっくりなのだ。

（ホント、困る。あんな事があると、姉ちゃんと顔を合わせられないよ）

現に今日は、亜希と食事に出かける時、つい美鈴に嘘を吐いてしまった。そのため、余計気が重いのだ。嘘だとばれたら、只ではすまない。

（おまけに、二人のお母さんのタマヨリさんは、母さんにそっくりだし）

そう、ヤマトの国のウガヤ王の妃タマヨリは、武彦の母である珠世に瓜二つなのだ。その偶然とは思えない出来事は、実は武彦の想像を超えたところで繋がりを持っていたのだ。

「はア……」

武彦は溜息を吐いた。目の前に自分の家の玄関のドアがある。

「只今」

そっとドアを開け、申し訳程度の声で言う。美鈴は大学が休みの日は酒を飲んでいるから、もう寝ているはず。そして、珠世は明日も仕事が早いから、すでに寝入っているだろう。武彦はそう推理し、静かに玄関で靴を脱ぐと、そのまま二階の自分の部屋へ行こうとした。

「お帰り、武彦」

美鈴がキッチンから現れた。完全に想定外だった武彦は驚きのあまり、危うく階段から転げ落ちそうになった。

「た、只今」

顔を引きつらせたまま、やっとそれだけ言った。

「ちよつといいか、武彦」

美鈴は酔いが回っているらしく、トロンとした眼で言った。武彦は嘘を吐いたのがバレたのかと思ってギクツとした。亜希の時とは違う理由で鼓動が高鳴って来るのがわかる。

「な、何、姉ちゃん？」

「いいから」

武彦は美鈴に腕をギュツと掴まれ、そのままキッチンへと引つ張って行かれた。

(ど、どうしよう……?)

ビビりまくる武彦だった。

マ。
どこにあるのか、いつの時代なのかもわからない存在のオオヤシ

スサノとタジカラは馬を降り、地面に寝転んでいた。

「仕方のないお館様やかたさまですね」

ウズメは苦笑いをし、クシナダと目配せをし合い、それぞれの夫のところへ歩み寄った。

「相変わらず、強いな、タジカラ」

スサノが荒い息をしながら、夜空を見上げたままで言う。タジカラも胸を大きく動かして呼吸をしていたが、フツと笑い、

「お前は相変わらず弱いな、スサノ」

「貴様！」

スサノは顔を上げてタジカラを見たが、その顔は笑っていた。

「この始末、どうつけるつもりだ？」

スサノが真顔になって問うた。タジカラも顔を上げて、

「ありのままに申し上げる。この戦いくはもはや何も生まれぬ。喜うぶは、

ヨモツのみよ

「貴様もそう思ったか」

スサノは半身を起こした。タジカラも起き上がり、
「オオヤシマがこれほど悪しき心に包まれたは、何やら解せぬので
な。私は知恵は回らぬ方だが、勘は冴えておるのだ」
「なるほどな」

スサノはニヤリとした。ウズメとクシナダは不安そうに顔を見合
わせた。

しかし、そんな彼らの思いは叶わぬ方向へと動き出していた。ヒ
ノモトの国の留守居役であるウカシが、大軍を率いてヤマトの国に
進んでいたのだ。名目はナガスネを止めるため。逆らうようであれ
ば、攻撃するという大義を得ていた。

（ホアカリは本当に間抜けな王よ。俺が言った事を全て真に受けた。
何とも愉快だ）

ウカシはその大軍でヤマトに攻め込むつもりだ。彼はナガスネが
進軍したと思われる道を外れ、違う進路でヤマトを目指していた。
歩兵達が掲げる松明の火がゆらゆらと揺れ、辺りを照らし出してい
る。街道沿いの家に住む民達は怯えたような眼差しで、ウカシ軍の
行軍を見ていた。

（イザ様は、血がお好きだが、俺は好かぬ。但し、人の命は俺も好
きだ）

ウカシはヨモツの女王イザと通じている。そして、彼はヨモツに
魂を売った人間である。

「全軍、ヤマトの国に攻め込むぞ。ヒノモトに勝利を！」

ウカシは兵達に檄を飛ばした。視点の定まらないような目つきの
兵達は、

「おーっ！」

と応じたが、自分の意志で動いているとは思えない。ウカシはそん
な兵達を見渡してニヤリとした。

イワレヒコは残虐であったが、民を巻き込む戦はしなかった。し
かし、ウカシは敢えて民を殺戮し、イザにその魂を土産として捧げ

るつもりなのだ。

「むっ？」

ツクヨミはイワレヒコの部屋に戻って姿を現した時、そのウカシの悪しき心を感じた。

「何奴？」

ツクヨミは自分の言霊を飛ばし、ウカシの心を探った。彼はウカシとは会った事がないため、彼の心を探えるのは難しかった。

(やはり知らぬ者の心は捉えられぬか)

ツクヨミは自分の力の至らなさを悔やんだ。

そしてもう一人、ウカシの心を探えていた者がいる。ヤマトの国の軍師、オモイである。彼は自分の寝所でウカシの悪意を感じていた。

「そうか。奴はそう出るのか。しかし、そうはいかぬ。お前に手柄の独り占めはさせぬぞ、ウカシ」

オモイはその青い瞳をギラつかせて、そう呟いた。

オオヤシマの北の外れにある洞窟アマノイワト。

先代の女王であるオオヒルメとその後継であるアキツが、長い時間をかけて、ヨモツを抑える祝詞のりこを唱えていた。

「アキツ」

オオヒルメが不意に言った。アキツはオオヒルメを見て、

「はい、大叔母様」

オオヒルメは前を向いたままで、

「時が来たようだ。私は命を捨てねばならぬ」

「どういう事です？」

アキツはオオヒルメの言葉に仰天した。オオヒルメは穏やかな顔でアキツを見て、

「大声を出すな、アキツ。この定めは、私がワの国に生まれた時か

ら決まっていたものじゃ。騒ぐ事ではない」

「ですが、大叔母様……」

アキツはいつになく動揺していた。そんな日が来るとは思っていたが、現実にはオオヒルメの口から告げられると、平常心ではいられない。

「もはや、この程度の祝詞で抑えられるようなものではない。ヒラサカが軋きしんでおる」

ヒラサカとは、オオヤシマとヨモツを隔てる場所である。その昔、時のワの国の王が自分の命を賭としてヨモツを封じたという伝説が残っている場所だ。

「それでもヨモツを止める事ができぬ時は、頼んだぞ」

「はい……」

アキツは泣いていた。オオヒルメはそんなアキツを一度優しく抱きしめてから、ヒラサカがあるイワトの奥へと歩き出した。

「大叔母様……」

アキツは小さな声で言った。そして、その場に泣き伏してしまっ

二十一の章 ウカシの悪意、アキツの悲しみ

いわがみたけひこ
磐神武彦は、人生で最大の緊張をしていた。

キツチンのテーブルに、姉美鈴と差し向かい。しかも姉はほろ酔いで目が完全に座っている。下手な答えをすれば、いつも以上に怒られ、拳骨が飛んで来そうだ。姉は酔うほどに強くなる。酔拳の継承者なのかも知れない、と武彦は思った。

「武彦」

しかし、武彦の暴走気味の妄想に反して、美鈴の顔は悲しそうだった。その顔がヤマトのイスズ姫と重なる。そして、あれこれ思い出してしまう。

「な、何？」

そのため、武彦はボツと赤面し、イスズの残像を振り払った。美鈴が尋ねる。

「その後、調子はどうなの？」

「え？」

何だ、嘘がばれたんじゃないのか……。ホツとしたが、姉の事だから油断はならない。武彦は警戒を第一級のままにして姉を見る。

「あまり一人で抱え込むなよ。母さんも、姉ちゃんも、お前の事が心配なんだから」

しかし、姉は明日世界が破滅するのではないかと思ってしまうくらい優しい口調だった。いや、むしろ元気がないと表現した方が正しいかも知れない。

「う、うん……」

酔っているせいで目が潤んでいるのかと武彦は思ったが、違った。姉は涙ぐんでいるのだ。充血した目で自分を見ている。武彦は罪悪感で押し潰されそうだった。自分はそんな弟思いの優しい姉を騙したんだ、と。

「何ともないのなら、それでいい。ごめんな、疲れて帰ったところ

をさ……」

美鈴のその言葉は、武彦の気持ちをグラグラと揺らした。

(姉ちゃんにこんな心配してもらってるのに、僕は又ケ又ケと亜希ちゃんと食事に行つて……)

本当の事を言おうかと思つたが、そんな事したら弟が狂つてしまつたと思われる。ジレンマだつた。

「お、お休み」

武彦は姉の優しさが辛く、その心配そうな視線が痛くて、キツチンを逃げるように出た。

「お休み」

姉の声が背中に突き刺さるようだ。実際刺さつたのではないかと思つほど、武彦は堪こたえていた。這うようにして階段を駆け上がり、自分の部屋に飛び込む。

(どうしよう……？ このままじゃ、姉ちゃんに申し訳なくて……)そして、着替えもせずにベッドに倒れこんだ。

「あ……」

また睡魔が襲つて来た。かなり強いもので、まがた瞼を開けていられなくなる。

(ツクヨミさんが呼んでるのか？ いや、アキツさんが泣いてるんだ……)

まもなく武彦は眠りに落ちた。

ふと目を開けると、蝋燭のような薄明かりの中、ツクヨミが見えた。どうやらイワレヒコの部屋の中のようなようだ。夜はまだ明けていない。

「たけひこ様」

ツクヨミは悲しそうな顔でこちらを見ていた。その顔に武彦はギクツとして、

「どうしたんですか？」

と起き上がって尋ねた。ツクヨミは跪いて、

「アキツ様のお心が届いたのでですね？」

その言葉に武彦は自分の世界で眠りに落ちる瞬間に感じたアキツの心を思い出した。

「あ、ええ。アキツさんが悲しんでいるのがわかって……」

ツクヨミは武彦の言葉に頷き、

「オオヒルメ様が、お命を懸けてヨモツを封じるお覚悟のようなのです」

あの英語の尼照先生あまてるに似ている人が？ アキツが「大叔母様」と呼んでいたから、尼照先生より高齢なのだろう。ツクヨミは武彦を見て、

「アキツ様は大変お嘆きのご様子です」

武彦にはツクヨミの気持ちひたすらいが痛いほどわかる。彼はアキツに対する思いを押し殺して、只管彼女に尽くそうとしているのだ。強い人だなあ、と武彦は思う。

「そうですか」

幼馴染で同級生の都坂亜希みやざかあきにそっくりなアキツが悲しんでいると聞くと、今まで以上に武彦の心は動揺した。亜希とキスをした時を思い出し、つい赤くなる。

「如何いなさいましたか、たけひこ様？」

ツクヨミが武彦の心の揺れを見抜いたかのように尋ねた。武彦はツクヨミに心の中を見透かされたかと思っただが、彼がそんな不躰ぶじつげな事をするはずがないと思ひ直した。

「僕に何かできる事はありますか？」

武彦は妄想を振り払い、ツクヨミを見た。

「何やら、ヒノモトに不穏な動きがあります。それを収めぬ事には……」

その時、ツクヨミの脳裏を強烈な悪意が駆け抜けた。気が滅入るようなおぞましい悪意だった。彼はその内容を感じて雷に撃たれたような衝撃を受けた。

「どうしたんですか？」

武彦が尋ねた。ツクヨミはその問いかけにハッとして、

「今、数多あまたの民の叫び声が聞こえました。何かが起こっているようです」

「え？」

武彦はツクヨミの顔色を見てギクツとした。ツクヨミは多くの人
の命が尽きるのを全て感じてしまったため、酷く蒼い顔をしていた
のだ。

「何事か！？」

ヒノモトの魔剣士であるスサノは、奥方のクシナダが何かを感じ
て水を探りを入れたので叫んだ。

「これは、ウカシ殿です。ヤマトに進軍しております」

クシナダは水を操りながら答えた。スサノは思わずヤマトの將軍
である旧友のタジカラを見た。

「何！？」

それを聞きつけたタジカラが立ち上がって叫んだ。その奥方であ
るウズメもクシナダを見た。

「如何なる事だ？ ウカシは城の留守居役。奴が進軍とは、解せぬ
ぞ」

スサノはクシナダに近づいた。

「ウカシ殿はこちらに向かっているのではないようです。ああ！」
クシナダは目を見開いた。水から更なる知らせを得たようだ。

「如何した？」

スサノが重ねて尋ねる。クシナダはスサノ、タジカラ、ウズメと
視線を移しながら、

「ウカシ殿がヒノモトとヤマトの国境こくがいの村を襲い、民を殺しており
ます」

と悲しそうな顔で伝える。

「何だと！？」

スサノとタジカラが同時に叫ぶ。

「これは危うき事です、お館様。やかたのま民が殺され、悪しき心が大きくなつております！」

やあやあ八百万の神を召喚して辺りを調べたウズメが叫んだ。

その頃、早馬がヤマトの城に着いていた。馬は城門を潜くるとそのまま倒れてしまった。伝令兵も馬から転げ落ちるようにして降り、城の中へと走った。

「申し上げます！ ヒノモトの軍が我が国の村を襲い、民が殺されております！」

謁見の間に辿り着いた伝令兵は息も絶え絶えに報告した。

「何と！？ 誰の仕業か！？」

ウガヤは激怒して椅子から立ち上がった。伝令兵は、

「ヒノモトの留守居役、ウカシ殿の軍でございます」

「ウカシだと！？」

ウガヤはそばに控えている軍師オモイを見た。オモイは苦々しそうな顔をし、

「何という恥知らずな……。すぐにどなたかに出陣のご命令をお出してください」

とウガヤを見る。隣に座る妃のタマヨリも心配そうにウガヤを見ている。

「うむ」

ウガヤは大きく頷き、

「タジカラはおるか？」

と尋ねた。オモイは深々と頭を下げて、

「いえ、お出かけのご様子で」

タジカラとウズメはウガヤには告げずに出陣したので、ウガヤはタジカラがいない理由を知らない。

「何？ いずこへ出かけたのだ？」

そのため、ウガヤはますます憤激した。

「誰も知らぬようです」

オモイは顔を上げて答えた。ウガヤは怒りが収まらず、

「このような夜更けにどこに参ったのだ、タジカラは!? すぐに探させよ」

「はは」

オモイは再び頭を下げてニヤリとし、

（ウカシめ、思い切った策に出たな。しかし、私もこのままにはしておかぬ）

「私が参りましょう、父上」

そこにイワレヒコが現れた。当然の事だが、姿を消したツクヨミが武彦の代わりに喋っている。オモイは誰にも聞こえぬように舌打ちをした。

「よし、すぐ出立してくれ。敵は皆殺しじゃ!」

ウガヤは目を血走らせて怒鳴った。しかしイワレヒコは、

「いえ、父上。それではヨモツが蠢うごめきます。追い返すだけに留めま
す」

と反論をした。オモイは部屋の隅に下がり、愉快そうにその父子のやり取りを見ていた。

「手緩いぞ、そのような事では! ヒノモトの兵共は皆、生かして帰すな!」

それでもウガヤはそう息巻いた。するとイワレヒコは、

「そのような事は致しかねます!」

と大声で言い返した。ツクヨミが言霊ことだまを使ったのだ。ウガヤは大人しくなり、オモイはギョツとしてイワレヒコを見た。

（イワレヒコの声が……?）

オモイはしばらく考え込んだ。

（今のは如何なる事か? イワレヒコの声で、何故これほど動揺するのだ?）

彼にはツクヨミの存在がわかっていない。

「では、出立いたします」

イワレヒコは呆然としているウガヤと嬉しそうに自分を見ているタマヨリに頭を下げ、オモイを一瞥してから、謁見の間を出て行った。

タジカラとスサノはそれぞれの奥方を国に帰し、ウカシの軍がいると思われる村に馬で向かっていった。

「愚か者が！ あの者、一体何を企んでおるのだ？」

タジカラがそう言うと、スサノが、

「彼奴は得体が知れぬ男だ。クシナダはこの上もなくウカシを嫌っておる」

「私も斯様な事をする者は好かぬ。戦に民を巻き込むなど、許しがたき行いぞ」

タジカラは顔を真っ赤にして怒った。

アキツもまた、ウカシの悪行を感じていた。彼女はアマノイワトから出て、遠くヤマトとヒノモトの国境を見やった。

「何という事を……。これでは大叔母様のお気持ちが悪くされたようで……」

彼女はオオヒルメの事を思い、涙を流した。それと同時に、武彦とツクヨミの声を聞いた。

「オオヤシマをお救いください、たけひこ様」

アキツはそう強く願った。

二十二の章 トミヤの嘆き、ナガスネの戸惑い

ヒノモトの国の留守居役であるウカシは大軍を率いて、ヤマトの国の村を襲撃した。彼は表向きはヒノモトの武将であるが、本当はオヤシマの地下深くに存在する闇の国ヨモツの女王であるイザの配下である。彼の使命は、オヤシマの混迷であった。

ヒノモトの軍の突然の来襲に村は大混乱に陥った。火矢が飛び交う中、民が逃げ惑う。老若男女を問わず、皆必死だった。

「一人も生かしておくな！ 皆殺しにせよ！」

ウカシは軍の遙か後方に陣取り、命令していた。彼は、一心不乱に弓を引いて剣を振り回す兵達を冷淡な目で見ていた。

（兵共にはヨモツの水を飲ませてある。皆、俺の思いのままに動く）
ウカシはまた、スサノとタジカラが近づいている事も承知していた。二人が近づいたら、全軍をぶつけるつもりだ。そして、自分は何もせずに退く。決して自らの手を汚さない、実に卑怯な男である。

「ナガスネ様は如何したか？」

ウカシは伝令兵に尋ねた。兵は跪き、

「ナガスネ様はヒノモトに向かわれております」

意外な返答に彼は眉を吊り上げた。

「何？」

ウカシはその時、スサノの奥方であるクシナダの気配がしないのに気づいた。

「おのれ、二手に分かれたか」

彼は齒軋りし、

「このまま全軍、ヤマトへ攻め込め！ ヒノモトの勝利はもうすぐぞ」

と命じると、馬を駆り、陣を抜けた。

（クシナダめ、ナガスネをヒノモトに戻し、俺を後ろから攻むるつもりか？）

ウカシはニヤリとした。

「そうはいかぬ。このウカシ、そのような手には乗らぬぞ」

彼は馬に鞭を入れ、闇に包まれた街道を疾走した。ヨモツにその身を捧げたウカシには闇は闇ではなかった。彼は日中のように自在に馬を操っていた。

そのナガスネの軍は、クシナダの進言でヒノモトに帰還中だった。如何なる事か、クシナダ？」

馬上でナガスネが尋ねる。クシナダはナガスネより半馬身下がったところを進みながら、

「留守居役のウカシ殿が謀反にむほんございます。陛下のご命令も無きまま、ヤマトを攻めております」

「何と！」

ナガスネは馬を止め、

「ならばウカシを討たねばならぬ！」

と後ろを見やった。クシナダは馬を下り、跪いた。

「ですが、兵の数が違います。ここは一度城に戻るが得策にございます」

「うむ……」

確かに今ナガスネが引き連れているのは、あくまで奇襲のための小部隊。ウカシが大軍を率いているのであれば、死に行くようなものである。

「わかった。任せる」

ナガスネは再び馬を進めた。

「ありがとうございます」

クシナダは騎乗し、ナガスネに続いた。

しかし、ウカシはクシナダ達が思う以上に狡猾だった。

「ナガスネ様、謀反にむほんございます！」

ウカシの先発させた伝令兵がヒノモトの城に先に到着し、謁見の

間でホアカリに報告をしていた。

「まさか！ ナガスネが謀反とな！」

ホアカリは俄かに信じられなかったが、自分に何も告げずに軍を出している以上、ナガスネの行動は解せないのは確かだった。

「偽りを申すな！ 我が兄が謀反など！」

ホアカリの妃であり、ナガスネの妹であるトミヤには、尚の事信じがたい話だった。

「偽りではございませぬ。ナガスネ様は陛下のご命令もなしに、ヤマトの村を攻めて、民を殺しております」

兵はウカシにヨモツの水を飲まされて操られている。彼はウカシに吹き込まれた「真実」を語っているので、その表情からは嘘とは思えない。

「そのような事……」

あまりの話に、トミヤは泣き伏してしまった。

「父上、如何なさいますか？」

嫡男ウマシが、ホアカリを追い詰めるように見ている。彼は元々ナガスネを好かない。これを口実に追い落とそうと考えているのだ。只、ウマシにはナガスネを殺すつもりはない。昔から自分を蔑んで来た伯父を屈服させたいだけだ。

「ウカシに伝えよ。ナガスネを追い、事の真偽を正せと」

ホアカリは伝令兵に苦渋の思いで命じた。

「ははっ！」

伝令兵は頭を下げてから退室した。ホアカリは最善の策と思い、命じた。しかし、それは最悪の選択だった。ウカシにナガスネ討伐の大義名分を与えてしまうからだ。

ヤマトの国を出立したイワレヒコの軍は、途中でタジカラの奥方であるウズメに出会った。

「イワレヒコ様」

ウズメは馬を降り、跪いた。

「如何した、ウズメ？」

イワレヒコは騎乗のまま尋ねた。ウズメは、

「ヒノモトのウカシ殿の軍が、国境くわんがいの村を攻め、民が殺されており
ます」

ウズメを見た武彦は、そのあまりに露出の多い衣にドキドキして
いた。

「それは聞いておる」

姿を消してイワレヒコの後ろにいたツクヨミは、ウズメがまた自
分に気づいている事を知った。ウズメはチラチラとこちらを見てい
るのだ。

(ウカシという男、一体何を企む？)

ツクヨミ程の力を持つ者でも、ウカシがヨモツに通じているのを
見破る事ができない。それはウカシが意図的にツクヨミとの接触を
避けていたからでもある。

「タジカラとスサノ殿が、ウカシ殿の軍に向かいました」

ウズメはツクヨミの方を見るのを止め、イワレヒコを見上げて言
った。

「そうか。わかった。我らもすぐに向かう。ウズメは城に戻り、こ
の事を父上達に伝えよ」

「はは」

ウズメは馬に戻る前にそっとツクヨミがいる辺りに近づき、

「お気をつけなさいませ。ウカシは得体の知れぬ者です」
と囁いた。

「かたじけない、ウズメ殿」

ツクヨミも小声で応じた。ウズメは微笑み、馬に戻った。
「行くぞ」

イワレヒコは馬に鞭を入れ、走り出した。それに大軍が続く。ツ
クヨミは姿を消したままでイワレヒコの横を飛翔している。

(うはあ)

イワレヒコの中の武彦は驚嘆していた。

(どうしてこんな事ができるんだろう?)

武彦は不思議だった。馬に乗った事もないし、スポーツ全般がダメな武彦には、今起こっている事が信じられなかった。

『 どうなさいましたか、たけひこ様? 』

ツクヨミが武彦の心の中に話しかけて来た。

『 どうして馬に乗れているのだろうって、凄く不思議なんです 』

武彦も心の声で返した。

『 今はイワレヒコ様のお身体だからです。貴方がなされぬ事でも、イワレヒコ様がなされる事はおできになれます 』

『 そうなんですか 』

武彦は何となく納得した。

『 イワレヒコさんの頭は眠っているけれど、身体は起きていますね? 』

ツクヨミは微笑んで、

『 ほぼそのとおりでございます。ですから、戦いくさになれば、貴方は鬼神の如き強さになります 』

『 …… 』

想像がつかない武彦だった。

『 むっ? 』

闇の果てに、火の手が見えて来た。ウカシの軍が攻めている村のようだ。

『 あれか…… 』

武彦はつい声に出して呟つぶやいてしまった。しかし、喧けんそつ噪にかき消され、兵には聞こえていなかった。

『 うおおお! 』

タジカラとスサノは、たった二人であったが、まさしく鬼神の如き勢いで戦っていた。戦力的には数十倍のはずであるが、ウカシが残して行った兵達は、烏合の衆でしかなかった。すでに敗走が始まっていた。

「やめよ、スサノ。こやつら、操られておる」

タジカラが一人の兵を捕まえて叫んだ。

「そついう事か」

スサノは剣を鞘に納め、馬を止めた。

「クシナダがおれば、たちどころに救えるはず」

スサノは水使いの魔導士である奥方を帰らせた事を悔やんだ。

「おお、我が軍の援軍じゃ」

タジカラがイワレヒコ軍に気づいた。スサノは振り返り、

「イワレヒコ殿？ 大事ないか？」

と心配そうにタジカラを見る。彼はイワレヒコの残虐さを知っている。戦場がより混乱するのではないかと危懼しているのだ。しかしタジカラは、

「大事ない。イワレヒコ様は、変わられた」

「そうか？」

それでも心配なスサノだった。

軍を離れたウカシは、ヒノモトの城から戻った伝令兵と合流していた。

「軍は散り散りになっている。もはや負け戦しぐ。それは良い。もう一手打たせてもらおう」

ウカシはまた狡猾な笑みを浮かべた。

ナガスネの部隊は、城までもう一息のところまで来ていた。

「ナガスネ様、お迎えに上がりました」

騎馬隊が現れた。ナガスネのよく知る老武将の部隊である。

「うむ。大儀である」

ナガスネは彼等を労うった。彼はその部隊の背後にある邪悪なものに気づいていない。

「どうぞ」

その老武将は樽を運んでいた。

「馬も皆も喉が渴いておりましょう。水をお持ち致しました。お召し上がりください」

「うむ」

ナガスネは馬を降り、兵達を休ませた。

「ささ、ナガスネ様」

その武将が差し出した椀をナガスネは受け取った。

「やはり、水はヒノモトのものに限るな」

老武将は齒を見せて笑った。

「そうでございます」

ナガスネが椀に口を付けようとした時、何かが椀を弾いた。

「む？」

ナガスネは飛ばされた椀を見てから、背後に目を向けた。そこには、険しい顔のクシナダがいた。

「何をする、クシナダ？ 血迷うたか？」

クシナダは樽を運んで来た老武将を睨んだままで、

「ナガスネ様、その者は悪しき水を持っております。口にしてはなりません」

「何？」

ナガスネがもう一度老武将の方を見ると、彼は齒軋りをしてこちらを睨んでいた。

「今一步のところで！」

ナガスネはその変貌に驚愕し、

「これは一体？」

「その者は、ウカシの手の者です。水は毒です」

クシナダの声に、ナガスネの部隊の兵達は驚いて椀を放り出した。「退けっ！」

彼等は素早くその場から立ち去ろうとしたが、クシナダの水の方が早かった。クシナダの放った水は鋭い刃のように襲いかかる。

「グエエエッ！」

ナガスネ暗殺部隊は、たちまちクシナダの水の攻撃で死んだ。

「もはや城に戻るも危うき事となりました」

クシナダが言った。ナガスネは眉間に皺を寄せて、

「そのようだな」

と呟いた。

クシナダの言う通りだった。ウカシはすでに城に帰還し、ホアカリに嘘の報告していた。

「ナガスネ様、謀反にございます。我らの問いかけを振り切り、ヤマトに攻め入りましてございます」

「何と……」

呆然としてウカシを見るホアカリ。未だにその話を信じられず、泣き続けるトミヤ。伯父の謀反を好機と捉え、隙を窺おうと策を巡らし始めるウマシ。その三人の反応を見て、ウカシは確信する。

（勝った。これで、ヒノモトは滅ぶ）

そしてウカシはニヤリとした。

二十三の章 ウカシの罫、ナガスネの嘆き

イワレヒコの身体に魂を宿された磐神武彦いわがみたけひこと言霊師ことだましのツクヨミは、ヤマトの国の將軍タジカラ、そしてヒノモトの国の魔劍士スサノと合流した。

ツクヨミは、周囲のヒノモトの兵達の妙な気に気づいた。

(これは、ヨモツの臭においだ。ならば！)

彼は言霊を使い、すぐそばにいる兵達の正気を取り戻した。

「む？」

タジカラは捕らえていた兵の顔つきが変わったのに気づいた。そしてイワレヒコを見た。

(ツクヨミが何かしたのか?)

タジカラ自身はウズメからツクヨミの事を聞いてはいたが、彼の気配を感じる事はできないので、ツクヨミがどこにいるのかはわからない。

「スサノ様！」

幾人かの兵がスサノに気づき、跪いた。

「おお、正気を取り戻したか。これは如何なる事だ？」

スサノはその兵達に尋ねた。

「ウカシ様の下さった水を頂いてから、何もわからなくなりました」
兵の言葉にスサノはタジカラと顔を見合わせた。

「やはりそうか」

イワレヒコが馬を降りて言った。タジカラとスサノ、そして正気を取り戻した兵達が彼に跪く。

「ウカシめ、ヨモツに通じておるわ」

イワレヒコはウカシが逃げ去った方角を睨みつけて言った。

「何と！」

スサノとタジカラは異口同音に叫んだ。正気を取り戻していない兵達は逃亡を始めており、軍は崩壊した。

「追う必要はない。やがてヨモツの水の力が切れる。さすれば元に戻る。」

イワレヒコが追いかけてよととするタジカラを止めた。

「はは！」

タジカラはイワレヒコに向き直った。イワレヒコはタジカラとスサノを見て、

「ウカシは城に戻ったようだ。ナガスネが危うき事になる。」

「ナガスネ様が？」

スサノがギクツとしてイワレヒコを見た。

「ナガスネが討たれてしまえば、ウカシの企み通りとなり、再びヨモツの悪しき心がオオヤシマを覆う。それは何としても防がねばならぬ。」

イワレヒコの言葉にスサノは、

「ならば一刻も早くナガスネ様の元へ。クシナダがおそばにありますが、ウカシの策に陛下が惑わされておいでだとすれば、危うき事この上なし。」

その言葉にイワレヒコは頷く。

「イワレヒコ様」

タジカラとスサノは、イワレヒコの命を待っている。イワレヒコは馬に跨りながら、

「ナガスネの元に参るぞ、タジカラ、スサノ」

「はは」

スサノは兵達には城を目指すように命じた。そしてイワレヒコ、タジカラ、スサノというオオヤシマ最強の三人衆が結成され、ナガスネ救出に向かった。

ウカシはホアカリの勅命を受け、再び軍を率いてナガスネ討伐に出発した。

（愚かな王の浅はかな考えでヒノモトは終わる。後はヤマトだが…）

彼はヤマトの軍師であるオモイの動きが気になっていた。

(彼奴もイザ様のご命令で動いているが、どうも好かぬ。この俺を出し抜こうとしているのが、ありありとわかる)

ウカシとオモイは、共にイザのために行動している仲間でありながら、互いを信用していなかった。いや、仲間とは思っていないのかも知れない。

ヒノモトの玉座の間では、妃トミヤが泣いていた。

「トミヤ……」

非情の決断をし、自分の義理の兄であるナガスネを討つ事をウカシに命じた国王ホアカリは、妃の泣いている姿を見て、何も言葉をかける事ができなかった。

「父上、私もウカシに同行し、伯父上を討ちとう存じます」

そのような時に、全く二人の心を考えない愚息のウマシが鎧兜を身に着けて、トミヤの心を逆撫するような事を言い出す。

「勝手に致せ」

ホアカリは息子の愚かさを嘆き、そう言い捨てた。

「はは！」

それを真に受け、ウマシは得々として出陣した。

「何という事だ。ヒノモトは滅ぶるのか？」

ホアカリは天を仰いだ。

ナガスネに同行しているスサノの奥方であるクシナダは、水を使つて辺りを探っていた。そして、ウカシの軍が近づいている事を知つた。

「ナガスネ様、ウカシがまたこちらに向かつております」

クシナダはナガスネの馬に自分の馬を寄せ、

「そうか。もはやこれまでのようだな」

さすがのナガスネも自分の愚かさに気づき、宿命を感じていた。

「いえ、まだ終わりではありません。我が夫スサノとヤマトのタジ

カラ殿がこちらに向かつております。それと、イワレヒコ様も」
クシナダは嬉しそうに続けた。

「何？」

スサノはともかく、タジカラとイワレヒコは敵ではないか？ ナ
ガスネはクシナダがおかしくなったのではないかと思った。

「スサノはタジカラと共にいるのか？」

「はい」

クシナダは微笑んでいる。ナガスネは眉をひそめ、

「それは如何なる事か？」

クシナダは真顔のなり、

「タジカラ殿は我らの味方。そして、イワレヒコ様も我らの味方に
ございます」

「何と！」

ナガスネは理由がわからなかった。

「ウカシはヨモツの力を借り、兵を操っております。ヤマトの村を
攻めたるも、その力によるものです。敵はウカシ。ヤマトでもウガ
ヤ様でもイワレヒコ様でもありません」

クシナダの言葉でナガスネはようやく全貌が理解できた。

「そうか。あの者、ヨモツと……。おのれ、ウカシめ」

ナガスネはヒノモトの城の方角を睨んで拳を握り締めた。そして
再びクシナダを見る。

「どちらが早くここに来るのか？」

クシナダは水を放つてから、

「ウカシが早いかも知れませぬ」

「そうか……」

ナガスネは歯ぎしりした。

「私は陛下の御ためと思い、戦つて来た。しかし、ウカシがヨモツ
に通じていたとなれば、それも怪しくなる。彼奴の進言で動いた事
もあつたのでな」

ナガスネは自嘲気味に言う。クシナダはナガスネの心を思い、胸

が痛んだが、

「もうそれは過ぎたる事です。今はこれからを考えるのが先でございます」

と頭を下げて進言した。ナガスネは苦笑いをして、

「そうだな。して、どうする、クシナダ？ このままでは我らはウカシの軍に蹴散らされるぞ」

「戻りましょう。ヒノモトの城から離れるのが良いでしょう」

クシナダは来た方角を見やった。

「それしかあるまい」

ナガスネは手綱を引き、

「一同、行く先はこちらじゃ。ついて参れ」

と方向転換した。クシナダがそれに続き、兵達が更に続く。

「少しでも足止めになれば」

クシナダは水を使って罨を仕掛けた。

『む？』

ツクヨミはクシナダの水の動きを感じた。

『どうしたんですか、ツクヨミさん？』

武彦がツクヨミの心の変化に気づいて尋ねる。ツクヨミは、

『ウカシがまた城を発ったようです。多勢です。ナガスネ様を討つつもりです』

『急がないといけませんよ』

武彦は焦った。しかしツクヨミは、

『ご安心を、たけひこ様。クシナダ殿が足止めをしてくれましょう』
初めて聞く名である。

『くしなださん？』

確か、同じ名字の中学の同級生がいた。その子も綺麗な子だった、
などと場違いな事を思ってしまう。

『スサノ殿の奥方です』

武彦はチラッとスサノを見て、

「その人、強いんですか？」

「ええ。この国の女性で三番目に強いと思います」

三番目？ 一番はあの英語の尼照先生に似ているオオヒルメさんで、二番目はアキツさんだから、その次か。それは凄いな。武彦はそう思い、クシナダがどんな女性なのか会ってみたくなった。

「大叔母様」

アキツはヒラサカの前で祝詞を唱えているオオヒルメに声をかけた。

「ナガスネの命が危ういか」

オオヒルメは振り返らずに言った。アキツは跪き、

「はい。ツクヨミ殿とたけひこ様がナガスネの元に向かっておりますが、ウカシはヨモツに通じる者です。安心できませぬ」

「そうだな。イザの命を強く受けている気配がする。ウカシという男、誠に怪しき者じゃ」

オオヒルメは目を閉じ、そう言った。

二十四の章 ウガヤの決断、武彦の動揺

オオヤシマの大きな揺れ。それは確実に闇の国ヨモツを引き寄せていた。

ヤマトの国では、国王ウガヤが軍師オモイとウガヤの書室で軍議を開いていた。オモイは前回の軍議で何者かの気配を感じたような気がし、今回は扉に仕掛けをし、誰かがこっそり入って来られないようにした。オモイはツクヨミが姿を消して入って来たのに気づいた訳ではないが、何かを感じ取ったのだ。そしてまた、嫡男であるイツセは軍議があるという知らせすら受けていない。オモイはイツセを危険と判断したのだ。無論その事はウガヤには伏せてある。ウガヤ自身も、イツセに失望しているので、彼がいない事を不思議とも思わない。

「イワレヒコ様はツクヨミに操られております。手立てを講じませぬと、取り返しのつかぬ事になるかも知れませぬ」

オモイはウガヤに進言した。ウガヤはイワレヒコとイツセに蔑ろないがしにされたという思い込みから、オモイだけを頼りにしていたため、「私が自ら出陣する。そして、イワレヒコを操るツクヨミを討つ」と宣言した。オモイは跪いて、

「ツクヨミはアマノイワトに潜んでおります。アマノイワトを攻め、ツクヨミを討ち取る事が何よりも先でございます」

「そうだな」

オモイはウガヤを操ってはいない。ウガヤ自身がオモイに全幅の信頼を寄せているため、今や彼はオモイの意のままに動く愚者と成り果てていた。

(愚かな王だ。やり易い)

オモイは頭を下げてニヤリとした。

イワレヒコ達は馬に鞭を入れ、夜の闇の中を疾走していた。

「間に合うか？」

スサノが呟く。

「間に合わせる！ そうでなければ、オオヤシマは滅びる」

イワレヒコが怒鳴った。それはツクヨミの叫びでもあった。彼の
言霊ことだまがスサノとタジカラに届き、二人を圧倒した。

（このまま、ヨモツの思い通りにさせてなるものか！）

ツクヨミはアキツの祈りと願いを感じ取っている。命に代えても、
ヨモツの思惑通りにはさせないつもりである。

「見えて来たぞ、スサノ。あれはナガスネの軍の松明たいまつの明かりだ」

タジカラが言った。前方に、ユラユラと揺れる小さな火が数多く
見える。

「おお、間に合ったか」

その時、スサノは奥方クシナダの無事を感じた。

「クシナダがウカシに罫を仕掛けたようだ。足止めをしたらしいぞ」

「そうか。さすが、クシナダ殿だ」

タジカラが感心して言った。

「先に行くぞ」

イワレヒコが不意に言った。タジカラとスサノは、

「え？」

と彼を見た。イワレヒコは馬ごと宙を舞い、まるで羽が生えたかの
如くそのまま飛翔した。

「っ、ツクヨミさん？」

これには武彦も慌てた。タジカラとスサノは口を開けたままでそ
れを見上げている。

「大丈夫なんですか？ 怖いんですけど」

武彦は目が回りそうになり、手綱をしっかりと握りしめた。

「ご心配召されますな。何も大事ありません」

ツクヨミの言葉に武彦はホツとした。

「最初からこうすれば良かったですね」

武彦は思ったままを口にしていたのだが、
『申し訳ありません。この術、そう長くは保ちませぬので』
武彦は軽はずみな事を言ってしまったと後悔した。

『そうなんですか』

ツクヨミの言葉通りやがて馬はゆっくりと地上に戻り、また普通に走り出した。しかし、相当距離を稼げたようで、ナガスネ軍はもう目の前に見えていた。

「よーし」

武彦は周りに誰もいないので安心して声を出した。

「もう少しですね、ツクヨミさん」

「はい、武彦様」

ツクヨミはそう答えたが、ナガスネ討伐を命じられて城を出たウカシの軍の気配も感じていた。

「我らと然程たいかく変わらぬ時で、ウカシの軍がナガスネ様に追いつきま
す。激しい戦いくさになるかも知れませぬ」

「ええ？」

武彦はギクツとした。

（戦……？ どうしよう？）

ここまで来て、急に恐怖心が芽生える武彦であった。

その頃、ヤマトの城を目指していたタジカラの奥方であるウズメは、周囲に召喚していた八百万やおよろずの神々の言葉を聞いた。

「陛下御自らご出陣？ 如何なる事か？」

そしてウズメはウガヤの目指す先を知り、驚愕した。

「何と！ アマノイワトを攻むる？ 何という事を！」

彼女は進行方向を変え、アマノイワトへの近道に入った。丈の高
い草の生い茂る藪の中である。

（何としても、陛下より先にアマノイワトへ！）

ウズメは舌を嚙まないように気をつけながら、馬を急がせた。

ウガヤはイツセに何も言わず、オモイと共に出陣した。国王直轄軍の大半で編成した大部隊だ。総勢三万。そんな大軍がアマノイワトに押し寄せれば、イワトは一瞬で攻め滅ぼされてしまう。

「ツクヨミばかりではない。オオヒルメもアキツも同罪。皆滅ぼす」
ウガヤはもはや正気を失っているようだった。オモイはそんなウガヤを見て、

（ヤマトは滅ぶ。イザ様のお心のままに）

イツセは部屋に籠っていたが、何やら胸騒ぎがして廊下に出た。

「何が起こっているのか？」

彼は不審に思い、そのまま駆け出して城の外に行った。

「何？」

彼は厩しほに馬が一頭もない事に気づき、馬番に尋ねた。

「馬がおらぬようだ、イワレヒコの他に誰か出立したか？」

「国王陛下御自らご出立でございます」

馬番は跪いて答えた。

「何と！」

イツセは仰天した。彼は嫌な予感がして、

「オモイはどうした？」

「オモイ殿も同行しております」

オモイが同行している事を知り、イツセは呆然とした。

（如何なる事か？ この私に何も仰らず、オモイをお連れになるとは……）

「私の馬を引け。出立する」

イツセがそう命じると、馬番は、

「イツセ様には、お留守居役をとの仰せにございます」と頭を下げた。

「何イ！？」

さすがに温厚なイツセも、あまりにも自分が蚊帳の外に置かれている事を知り、激怒した。

「オモイめ、父上をどうするつもりか？」
イツセは歯ぎしりし、城に戻った。

アキツは巨大な悪意がアマノイウトに近づいているのを感じ、外に出た。

「まさか……」

彼女はウガヤの出陣を感じた。もはやウガヤから発するのは悪意のみである。アキツは彼のその思慮の浅さに落胆した。元々ウガヤは短絡的で直情的な人間であったが、ここ数日でそれは更に酷くなっていた。アキツが落胆するのも無理はないのだ。

「ウガヤ殿が自らここに向かっているのか？」

そして同時にオモイの存在も感じた。アキツはウガヤよりオモイの方が気になっている。

「あの者、何を企む？ 只の異国人ではない……」

アキツの額に汗が滲んだ。その一方で、こちらに急いでいるウズメの気配も感じた。

「ウズメか？ 何としても、先にこちらに……」

アキツはウズメの到着を祈った。

ナガスネ軍もイワレヒコの接近を察知していた。彼らの部隊は、広い平原を進んでいた。周りには民の家はなく、ウカシの軍を迎え討つには良い場所である。

「イワレヒコ様が？」

ナガスネはクシナダの水の報告を受けて尋ねた。クシナダは頷き、「はい。刹那の差ではありませんが、イワレヒコ様の方がお早いお着きでございます」

「そうか」

ナガスネは後方から迫るウカシ軍の明かりを見やった。

「ウカシめ」

彼はウカシだけは何としても自分の手で仕留めようと決意した。

ウカシも、ナガスネ軍に迫るイワレヒコを感じていた。

(おのれ、イワレヒコめ。貴様らの思い通りにはさせぬぞ)

彼はオモイがアマノイワト攻めに出陣した事を知らない。

(オモイめ、おめおめとイワレヒコを出してしまっておつて。やはり彼奴は俺とは組まぬつもりか?)

ウカシはオモイとの共闘を見限った。しかし、オモイは最初から共闘など考えていなかったのだ。

ヤマトの王女であるイスズとその母タマヨリは、イスズの部屋で身体を寄せ合っていた。二人は確実にウガヤの悪意に影響されていた。

「母上、オオヤシマは如何なる道を進むのでしょうか?」

イスズは涙に濡れる目をタマヨリに向けた。タマヨリはイスズの頭を撫でながら、

「わかりませぬ。我らには如何様にもできぬ事なのです」

タマヨリも目を潤ませている。

(たけひこ様、オオヤシマをお救いください)

イスズは心の中で祈った。涙が彼女の頬を伝う。

(そして、私は貴方様のお子を産みとう存じます)

彼女は武彦の無事を願った。

『何!?!』

ツクヨミの反応を武彦が感じ、

『どうしたんですか、ツクヨミさん?』

『ウガヤ王がアマノイワトに向かっています。イワトを攻むるおつもりのおつです』

その言葉に武彦は仰天した。

『ええっ!?!』

アマノイワトには、幼馴染みである都坂亜希みやこがみに生き写しのアキツ

がいる。武彦は動揺した。ツクヨミも武彦の動揺を感じ取り、
『ウカシの軍を討ち、すぐにイワトに向かわねばなりません』
『はい』

武彦は、前方に見えて来ているウカシ軍の松明の明かりを睨んだ。

そしてこの戦いがオオヤシマに大きなうねりを作り出す事を、武彦だけでなくツクヨミすら気づいていなかった。ヨモツの女王イザの深謀遠慮が動き出そうとしていたのである。

二十五の章 ウズメの決心、ツクヨミの閃き

二十一世紀の日本の高校生である磐神武彦いわがみたけひこの魂を降ろされたヤマトの国の王子イワレヒコは、ヒノモトの国の將軍ナガスネの部隊に合流した。

「間に合って何よりであった」

あまりに雰囲気の違いイワレヒコに、ナガスネは戸惑っていた。

（あの非道さが微塵も感じられぬ。如何なる事か？）

「話は後だ、ナガスネ。まずはウカシを蹴散らすぞ」

イワレヒコは今にも矢継ぎ早に問いかけを始めそうな顔つきのナガスネの機先を制した。

「はは」

つい頭くちかぶを垂れる自分に驚くナガスネである。イワレヒコは神々しさすら漂なびわせていたのだ。ナガスネがそう感じたのは、ツクヨミの言霊ことばたまのせいではあったが。

『ツクヨミさん、どうしよう？』

目の前に迫るウカシ軍を見て、武彦は怖おそくなっていた。身体が震え出しそうなのだ。

『ご案じ召めされますな。我が言霊がお導まき致します故』

ツクヨミの言霊がイワレヒコを包む。

『ああ！』

武彦は、自分がとても強くなったような気がした。現代で言う「自己暗示」であろう。

「ナガスネ、ついて参れ！」

イワレヒコは馬に鞭を入れ、ウカシ軍に突進する。ウカシ軍は水使いのクシナダが仕掛けた罠で幾人かの兵を失ったが、その大半はまだ健在である。あまりにも無謀な戦いなのだ。

「怯おそむな！ 我が軍は敵の数十倍ぞ！ 叩たたき伏せよ！」

ウカシは相変わらず陣の最後方から命令している。どこまでも姑

息で卑怯な男である。

「ウカシめ、己おのれは大事なところで！ 許さぬ！」

スサノが剣を振り上げて炎を巻き上げ、凄まじい勢いでウカシのいる場所へと馬を駆った。その気迫に近くにいたウカシの兵は後退おとすまってしまった。

「お館様やかたさま、危のうございます！」

クシナダが慌てて水の陣を張り、夫スサノを追った。

「私も遅れは取らぬ！」

タジカラも大声で叫び、イワレヒコを追う。

「うおおお！」

イワレヒコの強さは神懸っていた。イワレヒコ本来の強さに加え、ツクヨミの言霊が補助しているため、まさに天下無双の勢いである。その上、ヒノモト軍の兵達は、全員ヨモツの水を飲まされているので、ウカシの命令がないと、只の木偶でくの坊同然ぼうなのだ。

「おのれえ！」

ウカシは迫り来るスサノから逃げるため、馬に跨ると一目散に戦場から離れた。

「逃さぬ！」

そのウカシの行動に更に怒りを増幅させたスサノが鬼神の如き形相で追いかける。

「お館様！」

クシナダの水の陣は、スサノの放つ気のせいについて行けなくなっていた。

「むっ？」

ツクヨミは逃げるウカシから奇妙な気を感じていた。

「どうしたんですか、ツクヨミさん？」

それに気づいた武彦が話しかける。

「ウカシの気が妙です。ヨモツの気とは違う……。これは？」

ツクヨミは更に探ろうとしたが、できなかった。スサノがウカシに追いつき、その首を刎はねたのだ。

「ウカシを討ち取ったぞ！」

スサノが大声で叫んだ。その瞬間だった。

「何！？」

首を失って馬から転げ落ちたウカシの胴体から黒い炎が噴き出したのだ。それはまるで漆黒の蛇のようにうねうねと広がり、スサノに迫った。

「お館様！」

クシナダが水の壁でスサノを防御し、黒い炎から守った。

「今のは？」

スサノは馬を反転させ、ウカシの胴体から離れた。

「何事か！？」

ナガスネも馬を止め、ウカシの異変に目を見張った。

「むむ？」

タジカラも眉をひそめ、ウカシを見ている。

「皆退くのだ！ それはヨモツの罠。その黒火くろびに触れば、死人しびとになるぞ！」

イワレヒコが叫んだ。

（ウカシはヨモツの黒火を運ばされておったのか……。何と惨あはい事を！）

ツクヨミはあまりにも非情なヨモツの戦略に怒りを感じた。

スサノとクシナダはナガスネを守るように黒火から離れた。タジ

カラもイワレヒコに付き従い、遠巻きに火を見ている。

「兵達を救う事はできぬのか？」

黒火に取り込まれるヒノモトの兵を見て、ナガスネが呟く。

「兵共はウカシがヨモツの水を飲ませておる。如何様にもならぬ」

イワレヒコが齒軋りして言った。齒軋りは武彦の心の現れだ。

（何にもできないなんて……）

「あの火、ウズメさまでしたら、消せますものを……」

クシナダが悔しそうに言った。自分の水では消せないのがもどかしいのだ。タジカラも頷き、

「まさに……。ウズメがおれば……」

ウズメなら神降ろしで黒火を浄化できる。しかしそのような事を思ってみても仕方のない事である。

そのウズメはヤマトのウガヤ王の軍とオオヤシマの北の外れの洞窟アマノイワトへの競争をしていた。

(何としても、オオヒルメ様とアキツ様だけはお守りせねば！)

彼女は馬が潰れても良いと思いつながら、イワトを目指していた。

ヒノモトの王子であるウマシは、ウカシが死に、軍が壊滅し始めた事も知らず、自分の側近達を伴い、勝ち戦いくさに参加すべく、ゆっくりと進軍していた。彼がいるのは軍の最後方だ。

「先にウカシの軍に戦わせ、一番の手柄はこちらで頂く」
どこまでも卑屈な男である。

「ウマシ様、ウカシ殿の軍勢が、敗走しております」

老参謀が告げた。ウマシはまさに仰天した。彼にとって思ってもみない展開である。

「何と！ 如何なる事か？」

老参謀は首を横に振り、

「わかりませぬ。敵軍は、イワレヒコ様、そしてタジカラ殿としかわかっておりませぬ」

ウマシは自分の実力を把握していない男であるが、イワレヒコとタジカラが揃っているのを聞いては、負け戦になると考えた。臆病が鎧を着ているような性格のウマシは即刻撤退を決意した。

「引き揚げじゃ！ 城に戻るぞ」

ウマシは慌てて撤退を始める。最後方であるから、逃げるのは誰よりも早い。実に情けない武将である。

「あのようなお子が跡目では、ヒノモトは滅ぶぞ」

あまりにも不甲斐ないウカシの姿を見て、参謀役の老兵はそう呟いた。

その老参謀があらかじめ放っていた伝令兵がヒノモトの城に到着していた。

「ウカシ様、討ち死ににございます」

謁見の間でその報告を聞き、ホアカリ王はある意味ホツとして妃トミヤを見た。トミヤも兄のナガスネが無事なのを知ってホツとしていた。彼女はホアカリを見て、

「陛下、もはやこれ以上の戦は意味がございませぬ。すぐにでも出立し、ウガヤ様とお会いなさいませ」

「そうだな」

ホアカリは決意し、出立の準備に取りかかる事にした。

「これでようやくオオヤシマに安寧あんねいが訪れます……」

トミヤは涙ぐんで呟いた。

また、ウカシ軍の動きを探っていたウガヤ軍の斥候せこうも、アマノイワトに進軍中のウガヤに報告をしていた。

「ウカシが討ち死にな？」

ウガヤは軍師オモイを見た。オモイは頷き、

「ヒノモトは滅びの道を歩み始めたようです。ツクヨミを討ち取りし後は、ヒノモトを滅ぼしましょう」

「うむ」

ウガヤもニヤリとして応じる。

(ウカシめ、しくじりおつたな。やはり、ツキはこの私にある)

オモイはウガヤに見えぬようにニツと笑った。彼はツクヨミがイワトにいない事に気づいている。それなのにウガヤに進軍をやめさせない。彼の本当の目的は、アマノイワトそのものだったのだ。

「アマノイワトの前に、ウズメ殿がおります」

先発の兵が告げた。ウガヤはキツとして、

「ウズメめ、一体どこにおったのか？」

と前方を睨み据えた。

「間に合つて良うございました」

ウズメは息を弾ませたまま跪いてアキツに言った。馬はイワトの前で倒れてしまつてゐる。アキツは微笑んで、

「ありがとう、ウズメ。貴女にとってウガヤ殿は主君。これは謀反むほんであると言つのに」

「いえ、私の仕えしは、オオヒルメ様、そしてアキツ様にございませぬ。ウガヤ様は、私の仕える方ではありません」

ウズメの言葉にアキツは感激して涙を流した。ウズメは本来は神そのものに仕えると言われている舞踏師の家系である。彼女にとつての主君とは、常にワの国の王族なのだ。

「先程、我が夫タジカラに使いを送りました。もうすぐ千万の味方よりも頼りになる方々が参りましょう」

ウズメはニツコリとして告げる。アキツは微笑み返して、

「ええ」

アキツはツクヨミからの言霊で、イワレヒコとタジカラ、そしてスサノとクシナダが一緒なのを知らされていた。彼女自身気づいていなかったが、アキツは確実にツクヨミを男として慕い始めていた。「ツクヨミ殿」

ウズメはアキツがそう呟いたのを聞いたが、聞こえないふりをした。

イワレヒコ達は、ヨモツの黒火が大きくなつて行くのを見ていた。「このまま収まらぬとなれば、オオヤシマは如何なる事になるのか？」

タジカラは眉間に皺を寄せて黒火を見上げて呟く。

（タジカラ様の仰る通りだ。この黒火を抑えぬうちは、アマノイワトに向かう事もできぬ）

さすがのツクヨミにも、この黒火は手の施しようがなかった。ヨモツのものには、言霊は通じないのである。

「む？」

そこへウズメの放った八百万やちみんの神が到着した。タジカラがそれを感じ、

「ウズメがアマノイワトにあります。どうやら、陛下がイワト攻めをされるご様子です」

イワレヒコはその言葉に反応して、

「それは承知。しかし、この火を始末せぬ限り、ここから離るる事はできぬ」

クシナダも水を使ってみるが、やはり黒火は消せなかった。逆に炎の勢いを増す形になってしまう。

「この火、水では消せぬ。如何致す、タジカラ？」

スサノが尋ねた。タジカラはそれには答えず、イワレヒコを見る。ナガスネもイワレヒコを見ている。武彦は一同の期待が自分に集まっているのを感じた。

「ツクヨミさん、言霊で火を消せないんですか？」

武彦が尋ねた。ツクヨミは、

「できません。この世ならざりしものは、言霊では如何様にもなりません故」

「そうですね。どこかに飛ばせればいいのになあ」

武彦の何気ないその一言が、ツクヨミに閃きを与えた。

「そうですね。それは良い考えでございます、たけひこ様」

「そうですねですか？」

武彦はツクヨミの応答に面食らってしまった。

二十六の章 イザの悪意、ツクヨミの叫び

イワレヒコ一行の前で勢いを増して燃え広がる黒き炎。何もかも飲み込んでしまいそうな漆黒。それはヨモツの火である。普通の水では消せぬばかりか、勢いを増させてしまふ。そして掠められただけで、人は死人しひとと成り果てる。

「皆の者、離れよ。今から私が、この火を飛ばす」

イワレヒコが剣を構えた。

「如何いかなさるおつもりです、イワレヒコ様？」

タジカラが眉をひそめて尋ねた。対処のしようがないと思えたからだ。イワレヒコは炎を見据えたままで、

「この炎をウズメが元に飛ばす。ウズメに鎮しずめてもらうのだ」

「何と!？」

タジカラはイワレヒコの途方もない作戦に啞然とした。ナガスネやスサノ達も驚愕している。

「そのような事、おできになるのですか、イワレヒコ様？」

スサノが恐る恐る言った。イワレヒコはチラッとタジカラ達を見て、

「私はできぬ事は言わぬ。見ていよ」

と言い放つと、ブワンと剣を振り回した。

『たけひこ様、先ほどの手筈通りに参ります』

ツクヨミが声をかける。

『わかりました、ツクヨミさん』

武彦は剣を握る手に力を込めた。

「我ヨモツの焰ほむを舞いに舞わせて届かせん！」

ツクヨミの放った言霊ことたまがヨモツの黒い炎にぶつかった。言霊は炎の周囲の空気を捕らえ、炎を宙に浮かばせた。武彦の言葉でツクヨミが思いついた秘策である。

「いざ行かん！」

イワレヒコの声に合わせて、炎は遙か彼方へと飛び去った。

「おおお！」

ナガスネ、スサノ、タジカラが、異口同音に叫んだ。クシナダはすっかり驚き、天を仰いだままである。

（す、凄い……。何たるお力）

クシナダはイワレヒコに異界人の魂が降ろされている事を知らないで、イワレヒコの秘儀だと思っていた。

『そして、ウズメ殿にお伝え致します』

ツクヨミは更に言伝の言霊をウズメに放った。

『やりましたね、ツクヨミさん』

武彦はホツとしたが、ツクヨミはまだ気を抜いていない。

『まだです。ウガヤ様が進軍、お止めせねばなりません』

武彦はハツとして、

『ああ、そうでした！』

黒火が飛び去るのを確認し、イワレヒコは馬に跨った。

「さて、時が惜しい。行くぞ、皆の者！ 父上をお止めせねばならぬ！」

「はは！」

イワレヒコ、タジカラ、スサノに加えて、クシナダ、ナガスネと、オオヤシマの名立たる武将が一斉に馬を走らせ始めた。

闇。一切の光が入り込まない世界。そこがヨモツ。イザ女王の支配する国だ。もちろん、彼らはそんな闇の中でも眼は見える。だから何も不自由はない。

「イザ様」

ヨモツの国の兵であるシコメがイザのいるヨモツ最深部の玉座の間に赴き、跪いて報告する。シコメには性別はない。姿は半身が腐りかけた女性に見える。鎧は身に着けておらず、薄汚れたような色合いの衣を纏まとっているだけである。

「如何した？」

玉座に座している女王イザ。その姿は美しい巫女。しかし、着ている服は全て漆黒。頭を飾る王冠すら黒。彼女に瞳はなく、眼は只黒い。黒く長い髪は足元にまで及ぶ。

「ウカシめがしくじりました。如何なさいますか？」

シコメの言葉にイザはニヤリとし、

「大事なし。まだ我には駒あり」

「左様で」

シコメは額ずいて応じた。

その頃ウズメはツクヨミからの言伝の言霊を受け取っていた。

(何と、ヨモツの焰?)

彼女はすぐさま、八百万やおよびの神の中から、海神わたつみを召喚し、黒火を待ち構えた。

「ウズメ、如何したのですか？」

ウガヤ軍の進撃を見ていたアキツはウズメが召喚した海神に気づいて尋ねる。

「ツクヨミ殿が、ヨモツの?をこちらに……」

ウズメの言葉にアキツはハツとした。彼女はそれを聞いた途端、ヨモツの策略が見えた。

「ウカシがヨモツの?を運んでいたのというのか？」

アキツは拳を握りしめ、唇を震わせる。

「そのようです」

ウズメは悲しそうに答えた。

「何という事を……。ヨモツ、誠に許し難し！」

アキツは声を荒げた。そして、

「ウガヤ殿もそこまで参っておる。ウズメ、巻き添えにしてすまぬ」と頭を下げた。ウズメはそれに驚いてしまった。ワの王家の方々が、私のような者に御髪おみくしをお下げになるとは……。ウズメは感激して跪いた。

「恐れ多きお言葉にございます、アキツ様。私は才オヒルメ様とア

キツ様の御ためならば、いつでもこの命、差し出す覚悟です」

ウズメの顔は真剣そのものである。アキツは目を潤ませて膝を着き、

「ありがとう、ウズメ」

とウズメの手を握りしめた。

ウガヤの軍は遂にアマノイワトの前に到着した。

「如何致す、オモイ？」

ウガヤは馬上から軍師オモイに尋ねた。オモイは跪き、

「イワトは大きな洞窟にございます。そしてその奥はヒラサカ、更にその奥はヨモツに通じております。焼き払うが宜しいかと存じます」

その言葉に周囲にいる兵達は顔を引きつらせた。彼らにとっては、まだアマノイワトは聖なる場所なのだ。

「そうか」

しかし、ウガヤはニヤリとした。彼にはオオヒルメもアキツも、もはやどうでも良い存在なのだ。ヒノモトも軍が崩壊し、返す刀で攻め入れれば、たちどころに滅ぶ。すでにオオヤシマの支配者は自分そう確信したウガヤは、その心に鬼が棲み始めていた。

「火矢を放て。オオヒルメ、アキツ諸共、ツクヨミを焼き殺してしまおうのだ！」

ウガヤがそう命じた時、異変が起こった。空の星が突然見えなくなり、禍々しい気が辺りに漂い始めたのだ。ウガヤ軍の兵達は混乱し、右往左往した。やがて星を隠していた正体が明らかになった。空からヨモツの黒火が降りて来たのだ。

「何事ぞ！？」

ウガヤはその妖気を孕む黒い炎を見て狼狽えた。オモイも仰天していた。

（これはヨモツの?? 何故それが天から?）

さすがの彼にも何が起こったのかすぐにはわからなかった。

「おお！」

ヨモツの？が進軍するウガヤ軍とイワトの間に降り、その行く手を阻んだのを見て、アキツとウズメは思わずそう叫んだ。

「お見事です、ツクヨミ殿は。ウガヤ様を止めました」

「ええ」

ウズメは感動している。アキツはツクヨミの力に驚嘆しながらも、感謝していた。

（ありがとうございます、ツクヨミ殿）

黒火は周囲を侵食し始める。土は腐り、草は枯れ、虫は砂のように崩れ去る。

「さて、ここより先は進ませぬ！」

ウズメが降臨させた海神がヨモツの黒火を聖なる水で押し留めて浄化して行く。そのため、黒火は海神を恐れるかのようにウガヤ軍の方へと広がり始めた。

「ええい、何じゃ、この火は！？ 早う何とかせぬか！」

ウガヤは黒火の恐ろしさを知らないため、兵達に消火命令を出した。

「陛下、これはヨモツの？にございます。人には消せませぬ」

オモイが慌てて進言した。目先の事で精一杯のウガヤは、異国人のオモイが何故そのなにゆえような事を知っているのかと疑問にも思わない。

（冗談ではない。この私程の者が、ヨモツの？に焼かれて死ぬるなど、ご免被る）

彼は黒火の真の恐ろしさをよく知っているので、真剣だった。ウガヤが勝手に黒火に焼かれるのは構わないが、これから自分の手足として使うつもりの兵まで全滅しては元も子もないからだ。

「一度お退きくださいませ」

オモイはウガヤの前に立ちただかるように言った。

「うつうつ……」

ウガヤは唇を噛み、悔しそうにイワトを睨んでいたが、
「全軍、退け！」

と命じた。ウガヤ軍はヨモツの火に追い立てられるように後退し始めた。

「ウガヤ様の兵が、立ち往生しておりますな」

水に調べさせたクシナダが告げた。イワレヒコ達は高台に出てその先を眺めているところだ。

「そうか。ヨモツの？が父上を止めたようだな」

イワレヒコが言った。タジカラはチラツとイワレヒコを見た。

（あれもまた、ツクヨミの力なのか？ 誠に恐るべき男よ）

ツクヨミが味方で良かったとつくづく思うタジカラである。

「イワト攻めは何としても止めねばならぬ。イワトが攻められれば、ヒラサカの封が解け、ヨモツが雪崩を打ってオオヤシマを攻むる事となるう」

イワレヒコはそう言うと、また馬を走らせた。タジカラ、ナガスネ、スサノ、クシナダの順でそれに続く。

ヨモツの女王イザはウガヤ軍とイワレヒコ達が接近している事を知った。

「時は満ちる。オオヤシマは闇に染まる」

彼女はニツと笑って歩き出し、闇の向こうに消えた。

「ぬっ？」

ヒラサカで祈り続けていたオオヒルメが異変に気づいた。

「これは如何なる事か？ 闇がヒラサカの向こうだけではなく、イワトの外からも迫っており……」

オオヒルメの額を汗が伝う。

「イザめ、何を企む……」

彼女は唇を噛み、身体を震わせた。

二十七の章 オオヒルメの思い、ツクヨミの焦り

アキツは、オオヒルメの心の揺れに気づき、アマノイワトの奥を見た。

「大叔母様！」

オオヒルメの命が危うい。アキツは顔を引きつらせてオオヒルメの居場所へと向かう。

「ここを頼みます、ウズメ」

「は、はい」

ウズメはアキツの慌てように驚いていた。

(やはり、ワの国の王家の方々は、私達にはわからぬ心の通い合いがあらせられるのか……)

ウズメは退却して行くヤマトの国のウガヤ王の軍を見ながら思った。

「陛下、イワレヒコ様の馬がこちらに向っております」

伝令兵の報告に、ウガヤは蒼ざめた。

「イワレヒコだと!？」

彼奴はこの父を弑するために参ったのか？ 兄であるヒノモトの王のホアカリを殺そうと考えているウガヤには、そのような発想しかない。

「イワレヒコ様はツクヨミに操られておいです。どのようなお話も、ご承諾なさいますな」

オモイが小声で提言した。

「無論じゃ」

ウガヤは不愉快そうに言った。

「父上の軍か？」

イワレヒコが呟いた。タジカラが頷き、

「そのようです。何やらこちらにお向かいのようですが……」
と訝しそうに言った。スサノが、

「もはや、我らをお討ちになるつもりでは？」

「まさか！」

クシナダが驚く。するとナガスネが、

「あり得る。ウガヤ様に同行しているのはオモイ。彼奴は何を考えているのかわからぬ男よ。どのような企みを持っているのか」

「いろいろと思いを巡らせてみても何もならぬ。父上にお会いし、この戦、止めねばならぬのだ」

イワレヒコは各自の推測を打ち消し、馬を進めた。タジカラとスサノは顔を見合わせてそれに続き、クシナダはナガスネに目配せしてそれに続いた。

その頃、ホアカリは嫡男ウマシを引き連れ、城を出立していた。

「ウガヤよ、早まった事を為すでないぞ……」

兄はその激しき気性の弟を心配していた。その弟が自分を殺そうとしているのも知らずに。

「オオヤシマはワの国の王家を戴いてこそ栄えるのだ。我らが頂きに立つ事はならぬのだ」

ホアカリは自分に言い聞かせるように呟いた。

（父上はお心が脆弱過ぎる。やはりここは私が……）

身の程を知らぬウマシは、ホアカリの心を理解する事はなかった。

オモイはイワレヒコの一行にナガスネが同行している事に気づいた。

（そうか。なるほど。そういう事か……）

彼はニヤリとした。

（つまりは、ウカシは始めからイザ様の捨て駒であったという事よ。私こそが、イザ様の真の使い。このオオヤシマを闇に染めるための先駆け）

オモイは得意の絶頂であった。

「陛下、イワレヒコ様のそばにナガスネがおります。あの者こそ、此度の戦の元にございます」

オモイは囁くようにウガヤに言った。ウガヤは前方を睨みつけ、「そうであったな。ナガスネが怪しき事をせねば、我が兄ホアカリも戦を起こさなんだ。全てこれ、あの者に発するものである」

「はい」

オモイは応じながら、

（さて。いよいよ、このオオヤシマが闇に埋もれる時が来たぞ）
と思い、低い声で笑った。

オオヤシマの地下に広がる闇の国ヨモツでは、女王イザが兵を集結させていた。

「時は満ちたり。これより我らはヒラサカを越え、オオヤシマを統べるために進軍する。我らこそが、オオヤシマの主である事を示す時が来たのじゃ」

イザはその真つ黒な目を見開き、兵達を鼓舞した。ヨモツ中に凄まじい熱気が巻き起こっていた。

「おおーっ！」

兵達が雄叫びを上げる。皆、顔の半分が腐り落ちている。死人である。

「まずはうぬらが行くが良い、シコメよ」

イザは、歩兵軍団の指揮を執るシコメに命じた。

「はは！」

シコメはその腐りかけた身体で跪き、答えた。

オモイは、その視界にナガスネを捉えている。

（イザ様、今扉を開きますぞ）

オモイはニヤリとし、妙な言葉を唱え始めた。いや、それが言葉であったのかもわからない。

「む？」

ウガヤは、オモイの馬が止まったのに気づき、オモイを見た。

「如何いかがした、オモイ？」

しかしオモイは答えない。彼が何かを喋っているのは、ウガヤの位置からもわかった。

「オモイ！」

返答をしないオモイに苛立ち、ウガヤは馬を近づけた。その時である。

「ぬお！？」

ウガヤにはオモイから何かが放たれたように見えた。いや、そう見ただけで、実際には何も放たれていない。オモイが放ったのは、ヨモツの世界で言う「鍵かぎ」であった。

「陛下、もうしばしお待ちを」

オモイは振り返って、意味ありげにそう言った。何の事かわからないウガヤは憤然とし、

「如何なる事か？」

と尋ねたが、オモイは笑っているだけで何も答えない。

「何！？」

ツクヨミは前方から迫る妖気に気づいた。その妖気からはオモイの悪意が感じられた。

「オモイが何事か仕掛けたのか？」

ツクヨミは言霊ことたまでそれを防ごうとしたが、妖気は言霊を弾き飛ばしてしまった。

「どうしたんですか、ツクヨミさん？」

武彦がツクヨミの動揺に気づいて尋ねた。

「ヤマトの軍師であるオモイが、妖気を放ちました。防ごうとしましたが、弾かれました」

「え？」

次の瞬間、オモイの放った「鍵」がナガスネを襲う。ナガスネは

たちまち妖気に身を包まれてしまった。

「ぐおお!？」

突然ナガスネが苦しみ出す。スサノとクシナダがそれを見て慌てた。

「ナガスネ様、如何なさいましたか？」

二人は何が起こったのかわからず、苦しむナガスネに声をかける。

『そういう事か』

ツクヨミはオモイの策に乗せられた事に気づき、齒軋りする。

「ふおおお!」

ナガスネの悶絶は更に酷くなり、彼は馬から転げ落ちた。そして地面を転げ回った。

「ナガスネ様!」

スサノとクシナダが馬を降り、ナガスネに駆け寄る。

「ぬう?」

タジカラもナガスネの異変に驚愕し、馬を戻した。

「妖気か?」

彼はナガスネの悶絶の原因に気づき、

「ウズメーッ!」

と奥方に救いを求めた。

そのウズメは、ヨモツの黒火を押し留める事で手一杯になっていた。遠のいていた炎が押し返して来たのだ。

(如何なる事か? 先程より焰ほむの勢いが増しておる……)

確実に炎が大きくなって来ている。それは、ヨモツの接近を示していた。

「オオヒルメ様、アキツ様!」

ウズメはアマノイワトの奥にいる二人の安否が気になった。

ツクヨミは妖気をナガスネから追い出そうとしたが、言霊は弾かれてしまい、成す術がない。

「ナガスネ様！」

クシナダも水で浄化しようとするが、水がナガスネに近づけない。いくら放つても、その直前で弾けてしまう。

「妖気が尋常ではありませぬ。このままでは……」

クシナダの目に涙が浮かべてスサノを見る。

「泣くな、クシナダ！ 考えるのだ！」

そう言うスサノもすでに泣いていた。二人共、ナガスネを助けられない事を悟っているのだ。しかし、それを認めたくない。

「ぐおおおお！」

ナガスネは地面をのた打ち回っている。あまりにも凄惨な光景に武彦は息を呑んだ。

『ツクヨミさん』

それでも武彦は何とかできないかと思い、ツクヨミに声をかけた。ツクヨミは、

『何もできませぬ。私は無力です』

と悔しそうに答えた。

(何故だ？ 何故言霊を弾く？ まさか……)

ツクヨミは謎の答えに至った。もしそれが真実であれば、ナガスネから離れないとここにいる全員が死ぬ事になる。

「くー！」

しかし、ツクヨミより早く、「鍵」が反応した。

「ぶおおおお！」

ナガスネの全身から漆黒の妖気が噴き出し、彼は絶命した。そしてその妖気はそばにいたクシナダとスサノに襲いかかった。二人は水と炎でそれを防ぎ、難を逃れた。続いて妖気はイワレヒコとタジカラに襲いかかった。

「は！」

クシナダが水を使い、タジカラとイワレヒコを助けた。妖気はそれでもなお、二人を、いや、イワレヒコを襲った。

「うわ！」

イワレヒコは妖気を食らってしまい、遙か後方まで飛ばされて倒れた。

「ああ！」

武彦の魂はその衝撃でイワレヒコの身体から弾き飛ばされてしまった。

「たけひこ様！」

ツクヨミはつい声に出して叫んでしまった。

「わあああ！」

武彦の魂はそのままオオヤシマから消えた。

「うつつうつつ！」

イワレヒコは本来であれば武彦の魂が抜けてしまったのであるから、動かなくなるはずだった。

「何と！」

ツクヨミは自分のかけた封印が解けてしまっている事に気づいた。

「ぐああああ！」

イワレヒコは叫び、走り出した。彼はヤマトの軍に突っ込むと、兵を次々に剣で斬り殺し、ウガヤに向かった。

「イワレヒコ！」

ウガヤは自分の息子の狂気に仰天し、馬を反転させて逃げ出した。

「ヤマトもこれで滅ぶ……！」

オモイはイワレヒコの殺戮を見て呟いた。

（何がどうなっておるのだ？）

ツクヨミには全くわからなかった。

「大叔母様！」

アキツがヒラサカに着くと、オオヒルメは汗で塗まみれた顔をアキツに向け、

「来てはならぬ！ お前はイワトを出よ」

「え？」

アキツにはオオヒルメの言葉の意味がわからない。

「行くのだ、アキツ！」

オオヒルメがそう叫んだ瞬間、ヒラサカが吹き飛び、岩のいくつが彼女を直撃した。

「うう！」

オオヒルメはその衝撃で跳ね飛ばされ、倒れた。彼女の身体からたくさんの血が流れ出した。

「大叔母様！」

アキツが近づこうとすると、

「ならぬ……。行くのじゃ、アキツ……」

とオオヒルメが虫の息で言った。アキツはそれでも彼女に駆け寄った。

「え？」

ヒラサカの向こうから、不気味な声が聞こえる。

「アキツ、もはや私は助からぬ……。ヒラサカの封も破られた……。ここももう終い^{しまし}じゃ。逃げよ」

「そのような事、できませぬ！」

アキツはオオヒルメを抱きかかえて歩き出す。

「ならぬ、アキツ……。このままでは、お前までヨモツの餌食となる。一人で行くのだ」

「大叔母様……」

アキツは涙で濡れる目をオオヒルメに向けた。オオヒルメも涙を流し、

「行くのだ、アキツ」

「はい」

オオヒルメの強い眼差しに諭され、アキツは断腸の思いで彼女をその場に残すと、走り出した。

「さあ、そう簡単にはここは通さぬぞ、ヨモツの魔物共。我が力、思い知るがいい！」

オオヒルメは最後の力を振り絞って、身体を起こした。

「ああ！」

武彦は自分の部屋のベッドの上で目を覚ました。

「ここ、僕の部屋か……」

ホッとすると同時に、ツクヨミ達の事が心配になった。あの無敵と思っていたツクヨミが苦戦していたのだ。

（大丈夫なのかな？）

自分ではどうする事もできない歯痒さに、武彦は両手を強く握りしめた。

二十八の章 武彦の迷い、イザの嘲笑

朝になつていた。

いわがみたけしこ

磐神武彦は、アキツやツクヨミ達の事が気にかかつていたが、自分の世界に戻ってしまった以上、どうする事もできない。彼らが召喚してくれなければ、武彦にはなす術はないのだ。

そして、自分の世界に戻った事で、姉美鈴や幼馴染の都坂亜希みやこざかあきの事を思い出した。

(姉ちゃんに嘔吐いたままだ)

その事が心に重くのしかかって来た。

「正直に話そう。おかしくなったと思われても、それが一番いい」

武彦は決断し、部屋を出て階段を駆け下りた。

「おはよう」

キッチンで母珠世と共に料理をしている美鈴に声をかける。

「おはよう。昨日うなされていたみたいだけど、大丈夫か、武彦？」

心配そうな顔の美鈴が尋ねた。その顔がまたヤマトの国の姫であるイスズと重なり、武彦はギクツとしたが、

「だ、大丈夫だよ」

と答えてから、

「ちよつと話があるんだけど」

「何？」

武彦は美鈴をキッチンから連れ出し、廊下に出た。

「何だよ、朝は忙しいんだから！」

ムツとする美鈴に武彦は、

「今夜全部話すよ。取り敢えず、ゴメン」

「は？」

いきなり謝られて呆然としてしまう美鈴。武彦はサッサとキッチンに戻ってしまう。

「何なんだ、あいつ？」

美鈴はとうとう弟がおかしくなってしまうたのか、と心配になった。

その頃、武彦がいなくなってしまうたオオヤシマは、荒れ狂うイワレヒコのせいでヤマトの兵が一人残らず斬り殺されてしまった。

「まさに鬼神が如き強さ……」

スサノモタジカラも、イワレヒコの迫力の前になす術がない。クシナダが水でイワレヒコを縛ろうとしたが、イワレヒコは兵達の血を滴らせた剣で水を弾いてしまった。

「ふおおおー！」

その力にはどれ程の剣士も敵わないように思われた。

「そんな……」

クシナダは啞然とした。

(妙な……。イワレヒコ様の封が解けたとしても、あのご様子は面妖だ)

ツクヨミはイワレヒコの変貌を怪しんだ。そして、アマノイワトの奥を見ようと目を凝らした。

(もしか、ヨモツの女王であるイザが何か仕掛けたのか?)

するとイワレヒコは、接近してくるヨモツの炎に突進し、

「うごおおおー！」

と雄叫びを上げ、炎を吸い込み始めた。

「何と！」

これにはツクヨミ達全員が驚愕した。

(やはりイワレヒコ様は、イザに……)

ツクヨミはこの危機を打開できるのはアキツしかいないと考え、アマノイワトに向かって飛翔した。

他方、アキツとウズメは、勢いを増すヨモツの炎を押し留めるために、力を尽くしていた。

「アキツ様……」

ウズメも限界に達していた。アキツも同様である。その時、炎の勢いが弱まって来た。

「何？」

アキツとウズメは、顔を見合わせた。見る見るうちにヨモツの炎は小さくなって行く。

「これは？」

二人共、何が起こったのかわからない。

やがて炎は完全に消滅し、その向こうにイワレヒコが姿を現した。

「イワレヒコ様！」

ウズメは一瞬歓喜の声を上げたが、イワレヒコから発している妖気に気づき、ギョツとした。

「アキツ様、イワレヒコ様が！」

ウズメはイワレヒコの何も見ていないような目と、裂けたかのように大きく開かれた口を見て叫んだ。

「ヨモツに取り込まれたようですね」

アキツの顔色が悪い。アキツはイワレヒコの心を探っていた。

（たけひこ様の魂が感じられぬ。あちらの世界に戻されてしまったのか？ しかし、如何いかにして？）

「アキツ様」

そこにツクヨミが突然姿を現した。ウズメはツクヨミの秘術を知ってはいたが、こつも完全に姿を消せるツクヨミにビクツとしてしまった。

「ツクヨミ殿、これは如何なる事ですか？」

アキツが尋ねた。ツクヨミはイワレヒコを見たままで、

「ナガスネ様から噴き出した妖気がイワレヒコ様のお身体からたけひこ様の魂を追い出してしまいました」

「何と！」

アキツは事の重大さに驚いた。ウズメは武彦の事は知らないので、何の事かわからず目を瞬しばたかせている。ツクヨミは齒軋りして、

「今、イワレヒコ様はイザが術中にあります」

アキツは改めてイワレヒコを見た。そして、その後ろで嘲笑うイザの姿も見た。

「イザ！」

アキツは怒りに震えた。拳を握りしめ、イワレヒコを睨みつける。「ぐおおおおお！」

イワレヒコが大声で叫び、アキツ達に向かって走り出した。ツクヨミが言霊ことだまを飛ばす。

「留まれ！」

しかし、イワレヒコは止まらない。何事もなかったかのように走ってくる。ツクヨミは啞然とした。

(やはり、イザの力か……)

イワレヒコの暴走に色を失って逃走したヤマトのウガヤ王は、そのイワレヒコがアキツ達のいるアマノイワトに向かったのを知り、ホツとして馬を止めた。

「イワレヒコめ、血迷うたか」

ウガヤは隣にいるオモイを見た。

「そのようで。ツクヨミの術で、お心が壊されたのやも知れませぬな」

オモイは頭を下げた答え、ニヤリとした。

(そして今、ヤマトには兵はおらぬ。時が来たようだな)

そんなオモイの企みに全く気づく様子もないウガヤは、

「退くぞ、オモイ。このままでは、我らも危うい」

「はは」

ウガヤは馬をヤマトに向けて走らせた。

ヒノモトの王ホアカリは、嫡男ウマシと共にアマノヤス川を越え、ヤマトの領内に入っていた。

「久方ぶりに、この地に足を踏み入れたな」

ホアカリは周囲を見渡し、感慨に耽った。その穏やかさがホアカリの良さだが、それも時と場合によるものだ。

「父上、そのような事、後になさいませ。今はウガヤ叔父とお会いになるのが先にございます」

ウマシは苛立って言った。彼はどこまでも愚鈍な父親が疎ましいのだ。ウマシ自身、自分が家臣から同じように疎まれているのに気づかない愚鈍さがある。

「そうであったな」

ホアカリはそんなウマシの暴言にも怒らず、只苦笑いをして馬を進めた。

（ウガヤよ、オオヒルメ様とアキツ様はオオヤシマの宝。決して悪しき事を考えてはならぬぞ）

心配する温厚な兄の心は、激情的な弟に届いていない。

ツクヨミ達はジリジリと間合いを詰めて来るイワレヒコと対峙していた。

「八百万の神でも、イワレヒコ様はお止めできません」

召喚術をやり尽くしたウズメも焦っていた。アキツが、

「この場は私が！」

と言うと、オオヤシマ中に響くような柏手を四回打った。ツクヨミとウズメは、その荘厳な響きに驚愕した。アキツの身体が同時に輝き始め、辺りを照らし出して行く。

「悪しき心、被いたまえ！」

アキツが叫ぶ。その声がイワレヒコに届いた瞬間、イワレヒコが苦しみ出した。

「ぐううおおおお！」

彼は膝を折り、剣を投げ出し、頭を抱えた。

「清めたまえ！」

アキツはもう一度柏手を四回打った。更に彼女の輝きが増し、その輝きがイワレヒコを照らし出す。

「ふぐわあああ！」

イワレヒコは遂に地面に倒れ、のた打ち回った。

(何と……。やはり、オオヤシマーと謳われたアキツ様だ)

ツクヨミは彼女の力にすっかり魅了されていた。ウズメも同様である。

(私の神降ろしの術など、アキツ様に比べれば、児戯にも等しい……)

そして、彼女はイワレヒコの異変に気づき、

「何事ぞ!?!」

と眉をひそめた。次の瞬間、イワレヒコの身体からボウツと黒い妖気が飛び出し、アキツの体から出る清らかな気で浄化された。

「うおおお……」

イワレヒコはそのまま動かなくなった。

「これでイワレヒコ殿は大事ないはずです」

アキツはフウと息を吐いて言った。ツクヨミはイワレヒコに駆け寄り、

「お眠りください」

と言霊を飛ばした。言霊がイワレヒコに浸み込んだ。確かにイワレヒコは元に戻ったようだ。

「む?」

アキツ、ウズメ、ツクヨミの三人は、一斉にアマノイワトの奥を見た。先程とは比べ物にならない程の禍々しい何か近づいて来るのを感じたのだ。

「さすがアキツじゃ。じゃが、まだこれからよ」

そう言っただけでイワトの奥から現れたのは、たくさんの兵を従えたヨモツの女王イザであった。ウズメはその姿を見ただけで震えが止まらなくなった。唇が震え、言葉が喉の奥で凍りついたようになる。ツクヨミも声が出ない。それほどイザの妖気とその存在感は強烈であった。

「あああ!」

アキツが絶叫した。ツクヨミはイザが右手に持っている黒い塊に気づき、ギョツとした。

「まさか!？」

それはオオヒルメの首であった。イザはオオヒルメを殺してしまったのだ。

「大叔母様！」

アキツは涙を流しながらもイザを睨み、

「おのれ、イザ！ よくも大叔母様を！」

イザは熱くなるアキツをせせら笑って、

「この我われに齒向かう者は、何人なにびとであろうと殺す」

「ううう！」

アキツはまた柏手を打った。しかし、イザは動じない。彼女はただ黒い目を見開き、

「そのような児戯にも等しい呪まじないが、我に通じると思っのか、アキツ？」

イザの言葉にアキツは何も言い返せない。彼女は、イザに自分の柏手が全く届いていない事がわかったのだ。

「わかっておるようだな。さもありません」

イザはニヤリとした。その笑みにアキツはギクツとした。ウズメは身体を強張らせた。

「我は、オオヒルメが大伯母であるのだからな」

ツクヨミはイザの言葉の恐ろしさに思わず身震いしてしまった。

二十九の章 アキツの決意、ウマシの悪意

オオヤシマは破滅へと動き出してしまったのだろうか？

アキツ、ツクヨミ、ウズメの三人は、闇の国ヨモツの女王であるイザを前にして、動けなくなっていた。完全に蛇に睨まれた蛙のような状態である。但し、ここオオヤシマには、蛇も蛙も存在しないが。

（イザが、我が祖に連なりし者だということのか？）

イザが、

「我はオオヒルメの大伯母」

と言ったので、アキツは酷く動揺していた。自分と同じ祖先を持つイザ。これをどう受け止めればいいのか？ 彼女は混乱している。

イザの妖気よりもその言葉の方がアキツにとって衝撃だった。
（イザが我らと同祖であるなら、私の如何なる術も通じぬ。やはり、我が命を賭して……）

ツクヨミは、アキツの思い詰めた顔に気づいた。

「アキツ様、まだそこまでお考えになるは、早うございます。我らは敗れた訳ではありませんせぬ」

「しかしツクヨミ殿……」

圧倒的な呪力と妖気を有するイザに対して、自分達はあまりに無力。アキツは絶望しかけていたのだ。

「そのようなアキツ様、私は好きではありませんせぬ」

ツクヨミの言葉に、アキツはビクツとした。ウズメもアキツを見て、

「私もツクヨミ殿と同じです。まだ我らは死んだ訳ではありませんせぬぞ、アキツ様」

ツクヨミ達の言葉が聞こえたのか、イザは只黒い目を細めてニヤリとした。

「ほう。まだ我らに抗うか？ どこまでも愚かな事よ。死ぬるだけぞ」

「お前に従いし時も、死ぬる事となるのであろう！？」

アキツはツクヨミとウズメの言葉に力を得て、イザの嘲りに反論した。

「同じ死ぬるなら、抗う事を選ぶか？ さてもおかしきは己らの思いよ」

イザにはそこまでして逆らうアキツ達の心情が理解できないらしい。彼女は高笑いを始めた。

「我が出張る迄もなし。こやつ等で十分よ」

イザはそう言い捨てると、背を向けてアマノイワトの奥へと消えてしまった。そこに残されたのは、数多くのヨモツの兵。シコメと呼ばれる半身が腐った魔物である。

「アキツ様！」

ウズメがアキツを庇うように退く。ツクヨミもイワレヒコを抱え、シコメ達から離れた。

「イザ様に逆らう者は全て滅する。かかれ！」

シコメの中の隊長らしき者が、兵に命じた。兵達はその姿からは想像ができないほど素早く動き、アキツ達に襲いかかった。

「させぬ！」

ウズメが海神を召喚し、聖なる水で攻撃した。

「グギャギャーッ！」

アキツに襲いかかったシコメの一体がその水を浴び、溶けてしまった。他のシコメはそれを見て警戒し、後退る。

「こやつ等、封じます」

ウズメは更に海神を使い、シコメを取り囲むように巨大な水の壁を作り、行く手を阻んだ。

「おのれ！」

シコメの隊長はその半分腐った目でウズメを睨んだ。

「今です、アキツ様！」

ウズメはアキツを支えて駆け出す。ツクヨミは言霊でイワレヒコを浮遊させ、それに続いた。

「ウズメ殿、この術、長くは持ちませぬ。タジカラ様を！」

「承知しました」

ウズメは続いて金色に輝く帆船である天の鳥船あまとじふねを召喚し、タジカラに向かつて飛ばした。

「お館様やがたを！」

ウズメは鳥船に伝言を頼んだ。

タジカラ達は、イワレヒコが斬ったヤマトの兵の中に生きている者がいないか調べていた。斬られた箇所を見れば、絶命しているのは明白なくらい、その斬り口は大きく深かった。

「皆死んでおるな。何という事か……」

スサノが呟いた。クシナダが、

「ウズメ殿が鳥船をこちらに飛ばされたようです」

「ウズメが？」

タジカラはクシナダの声に反応し、アマノイワトの方角を見た。すると金色に輝く帆船がこちらに飛行して来るのが見えた。帆船はやがて地上に近づいて来て、着陸した。

「おお！」

タジカラは鳥船が降下したところに駆け寄った。スサノとクシナダは顔を見合わせてから、タジカラを追った。

「イザが現れただと!？」

タジカラの叫びに、スサノとクシナダはギョツとした。

「どうやら、イザはアマノイワトの中に戻り、兵だけが残ったらしい。しかし……」

タジカラも、ヨモツの女王の力は昔話で聞いている程度であるので、具体的にはわからない。しかし、ウズメが相当焦っているのはわかった。

「アキツ様はご無事。しかし、オオヒルメ様はイザに……」

タジカラはグツと言葉を飲み込んだ。目に涙が光る。オオヒルメはタジカラやスサノにとって母にも等しい存在だったのだ。

「まさか！」

スサノもタジカラの言葉に驚く。クシナダも同様だ。

「おのれ、ヨモツめ！ 必ずこの私が成敗してくれる！」

タジカラは鬨気を漲らせ、馬に跨った。

「行くぞ、スサノ、クシナダ！」

「おう」

「はい」

三人は馬を駆り、アキツの元へと急いだ。

「ククク……」

イザは右手に持ったオオヒルメの首を見た。その目は糸のようなもので塞がれ、口も紐で結わえられている。オオヒルメの首は何かの呪術を施されているようだ。

「この首ある限り、我は負けぬ」

彼女はそう呟き、ヒラサカのそばに倒れている首を失ったオオヒルメの胴体を踏みつけ、ヨモツへと帰って行った。

その頃、ヤマトの城に帰還したウガヤは玉座の間に嫡男イツセを呼んだ。

「父上、これは一体如何なる事です！？」

自分だけが蚊帳の外に置かれていたイツセは父王に食ってかかった。ウガヤはイツセを煩わしそうに見て、

「イワレヒコがツクヨミのせいでおかしくなってしまうた。私ももう少しでイワレヒコに殺めらるるところであった」

「何と！」

イツセはウガヤの言葉に仰天した。そしてウガヤのそばに跪いている軍師オモイを見た。

「それは真か、オモイ？」

イツセは怒気をはらんだ声で尋ねた。

「はい。イワレヒコ様はツクヨミの術で操られております。危うき事にございます」

オモイは頭を下げて言い、ニヤリとした。

「そのような事が……」

イツセはオモイの言葉が信じられない。

(イザ様がおいでだ。もはやこの国も終わりよ)

オモイはイザがオオヤシマとヨモツを隔てるヒラサカを越えて来た事を感じていた。

ヒノモトの王ホアカリとその嫡男ウマシは、ヤマトの国の中ほどまで進んでいた。街道のそばにある民の家はまだ寝静まっている。彼らはオオヤシマに異変が起こっている事を知らない。

「おお」

東の空が明るくなって来ていた。夜明けである。

「これでもう少し早く進めるな」

ホアカリはにこやかな顔で言った。ウマシは、

「そうでございますな」

と答えたが、

(何と呑気な。ウガヤ叔父を追放し、オオヤシマを統べるべきお方が、このような事では困る)

ウマシには父に取って代わりたい野心があつたが、まだその時ではないと思っていた。謙虚なのではない。彼の狡猾さがそうさせているだけだ。

(だが、もうすぐだ。ウガヤ叔父を退け、イツセを追い落とせば、私が只一人の王位継承者となる)

彼はオオヤシマの混迷を全く感じていなかった。あまりにも愚かである。

タジカラ達はアキツ達と合流していた。

「アキツ様、その、何と申し上げれば良いのか……」

タジカラもスサノもクシナダも、オオヒルメの死を悲しんでいた。彼らはアキツの前に跪いていた。

「ありがとう。でも今は悲しんでいる時ではありませぬ。戦う時です」

アキツはそう言つてツクヨミを見た。タジカラが、道すがらスサノとクシナダにツクヨミの事を説明していたので、二人は何故ツクヨミがそこにいるのかは理解していた。

「ヨモツの兵はウズメ殿が止めてくださいました。しかし、時が経てば、その結界も破れます」

ツクヨミが言った。その時、日の光が一同を照らした。

「おお」

皆がその眩い光に目を向けた。周囲が次第に光に包まれて行く。

「この天の光がある限り、ヨモツには負けませぬ。大叔母様の思い、私が必ず成し遂げます」

アキツは朝日に輝く顔をツクヨミ達に向けて力強く語った。

「それには皆の力が要ります。私を助けてください」

「はい」

ツクヨミ、タジカラ、スサノ、ウズメ、クシナダが、揃つてアキツに跪いた。

(そしてたけひこ様をもう一度オオヤシマにお呼びする)

アキツは天を見上げた。明るくなり始めた空にまだいくつか星が輝いている。

「たけひこ様、今一度お力をお貸してください」

アキツはそう呟き、目を閉じて念じた。

オオヤシマの救世主的存在である磐神武彦いわがみたけひこは授業中だった。奇しくも、今教壇に立っているのは、武彦が、オオヒルメに似ていると思つた英語の尼照富美子先生だ。

(あ！)

彼はアキツの声を聞いた。

(良かった。アキツさん、無事だった)

ホッとした。武彦にとって、彼女の存在はすでに幼馴染の都坂亜^{みやこさかあ}希^きと同列なのだ。

(呼んでる、アキツさんが……。行かなくちゃ)

武彦はまた眠りに落ちた。

三十の章 武彦の願い、イスズの思い

タジカラ、スサノ、ウズメ、クシナダのヤマトとヒノモトそれぞれの最強夫婦二組がヨモツの兵シコメ達を退け、一時的にはあったが、アマノイワトは解放された。

「清めます」

アキツの柏手かしわてがイワトの中に鳴り響いた。柏手の力で、ヨモツの妖気に汚されたイワトが清らかな気で満ちて行く。

「おお、これぞワの女王陛下のお力だ」

タジカラ達は感激していた。ウズメとクシナダは感動のあまり、アキツを見て目を潤ませている。

「ツクヨミ殿、ご一緒ください」

「はい」

アキツはツクヨミを伴い、ヨモツとの境であるヒラサカに向かった。そこにはオオヒルメの首のない遺体がある。

「お辛かろう、アキツ様は……」

タジカラが呟いた。

「そうだな。我らがこれほど身に堪えているのだ、あの方のお心を思うと、それだけで……」

スサノはグツと涙を堪え、両の手を握り締める。ウズメとクシナダは互いを支え合うようにして泣いていた。

アキツとツクヨミはヒラサカに着いた。オオヒルメの遺体は、まるで昔からそこにあっただように横たわっている。ヨモツの穢けがれで妖気に塗まみれているのだ。

「ツクヨミ殿」

アキツは前を見たままでツクヨミに話しかけた。

「はい」

ツクヨミはアキツの凜とした声に思わずビクツとしてしまった。

「これより、大叔母様のお清めを致します」

「はい」

ツクヨミは身の引き締まる思いがした。ワの国の女王であったオオヒルメの葬儀に立ち会うのだ。

「……………」

僅かな蠟燭の火に照らされているだけで、薄暗い洞窟の先に、首のないオオヒルメの遺体が見える。

「オオヒルメ様……………」

ツクヨミの目から涙が溢れ出る。

（何たる事か…………。オオヒルメ様がこのような…………）

「始めます」

アキツは気丈にも涙を流していない。

「はっ」

ツクヨミは自分の脆さを思い知り、涙を拭った。

（誰よりもお辛いはずのアキツ様に先んじて泣くなど、恥知らずだ）
「被ひいたまえ！」

アキツの柏手が四回打った。それは彼女の心の内を表すかのように悲しく鳴り響いた。そして穢れている空間が、たちどころに清らかになつて行く。

「清めたまえ！ 被ひいたまえ！ 清めたまえ！」

アキツは連続して柏手を打ち続けた。その異常な様子アキツにツクヨミが気づき、

「アキツ様！」

と止めなければ、アキツは両手が碎けるまで柏手を打ち続けていたかも知れない。

「ツクヨミ殿……………」

アキツは遂に涙を流し、崩れるようにしてツクヨミに抱きついた。

「ア、アキツ様……………」

あまりの出来事にツクヨミは動揺したが、

（今はこの方を何としてもお支え申すのが我が務め）

と思い、震えているアキツを受け止めた。

「うづう……。大叔母様……。大叔母様……。大叔母様アツ！」

アキツは絶叫した。それほど彼女は我慢していたのだ。

「アキツ様……」

自分にしがみついて泣くアキツを優しく抱きしめ、ツクヨミは思った。

（この方のためにこれからの私の命を捧げよう）

「すみませぬ、ツクヨミ殿。お恥ずかしいところをお見せしてしまいました」

アキツは我に返り、顔を赤らめてツクヨミから離れた。そして、乱れた衣の襟を正す。

「いえ、滅相もございませぬ」

ツクヨミもまた顔を赤らめ、アキツの温もりが残る手を握り締めた。アキツはツクヨミに背を向け、

「大叔母様を弔いの間にお運びしますので、お力をお貸しください」

「はい」
ツクヨミはオオヒルメの遺体を言霊で浮遊させ、アキツについて行った。

二人は薄暗い洞窟をしばらく進んだ。やがて、行く手から荘厳な気が漂って来た。

「おお」

ツクヨミは思わず感嘆の声を漏らしてしまう。それほど、その先にある弔いの間は荘厳な雰囲気だった。蠟燭が灯されている訳ではないのに中は明るく、張り詰めたような気に満ちている。

「こちらに大叔母様を」

ツクヨミは部屋の中央の一段高くなっている祭壇のような場所にオオヒルメの遺体を下ろした。

「あ！」

途端にオオヒルメが強く輝き出した。同時に彼女の体の奥底にまで沁み込んでいた妖気が浄化されていくのがわかった。

「これでようやく、大叔母様から穢れを被い切れました」
アキツの言葉にツクヨミはハツとした。

(それほどまでにヨモツの穢れは深かったのか……。オオヒルメ様のお身体が輝きを増した)

アキツはオオヒルメの遺体を悲しそうに見つめて、

「でもこれは仮の弔いです。大叔母様の御髪おぐしをイザが持ち去ってしまったのですから」

ツクヨミは頭を下げて応じた。

「はい」

イザからオオヒルメの首を取り返さなければ、本当の弔いは完了しないのだ。

「戻りましょう、ツクヨミ殿。ここはもう、ヨモツには侵せませぬ」

「はい」

二人はタジカラ達のところへ向かった。

武彦は眠りに落ちながら、アキツ達の悲しみを感じていた。

(何があったのですか、アキツさん?)

彼は不安になりながらも、幼馴染の都坂亜希みやまあきに瓜二つのアキツを心配した。

やがて、武彦は目を覚ました。すると、目の前にアキツがいる。

どうやら、最初に呼ばれた場所のようだ。アマノイワトの広間のようなところである。

「あ、アキツさん」

武彦は何も考えずに喋ってしまい、そこにツクヨミ以外に人がいる事に気づき、慌てた。

「ご案じ召されますな、たけひこ様。ここにいらっしやる方は皆、たけひこ様の事をご存知の方です」

ツクヨミが笑顔で教えてくれた。

「そ、そうなんですか」

そこにはウズメ、タジカラ、クシナダ、スサノがいた。

「あれ、もう一人の人は？」

何も知らない武彦はナガスネがいない事に気づいて尋ねた。

「ナガスネ様は、ヨモツの妖気で……」

スサノがそこまで言っただけ涙を流した。その様子を見て、武彦はまずい事を訊いてしまったと悟り、

「ご、ごめんなさい。何も考えずに訊いてしまって……」

とスサノに歩み寄り、頭を下げた。スサノは武彦の行動に驚き、

「恐れ多き事です、たけひこ様。我らは皆、たけひこ様に仕えるべく集いし者です。そのようなお心遣いはもうなさいますな」

スサノは地面に頭を擦りつけて言った。武彦はそれに驚いてしまったが、

「わ、わかりました」

とだけ言った。

(僕が何かするたびに大袈裟な事になりそうだもんなあ)

そしてツクヨミがタジカラ達を正式に紹介してくれた。会話の中で誰が何という名なのか知ってはいたが、改めて紹介され、頭の中の整理がついた。オオヤシマの女性は皆美人だな、などと呑気な事を考えてしまう武彦である。

「これより先は、私もたけひこ様の影ではなく、先陣を切って戦う事に致します」

ツクヨミが言った。武彦はビククリして、

「ええ？　じゃあ、僕はどうすればいいんですか？」

「恐らく、たけひこ様のお手を煩わせる事はなきに等しいでしょう。我ら四人とツクヨミが戦えば、鬼神にも勝てましょう」

タジカラが豪快に笑って言った。するとウズメがそれを見て、

「お館様、お控えなさいませ。ここは兵の詰め所ではございませぬ」

武彦は改めてウズメの露出の多い衣を見てドキッとしてしまう。

「ウズメ、細かい事を申すな」

タジカラは苦笑いをした。するとアキツが、

「イザは退きました。が、一人気になる者がまだ残っております」

「オモイ、でございますね？」

ツクヨミが尋ねる。アキツはそれに頷き、

「オモイはウガヤ王とヤマトに戻ったようです。あの者もイザの使いと見ております」

「間違いありません。陛下に張り付きしは、何やら企みがあると思われます」

タジカラが同意した。

「イツセ様が心配です」

ウズメが口を挟んだ。タジカラも頷き、

「イツセ様は陛下をお諫めできる方のお一人。オモイの企みの邪魔となるはず」

「早うヤマトに出立致しましょう、アキツ様」

スサノが立ち上がった。しかしアキツは、

「私はここに残ります。ヒラサカを押さえねば、再びヨモツが現れましよう」

その言葉に危機感を抱いたウズメが、

「では私も残ります」

「よし、頼んだぞ、ウズメ」

タジカラが言う。ウズメはタジカラを見上げ、

「はい、お館様」

部隊は二手に分かれた。アキツを守護するウズメ、そしてその後を固めるクシナダ。ヤマトに向かうタジカラ、スサノ、ツクヨミ、そしてイワレヒコの姿の武彦。

やがて武彦達はアマノイワトを出発した。

「オモイめ。陛下に事あらば、只ではおかぬ」

タジカラはそう呟き、馬に鞭を入れた。

「私が先に参り、様子を探りまする」

ツクヨミが宙を舞い、ヤマトへと飛翔した。

「我らも急ぎましよう、たけひこ様」

タジカラに促され、武彦はハツとし、

「は、はい」

と手綱を握った。

ヤマトの城では、イツセがウガヤにツクヨミ討伐を命じられ、自分の部屋で出立の支度をしていた。

「兄様」

そこへ悲しそうな顔のイスズ姫が現れた。イツセはたった一人の妹の心を思うと胸が張り裂けそうだ。

「イスズ」

そして場合によっては、イワレヒコも殺めなければならない立場のイツセはイスズの目が見られない。

「ツクヨミをお討ちになるのですか？」

イスズは兄を真っ直ぐに見て尋ねる。その視線が突き刺さるようで、イツセは辛かった。

「あるいはな」

イツセは俯いて言葉を濁した。

「私は、オモイを怪しんでおる。あの者、何やら企んでおる気配なのだ」

「私もオモイは嫌いでございます」

いつになく強い調子でイスズが言ったので、イツセはギクツとした。

「イスズ、何か存じておるのか？」

「はい」

イスズはこの兄にだけは全てを話すべきと思い、武彦達の事を説明した。

「……」

イツセは哑然としてしまい、しばらく何も言わなかった。

「兄様？」

しばらくして、堪りかねたイスズが声をかけたので、イツセはハツと我に返った。

「俄かに信じ難き話だが、イワレヒコの変わりようは、それでわかった」

一部納得がいったイツセである。イスズはホツとして微笑み、

「ですから、イワレヒコ様はツクヨミに操られてなどおりませぬ」

「そのようだな」

イツセは妹の目をやつと見る事ができた。

「父上にはお話なさいませぬよう。父上は、オモイの意のままになつておいでです」

イスズはさすがのような眼差しでイツセに進言した。

「それもわかつておる。操られしは、父上の方よ」

イツセはキツとオモイがいる方角を睨んだ。

そして、ホアカリとウマシの父子一行は、着々とヤマトの城に近づいていた。すでに日は高く昇り、民は動き始めている。彼らは直にホアカリ達を見た事がないので、馬で通過して行く人々がヒノモトの王一行だとは夢にも思っていない。ホアカリもまた、その方が良いと思ひ、兵達にも何もさせなかつた。やがて集落を抜け、大平原に出た。

「この平原を越えれば、ウガヤ叔父の城が見えて参ります」

ウマシが説明する。ホアカリはそれを鬱陶しそくに聞きながら、

「ウマシよ、出過ぎた真似をするでないぞ。我らは話をしに行くのであるからな」

「はは、父上」

口ではそう言いながら、ウマシは、

(隙あらば、叔父を亡き者とし、ヤマトを滅してくれる)と考えていた。戦乱はまだ収まる気配を見せていない。

三十一の章 タジカラの悲しみ、アキツの決心

アキツはウズメを伴い、アマノイワトの別棟に当たる部屋へと赴いた。イワトの中は、基本的にはヨモツとの境であるヒラサカに通じる幹とも言うべき広い洞窟が全体の真ん中に位置している。アキツとウズメが向かったのは、そこから枝分かれしている別の洞窟である。広間やオオヒルメの遺体が安置されている弔いの間から比べるとこじんまりとした小さな部屋だ。その奥に祠のような小さな社があり、その中に剣が一振り置かれている。

「それは……」

ウズメはその剣を見て息を呑んだ。それはナガスネが戦乱の折に持ち出したアメノムラクモだったのだ。剣は荘厳な光を放ち、ウズメは無意識のうちにその前に行く^{いく}と跪いていた。

「この剣はワの国の最後の力を秘めしもの。イザに対するには、この剣を解き放つ以外になし」

アキツがウズメの隣に立って言った。

「解き放つ？」

ウズメは眉をひそめた。剣に何かが宿っているのかとも思ったが、何も気配を感じない。

「この剣は使う者の力を奪います。使い方を誤れば、死ぬる事もあ^ある」

アキツは淡々と恐ろしい事を語っている。

「……」

ウズメはギョツとしてアメノムラクモを見上げた。アキツはアメノムラクモに近づき、

「ですが、このままではこの剣も只の剣。ワの王家に伝わりし秘術で解き放ちてこそ、真^{まこと}の力を帯びる事になるのです」

ウズメは思わず後退^{あとひき}りした。

「怖いですか、ウズメ？」

アキツが優しい笑顔でウズメを見る。ウズメは苦笑いをして、
「怖くないと申さば、偽りとなります」

「そうですか」

アキツはまた剣を見た。

「私も恐ろしい。大叔母様ですら、この剣を解き放ちし事がないのです」

「オオヒルメ様も……？」

ウズメの額を汗が伝わる。そこへクシナダが駆け込んで来た。

「アキツ様、また何やらヒラサカが騒がしゅうございます」

クシナダは跪いて報告した。アキツは二人を見て、

「少しだけ時を稼ぐ事はできますか？」

「はい。クシナダ殿の水と、私の海神わたつみの結界で、しばしの間、ヨモツを抑える事はできましょう」

ウズメが答えた。隣でクシナダが頷く。

「ではお願い致します。私はこの剣を解き放ちます」

「はは！」

ウズメとクシナダはヒラサカへと走った。

イザはヨモツの最深部にある玉座に座り、アキツの動きを探っていた。

「やはり、アメノムラクモを使うか、アキツ。じゃが、無駄ぞ」

彼女は只黒い目を細め、ニヤリとした。

「今の我われには、そのような剣、何の役にも立たぬ」

イザはすでにアメノムラクモの力を凌駕したと思っていた。

武彦達一行の先発であるツクヨミは、姿を消してヤマトの城に入っていた。

（イツセ様がご出陣？）

彼は城の中の言葉を拾い集めていた。

（ウガヤ王のいらっしやるところがわからぬ。オモイめ、何をした

?)

ツクヨミは城の奥へと進み、イスズの部屋を訪ねた。

「ツクヨミ！」

思わず歓喜の声を上げてしまったイスズに大声を出さぬように指示したツクヨミは、

「陛下はいずこに？」

「私にはわかりませぬ。母上もご存じないのです」

イスズは悲しそうな目でツクヨミを見た。

「タマヨリ様はお部屋ですか？」

「はい」

ツクヨミは一瞬躊躇ったが、

「では、こちらにお連れしてください。私がお話を致します」

「わかりました」

イスズは部屋を出ようとして、

「兄様あにさまにはツクヨミの事、話しました」

「はい。イツセ様ならご信頼できます故、大事ありませぬ」

ツクヨミは微笑んで答えた。イスズもニコツとして、部屋を出て行った。

(それにしても、何故ウガヤ王の居場所がわからぬのだ?)

ツクヨミはその事の方が不安であった。オモイは得体が知れない。何を仕掛けて来るか読めないところがある。

武彦達はヤマトの国の端に到達していた。アマノイワト付近のゴツゴツとした岩肌が続く土地が終わり、背丈の低い草むらが広がる。

「如何した、スサノ？」

タジカラがスサノに尋ねた。スサノの炎の剣が別の方角に反応しているのだ。

「こちらの方角より、敵が迫っておる」

「敵？ 敵などおるはずがあるまい」

タジカラはスサノの剣が間違っていると思った。しかし、間違い

ではなかった。

「何事ぞ？」

朝日を背に、得体の知れぬ一団がゆっくりとではあるが武彦達に近づいて来る。

「まさか……」

タジカラは掲げられた破れた旗の紋様に気づき、驚愕した。

「あれは紛れもなくヤマトの旗……。如何なる事だ！？」

彼はスサノを見た。スサノは、

「よもやとは思うが、彼奴ら、死人あやつではないか？」

「何！？」

タジカラはスサノの言葉に接近して来る一団をもう一度見た。武彦はギクツとした。

（死人？ ゾンビ？ そんなあ……）

武彦はホラー映画も怖い話も大の苦手だ。ましてや、本物のゾンビなんてとんでもない。彼は、気絶してしまうかも知れないと思った。

（ツクヨミさーん、助けてくださいー！）

武彦はツクヨミに呼びかけた。

そしてまた、広々とした平原を進み、ヤマトの城を目指すホアカリ一行にも、その死人の軍団が近づいていた。しかもその先頭には、首を失ったヒノモトの武将ウカシと、嘔き出した妖気で身体の大半が吹き飛んだ將軍ナガスネがいた。彼らが騎乗している馬も一度死んで黄泉よみがえ返った馬だ。

「ホアカリ様、お命頂戴ちよつたいつかまつ仕ります」

顔が半分ないナガスネが呟く。ウカシの胴体は、首を小脇に抱えている。

「これでようやくオオヤシマは死人の王国となる。我らの世が来るのだ」

ウカシはニヤリとした。

ホアカリ一行も、死人と化したヤマトの兵に気づいていた。

「な、何じゃ、あの者達は？ ヤマトの兵ではないか？ 我らを襲うつもりか？」

戦の経験いくばくがほとんどない愚息ウマシが慌てふためくのをホアカリは嘆いた。

「お前はそれでもヒノモトの王子か、ウマシよ。父は情けないぞ」
「……」

父上には言われたくありません、と反論したいウマシであるが、そんな事を言っている場合ではない。敵は自分達の数倍の規模なのだ。

「陛下、お退きくださいませよう。我らに勝つ見込みはありません、老参謀が進言した。ホアカリは遠くに見えるヤマトの城を見やり、無念じゃ。ウガヤはあくまで我らと戦をするつもりらしいな」

ホアカリ達はウガヤの兵だと思っている。彼らは死人の軍団である事に気づいていなかった。

ツクヨミは武彦の心の叫びを捉えた。

（死人？ まさか？）

イワレヒコに斬り殺されたヤマトの兵が死人となって武彦達を追いかけて来たようだ。

（死人は昼夜別なく戦い続くと聞く）

ツクヨミはウガヤを探すのを諦め、イスズの部屋を出る事にして姿を消した。

「ツクヨミ？」

そこへイスズがタマヨリを伴って戻って来た。

「お帰りなさいませ、イスズ様。お久しゅうございます、タマヨリ様」

ツクヨミは姿を現し、跪いた。タマヨリは、イスズに来る途中で事情を聞いていたが、それでも仰天したようだ。

「久しいですね、ツクヨミ」

イスズはツクヨミが慌てているのに気づき、

「如何した、ツクヨミ？」

ツクヨミは二人を見て、

「はい、イワレヒコ様ご一行が、死人に襲われております」

「何と！」

イスズはタマヨリと顔を見合わせた。ツクヨミは頭を下げ、

「しばし、こちらでお待ちを。すぐに戻ります故」

と言うと、再び姿を消して城を出た。

（死人、か。どれほどの力なのか……？）

さすがのツクヨミも死人とは戦った事がない。それは、タジカラもスサノも同じだ。

「急がねば」

ツクヨミは飛翔し、武彦達の元へと向かった。

「ここは？」

ウガヤは、ヤマトの城の中のオモイの部屋に連れて来られていた。見た事のない異国の文字で壁が埋め尽くされている。

「ここならば、大事ありません、陛下。例えツクヨミでもこの部屋には入れませぬ」

「そうか」

ウガヤはホツとして椅子に腰を下ろした。オモイはその前に跪き、
「私はこれからイツセ様に同道し、ツクヨミを討ちます。そして、
逆賊タジカラも」

ウガヤはオモイの言葉を頼もしく感じたのか、嬉しそうな顔をした。

「うむ。じゃが、タジカラはできれば許せ。あれは私の一番の兵じ
ゃ」

「はい」

しかし、オモイは誰も助けるつもりはない。

（タジカラもスサノも、皆イザ様の僕しもとなるのだ）

「こやつら、頭を潰さねば動きを止めぬ！ スサノ、頭を潰せ！」
タジカラは一騎当千の働きをしていた。

「わかつておる！」

スサノは、炎で死人を焼き払い、倒した。

「ぬうう！」

タジカラは泣きながら死人の頭を潰した。

（皆、我が兵。皆、我が友……）

知っている顔を斬るのは、自分の身を斬るように辛かった。

「タジカラ、私が代わろう！」

スサノが次々に炎で死人を焼く。タジカラは涙を拭い、

「要らぬ世話よ、スサノ！ こやつらに正しき道を与えるが、我が務め！」

タジカラはスサノを押し退け、死人の頭を潰した。

「今度こそ、天に行けよ、うぬら……」

タジカラはそう呟いた。

ツクヨミは飛翔しながら、死人の別働隊に気づいた。

（アマノイウトを指す死人もおるのか？）

タジカラとスサノの活躍で、武彦達は危機を脱したのを知り、ツ

クヨミは方向を転換した。

（ヨモツめ、小癩こしゃくな真似を……）

ツクヨミは齒軋りしながらイウトを指した。

タジカラとスサノは、死人の数が少ないのに気づいていた。

「別の動きをしたる者共がおるのか？」

タジカラが辺りを見回す。その時武彦はツクヨミの声を聞いた。

（たけひこ様、ヒノモトの王であらせられるホアカリ様ご一行が、死人に追われております。そちらにお向かいください。アマノイウトにも死人が向かっておりますが、こちらは私が）

武彦は仰天した。そして、

「タジカラさん、スサノさん、ホアカリさんがゾンビに、あいや、死人に追いかけてられます。そちらに向かいますよ」

「何と！」

タジカラとスサノは顔を見合わせた。

「こつちです！」

武彦はツクヨミの言霊で知らされた方向へ馬を駆った。

「続くぞ、スサノ！」

タジカラが武彦の馬に続く。スサノはタジカラに続いた。

「おう！」

タジカラは武彦に追いつくと、

「たけひこ様、我らはどうぞ名のみでお呼びください」

「そうです。呼び捨てで構いません」

スサノが同調する。武彦は苦笑いして、

「でも、年上の人を呼び捨てにするなんてできませんよ」

「そうでございますか」

タジカラはスサノと顔を見合わせた。

三十二の章 オオヒルメの無念、ウガヤの苛立ち

アマノイワトの別棟の小さな社の前で、アキツは自分の気を最大にしていた。彼女の長い髪が気で舞い上がり、目もやや吊り上がり気味になっている。

(うまくいくのかわからぬが、イザに立ち向かうにはアメノムラクモを解き放つよりない)

怖さもある。言い伝えでは、アメノムラクモの解放に失敗した者は、命を吸われ、枯れ木のようになって死んだという。しかし、闇の国ヨモツの女王イザに対するには、何としてもアメノムラクモが必要なのだ。

(死を恐るるつもりはない。只、しくじるのは許されぬ)

アキツの額に汗が幾筋も伝わる。

「大叔母様、私にお力をお貸しくださいませ！」

彼女は今は亡き大叔母オオヒルメに祈った。そして気を凝縮して行き、指先に集中する。

「アメノムラクモよ、我われに従い、我の力となれ」

アキツは指先から気を放ち、神剣アメノムラクモに宿した。アキツの気がスウツと剣に溶け込む。アキツの舞い上がっていた髪が元に戻り、吊り上がっていた目も下がった。

「は！」

その途端、アメノムラクモの輝きが増し、部屋全体を照らす。アキツもその光の強さに目を細め、手を翳かざした。

「？」

だが、輝きは収まってしまった。しかもアメノムラクモには何の変化もない。

「しくじったのか？」

アキツは眉をひそめ、神剣を見つめた。

『足りぬのだ、アキツ』

声がした。アキツはハツとして振り返った。そこには、眩い光の中、オオヒルメの霊が立っていた。

「大叔母様！」

アキツは歡喜の涙を流し、オオヒルメに近づいた。

『アキツ、アメノムラクモは両刃の劍ぞ。御し方を誤らば、オオヤシマを滅ぼすやも知れぬ』

オオヒルメの真剣な表情とその厳しい言葉に、アキツは涙を拭い、

「はい」

と答えた。

『お前一人の気では、その劍は御し切れぬ。無理に使わば、お前の命ばかりでなく、皆の命を奪う事となるう』

アキツはオオヒルメの言葉にギクツとした。オオヒルメは慈愛に満ちた目でアキツを見、

『案ずるな、アキツ。私が力を貸そう』

「大叔母様！」

アキツは喜色に顔を輝かせた。

『私の魂をアメノムラクモに納めよ。さすれば、その劍を御する事ができよう』

オオヒルメの言った事にアキツは衝撃を受けた。それはオオヒルメの魂の消滅を意味するのだ。アキツが死んで、天に昇っても、オオヒルメには会えないのである。

「大叔母様、それでは大叔母様が……」

動揺するアキツにオオヒルメは優しく語りかける。

「これは我が定め。オオヤシマに災いを招き、それを収められなんだ我が罪への償いなのじゃ」

「……」

アキツは何も言えなかった。オオヒルメの優しい眼差しに決意の強さを感じたのである。

「さあ、早う。時は待ちてはくれぬ」

「はい……」

アキツはもう一度涙を拭い、オオヒルメの魂を神剣に収める儀式を始めようとした。

『ぐう！』

突然、オオヒルメが苦しみ出した。魂が苦しむとは一体何が起ったのかと、アキツは考えを巡らせた。

『おのれ、イザめ！』

オオヒルメの魂はそれだけ言うと、スーッと消えてしまった。

「まさか!？」

アキツは想像して恐ろしくなった。

(イザが大叔母様の魂を封じたのか?)

イザはオオヒルメの首を奪った。それを取り戻さない限り、オオヒルメの魂はイザの手の内にあるという事なのだ。

「如何にすべきなのか……」

アキツはその場にしゃがみ込んでしまった。

一方、ウズメとクシナダはヒラサカから出て来ようとしているヨモツの兵であるシコメの大群を相手に苦戦していた。シコメ達は腐りかけた身体を揺らしながら、ヒラサカの向こうから這い出て来た。

「これほどの数とは……」

ウズメが海神わたつみで結界を張ろうとするが、それを掻い潜ってシコメが湧き出そうとする。

「通さぬ！」

クシナダの水の槍がシコメを討ち取る。頭を砕かれたシコメはそのまま砂になって崩れた。

「ウズメ殿、このままでは我らが潰れます」

クシナダが叫ぶ。ウズメは、

「お館様やかたのみまに助けを求める事もできぬ故、何としても！」
と更に邪よこしまを封じる船戸神ふねのかみを召喚し、封印を強めた。

「ここは我らが命に代えても守らねばなりません！」

ウズメは諦めるつもりはない。クシナダはそれを見て微笑み、

「承知致しました。命尽きようとも守りましょう!」

「忝かたじけない、クシナダ殿」

ウズメはクシナダに引け目がある。かつて夫であるタジカラとクシナダの夫であるスサノは、ウズメを懸けて争った事があるのだ。そして、スサノが自分を諦めてクシナダを娶めとった。ウズメはその事を気にして、クシナダと距離を置いていたのだ。

「ウズメ殿、私は貴女の事、大切な友と思っておりますぞ」

クシナダの言葉にウズメはハツとした。クシナダはニコツとしてウズメを見ると、

「我が夫スサノが命懸けで惚れた方です。私も命懸けで貴女について行きます」

「ありがとう、クシナダ殿」

ウズメは術を使っていて涙を拭う事ができないため、顔がクシヤクシヤになっていた。

そして武彦達はホアカリ一行を追い、馬を走らせていた。

「あれか?」

タジカラが死人しひとの軍勢に気づいた。ゆらゆらと不気味な動きをしている歩兵らしき者が見える。

「まだ追いつかれてはおられぬご様子だな」

スサノはホアカリ達が無事なのを知り、ホツとした。

「手早く退治たいじるぞ、タジカラ!」

今度は私ごと、炎の剣を振り上げてスサノが先発する。

「待て、スサノ! 私が先じゃ!」

タジカラがそれを追いかける。武彦はそれを見て、

「いいなあ、親友って……」

と呟つぶやき、

「僕も!」

馬に鞭を入れ、二人を追った。

（イスズの言うた事が真まことならば、私は一体誰を討つたために出陣したのだ？）

父王ウガヤと異国人の軍師オモイに疑念を抱きながら、ヤマトの国の嫡男であるイツセは、アマノイワトへと進軍していた。

「もしや？」

イツセは城の方を見た。

（まさかとは思うが、オモイめ、父上を……）

留守になる城が心配であるが、ここまで来て引き返す訳にもいかない。

（イスズや母上の事も気がかりだ。如何すれば良いのか？）

イツセの心は大きく揺れた。

「ああ！」

ウズメとクシナダはようやくシコメの大群を押しやり、封印を完成させ、アキツの元に戻る途中だったが、そこに突然死人の群れが現れたのだ。

「これは、ヤマトの兵……」

タジカラ同様、ウズメにも見覚えのある兵達だ。

「ヨモツの力で操られておるのですか。何という事を！」

クシナダが怒り、水の槍で死人を貫く。しかし、胴体をいくら攻撃しても、死人は止まらない。頭を狙うと、死人とは思えぬ俊敏さでかわしてしまった。

「これは……」

ウズメとクシナダは、ジワリジワリと追い詰められて行く。

「お二方、お伏せくだされ！」

ツクヨミの声が響いた。ウズメとクシナダは地面に突っ伏した。

「被いたまえ、清めたまえ！」

ツクヨミはアキツの柏手の力を応用し、言霊ことだまを放った。

「ぐあおおお！」

それにより、死人達はたちまち消滅した。

「ツクヨミ殿！」

二人の美女が喜んでツクヨミに駆け寄った。ツクヨミは微笑んで、「ご無事で何よりです」

「はい」

クシナダとウズメは、互いを見やり、顔や衣に着いた土を払い落としながら答えた。ウズメが、

「あの者達は、ヤマトの……」

と言いかけると、ツクヨミは、

「存じております。皆、天に導きました。ご安心ください」

ウズメはクシナダと顔を見合わせ、微笑んだ。

「それで、アキツ様は？」

ツクヨミは真顔になって尋ねた。

「まだお戻りになりませぬ」

クシナダは心配そうに言った。ツクヨミも、アキツの心が悲しみに満ちているのを感じていたので、

「参りましょう、アキツ様の元へ」

と言った。ウズメとクシナダは黙って頷いた。

オモイはウガヤを椅子に座らせ、その前に跪いた。

「イツセはツクヨミを討ち取れるものか？」

ウガヤが苛ついて尋ねる。オモイは深々と頭を下げ、

「陛下がお助けなさるのが一番の策と存じます」

「そうか、やはりそうか」

元々血の気が多くて合戦好きのウガヤは、こうして城に閉じ籠っているより、外に出たいのだ。しかし、彼は戦で手柄を上げたことは一度もない。

「よし、支度を致せ。出陣じゃ」

ウガヤは上機嫌で命じて立ち上がる。

「はは」

オモイはもう一度頭を下げたニヤリとした。

その頃、スサノは死人の中にかつての將軍ナガスネと同胞ウカシ
がいるのに気づいていた。

「何ともお勞いたわしきお姿よ……」

スサノは顔半分がなくなっているナガスネを見て涙を堪え、

「せめて我が手で天にお送り致す！」

と炎の劍を掲げた。

「スサノ……」

タジカラにはスサノの無念が痛いほどわかる。そして劍を抜くと、

「私はウカシを！ お前はナガスネ殿を！」

「心得た！」

二人は馬のわき腹を蹴り、死人の軍団に突っ込んで行った。

アマノイワトの奥、ヒラサカの方こうにある闇の国ヨモツ。その
最深部の玉座に座す女王イザは、オオヤシマで起こっている全てを
把握していた。

「アキツ、如何様にしようとも、お前如きでは我には勝てぬ。恐れ
おの
戦おのくが良い」

イザは冷たい笑みを浮かべ、呟いた。

三十三の章 イザの策略、ツクヨミの祈り

闇の国ヨモツが動き、オオヤシマは大きく揺れていた。

「ナガスネ様……」

スサノは、ヒノモトの国の將軍であり、ホアカリ王の妃トミヤの兄でもあったナガスネのおぞましい姿を見て涙が止まらなくなった。「スサノ、私の僕しもべとなるがいい。イザ様の国は素晴らしいぞ」

ナガスネは半分失われた顔でニヤリとする。

「ナガスネ様アツ！」

スサノはナガスネの言葉に震えた。

「ヨモツめ、我が国の偉大なるお方をここまで弄もてあそびおつて！」

スサノの掲げる炎の剣の火の勢いが増した。

「ナガスネ様、これは天への送り火にございます！ お逝いき下され！」

スサノは涙を流しながら剣を振るつた。剣の先から炎が渦となつてナガスネに襲いかかった。

「うおお！」

ナガスネはそのまま炎に包まれ、燃え尽きるかと思われた。

「効かぬぞ、スサノ。私はイザ様から力を賜たまわつたのだ。うぬ如きの剣でやられはせぬ」

「何と！」

スサノは剣から放たれた業火の中で、ナガスネが燃えずに高笑いをしているのを見て驚愕した。

「これもまた、ヨモツのなせる業わざなのか？」

スサノの額を汗が伝わった。

「ははははは！」

脇に抱えられた首が大声で笑う。そんな不気味な姿のウカシに、タジカラも苦戦していた。

「私は雑兵共とは違うぞ、タジカラ！ この身体は、不死。死ぬ事なき身体よ」

ウカシが高笑いをしてタジカラを睨みつける。

「うぬ……」

タジカラは剣をギュツと握り締めた。

(ウズメがおれば、このような魔物、たちどころに……)

二人の戦士はヨモツの力で甦った者達に苦戦していた。

「うわ！」

一方武彦も、その姿こそオオヤシマーと言われたイワレヒコであったが、彼自身が戦^{いくさ}ができる訳ではないので、死人^{しにびと}の攻撃をかわしながら、タジカラ達に近づいていた。

「ツクヨミさん、大変です！ タジカラさんもスサノさんも、苦戦してますよ！」

武彦はツクヨミに救いを求めた。

そのツクヨミはアキツの元に到着していた。

「そうですね」

彼はアキツから、オオヒルメの霊がイザに封じられた事を知らされた。

「イザから大祖母様の御髪^{みくし}を取り戻さぬ限り、大祖母様の弔いはすみませぬ」

アキツは毅然とした顔でツクヨミを見る。その凛々しさにツクヨミは涙が出そうだ。

「はい、アキツ様」

アキツはツクヨミにすがるような眼差しを向け、

「力を貸してください、ツクヨミ殿」

「無論です」

ツクヨミは大きく頷いた。その時、彼に武彦の声が届いた。

「は！」

それはアキツとウズメにも聞こえた。

「お館様が危うき事になっております、クシナダ殿」

ウズメが叫んだ。クシナダは、

「先に水に行かせます。ウズメ様もお急ぎ下され」

「ええ」

二人はアキツに頭を下げ、部屋を出て行った。

「ツクヨミ殿？」

アキツはツクヨミが行かないのか確かめるように見た。ツクヨミはアキツを見て、

「ウズメ様とクシナダ様で大事ないでしょう。私はアキツ様のお手伝いを致します」

「ありがとうございます、ツクヨミ殿」

アキツは微笑んで言った。ツクヨミはアキツに縋りつかれて泣かれた事を思い出し、赤面した。

「いえ」

彼は顔が赤くなったのを感じ、慌てて頭を下げ、誤魔化した。

「大叔母様は、私一人の気ではアメノムラクモを操る事はできぬとおっしゃいました。ですから、貴方の気を使っていたら良かったのです」

アキツの言葉に、ツクヨミは改めてアメノムラクモを見た。その圧倒的な気を放つ神剣を見て、ツクヨミは尻込みしそうになるような圧迫感を受けた。

「それでございますか……」

彼はアメノムラクモに宿るアキツの気を感じ取った。

(アキツ様の気で賄えぬものが、私如きの気で足りるのだろうか？)
ツクヨミはいつになく弱気で不安だった。

「む？」

スサノは奥方のクシナダが放った水の気配を感じた。

「タジカラ、クシナダ達がこちらに向っておる」

「そうか」

二人共、それぞれの相手と睨み合ったままである。

「ぐお！」

ナガスネとウカシをクシナダの水が攻撃した。

「無駄よ。我ら是不死。何をしてても無駄」

ナガスネとウカシは、口を揃えて言い放った。

「ならばこれでは！」

ウズメの声が出た。

「海神！」

聖なる水が、ナガスネとウカシに降り注いだ。

「うぬ！」

さすがの二人もこれには堪えたらしい。

「おのれ！」

ナガスネとウカシは攻撃された箇所を溶かしながら、タジカラ達から離れた。

「タジカラさん、スサノさん！」

武彦の馬が駆け寄った。

「たけひこ様！」

タジカラとスサノは、武彦を守るように馬を寄せる。死人の残存兵達も、ナガスネとウカシを囲むように集まった。

「お館様！」

そこへ、ウズメとクシナダが、馬ごとクシナダの水に乗って宙を滑るようにして現れた。

「おお、よう来てくれた」

タジカラとスサノはそれぞれの奥方を労った。奥方達はそれぞれの夫に微笑み、再会を喜んだ。

「さあ、クシナダ、我が主であったナガスネ様を天へとお送りするぞ」

「はい」

二人は同時にナガスネに迫った。

「ウズメ、我らも行くぞ！」

「はい、お館様！」

タジカラ達も馬を走らせる。

「我らは不死！ 負けぬーッ！」

ナガスネとウカシが叫ぶ。

「皆さん！」

武彦はツクヨミの姿が見えないので不安になったが、

「アキツさんが？」

ツクヨミからの知らせを受け、納得した。

（やっぱりツクヨミさんはアキツさんが好きなんだな）

別にそういう事でツクヨミはアキツの元に残った訳ではないのだが、そう思われても仕方あるまい。

（でも、実際あの二人はお似合いかも）

武彦はそんな事をふと思ひ、幼馴染みの都坂亜希みやこざかあきに瓜二つのアキツがツクヨミとお似合いだという事に何となく嫉妬してしまう。

（何考えてるんだ、こんな非常時に！）

武彦は自分の呑気に呆れた。

「我らは敗れぬ！ 出でよ、ヨモツの使いよ！」

その時、ナガスネが叫んだ。すると突然彼の前に黒い炎が渦巻き始めた。

「何！？」

スサノとクシナダは馬を止めた。

「まさか、あれはヨモツの焰ほむつひ？」

二人は顔を見合わせた。

「違うぞ、スサノ。それはヨモツの使いだ。うぬらに勝てるか？」

ナガスネがニヤリとする。

炎はやがて人形ひとがたとなり、顔が現れた。それはイザに瓜二つのヨモツの魔物であった。

「我が名はオオマガツ。イザ様しもへが僕」

オオマガツと名乗った女の魔物はニヤリとした。

「これは……」

クシナダはオオマガツからイザと同じ気を感じた。

「お館様、お退きくだされ、こやつはイザと同じでございます！」

「何！？」

スサノはクシナダと共に馬を下がらせた。

「ぬ？」

そしてまたウカシの前にも、イザと瓜二つの雷を纏った女の魔物が現れていた。

「我が名はヤソマガツ。イザ様が僕」

タジカラとウズメも、ヤソマガツから離れた。

「そやつらを仕留めよ。我らはホアカリ様をお迎えに行く」

「はは」

ナガスネとウカシは死人の兵を伴い、ホアカリを追い始める。

「く！」

タジカラ達はその強大な気を放つ二体の魔物に阻まれ、ナガスネ達を追えなくなってしまった。

「ツクヨミさん、大変です！」

武彦は慌ててツクヨミに呼びかけた。

ツクヨミは自分の気を集中し、アメノムラクモに注ぎ込んでいた。

（これで足りねば、最早なす術なし！）

ツクヨミは身体中の気を送り込み、アメノムラクモに祈った。

（オオヤシマをお救いください、御剣様！）

再び剣が強く輝き出した。

「おお！」

ツクヨミとアキツは、その輝きに目を細めた。

「その願い、お聞き致そう」

剣が答えたような気がした。ツクヨミはそれを確かめるようにアキツを見た。アキツは頷いた。空耳ではないのだ。確かに剣が答えたのである。

「はー！」

ツクヨミは武彦の声を聞いた。

「ツクヨミ殿、たけひこ様が！」

アキツが叫ぶ。ツクヨミは頷き、

「御剣様、たけひこ様の元へ！」

『我を運べ、ツクヨミよ。我が力で魔を退けよう』

剣が答える。ツクヨミは言霊を使い、アメノムラクモを武彦達のところへと飛ばした。

「間に合ってください」

そう呟き、次の瞬間ツクヨミは血を吐いて膝を折ってしまった。

「ツクヨミ殿！」

アキツが驚いてツクヨミを支えた。ツクヨミは力なく微笑んでアキツを見上げ、

「大事ありませぬ、アキツ様。少し休みます」

「ええ」

それでもアキツは心配だった。

（ツクヨミ殿は身体の気を全て剣に注いだ。無理をしているのではないだろうか？）

ツクヨミはアキツの心がわかるので、それが辛かった。

（この方にここまでご心配させてしまうとは、情けなし）

それでも、身体が言う事を聞かない。アキツの肩を借り、壁にもたれた。

「たけひこ様、後はよろしくお願いします」

そしてツクヨミはそのまま気を失った。

三十四章の章 ホアカリの後悔、アキツの愛

「ごだまし
言霊師。」

その昔、オオヤシマでは人々に崇められ、王族より上位に位置していた。

しかし、その特別な能力を利用する者、その特別な能力を使って自分の立場を良くしようと企てる者の存在により、一族は絶滅寸前まで追い込まれた。

そして現在のオオヤシマには、言霊師はツクヨミしかない。

「はー！」

ツクヨミは子供の頃の夢を見てうなされ、目を覚ました。すると目の前にワの国の女王になるはずであったアキツの顔があった。彼女は今まで以上に美しく見えた。

「ア、アキツ様？」

ツクヨミは状況が理解できず、混乱した。

「すみませぬ。貴方を案じておりました。無礼をお許してください」
何の事かわからないツクヨミであったが、自分がアキツに膝枕をされている事に気づくと、仰天して飛び起きた。

「無礼は私の方でございます。何と大それた事を……」

ツクヨミは地面に額を擦りつけてアキツに詫びた。

「顔をお上げください、ツクヨミ殿。私がした事です。そのように詫びられては困ります」

アキツは微笑んで言う。ツクヨミはゆっくりと顔を上げ、アキツを見た。

「大事なく、安心致しました。しかし、まだご無理はされませんように」

「は、はい」

ツクヨミは顔が火照るのを感じ、頭を下げた。

「アメノムラクモまで使ってしまった。それでもイザに勝てねば、我らは滅びてしまおうでしょう」

アキツは社のある部屋の外を見やって呟いた。ツクヨミは再び顔を上げ、

「たけひこ様がお救いくださいます。ご案じなさいますな、アキツ様」

「そうですね」

アキツはツクヨミを見てニッコリした。彼女から、今までに感じた事のない波動が伝わって来て、ツクヨミはまた混乱しそうだ。

（如何なる事なのか？ アキツ様が、その……）

ツクヨミはいけないと思っても、アキツの心が読めてしまう。彼女はツクヨミに信頼ではなく、愛情を抱き始めている。あつてはならない感情だ。

（言霊師は滅ぶべきなのだ。私は自分の血筋を残そうとは思っておらぬ）

アキツの気持ちは叫びたくなるほど嬉しかったが、それに答える事はできない。

（私もアキツ様をお慕いしている。しかし、それはあくまで憧れ。アキツ様と添いたいなどは……）

自分の気持ちを必死に押さえ込もうとするツクヨミであった。そして言霊師には、他族との交わりを禁じた掟があるのだ。その理由を知っているからこそ、余計にアキツの思いには答えられないツクヨミである。

一方武彦達は、イザの送り込んだオオマガツ、ヤソマガツの二体の魔物と睨み合ったままだった。

「このままでは、ホアカリ様が……」

水使いのクシナダが夫スサノを見上げる。スサノも焦るばかりで、打開策が浮かばない。

「こやつら、我らでは太刀打ちできぬ。如何にすれば……」
スサノは齒軋りした。

「おのれ！」
タジカラとウズメの夫婦も同様であった。

「あ！」
その時武彦は、ツクヨミの声を聞いた。

『たけひこ様、そちらに神劍アメノムラクモをお送りしました。それでヨモツの魔物をお斬り下さい』

「は、はい！」

武彦は空を見上げた。すっかり明るくなったオオヤシマの青空を、小さな光が進んで来るのが見えた。

「あれかな？」

それはタジカラ達にも見え、そして魔物達も気づいた。

「そうはさせぬ！」

ヨモツの黒火を身に纏まとったオオマガツが飛翔した。

「待て、魔物め！」

クシナダが水を飛ばし、オオマガツを縛ゆった。

「温ぬるいわ！」

オオマガツはクシナダを睨みつけてから、水の縛りを易々と吹き飛ばすと、そのまま高度を上げ、光に迫った。

「くー！」

ウズメが海神わたつみを召喚し、オオマガツを聖なる水で攻撃した。

「無駄よ！」

オオマガツは聖なる水の攻撃も受け付けない。ウズメは啞然とした。

「これは如何なる事だ……？」

ウズメは二体の魔物の底知れぬ力に震えてしまった。

「行かせぬ！」

タジカラが馬を駆って追い始める。それにスサノが続く。

「待ってください、二人共！」

武彦も慌てて追いかける。ウズメとクシナダは目配せし合い、続こうとしたが、

「うぬらは我が相手じゃ」

と雷を身に纏ったヤソマガツが叫んだ。

「うぬ！」

ウズメとクシナダはヤソマガツを睨んだ。

「あれか？」

オオマガツは光の近くまで飛んで来ていた。彼女は身体に纏っている黒火を大きく広げた。光を取り込んで滅するつもりだ。

「何！？」

その光は突如巨大化し、オオマガツに襲いかかった。

「ぬおお！」

光が掠めた部分の黒火は削り取られたかのように消えた。オオマガツは辛うじて光から逃れ、地上に降りた。光はそのままオオマガツを無視するように飛び去った。

「あれは何者ぞ？」

彼女はその見聞きした事を逐一ヨモツの女王イザに伝えている。

『オオマガツ、それはアメノムラクモじゃ。不用意に近づくといい伊ザの声が返って来た。』

「アメノムラクモ？」

オオマガツはイザの分身であるが、イザの知識を全て与えられている訳ではない。彼女にはアメノムラクモの力が計れなかった。

「あ！」

武彦達はアメノムラクモの光が近づいて来るのを見た。

『磐神武彦よ、我を使うがいい。ヨモツの魔を退治るぞ』

「え？」

武彦はその声がどこから聞こえたのかわからなかった。しかもその声は彼の名を知っている。不思議だった。

「ああ！」

光はやがて剣の形となり、武彦の手に降りて来た。

「おお！」

武彦がアメノムラクモを手にした途端、輝きが更に増し、それを見たタジカラとスサノは驚愕の声をあげた。

「よおし！」

武彦はアメノムラクモを脇に差し、鞘から抜いて構えた。そしてまず、オオマガツに向かう。

「何！？」

オオマガツは、前方から迫る武彦の姿を見て驚愕した。

「あれは、まるで……」

まるで何だ？ オオマガツは頭の中の靄のようなものを振り払おうとするが、どうしても思い出せない。彼女は慌てて飛翔し、相棒のヤソマガツの元へと急いだ。

「逃げるのか？」

追いかけていたが、武彦は飛翔の術を知らない。ツクヨミがいなければ飛べないのだ。

『戻るのじゃ、武彦。女子達おんなが危うい！』

「はい！」

武彦はアメノムラクモを鞘に戻し、手綱を握り締めた。

ホアカリ達は背後から迫る異様な風体の軍に気づき、逃走していた。その軍の歩兵達はゆらゆらと歩いており、馬はよろけながら進んでいる。移動する速さはそれ程速くはない。

「何者か？」

馬を駆りながら、ホアカリの嫡男ウマシが老参謀に尋ねる。

「死人しにんの兵です。逃げるしかありません」

「し、死人？」

ウマシはその言葉に震えた。彼も武彦と同じで、その手の類いが苦手なのだ。

「ヨモツが現れたというのか？」

ホアカリは悲しそうな顔で呟いた。

「オオヤシマはやはり滅ぶのか……。我ら兄弟の罪は重いぞ、ウガヤ」

ホアカリはヤマトの国の方角を見やり、涙を流した。

そんな兄の憂いも知らず、弟ウガヤは大軍を率いてアキツとツクヨミのいるアマノイワトを目指していた。先に出陣したイツセを途中で待機させ、合流する手筈である。

「私も嫌われたものです」

ウガヤの左斜め後ろで馬を駆るオモイが言った。ウガヤは手綱を引き締め、

「イツセの我が儘だ。お前を蔑ろにするなど、許せる事ではない。戦の後、きつく罰する」

と怒りを露にした。イツセがオモイの同行を拒否した事を怒っているのだ。

「ツクヨミを討ち、アキツを捕らえれば、この国は治まる」
ウガヤはニヤリとした。

（どこまでも愚かな者だ。お前らの国はもうすぐ滅ぶのだ、ウガヤよ）

オモイはその青い目をキラつかせ、フツと笑った。

三十五章 武彦の憂鬱、ツクヨミの戸惑い

遂に神剣アメノムラクモを手にした磐神武彦。いわがみたけひこ 戦いはこれで動くのだろうか？

「ヤソよ、油断するな。あの者の持つ剣は、アメノムラクモぞ」
相棒である雷の魔物ヤソマガツの元に戻った黒い炎の魔物オオマガツが囁く。

「アメノムラクモ？ 聞いた事もなし。恐るる程の物か？」

ヤソマガツはオオマガツを嘲笑うように言う。

「身をもって知るしかあるまい」

自分の言葉を大袈裟と思うヤソマガツに、オオマガツはムツとした。ヤソマガツはすでにクシナダとウズメを追い詰めていたのだ。

「うっ……」

クシナダもウズメも、ヤソマガツの放つ雷を掠められ、傷ついていた。その白く美しい肌のあちこちが火傷のように赤く腫れていて、衣も切り裂かれていた。

「ヨモツめ……」

ウズメは齒軋りしてヤソマガツを睨む。クシナダが、

「私の水は魔物には効きませぬが、ほんの一時、足止めができます。その隙を突いて、仕掛けて下され」

と小声で告げる。

「承知しました」

ウズメは、クシナダが自分を犠牲にして彼女を先に行かせるつもりだとは夢にも思っていなかった。

タジカラとスサノは武彦と共にウズメ達のところへと急いでいた。
「ウズメ、無事でいてくれ……」

タジカラは自分の迂闊さを恥じていた。

（ウズメとクシナダ殿を残して離るるなど、あるまじき事だ。何と愚かな！）

スサノもまた焦っていた。

（クシナダの水を弾き、ウズメ殿の海神わたつみすら受け付けぬとは、何と
いう魔物なのだ）

「先に行きますよ！」

武彦の馬が先行する。しかも、タジカラ達が追いつけないほどの速さだ。

『武彦よ、我を抜くのだ。我の光を身に纏い、魔物を斬るのだ』

「はい！」

武彦は馬上で抜刀した。するとアメノムラクモが輝きを増し、武彦と馬をその光で包んだ。

「何じゃ？」

武彦の放つ光に気づいたオオマガツは、

「アメノムラクモを持つ男が来るぞ」

「イワレヒコであろう。彼奴は愚か者あやうよ。力にしか頼れぬ男だ」

ヤソマガツは、まだ相手を見くびっていた。二体の魔物はイワレヒコの秘密を知らない。

「えい！」

その隙を突き、クシナダが二体の魔物を水の縄で縛った。

「このような術、効かぬと言っておろう？ わからぬのか、愚か者め！」

オオマガツが怒鳴り、水の縄を切るうとする。

「させぬ！」

クシナダは続けざまに水を放ち、オオマガツとヤソマガツを縛り上げた。

「ウズメ殿、早うホアカリ様のところへ！」

クシナダは苦しそうな顔でウズメに叫んだ。

「ですが、クシナダ殿……」

ウズメはその時クシナダの考えに気づいた。彼女が自分を犠牲にしようとしている事に。

「早う！ もうすぐお館様やかたさまがご到着です。ここは大事ありませぬ！」
クシナダは動かないウズメを睨みつけて怒鳴った。その目は涙で光っていた。

「わかり申した！」

ウズメはクシナダの決意を受け止め、涙を堪えて馬に乗り、その場から駆け出した。

「行かせぬぞ、女あ！」

ヤソマガツは水で動きを封じられながらも雷撃を放った。

「そのような事、許さぬ！」

クシナダの水が走り、雷撃を吸収する。

「ぐ……」

その衝撃はクシナダに伝わった。ガクツと膝を折る。

「死ぬるつもりか、お前は？」

ヤソマガツが不思議そうな顔でクシナダを見下ろした。彼女にはクシナダの行動が理解不能なのだ。

「クシナダアツ！」

スサノが雄叫びを上げ、炎の剣を振り回しながら駆けて来る。そしてその前を光に包まれてアメノムラクモを振り上げた武彦が来る。

「オオよ、分ぶんが悪くなったぞ」

ヤソマガツが呟いた。オオマガツは水の縄を断ち切り、

「もはや十分に時を稼いだ。我らの役目は終わった。行くぞ、ヤソ」

「うむ」

武彦の斬撃が届く寸前に、二体の魔物はフツと姿を消してしまっ
た。

「ああ！」

空振りをし、武彦はグラツと揺れ、馬から落ちそうになった。

「逃げたのかな？」

武彦は独り言のように言った。

『そのようだ。いや、逃げてくれたのだ。あのまま留まられば、味方が幾人が死んでいた』

アメノムラクモの冷静な言葉が聞こえた。

「そう、なのかな……」

武彦は馬を下り、蹲すくっているクシナダに近づいた。

「大丈夫ですか、クシナダさん？」

クシナダはその声に反応して顔を上げ、

「ありがとうございます、たけひこ様。大事ありません」

と答えたが、顔は辛そうだった。

『武彦よ、クシナダに手をかざせ。お前には癒しの力がある』

アメノムラクモが言った。

「は、はい」

武彦はクシナダに右手をかざした。武彦の手の平から、緩やかに温かい光が放たれる。すると、雷撃で傷ついた彼女の美しい顔が元に戻った。切り裂かれた衣も修復し、更に雷撃の衝撃で弱っていた身体も、たちどころに回復した。

「これは？」

何が起こったのか理解できないクシナダは、武彦を見上げた。

「もう大丈夫ですよ、クシナダさん」

武彦はニッコリとした。クシナダは武彦の力で身体が回復した事に気づき、

「勿体のうございます」

と地面に平伏ひれふした。武彦はクシナダの行動に驚き、

「そんな、やめてください。僕達は共に戦う仲間じゃないですか。当たり前前の事をしただけですよ」

「たけひこ様」

クシナダは武彦の優しい言葉に目を潤ませる。武彦はその美しい瞳に思わずドキッとしてしまった。

「クシナダ！」

スサノが馬を飛び降り、駆け寄った。

「お館様」

クシナダは目を潤ませたままでスサノに微笑み、

「たけひこ様がお助けくださりました」

「おお」

スサノは跪き、

「かたじけのう存じます、たけひこ様
と頭を垂れた。」

「いや、当然の事をしただけですよ」

武彦は照れ臭くなって頭を掻いた。

「クシナダ殿、ウズメはどうした？」

タジカラが追いつき、尋ねる。クシナダは立ち上がり、

「ホアカリ様のところへ向かいました」

「そうか。我らも急ぎましょう、たけひこ様」

タジカラがそう言った時、武彦は自分に異変が起こっているのを感じた。

「あ」

彼に限界が訪れたのだ。武彦は自分の世界へと戻ってしまった。

「おお！」

いきなり魂が抜けたように倒れ伏すイワレヒコをスサノとタジカラが素早く支えた。

「たけひこ様が異界にお戻りになったようだ」

タジカラが言った。スサノはクシナダを見て、

「イワレヒコ様のお身体をアマノイワトに運んでくれ」

「はい」

クシナダは微笑んで答えた。

「行くぞ、スサノ」

「おう」

タジカラとスサノは再び騎乗し、ホアカリを目指す死人の軍団を追った。

「は」

武彦は目を覚ました。自分の世界に戻った事に気づくのに、時間がかかる。

（戻ったのか、僕）

途端に混乱が続くオオヤシマの事が心配になる。

（大丈夫だろうか？）

「こら、警神、ぼんやりするな」

学校一蔵しい尼照先生あまてるの声が聞こえた。

「す、すみません」

武彦は慌てて謝った。ふと見ると、心配そうみややしくみかあめな都坂亜希の顔が見えた。

「どうしたの、武君？ 最近、また変だよ」

休み時間に亜希が声をかけて来た。

「そう？ そんな事ないんだけどなあ」

武彦は、亜希ちゃんて何でもお見通しで怖いなあ、と思った。

「呑気ね、全く」

亜希は心配しているのに何も感じていない武彦の事がもどかしいのだ。武彦はそんな亜希の思いを感じたのか、

「ごめん」

と言った。

「別に謝らなくてもいいわよ」

そう言いながら剥れる亜希の潤いのある唇を見ているうちに、武彦は亜希とのキスを思い出してしまふ。あれはキスと呼べるものだったのかは武彦にはわからなかったが。

「どうしたの？」

亜希は急に赤くなった武彦に気づき、顔を覗き込んだ。

「き、昨日の事、思い出しちゃった……」

武彦の呟きに亜希もボツと赤くなる。彼女もその時の事を思い出

し、ドキドキし始める。

「バ、バカ！」

そして、クルツと背を向けて立ち去ってしまった。

「はあ」

武彦は姉美鈴に真相を打ち明けようと決意した事を思い出した。

「ふう」

また気が重くなる武彦だった。

三十六の章 武彦の本音、美鈴の不安

武彦は重い足取りで家に帰った。何度逃げ出そうと思ったか知れないが、逃げてても何の解決にもならないと考え、踏み止まったのだ。「只今」

玄関の鍵がかかっていないという事は、姉美鈴が帰宅しているという事だ。今日はいつもより早い。
(どうして今日に限って早いのだ)

武彦は、一度頭の中で予行演習をしようと思っていたのだが、それははかなくも打ち砕かれた。

「お帰り、武彦。待つてたよ」

姉は感情が見えないような表情でキッチンから姿を見せ、武彦を出迎えた。

「あ、うん」

そのまま、まるで容疑者が連行されるような雰囲気、武彦は姉について行く。

「朝の話だけどさ、何？」

姉はキッチンの椅子に座るなり俯いたままの弟に切り出した。武彦はビクツとして、

「う、うん……」

と顔を上げ、姉を見た。そして、意を決した。

(頭がおかしくなったと思われるもいい。とにかく、全部話そう)
彼は隠し事をしている事の方が辛かったのだ。

「あのさ、姉ちゃん……」

美鈴の訝しそうな顔を見ながら、武彦は切り出した。

武彦は、異世界の住人であるアキツに呼ばれて「オオヤシマ」という島に行った事、そのアキツが幼馴染の都坂亜希みやまかほに瓜二つな事、自分の魂が降ろされたイワレヒコの姉イスズが美鈴にそっくりな事、

二人の母タマヨリが母珠世にそっくりな事を話した。

「それで？」

姉は全く信用していない顔をしていた。それは最初からわかっていたので、武彦はそれほど悲しくはなかった。

「それで、オオヤシマにヨモツって言う闇の国が侵攻して来て、アキツさん達が危ないんだ」

「危ないのはあんだだよ、武！」

とうとう美鈴は怒り出して立ち上がった。武彦はここまで我慢してくれた姉に感謝したいくらいだった。

「どうしちゃったの、あんだ？ そんなバカげた話を姉ちゃんに聞かせて、どういうつもり？」

全く正当な疑問だ。武彦には何も言い返せない。

「やっぱり、もう一度病院に行こう、武。姉ちゃんがついて行ってあげるから」

「僕は狂ってなんかいないよ、姉ちゃん！」

武彦は生涯で一番大きな声を出した。美鈴も弟の大声に驚いて椅子に座ってしまった。目を見開き、口をポカンと開けたままで固まっていた。たかのように動かない。

「本当の話なんだよ。嘘でも妄想でもないんだ」

武彦は美鈴の目を真っすぐに見て言った。

「……」

姉は言葉を失っているようだ。武彦は続けた。

「こんな話を信じろって言うのは無理かも知れないけど、本当に本当の話なんだよ。僕はおかしくなっていないよ、姉ちゃん」

ようやく我に返った姉はジッと弟を見た。その目は悲しみに満ちていた。涙が溢れそうになっている。

「わかった。今日はバイトを休め、武。母さんが帰ったら、もう一度その話をしろ」

「うん……」

姉は理解をしてくれたのではない。自分には手に負えないと判断

し、母に委ねる事にしたのだ。

「姉ちゃんは出かけるけど、お前は家にいろよ」

「うん」

姉の言う通りにするしかない。

しばらくして、美鈴は大学に出かけた。武彦を見る目は相変わらず悲しそうだったが、母の携帯にメールで事情を伝え、母に任せる旨を書くと、後ろ髪を惹かれるようにして玄関を出て行った。

武彦もコンビニの店長に電話し、具合が悪いので休むと嘘を吐いた。

（昨日もバイト行けなかったのになあ）

気が重くなる。母はどんな顔をするだろう？ 姉は母に何と伝えただろう？ 母も自分の事をおかしくなってしまったと思うのだろうか？ 不安だった。

（母さんも信じてくれないだろうな。どうしたらいいのだろうか？）

一緒に行ってもらえれば、きっと信じてもらえる。そう思う武彦だが、そんな事ができるはずもなく、そんな事をあの大変な状況に置かれているアキツやツクヨミに頼めるはずがない。

「え？」

しばらく思い悩んでいた武彦の思索を破るように携帯が鳴る。都みや坂こさかの亜希からだ。武彦は何だろうと思いついて、出た。

「武君、大丈夫？」

亜希は部活の帰りにコンビニにより、武彦が病欠だと知って驚いたらしい。

「ごめん、ちょっといろいろあって、休んだんだ」

亜希にも別の意味で心配をかけてしまったのを申し訳ないと思った。

「脅かさないでよ」

亜希はそう言ってから、

「今一人？」

「うん、一人だよ」

武彦はどうしてそんな事を訊くのだろうと思ってしまふ鈍感な男である。

「遊びに行っていない？」

亜希からそんな事を言われたのは、小学校以来だ。

「い、いいけど」

何故かギクツとしてしまふ。すでに条件反射である。

「じゃ、今から行くね」

何だろう？ 亜希が来るのはかまわないけど、その間に母が帰って来ると、話がややこしくなりそうだ。また武彦は逃げ出したくなつた。

「今晚は」

やがて亜希が玄関から入って来た。武彦と同じく、まだ制服のままだ。武彦はキッチンから玄関に行き、

「上がって」

「うん」

いつになくドキドキする。今までは、亜希が怖くてドキドキしたのだが、今日は違う理由でドキドキしているのだ。

(可愛いよなあ、亜希ちゃんて)

改めて、靴を揃えている幼馴染をマジマジと見てしまふ。

「な、何よ、武君？」

亜希は武彦の視線に気づき、振り返つた。

「あ、ごめん。どうしたの、急に？」

そんな事を訊いてしまふところも、武彦らしい。

「誰もいないって言うから、心配だったの。武君てさ、具合悪くても言わないタイプだから」

亜希は武彦の事を心配して来てくれたのだ。長い付き合いだから、いろいろわかつてしまふ。

「具合悪いつていうのは、嘘なんだよ。だから大丈夫だよ」

武彦は心苦しくなつて本当の事を言つた。

「どうして嘔吐いたの？」

亜希は不思議そうに尋ねる。当然の疑問だ。今日は返答に窮してばかりいる武彦である。

「いや、何となく……」

頭を掻いて、笑って誤魔化す。亜希はフウツと溜息を吐き、呆れた顔をした。

二人はキッチンに行き、向かい合って座った。さっきまで美鈴が座っていたところに亜希が座る。

（どうしよう？ 母さんが帰って来たら、亜希ちゃんには帰ってもらおうかな？）

でも、ある意味では「関係者」である亜希にも、真実を打ち明けた方がいいかも知れない、とも思う。

（でも、母さんとはともかく、亜希ちゃんには絶交されそうだしなあ）
「学校でも様子が変わったから、やっぱり具合が悪いんじゃないの？」 さっきからボンヤリして……」

亜希の声にハツとする。

「ほ、ホントに何ともないんだよ。元気だよ」

そう言えば言うほど嘘に聞こえそうだ。

「そう？」

亜希はムツとした。武彦は胸が痛んだが、まだ迷っていた。

（母さんだけに話して、それから考えよう）

しかし、母の対応次第では、武彦は入院させられてしまうかも知れない。

（どうしたらいいんだろう？）

堂々巡りである。その時、

「只今」

と母の声がした。

「あれ、おばさん、今日は早いね」

亜希が立ち上がる。武彦も慌てて立ち上がり、

「そ、そうだね」

と言つと、素早く玄関へと向かった。

「あ、武君！」

亜希もそれに続いた。

「あら、亜希ちゃん、いらっしやい」

珠世は微笑んで亜希を見る。亜希も笑顔になって、

「お邪魔してます」

母と亜希が笑顔で挨拶し合う中、武彦は気が気ではなかった。

「おばさんが帰ったのなら、安心ね。じゃあね、武君」

亜希が帰ってしまうのは寂しいけど、これからの事を考えると帰つてもらった方がいいので、武彦は複雑な心境だ。

「う、うん」

「あら、もう帰っちゃうの、亜希ちゃん？」

何故亜希が来ていたのか知らない珠世は、キョトンとした。

「はい。お邪魔しました」

亜希はニコツとして手を振り、玄関を出て行った。それを見届けてから、

「隅に置けないわね、武彦」

母がニヤツとして武彦を見る。

「そ、そんなんじゃないよ」

武彦は慌てて否定する。母はすぐに真顔になって、

「美鈴が妙なメールを送って来たから、母さん、今日はシフトを変えてもらったのよ」

母の視線にビクツとする武彦である。

「え？」

どんな大袈裟な事を書いたのだろっ、姉は？ 武彦は頭が痛くなりそうだった。

「さ、話を聞かせて、武彦」

母はキッチンへと歩き出した。

そして武彦は、気が狂ったと思われるのを覚悟で、美鈴に話した

のと同じ事を、珠世にも話した。珠世は呆れて怒り出すかと思っただけ、反応が違った。

「そうか。ひいお祖父ちゃんの血を一番強く引いていたのは、あんただったんだね」

何故か母は嬉しそうに言った。

「は？」

珠世の言葉に、今度は武彦が、

（母さん、シヨックでおかしくなったのかな？）
と、思ってしまった。

三十七の章 珠世の祈り、イツセの焦り

武彦は母のあまりにも意外な発言に驚いていた。

「ひいお祖父ちゃんて……？」

思わず素っ頓狂な声で訊いてしまう。珠世はフッフと楽しそうに笑い、

「母さんのお祖父ちゃんは、人間の未知なる力に興味があつて、あんたが今話したような異界の事を研究していたの」

武彦にはその話は初耳だった。珠世は不思議そうな顔で自分を見つめる武彦に微笑み、

「だから、親戚中から変わり者呼ばわりされていて、私の父、要するにあんたのお祖父ちゃんは、凄く嫌っていたわ」

「ふーん」

どうやら、自分もその仲間だと判定されたようだ。武彦はガツカリした。母は姉とは違う反応をしてくれたと思つたのだ。

「でもね、母さんはそんなお祖父ちゃんが大好きだったのよ。とっても面白いお祖父ちゃんだったから」

母がまた更に意外な展開を話し出した。

「そ、そうなんだ……」

話が違う方向に動き始めたぞ。武彦にはもう展開が読めなくなつていた。

「あんたのお父さんと出会えたのも、そのお祖父ちゃんのおかげなの。だから、あんたの話を聞いた時、お祖父ちゃんと父さんがあんたを導いてくれたのかなつて、思つてしまつたわ」

母珠世は涙ぐんでいた。滅多な事では泣かない母も、亡き父の事を話す時だけは涙脆くなるのはいつもの事だが、今回は悲しそうではない母の涙が武彦には不思議でならない。

「何か、嬉しくなつた。あんたがひいお祖父ちゃんと父さんに繋がっているのがわかつて」

珠世は零れ落ちる涙を拭いながら言った。

「そう言えば、父さんて、先生だったんだよね？」

武彦は僅かに残る父の面影を記憶の彼方からたぐり寄せながら、母を見た。

「そう。歴史の先生だった。でも、どちらかって言うと、妖怪の話や、昔話に熱中する変わり者先生だったの。だから、うるさい父兄からは疎まれていたわ」

母はまた楽しそうに微笑んだ。父兄に疎まれる事など、全く気にしていなかったようだ。

「これはきつと巡り会わせよ、武彦。その人達の力になってあげなさい。きつと、ひいお祖父ちゃんと父さんが助けてくれるから」

そう言って、珠世は武彦の手を握りしめた。

「う、うん」

意外な話の進行に、武彦は戸惑いながらも喜んでいた。

「良かった。姉ちゃんに怒鳴られたから、母さんにも怒られると思っってたんだ」

珠世はその言葉に苦笑いした。

「美鈴は現実主義者だからね。信じてくれないよ、自分の目で見ない限り」

母の言葉に、武彦は納得した。

「そうだね。デジカメで撮って来られるといいんだけどね」

武彦はふと思いついた事を言ってみた。

「そのオオヤシマって言うところに行く時に、あんたが身に着けていれば、持って行けるかもよ」

母は突拍子もない事を言い出す。

「そ、そうかな？」

でも試してみる価値はある。武彦は早速実行に移す事にした。

「やってみるよ」

「そうそう。その方がいい」

母はあくまで前向きだ。武彦はふと思った。

「母さんは、僕がそんな所に行くのが心配じゃないの？」

武彦の大真面目な顔に、珠世はニッコリして、

「心配じゃないと言えば嘘になるけどね。でも、あんたはそのアキツさんを助けたいんでしょ？」

アキツを助けたい。それを指摘されて、武彦は顔が熱くなる。

「うん。それだけじゃないよ。タマヨリさんも、イスズさんも、他人とは思えないんだ」

「そうね」

母はクスツと笑った。そして、

「大丈夫。必ずあんたは無事に戻るわ。ひいお祖父ちゃんと、父さんがついでる。それに、ツクヨミさんは凄く強いんでしょ？」

「うん」

武彦は、母の言葉で迷いを吹き飛ばした。

「仲間を信じなさい。そして、自分を信じなさい。きっと願いは叶うわよ」

珠世は更に強く武彦の手を握りしめた。

「ありがとう、母さん」

武彦は涙ぐんでしまった。

「何泣いてるの、武彦？ 悲しい事じゃないでしょ？」

そう言いながらも、珠世も目を潤ませている。

「母さんこそ……」

武彦はそう言いながら涙を拭った。その時、アキツの声が聞こえた。

『たけひこ様』

緊迫した声だった。武彦はスツと立ち上がった。

「じゃあ、行くよ、母さん」

珠世は涙を堪えて微笑み、息子を見上げた。

「ええ。気をつけてね」

「うん」

武彦は自分の部屋に戻り、小遣いを溜めて買ったデジカメを机の

抽斗ひきたしの奥から引つ張り出して身に着けた。

「よし」

彼はベッドに仰向けになり、目を閉じた。

「アキツさん……」

そして武彦は眠りについた。

「武彦」

珠世は口ではあんな事を言ってしまったのを後悔している。本当は心配で堪らない。止めたかった。行かせたくはなかった。しかし、それを言えなかった。

「あの子のあんな真剣な顔、初めて見たわ、貴方」

珠世は自分の部屋に行き、亡き夫の笑顔の写真に語りかけていた。

「武彦を守ってね、貴方」

珠世は手を合わせ、夫に祈った。また彼女の頬を涙が伝つたった。

次に武彦が目を開けると、そこはアマノイワトの広間だった。武彦を囲んで、アキツ、ツクヨミ、クシナダがいた。

「おお、たけひこ様、お戻りなさいませ」

ツクヨミが嬉しそうに声をかけた。アキツがその隣で微笑んでいる。

「皆さん、ご無事で」

そして、タジカラとスサノがいない事に気づく。

「タジカラさんとスサノさんは？」

「二人は、ホアカリ殿を守るために、死人しにんの集団を追っています」
アキツが答える。

「そちらも気がかりですが、こちらも……」
ツクヨミの顔が曇る。武彦はツクヨミの顔色が気にかかり、尋ねた。

「どうしたんですか？」

「ウガヤ王が、イツセ様と共にこちらに向かっておられます」

ウガヤ王。ヤマトの国の王にして、イスズ姫の父であり、今その身体を借りているイワレヒコの父でもある。そしてイツセはその二人の兄だ。

「イツセ様はともかく、ウガヤ様はあの異国の者に操られておいでのご様子。如何にしたものか……」

クシナダが悔しそうに呟く。異国の者とは、ヤマトの国の軍師であるオモイの事である。

「オモイもイザに通じていると思われませぬ。何としても、ウガヤ様からオモイを引き離さねばなりません」

ツクヨミが力強く言った。それにアキツとクシナダが頷く。

「敵はオモイ一人。そう考えれば、いくらかは気持ちが悪く着きましよう」

アキツが言った。今度はツクヨミとクシナダ、そして武彦がそれに頷く。

「行きましよう」

武彦が声をかけ、立ち上がった。ツクヨミがそれに応じる。

「アキツ様とクシナダ様は、ヒラサカを」

「はい」

二人の美女はツクヨミの言葉に大きく頷く。

「参りましよう、たけひこ様」

「はい」

武彦はツクヨミを伴い、イワトの外へと向かった。

「私達も参りましよう、クシナダ」

「はい、アキツ様」

アキツとクシナダも、イワトの奥にある闇の国ヨモツとの境界ヒラサカに向かう。

その頃、ウガヤはイツセの軍と合流し、ゆっくりとアマノイワトを目指していた。

(本当にこのままで良いのか？ 父上がオモイに誑かびやうされているのは間違いないのだが)

嫡男でありながら、力のある弟イワレヒコに遅れを取っていたイツセは、ウガヤに対する危機感が強い。

(イワレヒコが変わったおかげで、ようやく私は父に向き合う事ができるようになった。今、それを躊躇ちゆうちゆうしてしまうのは何故だ？)

イツセは、ウガヤ以上にオモイの事が気になっていた。異国の者だというのも、偽りかも知れぬ。彼はそんな風に考え始めていた。

(父をオモイが操さくっているのであれば、私が何を言っても通じぬ。如何にするべきなのか？)

イツセは迷っていた。自分の話を聞いてくれない父に、その父が全幅の信頼を寄せている軍師の事を説いてもどうにもならないと思えたからだ。

「どうした、イツセ？」

黙り込んでいるイツセを不信に思い、ウガヤが声をかける。

「いえ」

イツセは短く応じた。ウガヤは訝あやしそうな顔をしたが、それ以上は何も言わず、前を見た。

「アマノイワトはもうすぐぞ」

イツセはチラッとウガヤの後ろに着いているオモイを見た。彼は無表情で、何を考えているのかわからない。

(この者、何をするつもりなのだ？)

イツセの不安は増すばかりだった。

三十八の章 ウズメの嘆き、スサノの怒り

タジカラとスサノは、死人しにんの群れに追いついていた。

「陛下だけは、何としても……」

スサノのその呟きの中に、

「愚かな王子の命はどうでもよい」

という思いが込められている事をタジカラは知らない。スサノはホアカリ王の嫡男であるウマシを見限みきりっているのだ。

「お館様！」

先行していたタジカラの奥方ウズメが二人に近づく。彼女は海神わたつみの聖なる水の力で雷いかずちの魔物であるヤソマガツに負わされた火傷を治癒していた。タジカラは奥方の美しい顔を見てホツとした。死人達はホアカリを追うのをやめ、彼等を先に始末する事にしたようだ。

「スサノ、我が行く手阻むは許さぬぞ」

顔が半分しかないナガスネが言い、前に進み出た。その後ろに自分の首を脇に抱えたウカシがいる。どちらももはや、生きていないばかりか、死んでもいない魔物である。

「ナガスネ様……」

スサノは右手を握りしめた。タジカラが、

「スサノ、落ち着くのだ。この者共はもはやお前の知る者ではない」と声をかけると、

「わかつておる！」

スサノは苛ついて怒鳴った。それを心配そうにウズメが見守る。

「我が兵よ、こやつらを討て。イザ様の邪魔をする者は、全て敵だ」
ナガスネのその言葉に、スサノは意を決した。

「タジカラ、うぬの言う通りよ。こやつらは魔物。もはや、あの方ではない」

「スサノ」

タジカラはスサノが心の中で泣いているのを感じていた。

(もし私が同じ目に遭うたなら、スサノのようにできるか?)

スサノはナガスネを睨みつけて、

「せめて、この剣の炎にて天へとお送りするが、我らの務め」

「うむ」

タジカラも嘲笑うナガスネを睨みつけて頷く。

「ウズメ、兵共は任せたぞ」

「はい」

ウズメは海神を召喚し、その聖なる水で兵達を攻撃した。

「ぐおおおお！」

聖水を浴び、のたうち回りながらも浄化されて行く兵を見て、ウズメは泣いた。

「すまぬ、皆、すまぬ」

兵達は共にヤマトの国を守って来た者達である。ウズメは我が身を切られるような痛みを感じていた。

「スサノよ、我らはあるような水ではやられぬぞ。皆をイザ様の臣下にするまで、我らは倒れぬ」

ウカシがゲラゲラと笑いながら言い放つ。

「黙れ、裏切り者が！ 今送り火で天へと上がらせてやる！」

スサノは剣を抜き、紅蓮の炎を吹き出させた。それは彼の怒りの強さと悲しみの深さを示しているようであった。

「ならば、我らも」

ナガスネは腰に下げている剣を抜いた。その剣は、闇のように黒い剣である。

「ぬ？」

スサノとタジカラは、その異様な雰囲気のある剣に眉をひそめた。

「我が剣は、イザ様のお力が宿りし剣。うぬら凡庸なる輩には太刀打ちできぬ業物よ」

ナガスネは嬉しそうに剣を眺め、次いでタジカラとスサノを睨みつけた。

「覚悟致せ！」

タジカラは思わずスサノを見た。スサノもタジカラを見ている。二人共、ナガスネが出した剣を見た事がないのだ。当然である。黒き剣は死人の剣である。二人が知るうはずがない。

「お館様！」

兵達を浄化したウズメが戻り、ナガスネに海神で攻撃を仕掛けた。「効かぬ！」

海神の聖水はナガスネにかかる事なく消滅した。

「何と！？」

ウズメは息を呑んだ。

「我らはイザ様のお力を頂いているのだ。そのような見戯にも等しい術で、我らを倒せると思うたか？」

ナガスネがウズメを見た。ウズメはそのナガスネの異様な風体と、その目の恐ろしさにたじろいだ。

「消えよ！」

ナガスネが黒い剣を振るうと、海神はその剣の放つ妖気で溶けるように消えてしまった。

「……」

ウズメはあまりの出来事に動く事ができない。八百万の神が消されるなど、彼女にとって考えられる事ではないのだ。

「おのれ！」

タジカラは奥方の危機を救うべく、剣を振り上げてナガスネに向かった。

「させぬよ！」

ウカシの首が飛翔し、タジカラに襲いかかる。

「うおっ！」

タジカラはその首を剣で払おうとするが、ウカシの首はまるで鳥のように動き回り、タジカラを翻弄した。

「まずはうぬからだ、ウズメ。一度、目交^{まぐひ}うてみたかったがな」

ナガスネが嫌らしい笑みを浮かべ、ウズメに近づく。ウズメは恐ろしさからか、ナガスネのおぞましい言葉に身が竦んだのか、動け

ない。ナガスネの言葉を聞きつけたタジカラはウカシの首を脇差しで叩き落とし、

「ナガスネーッ！」

と馬を駆った。スサノもナガスネの口から出たそのあまりにも下劣な言葉に仰天した。

「ナガスネ様……！」

今度こそ、完全に断ち切れなかった。もうあれは同じ方ではないのだと。

「今の言葉、断じて許せぬーっ！」

タジカラはナガスネの後方から斬りかかった。しかしナガスネはまるでそれを予期していたかのようにかわし、その反動を利用して黒い剣をタジカラに振り下ろす。

「お館様！」

ウズメの絶叫が響いた。

「くっ！」

もう少しでタジカラは首を刎ねられていたところだったが、スサノの炎の剣がナガスネの腕を斬り飛ばしていた。

「ぬっ！」

もはや痛みも感じないナガスネは只悔しそうにスサノを睨む。その上、斬り落とされた腕は、剣を持ったままナガスネに戻り、くっついてしまった。

「何と！」

タジカラとスサノ、そしてウズメが思わず叫んだ。

「タジカラーッ！」

そこへウカシの首が突進して来た。

「ぬおおお！」

鬱陶しいとばかりに、タジカラはウカシの首を剣で両断し、スサノがそれを炎で焼き払った。

「うごあーっ！」

ウカシの首は業火に焼かれ、消失した。

「後は貴様だけだ」
タジカラとスサノがナガスネを睨んだ。ナガスネはまだ余裕があるのか、ニヤリとした。

一方、ヤマトの国の連合軍が接近しているアマノイワトでは、武彦とツクヨミがそれを迎え撃つべく、イワトの入口で待っていた。
「オモイさえ討てば、戦は収まります。さすれば、後はイザのみ」
ツクヨミが前を見据えたままで言った。武彦は、
「はい」

と大きく頷く。

(もうすぐ終わる。もうすぐ終わるんだ)

武彦は高鳴る胸の鼓動を確かめるように手をかざした。

「あれ？」

その時武彦はある事を思い出した。

「如何なさいましたか、たけひこ様？」

ツクヨミが尋ねた。武彦は、

「ああ、えーとですね。僕の世界から、物が持ち込めるかなと思っ
て、確かめてみたんです」

「左様ですか」

ツクヨミは興味深そうに武彦を見ている。

「そしたら、本当に、ほら」

武彦は懐からデジタルカメラを取り出した。

「おお。これは如何なる物にございますか？」

ツクヨミは恐る恐るデジタルカメラに顔を近づける。武彦はデジタルカメラを
ツクヨミに見せながら、

「これは、写真が撮れるんです」

「しゃしん？」

ツクヨミにはそれからわからない。武彦は苦笑いして、

「つまりですね」

とツクヨミにカメラを向け、シャッターを押した。

「おお！」

ストロボが焚かれたままだったので、ツクヨミはその光に仰天した。

「ほら、ツクヨミさん、見てください」

武彦はツクヨミに撮れた画像を見せた。

「こ、これは？」

ことだまし言霊師であるツクヨミでさえ、その箱は驚愕の存在である。彼は

まさしく目を白黒させていた。

「わ、私がこの中に？ これは如何なる……」

「いえ、そうではなくてですね……」

武彦は拙い説明を繰り返して、ようやくツクヨミにデジカメの仕組みを理解してもらった。

「たけひこ様の世界は、こちらより遙かに進んでいるようですね」

「さあ、それはどうかなあ」

武彦にしてみれば、ツクヨミがもし武彦の世界でその気になれば、どんな軍事大国も滅ぼせるのではないかと思えるので、自分達の世界の方が進んでいるのかどうかはわからなかった。

「たけひこ様」

ツクヨミがウガヤ軍に気づき、前を見た。武彦の目にもその軍勢が確認できた。今までのどの軍より、兵の数が多い。そう思った。

（大丈夫かな？）

武彦は急に不安になった。

三十九の章 クシナダの戸惑い、ウズメの力

どこにあるのか、いつの時代なのかもわからないオオヤシマという存在。今まさに混迷は極みに達しようとしていた。

魔物と化してしまつたヒノモトの將軍ナガスネと、タジカラ・スサノの睨み合いは続いていた。タジカラの奥方ウズメは、その後ろで不安そうに行方を見守っていた。

「私はウカシのような訳にはいかぬぞ、スサノ。私の剣の腕は、よく知つていよう?」

ナガスネは半分失われた顔を歪ませて言う。

「……」

スサノはその言葉に苛立ちを覚えた。確かにナガスネの剣の腕は、スサノとほぼ互角であつた。だが、今その事を引き合いに出されるのは、我慢がならない。すでにナガスネは、スサノの知っているナガスネではない。命を懸けて仕えようと思つた名将ではないのだ。ナガスネは、その謀略的な思考が国王であるホアカリに好まれていなかったが、彼がヒノモトの事を第一に考えていたのは、紛れもない事実である。但し、ヒノモト至上主義の度が過ぎてヤマトの国を滅ぼそうとしていたのは誤りだつた、とスサノは思つていたが。

「委細承知!」

スサノは剣の炎をより大きくし、ナガスネに接近する。

「その焰うむほで、私を焼くつもりか、スサノ? 恩知らずな奴よ」

「恩知らず? そのような事、魔物に言われたくはない!」

スサノの反撃の言葉に、タジカラとウズメは顔を見合わせた。

「スサノめ、もはや蟠わたかまりなし、か」

「そのようですね」

ウズメはホツとして微笑んだ。彼女も、ヤマトの兵の死人しんじを浄化する時に心が痛んだ。しかし、そんな事に囚われていたら、まさし

くヨモツの女王であるイザの思う壺なのだ。イザが死人を使つて戦いくさを仕掛けるのは、まさしくそういつた動揺を誘つ心理作戦なのだから。

「ナガスネ様の御名おなをこれ以上、穢けがす事は許さぬ！」

スサノは一気にナガスネに近づいた。

「戯言ざれごとを！」

ナガスネが剣を振るう。スサノはそれを受け、跳ね飛ばす。

「ぬう！」

ナガスネの剣はしなり、反動でスサノにその剣先が襲いかかつて来た。

「何！？」

スサノは辛うじてそれをかわし、一旦ナガスネから距離をとった。

(あの剣、面妖な……。やはり、ヨモツのなせる業なのか?)

彼の額に汗が伝った。

「まずいな」

タジカラが呟く。ウズメが、

「お館様やかたさま？」

と疑問の眼差しを向ける。タジカラはスサノとナガスネを見たまま
で、

「スサノは頭で割り切つてはおろうが、心が割り切れておらぬ。踏
み込みが甘く、ナガスネに剣が届いておらん」

「そんな……」

夫タジカラと自分を争つたスサノの危機は、ウズメにとって非常に怖かった。

その頃、ヨモツとオオヤシマを隔っていたヒラサカの跡に到着したアキツとクシナダは、ヨモツの兵が再び通り抜けないように襖みそぎを行つ準備をしていた。ほとんどの穢けがれは、アキツが被っていたが、根深い物は再び戻り始めていたからだ。

「クシナダ、如何しましたか？」

顔を引きつらせているクシナダを見て、アキツが声をかけた。

「その、やはり、心が落ち着きませぬ。しばしお待ちください」
「わかりました」

アキツは微笑んで応じた。二人は、正式な被いを行うため、平服を脱ぎ、薄い絹の巫女服に着替えていた。クシナダは、素肌が透けて見える衣装を着た時、アキツの肌のきめの細かさと美しさを目にし、自分が肌を晒すのが恥ずかしく思えたのだ。

(やはり、ワの王家の方々は私達とは違うのだろうか?)

そんな事を考えてしまうクシナダであったが、アキツは、常日頃からそうだった服装に慣れていたので、クシナダの肌を全く気にしてはいない。

「クシナダ、恥ずかしいのですか?」

アキツが心を見透かすように尋ねる。クシナダはギクツとして、

「は、はい」

と正直に答えた。するとアキツはニコツとして、

「ここには私と貴女だけです。何も恥ずかしい事はありません。ましてや、我らはこれからここに残る穢れを被うのです。そのような心では、穢れは被えませぬよ」

「も、申し訳ありません」

自分の役目の重要さを思い知らされたクシナダは跪いて頭を下げた。アキツは微笑んだままで、

「詫びなくても良い。心から、邪念を追い出さない。さすれば、この襦はうまくいきましよう」

「はい、アキツ様」

クシナダは目を閉じ、自分の心の整理整頓を始めた。

アマノイワトを目指すウガヤ王の軍は、遂にその視界にイワトの入口を捉えた。

「イワレヒコ様と、ツクヨミがおります」

先発していた偵察隊が報告する。

「おのれ、ツクヨミめ。未だイワレヒコをそのまやかしで縛ってお
るのか!？」

目を血走らせ、ウガヤは憤激した。

「父上、私が先陣を賜りとう存じます」

イツセが後ろから声をかけた。ウガヤは軍師オモイを見る。オモ
イは微かに頷いた。

「許す。見事、ツクヨミを討て。さすれば、イワレヒコはまやかし
より抜け出せるはず」

ウガヤはイツセがようやく迷いを打ち払ったと思ったのだ。

「はは!」

イツセは頭を下げ、自分の部隊に戻った。

(ツクヨミと話がしたい。どちらが正しいのか、何としても確かめ
ねば)

イツセはこれを最後の機会と考えていた。ここで父上を止めねば。
彼は死を覚悟している。

「イワレヒコ……」

イツセはたった一人の弟を思い、胸が痛んだ。数多くいた弟達は、
戦で次々に命を落とした。勇猛果敢で鳴らしたイワレヒコが、今生
きている最後の弟。その弟を失いたくない。イツセは強く心に念じ
た。

「来たようですね」

武彦がゆっくりと進むウガヤ軍を見て言った。ツクヨミは頷き、

「はい。私は姿を消し、オモイに近づきます。たけひこ様は、イワ
トに迫る兵を押し留めて下さい」

「はい。でも、大丈夫ですか、僕一人で?」

武彦が不安そうに言うと、

『案ずるな、武彦。お前には我が^{われ}がついておる』

神剣アメモムラクモが輝きを増しながら言った。武彦はその声に
ホツとし、

「そうですね」

と頷いた。

「では、参ります、たけひこ様」

「はい」

ツクヨミは言霊で姿を消し、ウガヤ軍に向かう。武彦はアメノムラクモに手をかけた。

スサノとナガスネの対決は、時折剣を交えるだけで、長期戦になつて来ていた。スサノは体力は十分あつたが、精神力が尽きかけていた。

「どうした、スサノ？ この私が怖いのか？」

ナガスネがニヤリとしてスサノを挑発する。スサノはムツとして「黙れ！ そのような言葉で惑わされぬ！」

怒りが増幅し、スサノは冷静さを失つて来ていた。それが更に彼の精神を追い詰める。

「これで終いだ！」

意を決したスサノは炎の剣を振り上げ、ナガスネに突進した。

「愚かな……」

ナガスネは黒い剣を中段に構え、スサノを待ち受ける。

「む？」

ウズメはその時何かを感じた。八百万やおよその神を召喚する舞踏師の彼女ならではの勘だった。

「スサノ様、右を！」

ウズメの声が辺りに響いた。

「うお！」

スサノはその声に反応し、自分の右を見た。すると、真っ黒な何かが、今まさに飛びかかろうとしていた。

「おのれ！」

スサノは馬を止め、その黒い襲撃者を炎の剣で一刀両断した。

「ぎゃあああ！」

それは犬とも狼ともつかぬ姿のヨモツの魔物だった。魔物は業火に焼かれ、消滅した。

「ウズメ殿、忝かたじけない」

スサノはチラツとウズメを見て礼を言った。

「いえ」

ウズメは微笑んで応じた。

「汚い手を使う。やはりお前はナガスネ様ではない。魔物よ」

スサノの怒りの眼差しに、ナガスネはニヤリとした。

「昔の思い人に助けられるとは、お前もつくづく情けない男よ」

「……」

ナガスネの挑発にスサノは反応しなかった。対するウズメはムツとしていたが。

（今そのような事を言わずとも良いはず）

タジカラは奥方が怒っているのに気づいたが、何も言わない。

「言いたい事はそれだけか、魔物？」

スサノはようやく全てを振り切った。

（スサノ、大事なようだな）

タジカラにはそれがわかった。

四十の章 オモイの畏、ツクヨミの狼狽

二つの国に割れ、争いが続けられているオオヤシマ。それも全て、闇の国ヨモツの女王イザの企みなのだらうか？

ヤマトの国の嫡男であるイツセは、先発隊を率いて武彦達がいるアマノイワトに進軍していた。

「イワレヒコ……」

イツセは妹であるイスズから武彦の事を聞いていたが、まだ完全に理解はしていなかった。

（イワレヒコがイワレヒコでないなどと、イスズの申す事がわからぬ）

それでもイツセにとって、血を分けた兄弟の中で一番信頼できるイスズの言葉は重い。

「あの話が真ならば、まだ望みはある」

彼は、武彦と共に父であるウガヤ王を説得し、戦をやめさせ、軍師オモイを追放するつもりである。戦の元凶はオモイ。イツセはそう思っている。

「しかし……」

その当のウガヤはオモイに操られているらしい。それが真実ならば、事はそう簡単には捗らない。そのためには、協力者が必要である。

「何にしても、今はツクヨミと話さねばならぬ」

イツセはイワトを見据えた。

そのツクヨミは姿を消して飛翔していた。

（イツセ様？）

彼は先発隊の先頭にいるイツセに気づいた。

（イスズ様はイツセ様には我らの事をお話されたと仰った）

ツクヨミはイツセと話そうと思ったが、そのすぐ後ろをオモイ率いる別の部隊が追って来ているのにも気づいた。

（オモイ！）

ツクヨミは飛翔をやめ、ふわりと地面に降り立った。オモイはツクヨミに気づく事なく、馬を進めている。

（彼奴を仕留めれば、戦は終わる）

ツクヨミはオモイに向かって走り出した。

オモイはイツセが反逆するのではないかと考え、ウガヤにはイツセを援護すると嘘を吐いて、彼の部隊を追っていた。

（む？）

何かが迫る気配がする。しかし、視界には何もいない。

（もしかこれは？）

ツクヨミの接近を感じたオモイはニヤリとした。

（無駄よ、ツクヨミ。お前にはこの私は殺せぬ）

スサノとナガスネの戦いは最終局面を迎えようとしていた。

「そろそろ終わりにするか、スサノ？」

ナガスネは半分失われた顔でニヤリとした。スサノはフツと笑い、

「ようやく、消える覚悟ができたか、魔物め」

「ほざくな！」

ナガスネはそう言い捨てると、剣を振り上げ、突進して来た。

「はあああ！」

スサノは炎の剣の業火を最大にし、

「消えよ、魔物！ それ以上、ナガスネ様を愚弄するな！」

と叫ぶ。ナガスネの黒い剣が振り下ろされ、しなる。グリーンと曲がつた剣先が、スサノに襲い掛かる。

「笑止！」

スサノはそれを脇差で叩き落とし、炎の剣でナガスネを斬り裂いた。

「ぐおおおお！」

ナガスネの身体は真つ二つになり、馬から転げ落ちる。それと同時に、馬が崩れるように消滅した。馬もまた黄泉返った死馬しはだったのだ。そうでなければ、死人しじふとであるナガスネを乗せる事はできない。「スサノ、礼を言う」

燃え尽きる寸前のほんの刹那、ナガスネは己おのれを取り戻し、スサノに微笑んだ。

「ナガスネ様ーッ！」

燃え尽きて行くナガスネにスサノは絶叫した。ウズメは涙を流し、タジカラに寄り添った。

「スサノ、見事だった」

タジカラは涙を堪えて、友の決断を褒め称えた。そして、ゆっくりと馬を近づける。

「よし、ホアカリ様に追いつかねばならぬ、スサノ」

「おう」

スサノは涙を拭い、タジカラを見た。

アマノイワトの奥のヒラサカみそぎの楔を完了したアキツとクシナダは元の服に着替え、イワトの入口に来た。

「イツセさんが来るようです」

武彦はツクヨミからの連絡をアキツに話した。

「イツセ殿が？」

アキツは、イツセはヤマトの城に帰らされると思ったのだ。

「はい。イツセさんはツクヨミさんの事も僕の事も知っているそうです。だから、話し合いに来るのではないかと、ツクヨミさんが言っていました」

武彦の言葉にアキツはニッコリとし、

「そうですね。戦がお嫌いなイツセ殿なら、そう考えるでしょう」

クシナダも安心したように、

「ならば、ここは攻められないのでしょうか？」

アキツはキツと前方を睨み据え、

「いえ、その後ろにオモイが来ています」

アキツの言葉に武彦とクシナダはギョツとしてアキツを見た。

ツクヨミはオモイの乗る馬のすぐそばまで来ていた。オモイは全くこちらに気づいた様子はない。

(このようなやり方は好まぬが、そうも言っておれぬ)

彼は意を決して、オモイを見上げた。そして口を開いた。

「露と消えよ、オモイ」

言霊が放たれ、オモイに到達した。ツクヨミはそこまでを間違はなく確認した。しかし、オモイは何事もなかったかのように馬を進め、ツクヨミの脇を通り過ぎて行った。

(如何なる事だ？ 言霊は間違はなくオモイに届いたはず……)

ツクヨミは今見た事が信じられなかった。

「イツセ様から離れるな。私は別の用がある」

オモイは何故か部隊から離れ、アマノイワトとは別の方角へと馬を駆った。そこはイワトへ続く道より険しい岩山が並ぶ草木も少ない平原である。

(どこへ行くつもりだ？)

ツクヨミは不審に思い、彼を追った。

「ついて来ているか、ツクヨミ」

オモイが前を向いたままで言い放った。ツクヨミはギョツとした。

オモイは狡猾な笑みを浮かべ、

「姿を消しても、私にはわかる。隠れておらずに出て参れ」

オモイは部隊からしばらく離れたところで馬を止め、振り返った。

「お前は何者だ？」

ツクヨミは姿を現して尋ねた。オモイはニヤリとして、

「それは私にもわからぬ。生まれた時から、私は面妖な力を持っていた」

「何？」

ツクヨミは眉をひそめた。オモイはツクヨミの混乱ぶりを嘲り、
「私には如何なる術も通じぬ。それが何故なのかは、誰も知らぬ。
ある者は私を神と称えた。しかしある者は私を物の怪と誇った」

ツクヨミは自分と同じような境遇のオモイの話に呆然としていた。
「よつて、お前得意の言霊も、私には通じぬ。如何致す、ツクヨミ
？」

オモイは不敵な笑みを浮かべ、ツクヨミを見た。ツクヨミの額に
汗が伝った。

アキツは、オモイとツクヨミがアマノイワトへの道から移動して
別の場所に行ったのを感じた。

「二人で別のところに移りました。何があつたのかはわかりませぬ
が」

アキツはツクヨミの身が危ういのではないかと危惧していた。

「それは誠に気がかりですが、イツセ様との事の方が先です」

クシナダが口を挟んだ。アキツは微笑んで、

「それはわかつております」

クシナダはアキツに近づき、囁く。

「アキツ様はツクヨミ殿の事を？」

「え？」

クシナダにいきなり凶星を突かれたアキツは顔を赤らめた。クシ
ナダは微笑んで、

「私は良い事だと思えます」

「あ、ありがとう、クシナダ」

アキツは照れたように笑って、そう言った。

『来るぞ』

神剣アメノムラクモが武彦に呼びかけた。

「はい！」

武彦は剣を抜く。

『イツセがどう考えておるかはわからぬが、油断はするな、武彦』
アメノムラクモが言う。

「わかりました」

武彦は剣を握る手に力を入れた。そして、近づいて来るイツセの部隊を見た。

ウガヤは、先発したイツセを追ったオモイが姿を消したと知り、狼狽していた。

「オモイが討ち取られたのか？」

ウガヤは目を血走らせて興奮気味に尋ねた。

「いえ、そうではありませぬ。進軍から外れ、どこかへ行かれたようです」

斥候が跪いて告げる。ウガヤは奇立ちを隠さずに、

「何をしておるのだ、オモイは!？」

と叫んだ。周囲にいる兵達は、ウガヤの機嫌が悪くなったのを知り、恐れおののいていた。

四十一の章 イツセの思い、オモイの焦り

ヤマトの国の軍師オモイは、もはやその仮面を脱ぎ捨てていた。

「私の願いは、オオヤシマをイザ様の国に加える事。当面はな」

含みを持たせたオモイの言いように、ツクヨミの眉が吊り上がる。握られた拳に力が入る。

「それは如何なる事か？」

オモイは激高するツクヨミを哀れむように見てニヤリとし、

「オオヤシマの住人を悉く殺めし後は、我が故郷も攻むる」

「何と!？」

ツクヨミは驚愕した。

(イザは、この世界全てを統べるつもりか……。オオヤシマは、足がかりに過ぎぬと?)

「そのような事は決してさせぬ!」

ツクヨミは大声で言った。オモイは高笑いをして、

「お前の力はこの私には通じぬのだぞ。如何致す、ツクヨミ?」

と挑発して来た。

「私の力は、言霊のみにあらず!」

ツクヨミは体術でオモイを攻撃した。

「温いわ!」

ツクヨミの突き、蹴り、掌底を、オモイはいとも簡単にかわす。

「私はお前に劣るところがないのだ、ツクヨミ。無駄よ」

オモイはその青い目を見開いて高笑いした。

「くっ!」

ツクヨミは自分がオモイに対してあまりに無力なのをはっきりと悟ってしまった。

(この男、誠に面妖……。魔物ではない。言霊が通じぬのは、何故なのか?)

ツクヨミの額を汗が流れ落ちた。

タジカラ達はようやくホアカリの軍に追いついた。

「陛下、ウマシ様、ご無事で何よりでございます」

スサノが馬から降りて跪く。それをタジカラとウズメは離れたところから見ていた。

「あの小倅こせがれの疑い深さには、呆れたものよ」

タジカラは吐き捨てるように言った。ウズメは苦笑いして、

「仕方ありません。ヤマトとヒノモトは、戦いくさをしておるのです」

ヒノモトの国王ホアカリの王子であるウマシは、タジカラとウズメを近くに来させるのを拒否し、スサノだけ呼び寄せたのだ。ホアカリが異を唱えたが、タジカラとウズメは揉め事を避けるため、自らウマシの言葉に従い、馬を止めて降りた。スサノも苦々しそうな顔をしたが、何も言わずに一人でホアカリのそばに行ったのだ。

「スサノ、途中、死人しひとに出会わなかったか？」

ホアカリが尋ねた。スサノは顔を上げて、

「はい。ナガスネ様とウカシがおりました」

「そうか……」

ホアカリは悲しそうな顔で頷く。スサノはギュツと拳を握り締め、「ウカシとナガスネ様はこの私が、天へとお送り致しました。ご安心ください」

その言葉にウマシは急ににこやかな顔になった。死人がいなくなったのを知ったからだ。何とも場当たりの男である。

「おお、さすがだ、スサノ。お前はこのオオヤシマいしくみの戦上手せんじゆうずぞ」

「ありがとうございます」

スサノは頭を下げながら、ウマシを小声で罵る。

「腰抜けが」

そんなスサノの思いを知ってか知らずか、ホアカリはタジカラ達を見て、

「ウマシ、もう良かるう。タジカラもウズメも、共にスサノと戦いし者。こちらに呼ぶべきではないか？」

「はあ」

ウマシはまだ、タジカラとウズメを信用していない。その態度の煮え切らなさにスサノが動いた。

「タジカラ、ウズメ殿、陛下のお許しが出たぞ。こちらへ参れ」

ウマシは慌ててスサノの言葉に異を唱えようとしたが、ホアカリがそれを遮る。

「タジカラ、ウズメ。大儀であつた。話がしたい」

「はは」

タジカラはウズメにムスツとした顔を見せてから、馬を引いてホアカリ達に近づく。ウズメがそれに続いた。ホアカリ達を守るようにして立っていたヒノモトの兵達はタジカラが近づくと、サツと両脇に退いた。

「これより、如何致すつもりか、スサノ？」

ホアカリはウマシが意気消沈して後ろに下がったのを機会に、前に出た。

「はい。まずは城に戻り、戦の支度です。我らの敵はヨモツ。生半可な事では、太刀打ちできません」

「そうだな」

ホアカリとしては戦は避けたいのであるが、相手がヨモツでは否も応もない。戦うしか道がないのだ。

「お久しゅうございます、陛下」

タジカラとウズメがスサノと並ぶようにして跪く。ホアカリはにこやかな顔になり、

「タジカラ、大儀であつた。礼を言うぞ」

「は！」

本来であれば、この方がワの国の王位継承者だとタジカラは考え、以降はホアカリに従う決意をしていた。

(ウガヤ王は気性が激し過ぎる。あれでは国は治まらぬ)

ホアカリの温厚な顔を間近で見て、尚の事そう思うタジカラであつた。

オモイが戦列を離れたため、オモイの部隊は動きが止まってしまった。イツセから離れるなどは言われたが、どうすれば良いのかは命じられていないからだ。それに気づいたイツセは、

「お前達はここで待て。命あるまで、動くでないぞ」と言い、オモイの部隊を封じた。

（オモイがどこに行ったのかはわからぬが、こやつらを足止めしておく事ができたのはありがたい）

イツセは自分の部隊を二手に分け、一つをオモイの部隊の監視に残し、残りと共にアマノイワトに近づいた。

「イツセ殿」

その顔がはつきりと見える位置まで来たイツセを、アキツは懐かしそうな目で見ていた。

「アキツ様」

イツセは部隊の進行を止め、自分の馬だけを進めた。やがて彼は馬を止め、降りた。

「お懐かしゅうございます」

イツセはその場に跪いた。アキツは武彦とクシナダに目配せし、イツセに歩み寄った。

「こちらこそ、お久しゅうございます、兄様あにさま」

幼い頃、アキツはイツセを慕い、よく遊んでもらったのだ。その頃の呼び名が「兄様」である。

「まだそう呼んでいただけでは、このイツセ、誠に嬉しゅう存じます」

イツセは再び頭を下げた。

「貴方は全てご存じなのですね？」

アキツが尋ねる。イツセは立ち上がり、

「はい。そちらのイワレヒコが、異界の方の魂を宿している事は存じております」

武彦はその言葉を聞いてホツとした。

「大丈夫みたいですな」

彼は神劍アメノムラクモに囁いた。

『うむ。我を鞘に納めよ、武彦』

「はい」

武彦はアメノムラクモを鞘に戻した。

「たけひこ様」

イツセが武彦を見る。

「は、はい」

ドキツとしてイツセを見る武彦。イツセは真剣な表情になり、

「私と共に父に会っていただきたい。そして、父をお諫めし、戦を終わりにしましょう」

「はい」

良かった、戦うんじゃないかと。武彦は心の底から安心した。

「私達も行きます。ウガヤ王を説き伏せる事が叶えば、ヨモツと戦う事ができます」

アキツが提案する。武彦はまたギクツとした。

(ああ、そうか、一番の強敵が残っていたんだ……)

思わず頂垂れそうになる武彦からイツセはアキツに視線を移し、
「ありがとうございます」

と頭を下げた。

「む？」

オモイはイツセとアキツが会っている事に気づき、齒軋りした。

「おのれ、そうはさせるか！」

このまま、ヤマトとヒノモト、そして旧ワの国が連合してしまうと、自分の計略が水泡に帰すと感じたオモイは馬に飛び乗った。

「行かせぬぞ、オモイ！」

同じくイツセとアキツの事に気づいたツクヨミがすかさず馬に言葉霊を放ち、動けなくした。

「ぬう！ 邪魔立て致すな、ツクヨミイ！」

オモイは怒りの形相でツクヨミを睨み、馬から飛び降りた。

「お前はここで殺す！」

オモイの青い目がギラつき、ツクヨミを睨み据えた。

（如何にすれば、この男に打ち勝つ事が叶うのか？）

ツクヨミの背を汗が伝った。

四十二の章 ホアカリの心、イザの企み

ヤマトの国の軍師オモイ。その正体は闇の国ヨモツの女王イザの配下。そして彼の役目はこの世の全てをイザの物とする事。ツクヨミはイザの野望を知り、戦慄した。

「私にとって何よりの邪魔者がお前だ、ツクヨミ」

オモイは凄まじい形相でツクヨミを睨む。その目はまさにツクヨミを射殺さんばかりだ。

「かつて、オオヤシマで王家にも崇められ、全ての民の尊敬の対象でもあつた言霊師。それは私にとっては、一番の敵」

「……」

ツクヨミはオモイを睨み返すが、何も言わない。

(この者、如何なる考えなのか？ 言霊師に私怨があるようにも感じられる)

彼はオモイの真意を探ろうとしていた。

「今ここで、お前を殺める。イザ様の御心のままに」

オモイが両の手を合わせ、何かを唱え始めた。ツクヨミにはその言葉がわからない。

(オモイの発する言葉、奴の国の言葉なのか？ 正体が掴めぬ……。何をするつもりか？)

「アーツ！」

それは叫びなのか言葉なのかわからなかった。しかし、オモイの口からその音が発せられた瞬間、ツクヨミの足下の小石が、まるで生を得たかのように動き出し、彼に襲いかかって来た。

「何と!？」

ツクヨミは素早く飛び退き、飛翔した。

「逃さぬぞ、ツクヨミ!」

オモイの呪文のような言葉は続く。小石は次々に寄せ集まり、巨大な岩のような大きさにまで膨れ上がり、やがて人の形となった。

「ぬっ？」

ツクヨミはその岩が人の形になり、右手に巨大な斧のようなものを振りかざすのを見た。

「物の怪か？」

岩の魔物は、ズシンと地面を揺らして歩き出し、ツクヨミを追いかける。

（あれは岩の塊。よって魂はなし。それ故、言霊は通じぬという事か？）

ツクヨミの背を汗が伝う。

「やはり、オモイは侮り難し。如何様にすれば良いのか……」

ツクヨミは岩の魔物が振り回す斧もどきをかわしながら飛んだ。

武彦達は馬に乗り、イツセの部隊と共にウガヤ王の陣に向かい始めていた。

「何だ、あれ？」

武彦が別の方角に見えるゆっくりと動く巨大な岩の魔物に気づいた。それほどオモイの操る魔物は目立つ大きさだった。

「面妖な……。あのような者を操るは、オモイか？」

イツセが歯ぎしりした。アキツも魔物に目を向けて、

「あれは命なきものです。オモイは一体何者でしょう？ 只の異国人とは思えませぬ」

と呟いた。

『武彦』

神剣アメノムラクモが語りかける。武彦はアメノムラクモを見た。

「はい」

『ツクヨミが危うい。ウガヤ王はアキツ様とイツセ殿にお願いし、お前はクシナダと共にツクヨミを助けに行くのだ』

武彦は思わずクシナダを見た。クシナダは武彦に命を助けられた事を恩に感じているので、

「参りましょう、たけひこ様」

とすぐさま同意した。イツセは心細そうだったが、

「ツクヨミを失うは、我らにとって一大事。急がれよ、たけひこ様」
「はい」

武彦はアキツを見た。アキツがツクヨミに惹かれている事はわかっている。幼馴染みの都坂みやこさか亜希に瓜二つのアキツが、他の男に心惹かれてるのは何とも複雑な思いの武彦だが、ツクヨミの危機を救わなくてはならないのは間違いない。

「ツクヨミ殿をお救いください、たけひこ様」

アキツは目を潤ませて武彦に懇願するように言った。アキツの顔が亜希と重なる。

「はい、アキツさん」

複雑な感情を胸に秘めたまま、武彦はクシナダと共に馬を駆り、ツクヨミの下へと向かった。

ヒノモトの国王ホアカリとその一行はアマノヤス川を越えて森に入り、城までもう一息のところまで来ていた。

「父上」

ホアカリの嫡男ウマシが馬を並べて小声でホアカリに話しかける。

「何じゃ？」

ホアカリは鬱陶しそうに応じる。

「父上は、タジカラをお信じになるのですか？」

「何を言いたいのだ、ウマシ？」

尚もヤマトの国の將軍であるタジカラとその奥方ウズメを信じられないウマシに、ホアカリは呆れていた。

「叔父上の策ではありませんか？ このまま城まで連れて行くは、危うき事ですぞ」

ウマシは、タジカラとウズメを信用できないというより、父ホアカリの弟であるヤマトの国の王ウガヤを信じられないのだ。

「ウマシよ、其方そなたはあまりにも人を疑い過ぎるぞ。スサノと共に戦ってくれたタジカラとウズメをそこまで信じぬは、其方の度量の狭

「おれ」

「……」

ウマシは全く自分の意見を聞き入れてくれない父にムツとし、馬を離れさせた。

（父上は、あまりにお人が好過ぎるのだ）

ウマシはウマシなりに国を思ってはいるのだ。しかし彼の考えはあまりに自己中心的で狭苦しかった。

そしてそのウマシの疑いの対象であるウガヤは、アキツとイツセが同行しているのを斥候せつこうに知らされ、激怒していた。

「イツセめ、アキツの色香に迷うたか」

ウガヤは昔からイツセを疎んでいた。イツセがアキツに慕われて悦よろこに入っていると誤解し、

「身の程を弁わえよ！」

と怒鳴りつけた事がある。そのため、イツセが憧れの人であるアキツに籠絡かごろうされたと思ったのだ。ウガヤは斥候を睨み、

「オモイは如何したのだ？ まだわからぬのか？」

「オモイ様はツクヨミと戦っておりませぬ」

斥候の意外な報告にウガヤは目を見開いた。

「ツクヨミと？ それはまた如何なる事か？」

ウガヤにはその経緯が理解できなかった。

「軍師様は秘術を使われ、ツクヨミを追いつめておるようです」

ツクヨミが追い詰められているという斥候の言葉にウガヤはニヤリとした。

「そうか。オモイは戦いくを考えるは得意であれど、戦そのものは不得手であると思っていたが、それは間違いであったか」

しかし、ウガヤの喜びも然程時ほどを待たずして、ガラガラと崩れるのである。

ヒノモトの城の自分の部屋でひたすら愛する夫ホアカリの帰りを

待っていたトミヤは、ホアカリがアマノヤス川を越えたという知らせを受け、喜んでいた。

「陛下、よくぞご無事で」

まだ顔を合わせてもいないのに、トミヤは涙ぐんでいた。しかし彼女は知らないのだ。実の兄ナガスネの死を。そのあまりに惨い最期を。

「後は戦が早う終わる事です」

トミヤは涙を拭いながら、侍女達に言った。

そして他方ヤマトの国の城では、王女イスズと王妃タマヨリが玉座の間で深刻な顔で語り合っていた。

「兄様は父上をお諫めすると申されました。ですが、父上が兄様のお言葉をお聞きになるとは思えませぬ」

イスズ姫は涙を浮かべて母に訴えた。タマヨリはイスズを抱きしめて、

「イワレヒコの身体におられるたけひこ様を信じましょう、イスズ。異界の方が、必ずやこのオオヤシマを正しき道へと誘ってくださいるはずです」

「はい、母上」

イスズ姫はタマヨリの顔を見て頷いた。そして頬を染め、

「あの方なら、オオヤシマをお救いくださると信じております」と応じた。

「そして……」

そして、あの方の御子を（みこ）生みたい。イスズは心の底からそれを望んでいた。もし武彦が聞いたなら、卒倒してしまうだろう。

ヨモツ。

オオヤシマの地下深く、そしてアマノイワトの奥深くに存在する闇の国。

その最深部にある女王イザの玉座。彼女はその漆黒の瞳で闇の彼

方を睨んでいた。

「オモイ……。其方の心、見せてもらったぞ。これから我^{われ}のために励めよ」

彼女はそう呟くと立ち上がった。

「もう一息じゃ。あとはウガヤよ」

イザの顔が狡猾さを増す。彼女はウガヤに何をさせようとしているのか？

オオヤシマが更に揺れようとしていた。

四十三の章 ホアカリの懸念、ウガヤの野心

武彦達は、ツクヨミとオモイの戦いの場へと急いでいた。巨大な魔物が斧を振るう姿が見える。武彦は動揺していた。武彦にはその魔物が、昔テレビで観ていた戦隊ヒーローものに最後に出て来る怪獣に見えた。

（あんな怪獣みたいな奴、倒せるのか？）

するとその心を見透かすかのように神剣アメノムラクモが言う。

『案ずるな、武彦。我に斬れぬものはこの世になし』

その言葉に安心を感じる武彦である。

「はい、御剣さん」

するとアメノムラクモは、

『その言いよう、やめよ。何やらこそばゆい』

「はい」

アメノムラクモが自分の感情を語ったのに武彦は苦笑した。

『クシナダよ、あの魔物は土塊つちくれ。其方そなたの水の技で倒してくれ』

アメノムラクモはクシナダに告げた。

「はは！」

クシナダは周囲からたくさん水を呼び寄せ、臨戦態勢に入る。

武彦はその凜々しい横顔について見入ってしまう。

（改めてみると、クシナダさんて綺麗な人だよなあ）

この緊急時に不謹慎な武彦である。そしてまた中学時代の同級生の女子の事を思い出した。

オモイはツクヨミを追い込みながらも、武彦達の接近を察知していた。

「おのれ、邪魔はさせぬ！」

オモイはまた呪文を唱えて別の魔物を作り出し、武彦達に向かわせた。

「何と！」

ツクヨミはオモイの呪力の高さに目を見開いた。

(こやつ、やはり人にあらず……。何者なのだ?)

言霊が効かない相手に、ツクヨミは無力だった。そんなツクヨミの動揺を見抜いたかのように磐の魔物が斧もどきを振り降ろす。

「くっ！」

魔物の斧もどきを避け、自分の身を守るので精一杯なのが、ツクヨミはもどかしかった。

(たけひこ様！)

それでも彼は何よりも武彦の身を案じた。武彦に何かあれば、オヤシマは潰つぶえてしまつかも知れないからだ。

「わわ！」

武彦はもう一体現れた魔物に仰天していた。

「はあッ！」

クシナダの操る水が魔物を次々に貫く。痛みなど感じない魔物は全く動きを止めず、ゆっくりと一歩一歩武彦達に近づいて来る。

「クシナダ、足を折れ！ 彼奴あやつを倒せば、勝機はある！」

アメノムラクモの指示でクシナダは水を動かす。魔物も足を攻撃されるのに気づいたのか、腕を下げ、防御する姿勢を取った。

「今だ、武彦！ 我を抜け！ 彼奴の腕を斬るのだ！」

「はい！」

武彦は剣を振りかざし、馬を走らせる。

「飛ぶのだ、武彦！」

「ええっ？」

戸惑う武彦だったが、やるしかないと思い、馬から飛んだ。すると不思議な事に、彼はまるで鳥のように空を舞った。自分が体験している事が信じられない。

「たけひこ様！」

クシナダが驚いて彼を見上げる。

『斬れ、武彦！ 敵はまだおるのだ！』

アメノムラクモが叫んだ。

「はい！」

武彦は急降下し、魔物の腕を斬り落とした。ズシーンと大きな音と土煙を伴って、魔物の腕は地面に落ち、砕け散って元の小石に戻る。

「行けーッ！」

次に武彦は魔物の頭を斬った。魔物は頭から真つ二つになり、がらがらと崩れ落ちた。

『ツクヨミを助けるぞ、武彦！』

アメノムラクモが告げる。

「はい！」

武彦はそのまま飛翔し、ツクヨミの元に向かった。クシナダはあまりの展開に啞然としていたが、

「たけひこ様！」

と慌てて馬を走らせた。

「ぬ？」

オモイは、武彦達に放った魔物が倒されたのを知り、ギョツとした。

「あのイワレヒコ、一体……？」

彼はイワレヒコがイワレヒコでなくなっているのを知っているが、その正体までは掴んでいない。

（もしか、異界の者か？）

オモイは潮時と感じた。彼もまたその昔オオヤシマを救ったという異界人いかいびとの話を知っているのだ。その力は想像を絶していたと。

（異界の者の力が読めぬうちは、退くしかあるまい）

オモイは魔物をそのまま放置し、馬を駆って自分は逃げ出した。

「オモイ！」

それに気づいたツクヨミが彼を追おうとするが、魔物が立ち塞が

る。

「ぬう！」

魔物の攻撃をかわし、ツクヨミは齒軋りした。

「ツクヨミさん！」

武彦の声が聞こえた。

「たけひこ様？」

ツクヨミも、武彦が飛翔しているのを見て驚いてしまった。

「やあ！」

かけ声と共に、ツクヨミに気を取られている魔物を一刀両断し、

武彦は着地した。ドーンと地響きをさせて、魔物は倒れ、バンと四

散し、小石に戻った。

「ツクヨミさん、大丈夫ですか？」

武彦がツクヨミに駆け寄る。ツクヨミは微笑んで、

「私は大事ありません、たけひこ様。それより、オモイが逃げまし

た」

するとアメノムラクモが、

『オモイとウガヤ王を会わせてはならぬ。急ぐのだ、武彦、ツクヨ

ミ！』

「はい」

そこへクシナダが追いついた。

「クシナダ様はイツセ様を追ってください。私達はオモイを追いま

す」

ツクヨミはそう言うと、武彦と共に空へと舞い上がり、飛び去っ

た。

「はあ」

クシナダは超人的な二人の力を目の当たりまにし、自分の未熟さを

思い知った。

「私など、まだまだだな」

彼女は苦笑いし、馬を走らせた。

そのウガヤ王は、進軍を再開していた。

「イツセがアキツに寝返り、オモイがツクヨミを追い詰めている今、勝機である。アマノイワトを攻め、ヤマトの国こそがオオヤシマの正統なる後継である事を民に示すのだ」

ウガヤの檄に兵は高揚し、軍は力を増したように見えた。それすらヨモツの女王イザの策略なのかも知れない。

そしてまた、ヒノモトの国ではスサノが軍を再編成し、謁見の間で軍議が開かれていた。

「しかし、イザの力はあのオオヒルメ様を上回ると聞く。大事ないいのか、スサノ？」

元々戦を好まないホアカリは不安だった。隣に座るトミヤも同様であったが、彼女は兄ナガスネの死を知り、抜け殻のようになっていた。

「ご安心召されませ、陛下。我らには、異界のたけひこ様と神剣アムムラクモ様がいらっしゃいます。必ずや、ヨモツに打ち勝てましょう」

スサノは跪いて答えた。

「そうか」

ホアカリはそれでも心配そうだった。

「はて、ウマシ様はどちらに？」

スサノはホアカリの嫡男ウマシの姿がない事に気づいた。

「先程までそこにおつたはずだが……」

ホアカリも知らなかった。それを聞いていたタジカラとウズメは顔を見合わせた。

「あの愚か者、何やら良からぬ事を企んでおる様子であった。ウズメ、探してくれ」

タジカラが小声で言う。ウズメは黙って頷き、謁見の間を退室した。

イツセはアキツと共に父ウガヤの元に向かっていたが、斥候せっこうの知らせに驚いていた。

「父上がこちらに向かっている？」

「はい。軍を進め、アマノイワトを攻め落とすと兵に命じておいででした」

斥候は跪いて報告した。

「イツセ殿、如何致します？」

アキツが尋ねる。イツセは思案顔で、

「このまま父上のところに行けば、私は勿論の事、アキツ様まで囚われましょう。如何したものが……」

彼は途方に暮れた。

「アキツ様、イツセ様！」

そこにクシナダの馬が追いついた。

「クシナダ、ツクヨミ殿は？」

アキツが不安そうに尋ねる。クシナダは微笑んで、

「たけひこ様が御剣様と共に魔物を打ち倒してくださいました」

「そうですか」

アキツの顔は愛しい人の無事を喜ぶ顔だ。スサノとの事を思い出しながら、クシナダはアキツの恋の成就を祈った。

「いた！」

先行していた武彦が走って逃げるオモイを視認した。

「待て！」

彼はオモイの前にふわりと着地した。

「ぐ……」

オモイは思わぬ人物の登場に面食らっていた。

（イワレヒコが？ ツクヨミよりも速く？ しかも、こやつ、今空から降りて来た……）

オモイの額に汗が流れ落ちた。

「貴方とウガヤさんを会わせる訳にはいかないんです！」

武彦はアメノムラクモを中段に構えて言った。

四十四章 イスズ之力、イツセの願い

武彦は目の前にいる男に妙な感覚を得ていた。

(何だ、この人？ 目の前にいるのに、そこにいる気がしない……)

『武彦、気を緩めるな。こやつ、手強いぞ』

神剣アメノムラクモが注意する。武彦はハツとして思索をやめる。

「ほう。それが噂のアメノムラクモ様ですか。さすがイワレヒコ様。その御剣様みつるぎさまを使いこなされるとは、お見事にございます」

オモイは跪いて頭を下げた。

「え？」

思ってもいない行動に、武彦は困惑する。

『オモイめ、何を企む！？』

アメノムラクモが怒鳴った。オモイは意外そうな顔で、

「何を仰せおほです、御剣様。私はヤマトの軍師。ヤマトのために戦っております」

「戯言たわごとを申すな！」

アメノムラクモが更に怒鳴る。そこへツクヨミが追いつき、着地した。

「フツ、もう来たか」

オモイはニヤリとしてツクヨミを見た。

「お前では私を倒せぬ。下がっておれ、ツクヨミ。今から、イワレヒコ様と一戦交える」

「何！？」

ツクヨミがギョツとした瞬間、オモイが何かを指先から放った。

(何だ?)

ツクヨミはその放たれたものに邪悪なるものを感じて、武彦を庇うようにして前に出た。しかし、オモイが放ったものはツクヨミをかわし、武彦にぶち当たった。

「うわ！」

武彦は衝撃を受け、そのまま後ろに倒れた。全身を強く打ったので、一瞬だけ息が止まりそうになる。

「たけひこ様！」

ツクヨミが慌てて駆け寄り、武彦を抱き起こす。

「うっ……」

武彦は頭を数度左右に振り、立ち上がった。

「あれ？」

オモイを見ると、そこにはオモイがいなかった。何故か、姉美鈴が立っていたのだ。

「えええ！？」

武彦は混乱した。意味がわからない。

「ね、姉ちゃん、何でここに？」

武彦の言葉にオモイはニヤリとした。

（術にかかったな。今こやつは、私を己がおのれ一番恐れし者と間違えているはず。勝てる。神剣を振りかざそうとも、勝てるわ！）

「覚悟！」

オモイが風を巻いて武彦に近づく。

「うわああ！」

武彦は、鬼の形相の美鈴が迫って来るので心底驚いて後退おとりした。

「たけひこ様！」

ツクヨミには武彦の異変の理由がわからない。

『武彦、如何いかがした？』

アメノムラクモにも、武彦が見ている美鈴の幻影まではわからなかった。

「何で姉ちゃんがいるんだよ？」

武彦は混乱を飛び越え、狂ってしまいそうだった。

（余程恐ろしい相手のようだな）

オモイは嬉々として武彦を追う。

「やめてよ、姉ちゃん！　こんなとこまで追いかけて来ないで！」

武彦は泣きそうになりながら、美鈴の幻影から逃れようと走った。

ヤマトの国の玉座の間。イワレヒコの許婚にして姉であるイスズは、妙な声を聞いた。

「イワレヒコ？」

弟が自分を呼ぶ声。そう思った。

「違う。これは、たけひこ様……」

武彦が、助けを求めている。そう感じたイスズは、意識を飛ばした。

（たけひこ様、私がついております。ご案内召されますな）

イスズは癒しの術を心得ている。彼女の意識はその力と共に、武彦に向かった。

『武彦、落ち着くのだ！ 如何したのだ？』

アメノムラクモの声も届かないほど、武彦は混乱している。

「うおおお！」

オモイは更に武彦に追いつがる。

「たけひこ様！」

ツクヨミは無駄と思いつつも、オモイに言霊をぶつけた。

「無駄と申しておろう！」

オモイがツクヨミを睨み、再び土塊つちくれの魔物を繰り出す。

「くっ！」

ツクヨミは魔物の攻撃をかわすため、後退した。

「そおれ、もう一息よ！」

オモイは、このまま武彦を発狂させようと考えていた。その時である。

『たけひこ様』

武彦の目の前に、イスズの意識が具現化した。そのイスズは一糸まとわぬ姿だが、動転している武彦にはそれは見えていない。

「え？」

武彦はイスズから出る癒しの波動で一気に落ち着いた。

『たけひこ様、私がついております。大事ありませぬ。貴方はあの
ような邪まじな者に負けませぬ』

イスズの微笑みは武彦を完全復活させた。

「ありがとうございます、イスズさん。もう大丈夫です」

武彦はアメノムラクモを構え直し、オモイを見た。

「よくも姉ちゃんに化けたな！ 許さないぞ！」

オモイの幻術だとわかると、姉を汚されたような気がして、武彦は無性に腹が立った。

「何？」

オモイは武彦が術を破つたのを知った。そして、彼の背後にイスズを見た。

（何故あの女が？ あれは魂ではない。されば何だ？）

イスズの姿はオモイの理解を超えていたのだ。

「行けーッ！」

武彦が剣を振り上げて向かって来る。

「おのれエー！」

オモイは斬撃をかわし、武彦から離れた。

「何者だ、こやつ？」

オモイはイワレヒコの正体を掴めないまま、逃走し始めた。

（このままでは、やられる。やはりイワレヒコには異界人の魂が宿っているのか？）

彼はイワレヒコの底知れぬ力を恐れたのだ。

「待て！」

武彦が追おうとすると、オモイはもう一体土塊の魔物を出した。

「うわー！」

武彦が魔物と戦っている隙に、オモイは姿をくらませってしまった。

「ツクヨミさん！」

オモイが逃げてしまつのに気づいていたが、武彦はツクヨミ救出を優先した。

「ええーいー！」

アメノムラクモが魔物を両断した。

『たけひこ様』

イスズの意識が武彦に近づいた。

「イスズさん、ありがとうございます。もう少しで、姉の幻に捕まるところでした」

武彦は改めてイスズを見た。そしてようやく彼女が裸なのに気づいた。光っているのでそれほどはつきり見えないのであるが、胸の膨らみはわかる。

（わわ、イスズさん、何も着てない！？）

武彦は慌ててイスズから目を逸らせる。また美鈴と顔を合わせ辛くなりそうな武彦である。

『姉？』

イスズは、武彦の姉美鈴が自分に瓜二つなのを聞いている。

『左様ですか』

イスズは合点がいった。だから、武彦の声が自分に聞こえたのだと。彼女は嬉しくなった。

『たけひこ様、私は離れていても、貴方のおそばにおりますから』

イスズは微笑んで武彦の耳元で囁くと、光と共に消えた。武彦は耳がこそばゆくなり、顔を赤らめた。

「……」

ツクヨミもイスズがそのような力を持っている事を知らなかったので、啞然としていた。いや、イスズ自身も、その力に初めて気づいたのかも知れない。

（イスズ様のお力、恐れ多いものだ）

武彦は全裸のイスズが消えたので、ホッとしてツクヨミを見た。

「とにかく、あいつを追いましょー！」

「はい」

二人は再び飛翔し、オモイ追跡を再開した。

ウガヤ王の進軍を知り、アキツ達は立ち止まったままだった。

イツセは考え込んだまま。アキツも黙っている。クシナダだけが苛ついて馬を動かす。

「クシナダ、ホアカリ殿に使いに行ってくれぬか」

不意にアキツが告げた。クシナダは馬を停め、

「ホアカリ様に、ですか？」

「ええ。ウガヤ殿を説き伏せらるるは、ホアカリ殿しかおらぬと思う」

アキツの言葉にイツセが顔を上げた。

「そのようです。父はもはや、我らの言葉に耳を貸すとは思えませぬ」

「しかし、戦をしている国の王であるお二人が、お話になるでしょうか？」

クシナダは不安だった。ホアカリは確かにウガヤの兄であるが、ウガヤはホアカリを軽んじている。

「クシナダの申したい事はわかります。ですが、今はホアカリ殿にすぎるしかないのです」

アキツはクシナダを見た。クシナダは目を伏せて、
「わかりました」

と言うと、無数の水を呼び寄せて大きな船を造り、馬ごと乗り込むと、地を滑るように走り去った。

「間に合いますか？」

イツセが不安を隠し切れずに呟く。

「間に合わせねばなりません」

アキツはクシナダが去った方角を見て力強く言った。

武彦とツクヨミはオモイを見失っていた。

「どこだ？」

武彦は地上に降り立ち、付近を探ったが、オモイはいない。

「また、何やら秘術を使ったのか？」

ツクヨミは齒軋りして悔しがった。

『オモイが目指すはウガヤの軍のはず。そこへ向かうしかあるまい』

アメノムラクモが言った。ツクヨミは頷き、

「そうですね。参りましょう、たけひこ様」

「はい」

二人は飛翔し、ウガヤ軍を目指した。

四十五章 ウガヤの変貌、ホアカリの意志

オオヤシマの地下深くにある闇の国ヨモツ。その最深部にある女王イザの玉座の間。

「オモイめ。しくじりおつたか」

そう言いながらも、イザは愉快そうに笑っている。

「じゃが、ウガヤ王はすでに我が術中にあり。最後の扉を開ける時が来たようじゃ」

イザはその瞳なき漆黒の目を見開き、高笑いした。

「アキツ、うぬがどれ程足掻こうとも、オオヤシマは我のものよ！」
イザの笑い声はヨモツ中に轟いた。

ヤマトの国の王であるウガヤの軍は、すでにその視界にアキツ達を捉えていた。

「アキツめ。もはやこれまでと、覚悟を決めたか」

嫡男イツセと共に立ち止まったままのアキツを見て、ウガヤは狡猾に笑った。

「オモイ様、お戻りです」

伝令兵の報告に、ウガヤの顔が怒りに変わる。

「陛下、申し訳ありません」

オモイはウガヤの前に進み出て、跪いた。

「オモイ、何をしていたのだ！？ ツクヨミは如何した！？ イワレヒコは！？」

ウガヤの怒りは増すばかりだ。オモイは馬上のウガヤを見上げ、

「ツクヨミとイワレヒコ様は、只今こちらに向かっております」

「何と！」

ウガヤは仰天した。ツクヨミの強さを間近で見て来た彼は、ツクヨミが敵に回った時の恐ろしさをよく知っている。

「オモイ、貴様、ツクヨミと戦^{たたか}つておつたのではないのか！？」

「はい。しかし、イワレヒコ様が神剣アメノムラクモをお持ちになつて……」

オモイの言葉に、ウガヤは気が変になりそうだった。

「勝てぬ。勝てぬ。勝てぬーッ！ ツクヨミばかりか、彼奴あやつに操られしイワレヒコが、ワの国の神剣であるアメノムラクモを持っているたのでは、我らに勝てるはずもなし！ 引き上げるのだ、オモイ！」
ウガヤは狂乱状態に陥っていた。

（使えぬお人だ。仕方あるまい）

彼は切り札を使うことにした。

「いえ、まだ我らにも勝機がございます」

「何？」

ウガヤはさわぐのをやめ、オモイを見た。オモイはフツと笑い、「私は闇の力を使う事ができます。さすれば、ツクヨミであるのが、神剣であるのが、負けませぬ」

「闇の力、だと？」

ウガヤの眉間に皺が寄る。血を好み、殺戮を愉しむウガヤほどの暴君でも、闇の力は使いたくないのだ。そんな事をすればどうなるのか、彼にもわかつている。

「しかしオモイ、そのような事をなさば、ヨモツが……」

ウガヤの反論はオモイにとって想定内だった。オモイはニヤリとして、

「ご案じなさいますな、陛下。ヨモツは我らの味方でございます」

「何？」

ウガヤの目が大きく見開かれる。

（あと一押しよ）

オモイはまたフツと笑った。

その頃、アキツの命でヒノモトに向かっているクシナダの前に、ホアカリの嫡男ウマシが軍勢を率いて現れた。

「ウマシ様！」

クシナダは、ウマシがウガヤを討つたために出陣したと思ったのだが、それは間違いだった。

「逆賊クシナダ！ 成敗致す！」

「逆賊？」

クシナダはウマシの暴言に呆れ返っていた。

（このお人は、どこまで愚かなのだ……）

ウマシの事があまりにも情けなくて涙が出そうなクシナダである。「かかれ！」

ウマシの命令で、兵がクシナダに向かって来る。皆知った顔だ。皆、泣いている。

「お前達……」

クシナダは、ヤマトの舞踏師であるウズメがヨモツによって死人と化したヤマトの兵と戦っている様を思い出した。

「己おのれらは、このクシナダに弓引く気か！？ それ程の覚悟があるなら、かかって参れ！」

クシナダは大声で言い放った。まるでそれはツクヨミの言霊ことだまの如く、兵達を硬直させた。

「何をしている！？ 王位継承者であるこのウマシの命が聞けぬのか、貴様らは！？」

ウマシが怒鳴るが、兵は誰一人動こうとしない。

「ウマシ様、クシナダ様は逆賊ではありませんぬ」

軍の参謀がウマシに諫言かんげんする。ウマシは兵全てが自分の味方ではない事を知り、

「勝手にするがいい！」

と言い放つと、馬を返し、城に向かって逃げて行った。

「情けなきお人よ」

クシナダはウマシの人望の薄さを哀れんだ。そして、

「今は火急の時！ 私は先に行くぞ」

クシナダは再び水の力で進んだ。兵達は顔を見合わせてから、城に向かい始めた。

武彦とツクヨミはオモイがすでにウガヤと会い、軍を城に向かわせている事に気づいた。

「これは？」

ツクヨミはウガヤ軍が帰還して行くのを上空から見て、驚愕していた。

「どついう事でしょう？」

武彦も不思議に思った。

『ツクヨミ、ウガヤ王の心を探ってみよ。あの者、すでに……』

神剣アメノムラクモが言った。ツクヨミはウガヤ王に言霊を飛ばし、彼の胸の内を覗いた。

「何と！」

ツクヨミは恐ろしくなった。ウガヤの心は闇に染まり始めていたのだ。

「ウガヤ様は、オモイがヨモツの者とお知りになった今も、彼奴に

……」

「え？」

しかし、武彦はチンプンカンプンだ。

『もはやウガヤはヤマトの王にあらず。彼奴はイザの僕に墮ちた』
アメノムラクモが、苦々しそうに言う。武彦は唾然としてしまった。

「じゃあ、イスズさん達が危ないって事ですよね？」

武彦はツクヨミを見た。ツクヨミは頷いて、

「そのようです」

武彦とツクヨミは目配せし、ヤマトの城を目指した。

「む？」

オモイはツクヨミとアメノムラクモの気がこちらに向かって来ないのに気づいた。

(ウガヤの心を読んだか、ツクヨミめ。しかし、手遅れよ)

オモイはすでに意のままになっているウガヤを見た。ウガヤは不安を拭いきれないのか、小刻みに震えている。オモイはそんな情けない国王を見てニヤリとする。

（そして、我らの狙いは城ではない。愚か者共め）
オモイは何を企むのか？

クシナダは城に到着し、謁見の間でホアカリに事情を説明した。「そうか。わかった。ヤマトに参ろう。ウガヤを説き伏せ、ヨモツに備える」

ホアカリは椅子から立ち上がった。そして、

「クシナダ、すまぬが、トミヤについていてくれぬか」

「はい」

ホアカリの妃トミヤは、兄ナガスネの戦死を知り、抜け殻のようになつてしまつており、同行は無理だ。かと言って置いて行くのも危ない。

「トミヤ様は私が必ずやお守り致します」

クシナダは頭を下げて言った。

「頼む」

ホアカリは力なく微笑んだ。

（トミヤ様は兄上様であるナガスネ様を喪い、お嘆きだ。よもやとは思つが……）

クシナダも、トミヤが発作的に自害してしまうのではないかと案じているのだ。だから、ホアカリの頼みがなくても城に残ろうと思つていた。

（恐らく、陛下もそれをご心配なのであろう）

クシナダは仲睦まじいホアカリとトミヤの関係を知っているため、ホアカリの思いを感じていた。

「では、参ろう」

ホアカリは意を決したように厳しい表情になつた。

「はは」

クシナダの夫スサノ、ヤマトの將軍タジカラ、その奥方のウズメがホアカリに従う。

「トミヤ様を頼んだぞ、クシナダ」

スサノが声をかけてくれた。

「はい、お館様やかたさま」

クシナダはそれに力強く答えた。

ヤマトの城では、ウガヤの妃タマヨリとその王女であるイスズがツクヨミとイワレヒコの帰還を知り、喜んでいた。

「イワレヒコ様！」

武彦達が玉座の間に入ると、いきなりイスズが武彦に抱きついて来た。

「わわ、イスズさん！」

姉美鈴に瓜二つのイスズにしがみつかれ、武彦はアタフタした。

しかも武彦は、オモイとの戦いの時に現れた裸のイスズを思い出して更に顔が熱くなる。

「これ、イスズ、はしたない。お控えなさい」

そう窺たしなめるタマヨリも母珠世に瓜二つだ。武彦は頭がおかしくなりそうだ。イスズは、

「申し訳ありません」

と言うと、武彦から離れ、タマヨリと並んだ。

「そうだ！」

武彦はふとデジタルカメラを持っている事を思い出す。

「皆さん、そこに並んでください」

「は？」

タマヨリとイスズはキョトンとしたが、ツクヨミは武彦の持つ箱が何なのか知っていたので、

「ささ、イワレヒコ様の仰せの通りに」

と二人を玉座に座らせ、自分もその脇に立つ。

「よし、ここで大丈夫」

武彦は近くにあった脚立のようなものにデジカメを立て、オートシャッターにする。そして、イスズの隣に立った。

「さあ、皆さん、笑ってください」

次の瞬間、ストロボが光り、タマヨリとイスズが叫んだ。

「大事ありませぬ、お二人共」

ツクヨミが騒ぐ二人を宥める。武彦はデジカメを持って来て、

「ほら、奇麗に撮れてますよ」

「おお」

タマヨリとイスズが驚きの声を上げる。

「これは如何なる術にございますか？」

イスズが尊敬の眼差しで武彦を見上げる。武彦は照れ臭くなって、

「いや、術なんかじゃなくてですな……」

その時、伝令兵が駆け込んで来た。

「何事ですか？」

タマヨリが尋ねた。伝令兵は跪いて、

「陛下の軍勢が、城の周りの村を焼き払っております！」

武彦は仰天し、ツクヨミと顔を見合わせた。

四十六章 イスズの怒り、イツセの決意

ヤマトの国の王であるウガヤは、すでに身も心も異国人の軍師オモイに操られていた。

「陛下、斯様な行い、天が許しませぬぞ」

年配の兵が命懸けで諫言した。しかしウガヤは、

「五月蠅い！」

と一喝すると馬から降り、老兵を一太刀の下に斬り殺してしまった。

「陛下……」

老兵は目に涙を浮かべながら、そのまま地面に倒れ伏した。他の兵達はそれを固唾を吞んで見守っているしかない。

「うぬらは、このウガヤの兵なのだ。逆らう事は許さぬ。ヤマトの国が永遠に栄えるために、この儀式は何としても為さねばならぬのだ！」

ウガヤの目は血走り、とても正気とは思えない様子だった。しかし、兵達は何も言わない。

ヤマトの軍は城の周辺の民の家に火矢を射かけ、焼き払っているのだ。多くの民が家から逃げ出したが、中には逃げ遅れる者もいた。「助ける事は許さぬ。民はヨモツへの贄。より多くの命を捧げねば、ヨモツは我らの味方にならぬ」

ウガヤのその言葉にオモイはニヤリとした。

（もはやオオヤシマは落としたも同然よ）

「何て事を！」

武彦はヤマトの城を飛び出し、真っ赤に染まる城下を見た。

「人間のする事じゃないよ！」

彼は城の外へと走る。ツクヨミがそれを追った。

「たけひこ様、敵は近くにあります。お気をつけください」

「今はそんな事より、みんなの命ですよ、ツクヨミさん！」

武彦は走りながら叫んだ。

「こんな時、クシナダさんか、ウズメさんがいてくれたら……」
彼は歯ぎしりした。

『我がおるぞ、武彦』

神剣アメノムラクモが言った。

「えっ？」

意外な言葉に、武彦はアメノムラクモを見た。

『我を天に向けよ、武彦。雨を呼び、火を消す』

「そんな事ができるんですか？」

武彦は仰天した。アメノムラクモは、

『我を何だと思つておるのだ』

とちよっぴり誇らしそうだ。

「その間を私が繋ぎ申す」

ツクヨミは城の周囲にある堀の水を言霊ことだまで吹き上げ、燃え盛る民の家に降り注がせた。

「こんな感じですか？」

武彦はアメノムラクモを空に向けた。

『それでよい。では、参るぞ』

アメノムラクモが輝き始める。その光は強く、それでいて温かく、次第に周辺に広がって行く。

「わわっ！」

武彦はその輝きに驚いた。ツクヨミもそれに気づいたが、

「私は私で……」

と言霊で堀の水を飛ばし続けた。

「む？」

オモイはアメノムラクモが放つ強い光に気づいた。

（何だ、あれは？ 焰ほむではない。面妖まがな……）

「如何いかがした、オモイ？」

馬に戻ったウガヤが尋ねる。オモイはウガヤを見て、

「先程、ヤマトの城の近くに面妖な光が見えました」

「光？ 何か？」

ウガヤは近くにいた兵を見る。兵はウガヤの形相に震えながら、

「斥候からはまだ何も……」

「役に立たぬ奴らよ」

ウガヤは吐き捨てるように言い、

「ならば進軍じゃ。城に怪しき者がおるのやも知れぬ」

「あるいは、ツクヨミかも知れませぬ」

オモイが言った。その時、天が急速に曇り始めた。

「何と！」

あまりに早い天候の変化にオモイは狼狽えた。

（もしや、これは、神剣アミノムラクモの力か？）

アミノムラクモの名の由来。それは、「雨雲を呼び寄せる剣」だと言つ。

（雨を降らせ、火を消すつもりか。そうはさせぬ）

「陛下、更に火矢を射かけましょう。ツクヨミ達が火を消そうとしておるようです」

オモイの言葉にウガヤの目つきが更に険しくなる。

「おのれ、ツクヨミめ。このウガヤの邪魔を致すのか。許さぬぞ」

ウガヤは兵達を睨みつけ、

「早う矢を射かけよ」

兵達は動かない。ウガヤは苛立ち、

「早う射かけよ！ うぬらは王の命が聞けぬのか！」

と怒鳴った。兵達は顔を見合わせて仕方なく火矢を放った。皆、泣いていた。射かけているのは、どれも自分達を知る者達の家なのだ。

ツクヨミはウガヤ軍が更に火を射かけて来たのを知り、

「何という事を！」

と憤激した。

「御剣さん、まだですか？」

武彦も焦っていた。家を焼く火はどんどん勢いを増している。ツクヨミが誘導している堀の水ではとても追いつかない。

『慌てるな、武彦。もうそこまで来ておる』

アメノムラクモが言った。次の瞬間、ドドーンと雷の音がして、凄まじい勢いで雨が降り注いで来た。

「おお！」

ツクヨミが歓喜の声を上げ、空を見上げる。

「やった！」

武彦も叫んだ。シュウシュウと音を立てながら、民の家を燃やしていた炎が弱まって行く。

『武彦よ、火が消えるまで我を掲げておれ。下ろしてはならぬぞ』

「ええっ？」

武彦はそれは過酷だと思った。でも、ヤマトの民達の命が懸かっているのだ。弱音は吐けない。

「ぬっつ……」

ずぶ濡れになりながら進軍していたウガヤは、いくら射かけても消えてしまう火を見て、更に苛立ちを募らせた。

（おのれ、アメノムラクモめ。ここは退くしかないが、どこに退く？）

オモイは進退窮まったと思っていた。

ヒノモトの国の王であり、ウガヤの兄でもあるホアカリを中心に、ヤマトの国の將軍タジカラ、その奥方ウズメ、そしてヒノモトの国の戦士スサノは、ヤマトの国に向かっていった。

「お館様やかたさま、ヤマトの国で恐ろしき事が起こっております」

異変を察知したウズメがタジカラに囁く。タジカラは眉をひそめた。

「恐ろしき事？ 何じゃ？」

「ここでは……」

ウズメは悲しそうに答える。タジカラは頷き、「わかった」

と答えると、また前を向いた。

(八百万の神々が、ヤマトの国の民の家が焼かれていると教えてく
ださった。ウガヤ様は、ご乱心遊ばされたのか?)

ウズメは悲しみのあまり、知らないうちに涙を零していた。

アキツはツクヨミからの言霊で、ヤマトの国の異変を知った。

「何という事を……。ウガヤ殿、血迷うたのか……」

あまりの出来事に、アキツは目眩がしそうだった。

「父上……」

いや、もはや父ではない。あれは魔物だ。イツセはそう思う事にした。

「ウガヤ王は、闇に落ちました。もはや王でも我が父でもありません」
ぬ

イツセのその言葉にアキツは悲しそうな目で彼を見た。

(兄様……)

その昔遊んでくれた優しいイツセが悲しむ姿を見るのは、アキツには辛かった。

ヤマトの城では、イスズ姫が中心になり、焼け出された民の救護に当たっていた。

「怪我人はおるか？ おるならば、私のところに連れて参れ」

イスズは母タマヨリと共に大広間に出て、傷ついた民達を診て回っていた。

「父上、何という事を……」

悲しみより先に怒りが込み上げて来る。イスズは天を仰いだ。

「もう少し。もう少しじゃ、オモイ。もう少しで、我はオオヤシマに出られるぞ」

闇の国ヨモツの最深部の玉座の間で、女王イザが眩く。

「もはや我に隙はなし。ツクヨミもアメノムラクモも恐るるに足らぬ」

彼女は不敵に笑った。

四十七の章 タマヨリの気持ち、ウガヤの無念

ワの国の時期女王であったアキツはアマノイワトの奥から迫る只ならぬ妖気に気づいた。

「如何いかがなさいましたか、アキツ様？」

ヤマトの国の嫡男であるイツセが、アキツの様子を見て尋ねた。

「何やら、ヨモツが蠢うごき出しました。クシナダと共にヒラサカを封じ直しましたが、これは……」

アキツは、ヤマトの王ウガヤが行っている虐殺が、ヨモツを勢いづかせている事を感じていた。

（人の憎しみがヨモツを、闇を呼び込む。それを何としても終わらせねばならぬ）

アキツは意を決してイツセを見た。

「私はアマノイワトに戻ります。イツセ殿はウガヤ殿を説き伏せてください」

「はい」

イツセはアキツに同行したかったが、自分がついて行って役に立てると思えず、同意した。

「はー！」

アキツは馬を駆り、アマノイワトに戻って行った。

「我らも出立だ。ウガヤ王の愚行を止めるぞ」

「はっ！」

イツセは兵達と共に、再びヤマトに向かって進軍を始めた。

ヤマトの城の周辺の火は神剣アメノムラクモが呼び寄せた雨により完全に沈下し、ウガヤ軍が射かける火矢もすでに何の役にも立たないほど、辺りは濡れていた。

『武彦、もう良い。我を戻せ』

アメノムラクモが武彦に言った。

「はい」

武彦はホツとして神剣を鞘に納める。すると雨雲は急速に消えて行き、太陽が照りつけて来た。

「オモイもいるはず。彼奴を倒せば、陛下は助かるはずですよ」

ツクヨミが囁いた。武彦は頷き、

「行きましょう、ツクヨミさん」

「はい」

二人は濡れた地面を水飛沫を上げて馬で進んだ。

ウガヤは火が消えてしまった事で呆然としていた。まるで頭の中から何もかもなくなってしまったかのような呆けた顔になっていた。陛下、ここは退くしかありません。ご決断を！」

オモイはウガヤの前に跪いて進言した。しかしウガヤはオモイの言葉にハツと我に返ると、

「ならぬ！ ツクヨミを討ち、イワレヒコを正気に戻すのだ！ 退く事など許さぬ！」と叫んだ。

(こやつ、狂ってしまったか?)

オモイはそんなウガヤを見捨てる事にした。民の殺戮が中途半端になってしまった以上、女王イザの救援は望めない。このままでは自分もイザに見捨てられてしまう。ウガヤと共倒れは御免被りたいのだ。オモイは、

「では、私はこれにて」

と立ち去ろうとした。

「許さぬと申したはず！」

ウガヤが剣を抜き、オモイの背中に斬りつけた。

「愚かな……」

オモイは逃げもせず、それを受けた。彼の背中はバツサリと斬られたが、血は出なかった。

「何と！」

ウガヤはその時になってようやく、オモイが人ではないと気づいた。オモイはニヤリとして振り返り、

「使えぬお人よ」

と呟き、その次の瞬間、ウガヤの首を彼の剣を奪って跳ね飛ばしていた。首は離れたところにまるで石ころのようにドサツと落ち、転がった。周囲にいた兵達は何が起こっているのか全くわからなかった。ウガヤの首を失った胴体はズルズルツと地面に落ちた。馬は主を失い、一声嘶いななくと、走り去ってしまった。オモイはウガヤの血がべったりと付いた剣を地面に投げ捨て、兵を見渡した。

「陛下はご乱心あそばされた。これより先は私が指揮する。退くぞ」
オモイは軍の先頭に立ち、歩き出した。兵達はそれに魅入られたように続く。

(さて、どうしたものか……)

オモイは眉間に皺を寄せて思案を巡らせた。

武彦とツクヨミが到着した時、ウガヤ軍はすでに撤退しており、そこにはウガヤの遺体が転がっているだけだった。

「陛下……」

暴君ではあったが、自分をヤマトの国に仕つかえさせてくれたウガヤのあまりにも無残な最期に、ツクヨミは言葉を失った。

「酷い……」

武彦は震えた。彼は首無し死体など見た事がない。怖かったのだ。『例え、愚かなる王であったとしても、哀れよ』

アメノムラクモもウガヤの死を悼いたんだ。

「オモイめ。許さぬ」

ツクヨミがそう呟くと、

『ツクヨミよ、それこそがヨモツの罫よ。敵を憎み、怒りを募らせては、闇を呼び込む』

アメノムラクモの言葉にツクヨミはビクツとした。そして彼は跪まき、

「その通りにございます。申し訳ありません、御剣様」と頭を下げた。

『ウガヤの亡骸を城に運び、丁重に弔え。死人にさせぬためにな』
アメノムラクモは言った。

「はい」

ツクヨミはウガヤの首を探し出し、胴体の近くに置くと、それを一緒に言霊で浮き上がらせ、城に運んだ。

『武彦よ、お前はアマノイワトに行くのだ。アキツが待っている』

「は、はい！」

幼馴染の都坂亜希に瓜二つのアキツが待っているとわれ、武彦は心が弾む。

『お前の幼馴染とアキツは別人ぞ』

彼の心を見透かすかのようにアメノムラクモが言う。武彦は赤くなって、

「わ、わかってますよ。アキツさんはツクヨミさんが好きなんですから」

『それも許されぬ事よ』

アメノムラクモがそう言ったのを、武彦は聞いていなかった。

ヒノモトの国の王ホアカリ達の一行は、ヤマトとの国境まで来ていた。

「ウズメ、先程の話だが」

ヤマトの將軍タジカラが奥方であるウズメに囁く。彼はヤマトで何があつたのか、どうしても知りたいようだ。ウズメは溜息を吐き、

「陛下がオモイの策で、民をお手にかけられたのです」

「何？」

タジカラは仰天した。ウズメはタジカラを見て、

「その後、陛下はオモイに斬られ、お亡くなりになってしまいました」

「……」

あまりの事に、タジカラは言葉を失った。

「我らは、遅過ぎたのかも知れませぬ」

ウズメは悲しそうに呟いた。

ウガヤの妃であるタマヨリと娘であるイスズは、ウガヤの変わり果てた姿に啞然としていた。

「私の力が至らず、申し訳ありません」

ツクヨミは二人の前で土下座をした。するとタマヨリが、

「其方そなたのせいではない、ツクヨミ。これも天命。陛下のご寿命です」

彼女はウガヤの横暴を憂えていたため、このような事になるのではと考えていたようだ。

「父上……」

イスズはそれだけ言うと、ウガヤの遺体にすがり、泣き出した。

「陛下が死人にならぬよう、丁重にお弔いせよと、御剣様が仰せです。私の力全てを注ぎ、執り行わせていただきます」

ツクヨミは顔を上げ、タマヨリを見た。タマヨリは涙を拭って、

「頼みますよ、ツクヨミ」

と言った。

「たけひこ様」

武彦がアマノイワトに着くと、アキツが笑顔で出迎えてくれた。

武彦はまた赤くなる。

『武彦』

アメノムラクモが釘を刺す。武彦はアメノムラクモを見て、

「わかってますよ」

「何か？」

アキツが不思議そうな顔で振り返る。

「あ、いえ、何でもありません。急ぎましょう、アキツさん」

武彦はそう言うと、アキツを急ぎ立てるようにしてイワトの中に入ってしまった。

四十八の章 イスズの願い、イザの怒り

オオヤシマの地下深く存在する闇の国ヨモツ。その最深部の玉座の間に女王イザはいる。

「オモイめ。我を頼ろうとするは、浅はかよ。うぬは我の手駒に過ぎぬのだ」

イザの漆黒の目が細くなる。

「オオマガツ、ヤソマガツ」

イザは闇の向こうを睨んで言う。

「ははっ！」

イザの分身である黒い炎の化身であるオオマガツと雷を身に纏いかすちつたこれもまたイザの分身であるヤソマガツが、イザの前に現れた。

「うぬらなら、オオヤシマに留とどまれよう。すでにそこまでは穢けがれておる。あと一息、穢れを増やして参れ」

「はい」

二体の魔物は跪いて答え、そのままオオヤシマへと向かった。

「アキツ、異界の者を呼び寄せたは、さすがよ。じゃが、このイザは先轍は踏まぬぞ」

彼女は、大昔ヨモツがオオヤシマに攻め入った時、異界の者がそれを阻止した事を知っていた。

「そして、例え神剣アメノムラクモであっても、この我を斬る事は叶わぬ」

イザは高笑いをした。

「只、まだ時が足らぬ」

イザの言う「時が足らぬ」とはどういう意味なのか？

アキツと武彦はヨモツとの境であるヒラサカに来ていた。目には見えないが、ヒラサカにはアキツとクシナダがかけた封印が施されている。ヨモツの者はそれを通り抜ける事はできないのだ。

「やはり、封じたはずがすでに軋きしんでおります」

アキツが境界を調べて言った。破れる心配はないが、このままにはしておけないとアキツは思った。

「アキツ、魔物がここに向かつておるぞ」

アメノムラクモが告げる。武彦はビクツとした。

（魔物？ もしかして、あの黒い火と雷かみなりの？）

武彦はあと一歩のところまでその二体の魔物に逃げられた事を思い出した。そしてその時、アメノムラクモが、

「いや、逃げてくれたのだ。あのまま留まられば、味方が幾人が死んでいた」

と言った事も思い出していた。

「大丈夫なんですか、御剣みつるぎさん？ 今はアキツさんと僕しかいませんよ」

武彦が不安を口にするアメノムラクモは、

「何を言うておるか。アキツがおるのだぞ。タジカラ達にはすまぬが、アキツはこのオオヤシマで一番の強さよ」

「御剣様、そのような事を仰らないください」

何故かアキツは顔を赤らめた。また彼女が、幼馴染の都坂亜希みやこさかあきと重なる。女性にとって「この国で一番強い」は褒め言葉ではないかも知れない、と武彦は思った。

「来ました、たけひこ様」

アキツがヒラサカを睨んだ。その直後、バチンと大きな音がして、辺りが揺れた。パラパラと天井から岩の破片が落ちて来る。

「突き破ろうとしているんですか？」

武彦が尋ねる。アキツは頷き、

「そのようです。ですが、私とクシナダで封じ直したのです。そのくらいで破れるものではありませんね」

「そうですか」

武彦はホツとして微笑んだ。しかしその後も魔物達の体当たり戦法は続き、アマノイワト全体が崩れるのではないかと思えるくらい

揺れた。岩の破片の落ちて来る量が次第に多くなって来ていた。

「たけひこ様、このままでは動けませぬ故、一度封を解きます。ヒラサカよりお離れください」

アキツが厳しい表情で言った。またその横顔に思わず亜希を重ねてしまう。

「は、はい」

武彦はどういう事なのか理解できなかったが、ヒラサカから離れた。

「は！」

アキツが気合と共にヒラサカの封印を解いた。武彦は張り詰めていた何かがスウツと消えた感覚に囚われた。

「ぬおおお！」

オオマガツとヤソマガツは突然障害物がなくなったせいで、勢い余って飛び出して来た。

「被いたまえ、清めたまえ！」

その機を逃さず、アキツが柏手を連続して打った。途端に辺りに清らかな気が満ち、二体の魔物が悶絶した。

「グオオオオッ！」

彼女達は聖なる気の中では自分達の姿を留められない。身体の端が崩れ始めた。

「被いたまえ、清めたまえ！」

アキツが柏手を打ちながら魔物に近づく。

「うおおお……」

自分達があればほど苦戦した二体の魔物がアキツの柏手にもがき苦しんでいるさまを見て、武彦は、

（確かにアキツさんは強いなあ。でも、タジカラさん達とは違う強さだ）

と思った。

「おのれええ！」

オオマガツはヤソマガツを抱えるようにして、ヒラサカの向こう

へと逃げて行った。

「追います、たけひこ様」

アキツが武彦を見る。

「ええ？」

ここで終わりかと思ったので、ホツとしていた武彦だったが、

「わかりました！」

とアキツに続いてヒラサカを越えた。

「うわ」

そこは何とも形容しがたい禍々しいところだった。周囲の壁が死んでできているような造形だ。まさに「死の国」である。しかし、

「被いたまえ、清めたまえ！」

とアキツが柏手を打つと、たちどころに辺りは清らかな気で満ちて行った。同時に闇も追いやられたかのように明るくなる。壁に浮かび上がったいた死人のような模様も消えてしまった。

「凄いですね、アキツさん。さすがです。尊敬しちゃいます」

武彦があまりに絶賛するので、アキツは照れたように微笑み、

「そのような事、ございませぬ。たけひこ様がいらっしやるので、私も心置きなく力が使えるのです」

「そうなんですか」

武彦はキョトンとしてしまった。同時に急にアキツの事が可愛く見えてしまう。

「参りましょう」

アキツが歩を進める。

「はい」

武彦もそれを追った。

このアキツの「進撃」はイザにも意外だったようだ。

「アキツめ、よもやこちらに攻め入って来ようとは……」

彼女は齒軋りして玉座から立ち上がり、

「何としても押し返すのだ。ヨモツにあの女の気を満たされては、

国が保たぬ」

冷徹な女王が感情を露にしたのを見て、オオマガツとヤソマガツは恐れ戦いた。おのの

ツクヨミは自分の持てる力の全てを注ぎ込み、ヤマトの国王ウガヤを弔った。ウガヤの身体から邪気が消え、その顔は穏やかになった。

「忝い、かたじけなツクヨミ。陛下もこれで天に行かれた事でしょう」
妃のタマヨリが涙を流して礼を言う。ツクヨミは跪いて、

「ありがとうございます」

と言ってから顔を上げ、

「これより、アマノイワトに向かいます。アキツ様とたけひこ様がヒラサカを越えてヨモツにお向かいになりました」

「ええ？ ヨモツに？」

タマヨリとイスズ姫は驚いて顔を見合わせた。

「たけひこ様が？」

イスズは心配そうな目でツクヨミを見ている。ツクヨミは微笑んで、

「お二人は私がお守り致します。この命に代えても
するとイスズは、

「ならぬ。ツクヨミも必ず生きて帰りなさい。死ぬる事は許しませぬ」

と強い調子で言った。ツクヨミはその言葉に感動して目を潤ませ、

「はい」

と頭を下げた。

ホアカリ達一行はヤマトの城が見えるところまで来ていた。その時だった。

「何奴だ、あれは？」

スサノが彼らの遙か左から駆けて来る騎馬隊を見つけて呟いた。

「あれは……」

ホアカリがその軍旗に気づいた。それは彼の嫡男であるウマシのものだったのだ。

「ウマシが駆けつけてくれたか」

ホアカリは嬉しそうに言ったが、ウズメが、

「いえ、そうではありませぬ。ウマシ様から妖気が感じられます」「何？」

スサノもタジカラもその言葉にギョツとした。

「ご覧ください、ウマシ様に付き従っておる兵共を。死人しにんです」「ウズメは厳しい表情になって言った。

「……」

ホアカリは言葉を失ってしまった。タジカラとスサノも顔を見合わせた。

「オモイの気が感じられます。彼奴あやつがウマシ様を取り込んだようです」

ウズメは悔しそうに言った。スサノが、

「おのれ、オモイめ！ ナガスネ様ばかりでなく、ウマシ様まで！」

彼はウマシを嫌ってはいしたが、殺してしまおうとは思っていない。彼は複雑な心境だった。

四十九の章 ウマシの穢れ、武彦の危機

ヒノモトの国の王ホアカリとその一行は、ホアカリの嫡男であるウマシ率いる死人軍団しひとに迫られていた。

「行くぞ、タジカラ！」

スサノが炎の剣の業火を全開にし、馬を走らせる。昼間の炎の剣は、さながらもう一つの太陽のようである。

「おう！」

タジカラも剣を振り上げ、スサノに続いた。

「陛下」

ウズメがホアカリに目配せする。ホアカリは頷き、また馬を進めた。ウズメはそれに続く。

（オモイめ、ウマシ様まで取り込むとはどこまで卑怯なのだ……）

ウズメはヤマトの軍師オモイの狡猾さに腹が立った。

（しかも、己おのれは姿を見せぬ。誠に許し難き男）

正々堂々が夫であるタジカラの良さ。ウズメはそこに惹かれた。

だからこそ、タジカラと正反対の事をするオモイに怒りを感じるのだ。しかし、実はそうではなかったのは、まさにその直後にわかった。

「ホアカリ王、お命頂戴仕るー！」いのちをうけたまわります

不意に別の方向から、オモイが走って現れた。彼はヨモツの妖気を存分に吸った漆黒の剣を振り上げ、ホアカリに迫った。剣の先から黒い煙のように妖気が流れ出ている。

「何！？」

死人達と剣を交えていたスサノとタジカラはハツとした。

「こちらは囷か！？」

スサノが齒軋りした。

「おのれえええ！」

タジカラが剣を振り回し、死人達を弾き飛ばす。

「スサノ、タジカラ、もはや我らは女王イザ様にすぎるしかないのだ。無駄に戦を広げるな」

ウマシはすでにオモイによってヨモツの水を口にしており、死人にはなっていないが、味方ではなかった。

「ウマシ様、貴方という方は！」

スサノが剣を振り上げ、ウマシを斬ろうとした。

「やめよ、スサノ！ 陛下の御前だ！」

タジカラが間に入ってそれを止めた。スサノはウマシを睨みつけ、

「しかし、タジカラ……」

「今は堪えよ。それより、陛下をお助けするのだ！」

タジカラは纏わりつこうとする死人達を振り切り、ホアカリの元へと馬を走らせた。

「はあ！」

スサノはもう一度ウマシを睨みつけてから、タジカラを追った。

「うぬ！」

ウズメは八百万の神の中の船戸の神を召喚し、ホアカリを守っていた。船戸の神は穢れを退ける神である。

「さすがウズメ様。しかし、私は貴女より遙かに上に行く者ですよ。オモイはウズメを嘲笑うように言い放った。

(オモイめ、如何なる企みがあるのか?)

ウズメは軍師であったオモイの策謀を感じた。オモイはニヤリとして言う。

「このようなもの、私には通じませぬ」

「何と!?!」

オモイは、船戸の神が作った結界をもともせず、ホアカリに近づいた。

「陛下、お逃げください！」

ウズメが叫ぶ。しかし、ホアカリは目前に迫るオモイに吞まれたかのように動けない。

「陛下!」

ウズメが天の鳥船の神を召喚し、ホアカリを乗せ、移動させた。
「ぬ！」

オモイはホアカリを逃したのと、タジカラ達が追いついて来たのを知り、

「ここは退くか」

と呟くと、逃げてしまった。

「待て、オモイ！」

今なら背後から斬り捨てられると判断したタジカラが追おうとすると、ウズメが叫ぶ。

「お館様、おやめくたされ。今は、陛下の御身おんみを守るが先にございます」

「ああ……」

タジカラは、先ほどオモイの畏に呆気なく引つかかった事を思い出し、馬を止めた。

「陛下」

スサノも追いついた。ホアカリは悲しそうな目で後方に迫るウマシ達の部隊を見て、

「ウマシはもはや、ヨモツに堕ちたのか？」

「いえ、まだです。まだお救いする事ができます」

ウズメが微笑んで答えた。

ヤマトの城では、王妃タマヨリと王女イスズが再び民の手当てに動いていた。二人は癒しの力を持つ家系である。その治癒力は武彦がクシナダに使ったものの上を行く。

「たけひこ様、ツクヨミ、オオヤシマを頼みます」

イスズはアマノイワトの方角を見て、祈った。

アキツと武彦は更に奥へと進み、ヨモツの中枢に向かっていた。
「被いたまえ、清めたまえ！」

アキツの柏手の威力は凄まじく、ヨモツの穢れは嘘のように消滅

する。彼女はそのままヨモツを被い清めるつもりでいた。

「は！」

その時、アキツと武彦の間に何十体ものヨモツの兵であるシコメ（身体の半分が腐った魔物）が固まって地面の下から現れ、壁を作つて、二人を引き裂いた。

「アキツさん！」

アキツの姿はシコメ達の壁の向こうに見えなくなってしまった。

「たけひこ様！」

武彦はパニックになりそうだった。先ほどまでは、アキツの身体から出る清らかな気と、その力によつて放たれる光で、何とか平静を保てた。しかし、アキツと離れ離れになった今、周囲は漆黒の闇そして、シコメ達の放つ妖気と臭気で息が詰まりそうだ。

「うわああ！」

混乱する武彦に追い討ちをかけるようにシコメ達が襲いかかる。

「ぐおおおお！」

シコメには性別はないが、その姿は、武彦の世界で言うと「女のゾンビ」そのものである。顔が半分溶けていて、吐く息はまさに腐った肉の臭いである。

「た、助けて！」

思わず美鈴を思い浮かべる武彦。

『慌てるでない、武彦！』

神剣アメノムラクモが一喝した。

『退くがよい、ヨモツの魔物！ 我は神剣アメノムラクモ！ 我に触れる事は許さぬ！』

アメノムラクモは鞘の中にありながらも、眩い光を放った。

「ぐおおおお！」

シコメ達はその光に驚き、武彦から離れた。

『さあ、我を抜くのだ、武彦！』

「は、はい！」

武彦はアメノムラクモを鞘から抜いた。途端に光が更に強くなり、

シコメ達はその光によって溶けるように消滅してしまった。

「御剣さん、ありがとうございます。これでもう、僕一人でも大丈夫ですね」

武彦が嬉しそうに言う。

『いや、そうもいかぬ。本来であれば、我の力はイザに会うまで温存しておきたかったのだ。今使ってしまったのは、この先は危うき事となる』

「ええ？」

自分が情けないせいで、計算外の事が起こってしまったと感じた武彦は蒼ざめた。

『それより、この目の前の壁を斬り裂くぞ、武彦』

「はい！」

武彦は目の前にできたシコメの壁を斬り裂き、前に進む。アキツはすでにその先へと行ったらしく、武彦の前には漆黒の闇に包まれた大きな穴が見えるだけだった。

「アキツさん、先に行っただけですね」

武彦はまた不安になりながら言った。

『お前が情けないからな』

アメノムラクモが追い討ちをかけるように手厳しい事を言う。

「ごめんなさい」

武彦はシュンとしてしまった。

『気に病んでいる暇はない。走れ、武彦。我が明かりとなる』
アメノムラクモの言葉に武彦は奮起した。

「はい、御剣さん！」

武彦は輝くアメノムラクモを掲げ、アキツを追った。

一方ツクヨミはヨモツとの境であるヒラサカまで来ていた。

「おお」

彼はアキツの気がヨモツの穢れを押し返しているのを感じ、感嘆していた。

(さすがアキツ様。私など、まだまだだ)

それでも彼女の思いに答えたいと考え、ツクヨミは一人を追いかけた。そこがどれほど彼にとって恐ろしい場所かも考えずに。

五十の章 ウズメの秘術、イツセの覚悟

ヒノモトの国の王ホアカリ達一行は、ヤマトの元軍師オモイの奇襲を退けた。しかしまだ、ホアカリの嫡男であるウマシとそれに従う死人しびとの軍団がいた。

「ウズメ、何やら策があるようだな？」

タジカラが近づいて来るウマシ達を睨んだままで奥方のウズメに尋ねる。ウズメは頷き、

「ウマシ様は死人にはなっておられませぬ。恐らくは、ヨモツの水でオモイに操られているだけでしょう。その穢けがれを祓わば、大事ありませぬ」

ホアカリはウズメの言葉にホツとしたようだ。

「頼む、ウズメ。愚かではあるが、我が子である。救ってやってくれまいか」

ホアカリはさすがのような目でウズメに言った。

「はい、ホアカリ様」

ウズメは前に進み出て、馬を降りた。そして、舞を舞う。舞踏師ぶたうしの術が始まる。

「ウズメ殿は、何をするつもりだ？」

スサノが小声でタジカラに訊く。タジカラはニヤリとして、

「ウズメに舞われて、落ちぬ男はいぬ。お前もそれは存じていよう？」

「む……」

スサノは顔を赤らめてムツとした。彼はウズメの舞を見て、彼女に惚れたのだ。そして、タジカラとウズメを争ったが、ウズメはタジカラを選んだ。嫌な事を思い出させおって、とスサノはタジカラを睨む。

「はい」

ウズメは気合を入れ、舞い始めた。その動きはしなやかで美しく、

輝いていた。実際に彼女の身体は微かに輝いている。日が暮れてからであれば、それがはつきりわかったであろう。

「おお……。さすが、オオヤシマーと謳うたわれた舞踏師よ。美しいな」
ホアカリが言った。タジカラは頭を下げ、

「お褒めに預かり、光栄に存じます」

ウズメは舞いながら、気を放っていた。その気がゆったりと広がって行き、死人に触れる。その途端に死人達の兇悪な顔が笑顔に変わる。

「ほおお……。」

死人達は次々に浄化され、肉体は崩れ落ちるが、魂は天へと昇り始める。

「ぬ？」

ウマシはそれに気づき、進軍を止めた。しかし、ウズメは舞をやめない。彼女の気は次第にウマシ達を取り囲んで行き、彼に付き従っていた死人は全員浄化されてしまった。

「おのれ！ そのような幻覚、私には通じぬぞ、ウズメ！」

ウマシはウズメを睨んだ。するとウズメはニコツと微笑み、スツと衣の襟を開く元々ウズメの衣は露出が多いのであるが、彼女はそれを更に多くした。

「え？」

自分の奥方が始めた事を見て、タジカラがギクツとした。スサノも思わずギョツとする。ホアカリは状況がわからないのか、ポカンとしてウズメを見ていた。

「これでもそのような強がりをおっしゃいますか、ウマシ様？」

ウズメの白い肌が露になる。彼女は妖艶な笑みを浮かべ、ウマシを誘惑するように身体をくねらせる。

「……」

ウマシはホアカリの嫡男とは言え、まだ子供である。彼は大人の女性であるウズメの妖艶な色気に動揺していた。心臓の鼓動が速くなり、呼吸が荒くなる。

「さあ、ウマシ様、こちらにおいでください」

ウズメは半分見えかけた胸の膨らみをギョツと寄せ、ウマシを挑発する。タジカラは奥方の暴走を止めようと思ったが、ウズメの術なのか、身体が動かない。

(ウズメ、何をするつもりか……?)

彼は声すら出せなくなっている事に気づき、改めて奥方の力の凄まじさを知った。

「ああ……」

ウマシの身体からヨモツの水が揮発するのが見えた。次の瞬間、ウマシはガツクリとして馬の上に伏せてしまった。

「お館様」

ウズメは衣の襟を正して、タジカラを見た。タジカラの身体はスウツと硬直が解け、動けるようになった。

「お、おう」

タジカラはハツとして馬を走らせ、ウマシに近づいた。
「気を失っておられるだけだ」

彼はウマシをヒョイと担ぎ上げ、ホアカリのそばへと戻る。

「ウズメ、大儀であった。ウマシをよく救ってくれた」

ホアカリはウズメを見て嬉しそうに言った。ウズメは跪いて、

「ありがとうございます、陛下」と応じた。

「今のは、如何なる術なのだ、ウズメ殿？」

スサノが顔を赤らめたままで尋ねた。するとウズメは、

「殿方は、女性の肌がお好きですので、その欲が、ヨモツの水を追い出したのでございます」

「そ、そうなのか……」

要するに、ウマシはウズメの色香に欲情し、その心がヨモツの水の邪悪に勝ったという事らしい。

「怖い方だな、ウズメ殿は」

スサノが言った。ウズメはニコツとして、

「私と添わずに良かったとお思いですか？」

「あ、いや……」

スサノは真つ赤になってウズメから離れる。ウズメはそれを見てクスツと笑った。

一方ヨモツの中を進む武彦は、ツクヨミからの言霊ことばたまを受け取り、彼を待っていた。

『アキツ様にもお送り致しました故、程なくお会いできましょう』
『わかりました』

ツクヨミのおかげで、どうやらアキツと合流できそうなのがわかった武彦は、ホツとしていた。

『武彦』

神剣アメモムラクモが言う。

「はい？」

『くだいようだが、アキツはお前の幼馴染ではないぞ』
『わかってますよ！』

また自分の心を見透かされたのを思い知る武彦だった。

(アキツさんは、亜希ちゃんとそっくりだけど、違う人なんだ……)

そのアキツは、武彦よりしばらく奥の場所で、気持ちを高揚させていた。

(ツクヨミ殿……)

彼女はもう自分を偽る事をやめていた。

(私はツクヨミ殿の事をお慕いしている。それは真まことの心……)
「ツクヨミ殿……」

アキツは元来た道を見やり、そう呟いた。その顔はまさしく恋する女性の顔であり、ワの女王後継者の顔ではなかった。

そのアキツの心が、ヨモツの最深部である玉座の間にいる女王イザに伝わってしまった。

「そうか、そうか。アキツは、ツクヨミに心惹かれておるのか？
ならば、ツクヨミを手始めになぶ撈なぶろうかの」

イザはその漆黒の目を細め、ニヤリとした。彼女はアキツの心の隙を見抜いたのだ。

「オオマガツ、ヤソマガツ。アキツとイワレヒコはお前達には倒せぬ。ツクヨミを屠ほぶれ。さすれば、奴らの絆ほこが綻ほこぶ」

「はは！」

二体の魔物はイザに跪くと、すぐさまツクヨミの元へと向かった。

ホアカリ襲撃に失敗したオモイは、オオヤシマの中央にある高原の岩場に潜んでいた。ゴツゴツとした岩が集まってできた山が、長年の風雨の侵食によって鋭く尖った形に削れている。

（この先、如何いかがする？ イザ様の助けは当てにできぬ。もはやこれまでなのか？）

オモイは齒軋はりした。そしてはたと思い至った。

「そうか。ヒノモトにはクシナダがおるが、ヤマトには誰もおらぬではないか……」

彼の顔が再び狡猾さを取り戻した。

「イツセなど、物の数ではない」

そのイツセはヤマトの城に帰還し、母タマヨリと妹イスズを助け、民達の手当てに奔走していた。

「アキツ様達はどうかされたろう？」

自分の不甲斐なさが悔しいイツセだったが、そんな事を考えてみても仕方がないとも思った。

「今は、民達の命が大事だ」

彼は怪我人を励まして回った。

「兄あに様」

イスズが小声で話しかけて来る。イツセは妹の様子づきが妙なのに気

「如何した？」

イスズは更に声を低くして、

「何やら、面妖な者がこちらに近づいている気配が致します」

「何と！」

イツセはギクツとした。今ヤマトには自分しかない。

(もしや、オモイか?)

イツセは焦っていた。オモイの力を目の当たりに行っているので、自分一人では防ぎ切れないと思ったからだ。

「わかった。兵と共に備えよう」

イツセはそれでも意を決して城の外へ向かう。イスズはそれを心配そうに見送った。

五十一の章 オモイの襲撃、ウズメの怒り

策士であり、野心家でもあるヤマトの国の元軍師オモイは、ヤマトの城に亡き国王ウガヤの嫡男イツセしかいない事を思い出し、ヒノモトの国王ホアカリを戴くヤマトの將軍であるタジカラ達が到着する前に攻めようと考えた。

「城の一つも落とさねば、我が主は私を見限る」

オモイにとつて、ヨモツの女王イザは絶対的な存在であるが、畏怖の対象でもあつた。

一方、オモイに軽く見られたとは露ほども知らないイツセは、兵を揃えて城の周囲を警戒していた。

「民の多くが城にいるのだ。ヨモツの者にここを攻めさせる訳にはいかぬ」

イツセは、また痛み出した矢傷に顔をしかめながら、兵達を叱咤激励していた。

「イツセ様、あちらを！」

城の物見台に上つている兵が指差す。イツセはそちらに目を向けるが、まだ地上からは視認できない。

「オモイです！ オモイが、こちらに一人で向かつております！」
兵が大声で告げる。イツセはギョツとした。

（あの者は、面妖なる術を使う。私で太刀打ちできるのか？）

しかし、そんな弱気を振り払う。

「今は私しかおらぬのだ！ 何としても、ここは守る！」

イツセは剣を抜き、オモイを待ち構えた。

ヤマトの国の舞踏師であるウズメは、先発させた八百万の神からの声を聞いていた。

「お館様、オモイがヤマトの城に向かつております」

ウズメの夫タジカラはそれを聞いていきり立った。

「オモイめ！ 我らの隙を突こうというのか！？ どこまでも卑劣な男よ」

彼はスサノを見て、

「行くぞ」

と言ったが、ウズメが、

「私が参ります。お館様とスサノ殿は、陛下と殿下をお守りください」

タジカラはスサノと顔を見合わせてから、もう一度ウズメを見る。

「わかった」

三人の中で、一番早く城に行けるのは召喚師であるウズメだ。タジカラは反論する事なく、奥方の言葉に従った。

（陛下はともかく、気を失ったままのこの愚かな王子は、また利用されるかも知れぬからな）

タジカラは、自分の前に乗せたヒノモトの王子ウマシを見た。

「頼んだぞ、ウズメ」

ホアカリが声をかけた。

「はい、陛下」

ウズメは召喚した天の鳥船の神に乗り、空を飛んだ。

（一刻も早う……）

ウズメは遠くヤマトの方角を見た。

アマノイワトのヒラサカの奥へと足を踏み入れた言霊師ツクヨミは、強大な妖気が接近して来るのを感じていた。その妖気には覚えがあった。

（あの二体か？）

ツクヨミは考えた。二体は強力な魔物である。

（あの二体の魔物には我が言霊は通じぬ。如何にすれば……？）

考えあぐねる彼を嘲笑うかのように、黒い炎を身に纏ったオオマガツ、雷を身の纏ったヤソマガツが、地面を割って現れた。

「くっ！」

ツクヨミは後ろに飛び、身構えた。オオマガツはニヤリとして、
「ツクヨミ。イザ様の命により、その命頂く。覚悟せよ」

「そのような事、応じられぬな！」

その時彼は、二体の魔物の背後に長い紐のようなものを見た。それは二体が出て来た穴へと繋がっている。

（何だ、あれは？）

「何をしておるか、こやつ！」

二体のうちで血気盛んなヤソマガツが、ツクヨミの視線が自分達に向けられていない事に腹を立て、襲いかかる。

「ぬ！」

ツクヨミは軽い身のこなしでそれをかわした。

「逃げるだけか、言霊師。腑抜けが」

ヤソマガツが挑発する。しかしツクヨミはそれを無視した。怒りに任せて踏み込んで勝てる相手ではない事はよくわかっている。

（何か、こやつらを攻むる手立ては……？）

アキツは、ツクヨミが襲撃された事を感じていた。

「ツクヨミ殿！」

アキツは歩を速めて道を戻り始めた。

（あの方を今、喪う訳には参らぬ……）

彼女のその思いは、オオヤシマを救う事よりツクヨミを救う事に傾きかけていた。

そしてまた、二人の中間にいた武彦も、ツクヨミの危機を感じていた。

「どうしましょう、御剣さん？」

彼は神剣アメノムラクモに尋ねた。

『アキツがもうすぐここに来よう。それを待て。お前だけが戻っても、如何にもできぬ』

「はい」

武彦はアキツが戻って来るのを喜んだが、彼女はツクヨミのため戻って来るのだと気づき、シヨンボリした。

『何度も申すが、アキツはお前の幼馴染ではないぞ、武彦』

またアメノムラクモが釘を刺す。

「わかつてますよ、御剣さん」

武彦は口を尖らせた。そんな事は言われるまでもなくわかつているつもりの武彦であるが、アキツに感じるその思いは、只単に幼馴染みの都坂亜希みやこあきとアキツが似ているからだけではなかったのだ。それを知るのはまだ先の事である。

オモイは歩を止め、城門の前に居並ぶ兵達とその中心にいるイツセを見た。

（愚か者共が。うぬらは烏合の衆よ）

オモイはニヤリとし、再び走り出した。

「うぬらは全てあの方に捧げる贄にえよ！ 皆、死ぬるがいい！」

彼は剣を抜き、下段に構えた。

イツセもまた、オモイを視認かたきしていた。

「オモイめ！ 我が父ウガヤの仇！」

イツセは剣を正眼に構える。いや、父ばかりではない。多くの兵がオモイの策略で命を落としたのだ。許せる事ではない。兵達も剣や槍を手にした。彼らもまた、オモイに怒りを募らせていた。

「あの者を城に決して入れるな！ かかれ！」

「おーっ！」

イツセの命令で、兵達は一斉に走り出した。

「邪魔だあ！」

オモイが雄叫びを上げながら兵達をいとも簡単に斬り捨てる。その剣の動きは速く、まるで見えない。

「おのれ、オモイ！」

イツセは剣を振り上げた。肩の傷が痛む。しかし彼は齒を食いし

ばり、

「父上の仇！」

とオモイに突進した。オモイは兵の槍を跳ね上げ、イツセを睨んだ。「大儀の前に父とか言うでないわ！ うぬのような小者に、私は敗れぬ！」

火花を散らして、二人の剣が交差した。

「ぬうう！」

イツセが一気に押す。しかしオモイが押し返す。

「ふおおお！」

オモイはイツセを跳ね除け、一足飛びに彼の懐に入った。

「父上がお待ちです、イツセ様」

オモイはニヤリとして、イツセの心臓を剣で貫いた。

「グホオツ……」

イツセは血に噎せ返り、膝を着いた。オモイはスツと彼から離れ、

「おらああ！」

と叫ぶと、周囲にいた兵達を剣を振り回して追い払った。

「イツセ様アツ！」

兵達が絶叫した。オモイはそれを無視して、

「さあ、お逝きくだされ、イツセ様！」

と剣を振り上げる。

「させぬ！」

ウズメの声がして、オモイの剣が弾き飛ばされた。剣はくるくると宙を舞い、地面に突き刺さった。

「何！？」

彼は憎悪に満ちた目で天から舞い降りて来たウズメを見た。彼女は海神を召喚し、聖なる水でオモイの剣を弾いたのだ。

「オモイ！ 其方の相手は私がする！」

ウズメはイツセを天の鳥船で城の中へと運びながら、オモイを睨んだ。

「うぬも私の敵ではない！」

オモイが何かを呟く。すると周囲の地面の小石が竜巻のように渦巻いて集まり、巨人になった。

「うぬの相手はこやつがする」

オモイは高笑いをして、城へと歩き出す。

「待て、オモイ！」

追いかけるウズメの前に土塊つちくれの魔物が立ち塞がった。

「おのれ！」

ウズメは歯軋りした。

城の中では、瀕死の重傷の兄イツセを見てイスズが驚愕していた。

「兄様あにさま！」

彼女は自分の力の全てを注ぎ、兄の命を救おうとした。イスズとイツセの身体が輝き出す。

「無駄ですぞ、イスズ様。今お助けしても、すぐにそれは無駄となりましょう」

イスズがギョツとして目を上げると、そこには狡猾な笑みを浮かべたオモイが立っていた。

「オモイ……」

イスズは思いを睨みつけた。

五十二の章 オモイの無念、イザの進撃

ヤマトの国の王女であるイスズは、かつてヤマトの軍師であったオモイの形相に驚愕していた。あの穏やかな表情は面影すらない。

「オモイ、如何いかしました？」

イスズは悲しそうな顔で尋ねる。しかしオモイはニヤリとして、「私は変わりありませんよ、イスズ様。昔のままでございます」
イスズはその声に寒気を覚える。

「……………」

そして、オモイは初めから自分達を騙していたのかと気づき、イスズは啞然とした。

「く、イスズ、逃げよ……………」

イスズの癒しの力で、死の淵から戻ったイツセが呟いた。

「兄様！」

イスズはイツセを見た。イツセは微かに笑い、

「私はもう逝かねばならぬ。其方そなたは逃げよ……………」

「兄様、そのような事を仰せにならないでください」

イスズは泣いていた。たくさんの兄達が戦場いくさばで散り、兄はイツセのみ。そしてイツセを喪えば、弟であるイワレヒコしかいなくなってしまう。

「戯言たわごとはおすみですか、姫？」

オモイがゆつくりと近づく。イスズは兄とオモイを交互に見た。

その頃、ヤマトの舞踏師ウズメは、土塊つちくれの魔物と戦っていた。

「ええい！」

海神わたつみの聖なる水の攻撃で魔物の身体を砕く。しかし、一度崩れた

小石はすぐに集まり、再生してしまう。その繰り返しだ。

「埒ちひが開かぬ！」

ウズメはその美しい顔を険しくして、魔物を見上げる。

(こうしておる間に、イツセ様達が……！)

彼女はいつになく焦っていた。

(やはり、オモイを倒すしかないのか……)

ウズメは魔物の足をクシナダの水の槍を参考にして作った聖なる水の槍で攻撃して吹き飛ばした。魔物は片足を失って均衡を失い、ズズンとその場に倒れた。ウズメはその隙を突き、城へと走った。

「ぐおおお！」

だが、魔物はすぐに小石を集めて再生し、ウズメを追いかけて来る。それを遠巻きに見ていたイツセの兵達は固まってしまったかのように動かなかった。

武彦は、自分の姉美鈴に瓜二つのイスズが危機に瀕しているのを感じていた。もはや他人とは思えないくらいイスズに親近感を抱いている武彦は慌てていた。

「イスズさんが危ない……。御剣さん、どうすれば……？」

彼は神剣アメノムラクモに尋ねた。

『イスズに伝えよ。其方の力で、オモイを倒せるとな』

アメノムラクモは謎めいた事を言った。

「え？ どういう事ですか？」

武彦は意味がわからず、ポカンとした。アメノムラクモは、

『オモイは死人ではないが、ヨモツの者だ。イスズの癒しの力はヨモツの者に効く』

「え？」

こんな時に、武彦は自分の頭の悪さを痛感して情けなくなってしまう。そんな武彦にアメノムラクモはいらついたようだ。

『早はやうイスズに伝えぬか！』

「は、はい！」

ウダウダ悩んでいる武彦をアメノムラクモが一喝した。

そしてイスズは武彦の声を聞いた。

「御剣さんが教えてくれました。イスズさん、貴女の力でオモイを倒せるそうです。やってみてください」

イスズには武彦の言っている意味がすぐにわかった。彼女は武彦より更に親近感を抱いているのだ。だから彼の伝えたい事が瞬時にわかったのだ。

（オモイはヨモツの者。ならば……）

彼女はイツセへの治療を続けながら、オモイをもう一度睨んだ。

「どうされました、姫？」

オモイは相変わらず不敵な笑みを浮かべ、イスズを見ている。

「其方はヨモツの者。ならば、私にも戦う術すべがある！」

イスズは自分の力を解放した。オモイはギョツとして立ち止まる。

（何？ イスズめ、何をするつもりか？）

イスズの身体が更に強く輝き始める。しかしそれは決して攻撃的な輝きではない。癒しの輝きだ。

「はあ！」

彼女は気合と共に癒しの力をオモイに放った。

「ぬー！」

オモイは完全に虚を突かれ、それをまともに食らってしまった。

「ぐうっぐうっ！」

ツクヨミの言霊ことだまさえも効かなかったオモイがその場に膝を着いてしまった。

「こ、これは……」

オモイは自分の身体が溶けている事に気づいた。彼には訳がわからない。

「私の力は、癒し。それは生きる者には助け。しかし、ヨモツの者には痛み」

イスズはイツセの治療を続けながら言った。

「……」

オモイは啞然とした。

（これは……？ 私はイザ様に忠誠を誓ったが、死人にはなってお

らぬ。ヨモツの水も飲んでおらぬ。如何なる事なのだ？

「わからぬのか、オモイ」

アメノムラクモの声が聞こえる。

「ぬ？」

オモイは武彦が来たのかと思い、辺りを見回した。しかし彼の姿はない。

「ヨモツに忠義を示さば、それは死人になったと同じ。うぬはその生まれついでての力をイザに利用されたのみ」

「……！」

オモイは、イザの嘲笑を聞いた気がした。彼は齒軋りした。

（この私も、ウカシと同じく捨て駒に過ぎぬのか！？）

「ふおおお！」

オモイはイスズの癒しの力で身体を溶かされ、ドロドロと崩れ落ち、遂に消えてしまった。

「イザめーッ！」

それが彼の断末魔だった。

「……」

オモイが溶けてなくなってしまったのを見て、イスズはその場にしゃがみ込んだ。

「兄様！」

彼女は次第に生命力を取り戻して来ているイツセに、更に癒しの力を注ぎ込む。

「イスズ、代わりましょう」

そこへ二人の母タマヨリが微笑んで現れた。イスズは母を見上げて、

「はい、母上」

と微笑んだ。

ウズメは、追いかけて来た土塊の魔物がいきなり倒壊したので、ビクビクしていた。

(これは一体?)

彼女はすぐに我に返り、城の中へと駆け込んだ。

アキツが武彦のところまで戻って来た。

「たけひこ様」

アキツの微笑みに、武彦は照れる。また彼女が幼馴染の都坂みやしろ亜希あきと重なる。

『武彦』

すかさずアメノムラクモが釘を刺す。

「わかつてますよ、御剣さん」

武彦は苦笑いした。

「如何なさいましたか、たけひこ様？」

アキツが不思議そうに彼を見たので、武彦は真顔になって、

「いえ、何でもありません。急ぎましよう、アキツさん」

「はい」

二人はツクヨミの元へと走った。

ヨモツの女王イザは、アキツと武彦がツクヨミのところに向かっているのを知り、

「オオマガツ、ヤソマガツ、戻れ。アキツとイワレヒコがそちらに向かつておる。ツクヨミの始末は後だのち」

「はい」

ツクヨミは二体の魔物に追い詰められて瀕死の状態だった。身体中に火脹れができ、顔や手の傷から血が流れ出している。

「また相手をしてやるよ」

オオマガツはそう言い捨てると、もと来た穴に飛び込む。

「あんた、結構いい男だねえ」

ヤソマガツがニヤリとして言つて、穴に飛び込んだ。

(助かったのか……)

息をするのも苦しいツクヨミは、ドサツと地面に崩れ落ちた。

「アキツ様……」

彼はそのまま気を失ってしまった。

イザはヨモツの最深部である玉座の間で狂喜していた。

「オモイよ、最後に大儀であったぞ。うぬの我われに対する恨み、確かに受け取った。うぬは役に立ったぞ」

彼女は玉座を立ち上がり、

「さて、時は満ちた。オオヤシマをわが手に」

イザはそう言うと、大声で笑い続けた。

五十三の章 タマヨリの願い、アキツの戸惑い

武彦とアキツは、気を失っているツクヨミを見つけていた。

「ツクヨミ殿！」

アキツはツクヨミの負った傷と火傷を見ると、顔色を変えて彼にすがりついた。

『大事な、アキツよ。ツクヨミは気を失っているだけ。ここは一度引き、ツクヨミを休ませるのだ』

神剣アメノムラクモが言った。

「はい、御剣様みつるぎ」

アキツは涙を拭って応じた。武彦がツクヨミを背負い、歩き出す。アキツがそれに続く。

『イザが動いた。急がねばならぬ。走れ、武彦』

アメノムラクモが告げた。

「はい、御剣さん！」

武彦は猛然と走り出した。彼は自分でも驚くくらい速く走っていた。

（凄いな。この力があれば、亜希ちゃんより速く走れるかも！）

彼は幼馴染の都坂亜希みやまかあきが陸上部のエースプリンターである事を思い出していた。相変わらず場違いな呑気さを発揮する武彦である。

「たけひこ様！」

アキツがあまりにも速く走る武彦を慌てて追いかけた。

ヤマトの城では、母タマヨリと妹イスズの癒しの力で、長兄のイツセが回復していた。

「誠にありがとう存じます、母上。そして、イスズ」

イツセはタマヨリに対して頭を下げた。

「何を申すか、イツセ。私は其方そなたの母であるぞ。其方が危うき時は、いつでも助ける。当たり前前の事です」

タマヨリは息子の生還を喜び、涙ぐんでいた。

「はい。忝かたじけのう存じます」

イツセも母の優しさが身に沁み、涙を流した。

「皆様、ご無事でしたか」

そこへウズメが駆け込んで来た。

「ウズメ、其方こそ、無事で何よりです」

タマヨリが微笑んで応じる。ウズメはイツセの服が血で染まっているのを見て、

「イツセ様、それは……？」

と仰天した。イツセは苦笑いして、

「ヨモツの戸をくぐりかけたところを、母上とイスズに助けてもらったのだ」

「そうなのですか」

ウズメは血の量を見て、改めてイスズとタマヨリの癒しの力に驚愕した。

（クシナダ殿も、たけひこ様に助けられたと聞いた。ヤマトの王家ではなく、タマヨリ様のお血筋のお力なのか？）

ウズメはハツとして周囲を見渡し、

「オモイは逃げたのですか？」

するとイスズが、

「オモイは溶けてなくなりました。彼奴あやつは、やはりヨモツの者でした」

「溶けて？」

ウズメには意味がわからなかった。するとそれに気づいたイスズが、

「たけひこ様が教えてくださいました。オモイはヨモツの者であるから、私の癒しの力で倒せると」

と嬉しそうに話す。

「ああ」

ようやく合点がいくウズメである。

(癒しの力をヨモツの者に使うと、それは癒しとは違う力となるのか……)

イザに対抗できる手段が見つかったと思うウズメである。しかし、イザはその程度の存在ではない事を彼女は後に知る事になる。

武彦とアキツはヒラサカを越えてアマノイワトに辿り着いた。

「気休めにしかなりませぬが……」

アキツはヒラサカを封じ直した。オオマガツとヤソマガツの二体の魔物であれば、ヒラサカの封印も役に立とうが、イザにはそれすら通じない可能性があるのだ。

「ツクヨミ殿を寢所へ。お休みいただきます」

アキツは洞窟の角を曲がり、イワトの別棟に向かって歩き始める。

「あ、はい！」

武彦はハツとして彼女を追いかけた。

「こちらへ」

アキツが案内したのは、彼女の寢所らしかった。荘厳な気に満ちた部屋だ。武彦は入るのを躊躇したくらいだ。

「そちらにお寝かせ下さい」

アキツは自分が普段寝ているベッドのような場所を指し示した。

「はい」

武彦は慎重にツクヨミをそこに寝かせた。

『武彦、座を外せ』

アメノムラクモが言う。

「は？」

武彦はアメノムラクモの声の調子がいつもより強いのでびっくりした。

『部屋を出よ！』

更にアメノムラクモは言った。

「あ、はい！」

どうして怒鳴られるのかわからなかったが、武彦は慌ててアキツ

の寝室を出た。

『覗くでないぞ、武彦』

アメノムラクモの言葉に、武彦はキョトンとした。

(覗くなつてどういう事?)

武彦は首を傾げながら元来た道を戻った。

「ツクヨミ殿……」

アキツは愛おしそうにツクヨミを見た。

「ヨモツの穢れけが、私がお祓い致します故、どうぞ、お戻りください」

アキツはそう言つと、衣をするすると全て脱ぎ捨て、ツクヨミの隣に寝た。美しい彼女の身体から、荘厳な光が放たれる。

「ツクヨミ……様……」

アキツの唇がツクヨミの唇に触れる。途端にツクヨミの身体も輝き出した。アキツの気がツクヨミの身体に入ったのだ。同時にツクヨミの身体中から、霧のようにヨモツの穢れが吹き出して来た。それと同時に嘘のように傷と火傷が消え去って行く。アキツの超絶的な気のお陰である。

「ツクヨミ様……」

アキツはツクヨミの服を脱がせて、直接彼の肌を手で撫でて行く。アキツに撫でられたところが、強く輝く。ヨモツの穢れは完全に消滅した。それでもアキツはツクヨミの唇を求めていた。彼女は今、女としてツクヨミを愛し始めている。いつしか、ツクヨミも衣服を全て脱がされていた。アキツがツクヨミの上に覆いかぶさるようにして抱きつく。彼女はツクヨミの唇だけではなく、胸や腹までも愛おしそうに舐めた。そして顔を火照らせ、ツクヨミの顔を見つめながら、次第にその唇を彼の身体の下へと動かして行く。

「う……」

その時、ツクヨミが意識を回復した。彼は自分の身体に触れる柔らかくて温かい何かを感じた。

「ツクヨミ様」

アキツが恍惚とした目でツクヨミを見下ろす。ツクヨミは状況を

把握するのに時間がかかった。

「ああ！」

彼はアキツが一糸纏いっしまとわぬ姿なのに気づいた。そしてまた自分も。

「アキツ様、いけません、このような事を……」

ツクヨミは慌ててアキツを押しつけ、身を起こした。

「ツクヨミ様、私は……」

アキツの心はツクヨミは良くわかつている。しかし、彼はアキツの思いに答えられない。

「いけません。貴女はワの国の王家の方。私は一介の言霊師ことだまし。そのような事、許されませぬ」

ツクヨミはサツと自分の衣服を着ると、アキツの衣服を彼女にかけ、

「よくお考えください。失礼致します」

と寢所を出て行った。アキツはガックリと膝を着いた。自分がした事が今になって理解できない。

(私は何を……。ツクヨミ殿の穢れを被うつもりが……)

アキツは声を上げずに泣いた。

「く……。あと一息であつたが……」

ヨモツの最深部の玉座の間で、女王イザが呟いた。彼女はツクヨミの身体に纏わり憑いた穢れを通じて、アキツを操っていたのだ。

(ツクヨミめ、さすが言霊師。並みの者とは違うか)

イザはツクヨミの強さを敵ながら感心していた。ツクヨミもアキツに惹かれているから、一糸纏わぬ姿のアキツが目の前にいれば、ツクヨミの理性もなくなると考えたのだ。しかし、それは失敗した。「アキツが男を知れば、力を失ったものを……。まあ良い。余興は終わりじゃ」

イザはその漆黒の瞳を細め、ニヤリとした。

ヒノモトの国王であるホアカリと、それに従っていたタジカラ、

スサノ、そして気を失ったままのホアカリの王子ウマシがヤマトの城に到着した。

「お久しゆございます、義兄上様あにうえ」

タマヨリが頭を下げる。イスズもそれに倣ならった。ホアカリは馬を降り、

「久しいな、二人共。元気そうで何よりだ」

「イツセは怪我のため、床に臥せております。お許してください」

タマヨリが告げた。ホアカリは微笑んで、

「いや、構わぬ。それより、イツセも無事で何よりであった」

ホアカリは玉座の間に通され、亡き弟ウガヤが座っていた椅子に腰を下ろした。

「弟ウガヤの事、誠に残念だ」

「はい」

タマヨリとイスズはウガヤの死を思い出し、涙した。

「二人には迷惑をかけた。あれは我が儘であったから、苦勞したであらう?」

ホアカリがタマヨリとイスズを勞ねぎう。

「いえ」

タマヨリは涙を拭って微笑んだ。イスズも涙を拭った。

「そうか。とにかく、其方達とイツセが無事で何よりであった」

ホアカリ達はしばらく話し込んだ。

タジカラとスサノは、ウマシを客間の寢所に寝かせると、ウズメからイスズの話の聞かされていた。

「なるほど。あのツクヨミでさえ敵わなかったオモイに、イスズ様が……」

タジカラは嬉しそうだ。光明が見えた気がしたのである。スサノも、

「ヨモツに対する手立てが見つかったのは、良かった」

と頷きながら言った。しかし、イザの力は彼らの思いを微塵に打ち

砕くほどのものであった。

五十四の章 美鈴の気持ち、イスズの心

神剣アメノムラクモに言われて、アキツの寝所を離れた武彦はアマノイワトの入口で外を見ていた。するとそこへツクヨミがやって来た。

「たけひこ様、ご迷惑をおかけ致しました」

ツクヨミは深々と頭を下げて詫びた。何の事かわからない武彦はキョトンとして、

「え、別に僕は……」

ツクヨミは頭を上げて、

「イザは動かぬようです。ですが、ここは危うきところです。アキツ様と共にヤマトの城までお引きください」

「ヤマトの城まで？」

武彦が答えあぐねていると、神剣アメノムラクモが、『アマノイワトの封はイザには通じぬという事。ここにいるのは危ういのだ』

「でも、ここで守らないと、まずいんですよ？」

事情がわからない武彦が言うと、

『ここに留まると、アキツがイザに操られる。そういう事であろう、ツクヨミ？』

アメノムラクモの指摘に、ツクヨミは顔を赤らめて、

「はい。御剣様の^{みつるぎ}仰せの通りです」

「そうなんですか」

武彦は相変わらずチンプンカンプンだ。

「それに、たけひこ様もそろそろ時が参りましよう？」

ツクヨミが言った。武彦はアツと思い、

「そうか、ここで僕が僕の世界に戻ったら、ホントにまずいですよね」

「そうです」

ツクヨミは微笑んだ。そこへアキツが現れた。

「あ、アキツさん」

武彦が声をかけると、アキツは俯いたまま、

「ご迷惑をおかけしました」

と言った。同じ事を言われた、と武彦はツクヨミをチラッと見た。すると何故かツクヨミがギクツとして、

「たけひこ様、こちらへ」

と武彦を隅に連れて行き、

「私は、アキツ様とは、その、あのですね……」

『言うな、ツクヨミ。我が心得^{われ}である。大事ない』

アメノムラクモが遮る。ツクヨミはホツとしたように、

「はい、御剣様」

とだけ言った。心配そうな顔でアキツが近づいて来た。

『アキツよ、これからヤマトの城に向かう。ここは危しい。良いな？』

アメノムラクモが言った。アキツは俯いたままで、

「はい。仰せのままに」

（さつきから、アキツさんとツクヨミさん、全然目を合わせていないんだけど、喧嘩でもしたのかな？）

事情を知らない武彦は呑気な事を思っていた。

ヤマトの城の謁見の間では、ヨモツに対するための軍議が開かれていた。

「ヨモツには、癒しの力が効くようだ。癒しの力を持つ者を国中から集い、部隊を編成したい」

タジカラが提案した。すると脇でそれを聞いていたイスズが、

「私も同行したいのですが、タジカラ？」

タジカラはギョツとしてイスズを見た。イスズはタジカラを見て、「私の力が役に立つのであれば、一緒に参りたいのです。いけませぬか？」

タジカラは困った顔をして奥方のウズメを見た。ウズメは頷いて、「イスズ様、ありがたきお話ですが、それはお受けできません。イワレヒコ様も、癒しのお力がおあります。ですから、イスズ様はこちらにお留まりくださいませ」

「そうですか……」

イスズは寂しそうに応じた。

(ようやく、たけひこ様のお役に立てると思うたのに)

ウズメはイスズの気持ちが変わり、胸が痛んだ。するとスサノが、「ヒノモトにも癒しの力を持つ者がおります。只今、クシナダと共にこちらに向かつております」

ウズメが八百万やちゅうまんの神でクシナダに知らせたのだ。そして同時に、ホアカリの妃であるトミヤ達もヤマトに連れて来る事になった。皆が同じところにいた方が戦いやすいという戦略的配慮だ。

「民にはそれぞれ、アマノイワトから離るるよう知らせを出し申した。国の行く末を決める戦いくさに民を巻き込む事はできません故」

スサノが言った。かつてウガヤ王が座していた椅子に座ったヒノモトの王ホアカリが頷く。そして彼は、

「皆に聞いて欲しい事がある」

一同はホアカリを見た。

「この戦が終わりに、安寧の世になりし時、私は王位をアキツ様にお返ししたいと思う」

スサノが仰天した。いや、彼だけではなく、タジカラもウズメも、そしてタマヨリとイスズも。

「やはり、国が乱れ、ヨモツよもつが蠢もよほく元を作りしは私とウガヤ。オオヤシマを治むるは、ワの王家のお血筋の方。それが一番正しき道と思う」

ホアカリの言葉に一同は深く頷き、感動していた。

武彦達は馬でヤマトの城を目指していた。

「あ」

武彦が呟いた。

『武彦、いま少し待て!』

武彦の異変に気づいたアメノムラクモが叫んだが、それは無理な事だった。武彦の魂は彼の住む世界へと戻ってしまった。

「たけひこ様!」

馬から転がり落ちそうになったイワレヒコの身体をツクヨミが言^{こと}霊^{たま}で支えた。

『融通の利かぬ身体よ』

アメノムラクモが呟いた。

「は!」

武彦は目を覚ました。そこは自分の部屋だった。朝になっていた。

「戻ったのか……」

手にしていたデジタルカメラに気づき、画像を確認した。そこにはタマヨリとイスズとツクヨミの画像がしっかり残っている。

「写ってる。凄いや、これ!」

武彦は大喜びで部屋を飛び出し、朝食の支度をしている母珠世の元へ行った。

「おはよう、母さん」

彼の姿を見ると、珠世はホッとした顔で涙ぐみ、

「おはよう、武彦。良かった、無事に戻ってくれて」

「うん。それとき、見て、母さん」

彼はイスズとタマヨリとツクヨミと一緒に写っている画像を珠世に見せた。

「……」

珠世は啞然とした。そこには自分にそっくりな女性と娘の美鈴にそっくりな女性が写っていたからだ。

「ね、本当でしょ、母さん」

武彦は声を弾ませて嬉しそうに尋ねる。珠世も微笑んで武彦を見

ると、

「ええ、そうね。本当によく似ているわね、この二人」

二人が感動して話していると、

「武、朝から騒がしいぞ！」

と美鈴が眠そうな顔で現れた。彼女は昨夜遅かったのだ。武彦は今日が土曜なのを思い出した。

「ほらほら、姉ちゃん、僕の言ってた事、嘘じゃないんだよ。見て！」

武彦はデジカメを美鈴に渡した。怒鳴られないように機先を制したのだ。

「何、これ？」

美鈴は鬱陶しそうにそれを受け取ったが、そこに写っている人の顔を見てギョツとした。

「え、母さんと私がどうしてこんな格好してるの……？」

美鈴は武彦の話の話を全く信じていなかったから、珠世より衝撃を受けていた。

しばらくして、美鈴はようやく事情を飲み込めた。

「信じられないけど、これが現実なのか……」

彼女はもう一度画像に見入った。そして、武彦を見る。

「武」

姉の呼びかけにギクツとしてしまう武彦。悲しい条件反射だ。殴られると思ってしまうのである。

「ごめんな、酷い事を言つて。姉ちゃんを許してくれるか？」

美鈴はバツが悪そうな顔で武彦を見た。武彦は微笑んで、

「許すも許さないもないよ、姉ちゃん。疑われて当然さ。でも、わかってもらえて嬉しいよ」

「ありがとう、武彦！」

美鈴は泣きながら弟に抱きついた。だが、その力は強過ぎた。

「姉ちゃん、痛いよ！」

痛いと同時に、何やら柔らかいものが顔に当たる。美鈴の胸だった。武彦は思わず赤面した。でも美鈴はそんな事には気づかず、「うるさい！」

美鈴は弟を信じてあげられなかった自分を恥じたのだ。でも、それをあつさり許してくれた武彦の言葉で救われた思いがした。

「でも、また行かなくちゃ」

「え？」

武彦の言葉に母と姉がビクツとして彼を見る。武彦は真顔で二人を見て、

「まだ終わっていないんだよ。一番強い奴が、まだいるんだ。そいつをやっつけない限り、オオヤシマは救われないんだ」

珠世と美鈴は顔を見合わせた。

「武彦……」

「武……」

母と姉は何か言いたそうだったが、武彦の穏やかな顔を見て言葉を呑み込んだ。武彦は照れ臭そうに笑って、

「亜希ちゃんにそっくりなアキツさんが待ってるんだ。そろそろ行くね」

彼はキッチンを出て行きながら、

「今度はアキツさんの画像も取って来て、亜希ちゃんに見せようかな」

と言った。

「武！」

美鈴が駆け寄って来て、後ろからギュツと武彦を抱きしめる。

「姉ちゃん……?」

武彦は姉の行動に驚いて首を動かそうとしたが、美鈴の力が強過ぎて動かせない。そしてまた、背中に姉の胸の膨らみを感じ、ドキツとしてしまう。武彦は、イスズに抱きつかれてから、姉に対する感情がおかしくなっていた。

「必ず帰って来いよ。でないと、姉ちゃん……」

美鈴は泣いていた。武彦は美鈴の腕に自分の手を置いて、
「大丈夫だよ。絶対に帰って来るよ。だから、心配しないで、姉
ちゃん」

「うん」

もう一度美鈴はギュッと武彦を抱きしめた。

五十五章 珠世の願い、ツクヨミの不安

異世界である「オオヤシマ」に呼び込まれ、図らずもその人々と共に戦う事になった高校生、いわがみたけひこ磐神武彦。

彼は母と姉に自分の置かれている立場をようやく理解してもらえて、少しだけ気持ちが悪くなった。

(アキツさんを助けに行かないと……)

武彦は自分の部屋に戻った。そして、またデジカメを抱え、ベッドに横になる。

「アキツさん……」

武彦は別人とはわかっていながらも、アキツと幼馴染の都坂亜希みやこぞのかあきとを完全に重ねていた。しかし、それには実は深い理由があったのである。

キッチンでは、母珠世と姉美鈴が深刻な顔で向き合っていた。

「そんなに危険なの、そこ？」

美鈴は母から「異世界」の話聞いて目を見開いた。

「私もどなたところなのかよくわからないんだけど、戦争をしているらしいのよ。どう考えても、安全な世界ではないわ。それに相手はゾンビだって」

珠世はゾツとした顔で言った。美鈴は逆に首を傾げて、

「ゾンビ？ ゲームの話みたいだなあ。やっぱりあいつ、ウソついてるか、おかしいか……」

「でも、信じてあげたいのよ、母さんは。武彦があればほど熱い目をして私に話をしてくれた事、なかったから」

珠世は武彦支持派だ。しかし美鈴は、

「もちろん、私だって信じたいよ。それにあのバカがあそこまで話を作るなんて考えられないしさ。でも、それにしただって話があまりにも突飛過ぎて……」

「そうなんだけどね」

珠世はそう言って立ち上がると、食器棚の引き出しから一冊の大学ノートを取り出した。

「でも、母さんさ、武彦の話を聞いて思い出した事があつて、父さんの残したノートを見直してみたの。そしたら、あつたのよ」

「何が？」

問いかける美鈴に珠世は付箋紙を貼ったノートのページを開いて、「ほら、ここ」

と指差した。美鈴はそこに書かれた言葉を見て、ギョツとした。

「オオヤシマ……」

父の字で確かにそう書かれていた。珠世は美鈴を見て、

「私も父さんの影響で、日本の歴史に興味を持ったので、いろいろ勉強したから、『オオヤシマ』が日本の古代神話に出て来る地名なのは知っているわ。でもね、父さんの記している話は、日本の神話ではないのよ。父さんは、その当時見て来た事を書いているの。文章の中にも、『別の世界かも知れない』って書いているし」

「……」
美鈴は啞然としてノートを見た。現実主義者の彼女には受け入れ難いのだ。珠世は苦笑いして、

「空想好きな人だとは思っていたけど、まさか本当に異世界に行つた事があるなんて、思いもしなかったわ。だから、余計に運命を感じたの」

「運命？」

美鈴はノートから目を上げて母を見た。珠世は目に涙を浮かべて、「父さんが、そして、私と父さんを引き合わせてくれた私のお祖父ちゃんいじいが、武彦を異世界に行かせたんだって。そう思ったの」

「母さん……」

美鈴も大好きだった父親の話には弱い。つい、もらい泣きしてしまふ。

「確かに危険かも知れない。でも、きつとお祖父ちゃんと父さんが

助けてくれる、守ってくれる。そう信じているの」

珠世は一筋涙を流した。美鈴も涙を拭って、

「うん、わかった。私も信じるよ」

「ありがとう、美鈴」

珠世は微笑んで美鈴を見た。

武彦は才オヤシマに行った。目を開けると、夜になっていた。

（あれ？ ここ、イワレヒコさんの部屋か？）

武彦はイワレヒコの部屋の寝所に横になっていた。部屋の隅に置かれた蠟燭の明かりが、周囲をボンヤリと照らしている。その時彼は人の気配と温もりを感じて、

「え？」

と右隣を見た。そこには、イワレヒコの腕を取り、スヤスヤと眠るヤマトの王女イスズがいた。

「わー！」

武彦は驚いて大声を出して飛び起きた。

「たけひこ様？」

イスズが眠そうな目を擦りながら起き上がり、

「如何いなさいましたか？」

「え、あの、その、どうしてイスズさんがここに？」

武彦はすっかり慌てふためいていた。姉美鈴に瓜二つのイスズが自分に寄り添って寝ていたのだ。混乱するのは仕方なかった。

「私達は許婚いしなずけにいございます。寝食を共にするは、当たり前いにいございますよ」

イスズはそう言いながらも、どことなく恥ずかしそうだ。

「そ、そうかも知れませんが、僕はイワレヒコさんではないから……」

そこまで言いかけて、イスズが泣き出しそうな顔をしているのに気づき、武彦は更に慌てた。

(うわあ、姉ちゃんに泣かれそうな感じで、何だか複雑だなあ)
武彦は苦笑いをして頭を下げた。

「ご、ごめんなさい、すみません。この身体はイワレヒコさんですもんね」

するとイスズも頭を下げ、

「私の方こそ、たけひこ様のお気持ちも考えず、失礼致しました」

「あ、いえ、僕は別に……」

武彦は苦笑いをするしかない。するとイスズは、

「この戦が終わりましたら、晴れて私達は夫婦になります」

「あ、そうですね」

武彦は只返事をするだけにした。話をややこしくしたくないのだ。しかし、

「私は早う貴方様の御子を生みとう存じます」

とイスズが言ったので、武彦は真っ赤になってしまった。

(また姉ちゃんと顔を合わせるの、怖いよ……)

そんな武彦の動揺を感じていないのか、

「まだ夜更けです。もう一度眠りましょう、たけひこ様」

イスズはまた横になり、武彦が横になるのを待っているかのように見つめる。

「は、はい」

武彦はドキドキしながらイスズの横に寝た。イスズが抱きついて来るかと思っただが、それはなかった。

(わかってくれたのかな、僕とイワレヒコさんは違うって)

目を閉じて眠ろうとしているイスズを見て、武彦は思った。

その頃、城の周囲の警戒に当たっていたタジカラは交代のために城門をくぐり、スサノと顔を合わせていた。

「何も異変はなし、だ。イザならば、夜襲を仕掛けて来ると思うただが」

タジカラが眠そうな目で言うと、スサノはニヤリとして、

「とにかく休め、タジカラ。寝ている間に、私がイザを退治たいじしておく」
「抜かせ」

二人は笑い合って交代した。そこへタジカラの奥方であるウズメがやって来た。

「お疲れ様にごさいます、お館様やかた」

「如何いかがした、ウズメ？」

タジカラはウズメが何かを感じたのかと思い、尋ねた。

「静か過ぎます。何やら起こりそうな気が致します」

「そうだな。私もこの静けさは気に入らぬ」

タジカラは周囲を見渡して言った。

ツクヨミは自分の部屋で調べ物をしていた。かつて闇の国ヨモツが蠢蠢き、その時異界の者の力を借りてヨモツを封じたという話を詳しく知りたかつたのである。しかし、ヤマトの城にある全ての書物を読んでみたが、その事が書かれているものはなかった。

（あれは言い伝えに過ぎぬのか？）

しかし、ワの女王であったオオヒルメが話してくれたのだ。彼女が単なる伝説を本当の事のように言うはずがない。

「やはり、オオヒルメ様がお持ちだった書物を調べるしかないか」

イザの力が及んでいる今となつては、アマノイワトに近づくのは非常に危険であつたが。

「ツクヨミ殿、よろしいですか？」

アキツの声で、ツクヨミはハツと我に返つた。

「はい、アキツ様」

ツクヨミは顔を火照らせて答えた。すると、やはり顔を赤らめたアキツが入つて来た。

「このような時刻ときにお訪ねして申し訳ありません」

アキツはツクヨミに頭を下げた。ツクヨミは微笑んで、

「いえ。如何いかがなさいましたか？」

アキツは顔を上げて、

「イワトでの私の無礼、どうぞお許してください」

と今度は土下座した。ツクヨミはそれを見て仰天し、

「お止めください、アキツ様。御剣様のお話では、イザがアキツ様を操っていたと」

「それはそうですが、そうだったのは、私にそのような邪な心があればこそです。本当にお恥ずかしい限りです」

顔を上げたアキツは涙を流していた。ツクヨミはその涙を拭い、

「それは邪な心ではありません、アキツ様」

その言葉にアキツは喜びの表情を見せたが、

「しかし、私は貴女様のお心にお答えする事はできません」

と言われ、また顔を曇らせた。ツクヨミは心が痛んだが、

「それより、外が静か過ぎる気がします。アキツ様はどう思われま
すか？」

アキツはツクヨミとの事は、今考えている場合ではないと気持ち
を切り替えた。

「イザが仕掛ける前触れ。私はそう思います」

アキツはいつもの顔に戻った。ツクヨミは彼女の心が修復して行
くを感じ、ホッとした。

五十六の章 ツクヨミの覚悟、武彦の決心

オオヤシマの長い夜が明けた。

結局闇の国ヨモツの女王イザは夜襲をかけて来る事もなく、タジカラとスサノの不寝番は徒勞に終わった。

「まさか、それが狙いではあるまいな？」

眠い目を擦りながら、スサノが迎えに来た奥方のクシナダに言う。
クシナダは苦笑いをして、

「そのような事、考えられませぬ。お戯れはお止めください、お館様」

「そうか」

スサノは大欠伸おおあくびをしてから、昇る朝日に目を細め、

「ならば、しばし休むぞ」

「はい」

クシナダは夫について、タジカラ達が用意してくれた部屋に向かった。

「襲つて来なかったか」

自分の部屋で白い寝間着一枚のタジカラが呟く。隣で寝ていたウズメが薄い紅色の寝間着の襟を合わせながら起き上がり、

「そのようです。イザは何を企んでおるのか、わからなくなりました」

「それはそうだ。彼奴はヨモツの女王。我らの思いも及ばぬ事を考えておるのだ。企みがわからぬは、致し方のない事よ」

タジカラはウズメを抱き寄せて言った。ウズメはギクツとして顔を赤らめ、

「お館様、もうすでに二度、ご寵愛をいただきました故、これ以上は……」

するとタジカラは不満そうにウズメから離れ、

「そうか」

と言うと、立ち上がった。ふと見ると、タジカラの男が猛っているのがわかる。ウズメは申し訳ないと思いつながらもホツとした。身体が大きいタジカラと比較的小柄なウズメでは、体力が違い過ぎるのだ。愛されているのは嬉しいのですが、これでは身が保ちませぬ。彼女はそう言いたかったが、それではタジカラを傷つけると思い、言い出せない。

「すまぬな、ウズメ。私は無骨者故、作法を知らぬ」

何故か顔を赤らめてタジカラは部屋を出て行った。廁かわやに行くふりをして猛った男を鎮めるつもりなのである。ウズメは呆気に取られたが、

（私が、お館様のご寵愛を疎ましく思ったとお感じなのかしら？）
そんな不器用なタジカラを愛おしいと思うウズメである。

（戦が終わりましたら、貴方とのお子が欲しゅうございます、お館様）
ウズメはそう思って微笑んだ。

武彦は、身体を借りているイワレヒコの実の姉いいなぎで許婚のイスズからようやく解放され、ホツとして部屋を出た。もう少し夜が明けるのが遅ければ、彼は気を失っていたかも知れない。イスズは抱きついて来たりはしなかったが、いつの間にか武彦のすぐそばまで身体を寄せて来ていたからだ。そんな事を思いながら廊下を歩いていると、アキツがツクヨミの部屋から出て来るのを見てしまった。

（わ、まずい！）

武彦は慌てて柱の陰に隠れた。幸いアキツは彼に気づいた様子はなく、そのまま廊下の向こうへ歩いて行った。

（アキツさんとツクヨミさん、何してたんだらう？）

武彦は顔を赤らめた。

『不躰であるぞ、武彦』

神劍アメノムラクモが窺たしなめた。武彦はハツとして、

「す、すみません、御剣さん」

それに被さるようにツクヨミの言葉が届く。

『私とアキツ様はそのような間柄ではありません、たけひこ様』

ツクヨミが言霊師であるのを忘れていたと思う武彦である。

「たけひこ様」

ツクヨミが部屋から出て来た。武彦は慌てて、

「ごめんなさい、ツクヨミさん。失礼な事を考えてしまって……」

するとツクヨミは微かに火照った顔で苦笑いして、

「いえ。自分の部屋に女の方をお通しただけで、疑われても仕方がないのです。ですが、アキツ様と私はそのような間柄ではございません」

「わかりました」

武彦は戸惑いながら言った。アメノムラクモが、

『武彦は、アキツが自分の幼馴染に似ておるので、嫉妬しておるのだ』

「なるほど」

ツクヨミが微笑んで武彦を見たので、

「あ、いや、その……」

と彼は口籠もってしまった。

(でも、確かにそうなのかも知れない。僕は、亜希ちゃんとアキツさんを重ねて見ている……)

そう思いながら、それもまたアメノムラクモとツクヨミには筒抜けなのだと思いますし、武彦は赤面した。

オオヤシマの地下深く存在する闇の国ヨモツ。その最深部の玉座の間にいる女王イザは、すぐにでも地上へと現れるかと思われていたが、まだ動いていなかった。

「オオマガツ、ヤソマガツ」

彼女は自分の分身である二体の魔物を呼んだ。

「はは」

黒き炎を身に纏うオオマガツ。そして、雷を身に纏うヤソマガツ。
「アキツ達はヤマトの城まで退いた。まずはうぬらが先鞭をつけよ」
「ははっ！」

二人の魔物は嵐のように飛び去った。彼女達からは、ツクヨミと戦った時と同様に黒くて長い紐のようなものが続いていた。

「この手がどこまで通じるかだが……」

イザはニヤリとして、只黒い目を細めた。

武彦達は朝食をすませて兵の詰め所に行き、イザの軍を迎え撃つ準備を始めていた。

(何だか、変わった食事だったなあ)

武彦は何度かオオヤシマに来ているが、食事を摂ったのは初めてだったのだ。

「あの朝餉はタマヨリ様とイスズ様の癒しの力が秘められしものです。これ以上なきものでした」

ツクヨミが教えてくれた。武彦は甲冑を身に着けながら、

「ああ、そうなんですか。だから、凄く元気になった気がしたのか」

「そうです。そしてたけひこ様、貴方の魂を宿らせておりますイワレヒコ様も、癒しの力をお持ちです」

ツクヨミが更に教えてくれる。

「ああ、そうでしたね。凄いなあ、イスズさん達」

改めてイスズの力に感心した。そして武彦は、ヤマトの国の元軍師のオモイに追いつめられた時、一糸纏わぬ姿のイスズの意識が助けに来てくれた事を思い出し、赤面した。

「そうです。王家の方々は、皆、尊きお力をお持ちなのです」

ツクヨミは何故か悲しそうに言う。武彦がそれに気づき、

「どうしたんですか、ツクヨミさん？ 具合でもわるいんですか？」

「いえ、大事ありません」

ツクヨミはそれだけ言うと、サッと走り去ってしまった。

『武彦』

不意にアメノムラクモが言う。

「何ですか？」

武彦はツクヨミを目で追っていたが、アメノムラクモを見た。

『ツクヨミはこのオオヤシマのために、そしてアキツのために死ぬるつもりよ。お前が何としても彼奴あやつを守れ』

その言葉に武彦はギョツとしたが、

「はい、御剣さん」

と答えた。

(ツクヨミさんには何度も助けられたんだ。今度は僕が助ける番だ)

タジカラとスサノは新しく作った鎧兜に身を包み、大軍を率いて城の前に布陣した。

「イザが出張てはれば、我らなど役に立たぬだろうがな」

珍しく弱気な発言のタジカラに、スサノが眉を吊り上げる。

「どうした、タジカラ？ お前らしからぬ言葉ぞ」

タジカラはスサノを見て、

「さもあるう。イザは魔物ぞ。如何いかに我らが腕に覚えがあるうとも、それは人を相手の時。イザの分け身の魔物にも、我らは齒が立たなかつたのだぞ」

「そうだな」

スサノは遙か彼方にあるアマノイワトを見やった。

「むしろ、我らよりもウズメ殿や、クシナダ達の方がたけひこ様達の助けになるな」

スサノは脇に差した炎の剣に左手をかけて言う。

「ああ。悔しいがな」

タジカラはフツと笑ってスサノを見た。スサノもフツと笑った。その時だった。

「覚悟はできたか、愚かなる者共！」

いきなり地中から、オオマガツとヤソマガツが飛び出して来た。

「うわああ！」

兵達は大混乱に陥った。

「来たか、魔物め！」

スサノは炎の剣を振り上げ、業火を出す。

「おのれ！」

タジカラも剣を抜き放ち、魔物達を睨んだ。

遂に、オオヤシマの命運を懸けた最終決戦が始まろうとしていた。

五十七の章 ツクヨミの進撃、イザの真意

突然現れた二体の魔物に対し、タジカラとスサノは兵達を退かせた。彼らでは只命を落とすだけだからだ。兵達はまさしく転がるように城の中へと逃げて行った。

「おのれ、こやつらが先鋒か!？」

タジカラは齒軋りした。最初は小者が押し寄せて来ると踏んでいったのだ。

「イザめ、一気にここを攻め落とすつもりか？」

スサノが呟く。

「うぬらでは相手にならぬ。この城で一番強い者が来い!」

好戦的なヤソマガツが言い放つ。彼女は身体中から雷いかずちを放ちながら、タジカラとスサノを嘲るかのように笑った。オオマガツは黒い炎を更に強力に熾おこし、

「我らは更に力をつけた。アキツ、出て来い! うぬをこの黒きくろで焼き尽くしてくれるわ!」

と叫ぶ。二人共、アキツの柏手かしわでに手酷くやられているので、彼女に対する怨みが強い。

「お前達の相手は私がする」

するとそこへツクヨミが後方から現れた。ツクヨミはいつになく冷たい目をしている。彼はすでに自分の命を捨てる覚悟だ。だから何も恐れないし、何も哀れんだり情けをかけたりするつもりはない。

「ツクヨミ!」

タジカラとスサノはツクヨミの言霊ことだまが二体の魔物に通用しない事を知っている。現にアマノイワトでは、ツクヨミが瀕死の状態まで追い込まれたのだ。

「ほオ、まだ懲りていないか、言霊師よ。愚かな……」

オオマガツが笑う。ヤソマガツが目を細めて、

「あんたはいい男だから、殺めたくはないが、イザ様に逆らう者は

容赦しない」

ツクヨミはその言葉にキツとしてヤソマガツを睨んだ。

「我が一族が、何故王族の上に位くわいしていたのか、お前達は知らない」
ツクヨミは謎の言葉を言った。タジカラとスサノは顔を見合わせた。

「如何なる事だ？」

タジカラは今まで言霊師について深く考えた事がなかったが、王族すら彼らの下位であった時代がある事は知っている。その理由が、今ここで明らかになるという意味なのか？ 彼はごくりと唾を呑み込んでツクヨミを見た。

「言霊は、一つところに留まらず。昨日の私は勝てぬとも、今日の私は勝てる」

ツクヨミはタジカラ達の前に進み出て、二体に言い返す。

「強気だねえ。そういうところも、いい男だ。だが、生かしておく事はできぬ」

にやついていたヤソマガツの顔つきが険しくなった。

「私がお先に行くよ、オオ」

彼女はオオマガツにそう言うと、ツクヨミに仕掛けた。

「被かいたまえ、清めたまえ！」

ツクヨミは柏手を打ち、叫んだ。

「そのような戯ざれ言ことば、アキツでなくては恐るるものではない！」

ヤソマガツは構わずツクヨミに近づいた。その時だった。

「ぐわあああつ！」

彼女をツクヨミの放った言霊が押し包んだ。途端にヤソマガツは強烈な光に包まれ、悶絶した。

「ヤソ！」

オオマガツが仰天して叫んだ。彼女は目を見開いてツクヨミを見た。

「ふおおおつ！」

ヤソマガツは空高く舞い上がり、錐きしも揉みしながら地面に落下し、

砂埃すなほこりを舞い上げた。

「昨夜、アキツ様に頂いた力。言霊師の真髓しんすいは言の葉を操る事にある。その言の葉の力を得れば、私もアキツ様と同じ事ができる」

ツクヨミはまた冷たい目に戻り、オオマガツを見た。

「ぬっっ……」

オオマガツがジリジリと退く。

「おのれエッ！」

地面にめり込んでいたヤソマガツが飛び出して来て、再びツクヨミを襲撃する。

「やめよ、ヤソ！」

ツクヨミの強さに気づいたオオマガツが止めようとしたが、怒りに我を忘れているヤソマガツはそのまま突っ込んだ。

「抜いたまえ、清めたまえ！」

ツクヨミがまた言霊を放つ。それは大気を振動させ、ヤソマガツに迫った。

「同じ手は通じぬ！」

ヤソマガツは言霊を避けるために自分の身体を雷いかずちに変えた。彼女は言霊をやり過ごした。

「何!？」

その様子をツクヨミの後ろで見ていたタジカラとスサノが叫んだ。「我らたはかを謀るとは愚かなり、言霊師! その報いを受け、死ぬるがいい!」

雷となったヤソマガツがツクヨミに襲いかかる。

「うおおっ!」

元に戻ったヤソマガツが右手を槍のように尖らせ、そこに雷を纏まとわせて、ツクヨミに突き出す。

「ツクヨミ!」

タジカラとスサノが同時に叫んだ。

「ぐっっっ!」

しかし、苦悶の表情を浮かべていたのはヤソマガツの方だった。

ツクヨミは自分の身体に言霊を纏わせていたのだ。

「ぬっつ！」

ヤソマガツはツクヨミに繰り出した右手を言霊によって溶かされていた。彼女は齒軋りしてツクヨミから飛び退き、

「畏か……？ 始めから、待っていたのか？」

ツクヨミはそれには答えず、

「まだ戦うか、魔物共。お前達はアキツ様と戦う事はできぬ。この私がいる限りな」

二体の魔物は憎らしそうにツクヨミを睨む。

「ならば、これをその言霊で防いでみせよ！」

今度はオオマガツが動いた。彼女はツクヨミ、タジカラ、スサノを取り囲むように黒い炎を動かす。

「くっ！」

一瞬にして禍々しい炎に囲まれてしまったタジカラとスサノは身動きがとれなくなった。

「おのれっ！」

スサノが炎の剣で黒い炎を薙ぎ払おうとするが、全く歯が立たない。

「我らは強くなったと言ったはず。そのような剣では役に立たぬ」

オオマガツが笑った。スサノはムツとして、

「おのれ……」

そこへ武彦が駆けつけた。

「皆さん、遅くなりました！」

武彦は神剣アメノムラクモを抜き、走り出した。

『武彦、黒き？に触れるな。死人にされる。我で黒き？を薙ぎ払うのだ』

アメノムラクモが言った。

「はい、御剣さん！」

ヤソマガツとオオマガツは武彦の到着に気づくと、バツと退いた。神剣アメノムラクモ……。あれは手強いぞ、ヤソ」

オオマガツが言う。ヤソマガツはニヤリとして、

「その方がいい」と返す。

「ええーい！」

武彦はまずタジカラとスサノを取り囲む炎を一振りで薙ぎ払い、次にツクヨミの周りの炎をやはり一振りで薙ぎ払ってしまった。

「おのれ、アメノムラクモめ……」

オオマガツは自分の炎があっさり退けられたので、武彦を睨みつけた。

「次はどうしますか、御剣さん？」

武彦は二体の魔物を見ながら尋ねた。

『もちろん、彼奴ら^{あやつ}を倒す』

アメノムラクモは当然という調子で答えた。

「はい！」

武彦は輝きを増したアメノムラクモを中段に構え、再び駆け出した。

その頃、アキツ達は玉座の間に集まっていた。そこにはヒノモトの王ホアカリ、その妃トミヤ、亡き王ウガヤの妃タマヨリ、王子イツセ、王女イスズ、舞踏師ウズメ、水使いクシナダもいた。

「外の様子はどうなのだ？」

玉座のホアカリが尋ねた。ウズメが跪き、

「只今、ヨモツの魔物と戦^{いくさ}をしております」

「そうか。勝てそうか？」

ホアカリは不安そうに尋ねる。するとクシナダが、

「勝てまする、陛下」

クシナダの力強い言葉にホアカリは微笑んだ。

「そうであるな」

彼は隣に座るアキツを見た。アキツも微笑み、ゆっくりと頷いた。

(ツクヨミ様……。生きて帰ってくださいませ)

彼女のツクヨミに対する思いは、消えてはいなかった。

「ウマシはどうか？ まだ動けぬか？」

ホアカリはヨモツに取り込まれそうになった自分の嫡男であるウマシの容態を心配していた。

「大事ありませぬ、陛下。ウマシ様は、お元気になりまする」

ウズメがニツコリとして答えた。ホアカリはトミヤと顔を見合わせ、ホツとした顔になった。

闇の国ヨモツの最深部、玉座の間。女王イザは目を閉じたまま椅子に座っていた。

「あと一息ぞ。オオマガツ、ヤソマガツ、頼むぞ」

彼女はフツと笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0845w/>

オオヤシマ記 イワレヒコ伝（改訂版）

2011年9月27日13時35分発行